設

918. 6-G341ウ
1200500759129
8.6
34/4
(42)

24. 9. 30

28
918.6
G34イ
(42)

鈴木三重吉集
森田草平集

特本

42-1

杉浦非水裝幀

改造社版

騎道少年團正裝の鈴木氏と安土の前に立てる森田氏(昭和五年五月撮影)

「鈴木三重吉集」目次

巻頭寫眞（照影）

序詞（筆蹟）……四

千鳥……五

山彦……二一

おみつさん……三七

烏物語……四五

黒髪……五三

小猫……五七

烏女……七三

……八五

金魚……一〇一

瓦……一〇四

民子……一三一

羊……一五九

櫛……一七一

穴……一九〇

大伯母……二〇七

桑の實……二一八

八の馬鹿……二八四

（附）月夜一（二〇）　同二（三K）　同三（四四）　同四（五六）

同五（八四）　同六。午後一（一〇〇）　同二（一三〇）　同三（一五八）

同四（一八九）　赤菊（二〇六）

年譜……二九二

「森田草平集」目次

巻頭寫眞（照影）

序詞（筆跡）……二六六

煤煙……二九七

初戀……四二四

白敍傳……四四三

袈裟御前……五五八

（附）好きな文章（四四三）

年譜……九七一

鈴木三重吉集

千鳥

千鳥の話は馬喰の娘のお長で始まる。小春の日の夕方、蒼ざめたお長は軒下へ蓆を敷いてしよんぼりと坐つてゐる。干し列べた平蓆には、最早絲筋ほどの日影もさゝぬ。洋服で丘を上つて來たのは自分である。お長は例の泣き出しさうな目もとで自分を仰ぐ。親指と小指と、そして穗がけの眞似は初やがこと。その三人ともみんな留守だと手を振る。頤で奥を指して手枕をするのは何のことか分らない。藁でたばねた髪の解れは、掻き上げても直ぐまた頬に垂れ下る。

廊下へ上つても、誰も出て來るものがないから勢がない。廊下へ出て、のこ〳〵離れの方へ行つて見る。籠の家で方々に白木綿を織るのが轡虫が鳴くやうに聞える。廊下には草花の床が女帶ほどの幅で長く續いてゐる。二三種の花が咲いてゐる。水仙の一株に花床が盡きて、低い階段を拾ふと、そこが六疊の中二階である。自分が記念に置いて往つた摺繪が、その儘に仄暗く壁に懸つてゐる。これが目につくと、久しぶりで自分の家へ歸つて來でもしたやうに懐かしくなる。床の上に、小さな花瓶に龍膽の花が四五本插してある。夏二月の逗留の間、自分はこの花瓶に入り替りしをらしい花を絶やした事がなかつた。床の横の押入から、赤い縮緬の帶揭のやうなものが少しばかり食み出してゐる。一寸引つ張つて見るとすうと出る。どこまで出るかと續けて引つ張るとすら〳〵とすつかり出る。

自分はそれを幾つにも疊んで見たり、手の甲へ卷き附けたりしていぢくる。後には頭から頤へ掛けて、冠の紐のやうに結んで、垂れ下つたところを握つたまゝ、立膝になつて、壁の摺繪を見つめる。「ネイションス、ピクチュア」から拔いた繪である。女が白衣の胸にはさんだ一輪の花が、血のやうに滲んでゐる。目を細くして見てゐると、女はだん〳〵と繪から拔け出て、自分の方へ近寄つて來るやうに思はれる。

すると、いつの間にか、年若い一人の婦人が自分の後に坐つてゐる。きちんとした嬢さんである。しとやかに挨拶をする。自分はまどついて冠を解き捨てる。

婦人は微笑みながら、

「まあ、この間から毎日々々お待ち申してゐたんですよ。」といふ。

「こんな不自由な島ですから、あゝは仰しやつてもたうとおいで下さらないのかも知れないと申しまして、しまひにはみんなで氣を落してゐましたのでございますよ。」と、懐かしさうに言ふのである。自分は狐にでもつまゝれたやうであつた。丘の上の一つ家の黄昏に、こんな思ひも設けぬ女の人がのこりと現はれて、さも親しい仲のやうに對して來る。かつて見も知らねば、どこの誰といふ見當も附かぬ。自分は只もぢもぢと帶揭を疊んでゐたが、やつと、

「をばさんもみんな留守なんださうですね。」とはじめて口を利く。

「あの、今日は午過ぎから、みんなで大根を引きに行つたんですの。」

「どの畠へ出てるんですか。――私一寸行つて見ませう。」

「いゝえ、もう只今お長をやりましたから大騒ぎをして歸つていらつしやいますわ。」

「先刻私は誰もゐないのだと思つて、一人でず

私は永久に夢を持つ。たゞ、
年少の夢のごとく、
ちめん焼けさま
ことの少なるのみ。

二、三、

んぢんこゝへ上つて来たんでした。」と言つて、お長が手枕の眞似をしたことを胸に浮べる。女の人は少し頭痛がしたので奥で寝んでゐたところ、お長が裏口へ廻つて、障子を叩いて起してくれたのだと言ふ。

「もう何ともございません。」と伏し目になる。起きて着物をちゃんとして出て来たものらしい。稍あつて、

「あなたはこの節は少しはおよろしい方でございますか。」と訊く。自分の事は何でもすつかり知つてゐるやうな口振である。

「どうも矢つ張り頭がはき〳〵しません。實は一年休學する事にしたんです。」

「さうでございますつてね。小母さんは毎日あなたの事ばかり案じていらつしやるんですよ。今度またこちらへおいでになる事になりましてから、どんなにお喜びでしたか知れません。……考へると不思議な御縁ですわね。」

「妙なものですね。この夏はどうした事からでしたか、ふとこちらへ避暑に来る氣になつたんですが、――私は餘り人のざわつくところは厭だもんですから。――その代り宿屋なんぞの無いといふ事ははじめから承知の上なんでしたけれど、さあ、船から上つてそこらの家へ頼んで見ると、果してみんな斷つてしまふでせう。困つたんですよ。」

婦人は微笑む。

「それから仕方がないもんだから、たうとのこのこ役場へやつて行つたんでした。くる〳〵坊主ですね、こゝの村長は。」

「えゝ、ほゝゝ。」

「そしたらあの人が親切に心配してくれたんです。」

「そしてこゝの小母さんに、私は母といふものがないんだから、こんな家へ置いてもらつたらいゝのですがつて、さう仰しやつたのですつてね。」

「さうでしたかなあ。とにかく小母さんを一目見るとから、何だかしら懐かしくなつたんです。」

「そんなに仰しやつたものですから、小母さんもしをらしい方だと思つて、お世話をする氣になつたんですつて。」

「私は今では小母さんが生みの親のやうに思はれるんですよ。私の家にゐたつて何だか旅の下宿にでもゐるやうな氣がするんですもの。」

「小母さんも青木さんはあたしの内證の子なんだかも知れないなんて冗談を仰しやるんですよ。」

「あ、いつか小母さんが指へ傷をしたと云ふのはもう直つたのですか。」

「えゝ、只ナイフで一寸切つたばかりなんですから。」

二人はこのやうな話をしながら待つてゐる。築地の根を馬の鈴が下りてゆく。馬を引く女が唄を歌ふ。

障子を開けて見ると、旅の蜜柑畑が更紗の模様のやうである。白手拭を絞つた女たちがちら〳〵とその中を動く。蜜柑を積んだ馬が四五匹續いて出る。やはり女が引いてゐる。向ひの、縞のやうになつた山畠に煙が一筋揚つてゐる。焔がぼろ〳〵と光る。煙は斜めに撫かつて、末は夕方の色と溶けてゆく。

女の人も自分の側へ寄つて等しく外を見る。山畠のあちらこちらを馬がドリる。馬は犬よりも小さい。首を出して見ると、庭の松の木のはづれから、海が黒く浪へてゐる。影の如き漁船が後先になつて櫓々歌る。近い干潟の瓦白い砂の上に、黒豆をぶつしたやうなのは、鳥の群がドリてゐるのであらうか。女の人の教へる方を見れば、青松葉をしたゝか背負つた頬冠りの男が、とこ〳〵と畦道を通る。間もなくこちらを背にして、道に附いて斜めに折れると思ふと、その

男は最早、只大きな松葉の塊へ脱引の足が二本下つたばかりのものとなつて動いてゐる。松葉の色が見る〳〵黒くなる。それが蜜柑畑の向うへ這入つてしまふと、しばらく近くには行くものの影が絶える。谷間々々の黒みから、だんだんとこちらへ迫つて来る黄昏の色を、急がしい櫂の音が招き寄せる。

「小母さんは何でこんなに遅いのでせうね。」と女の人は慰めるやうにいふ。あたりは見る内に薄暗くなる。女の人が一寸出て行つて、今度歸つて来た時には、向き合ひになつても最う面輪が定かには見えない。

女の人は、立つて押入から竹洋燈を取り出して、油を掻つて見て、袂から紙を出して心を捻む。下へ置いた笠に何か書いた紙が吹つ附いてゐる。讀んで見ると章坊の手らしい幼い片假名で、フヂサンガ マタナタと書いてある。

「あら。」と女の人は恥かしさうに笑つてその紙を剝がす。

「章ちゃんがこんな惡戯をするんですわ。濾ですのよ、みんな。」と打消すやうにいふ。

「何の事なんです、これは。」

「ほゝゝ。」

「フヂサンいふのは。」

「あたしでございます。」

「あゝ、お藤さんと仰しやるんですか。」

「はい。」と藤さんは微笑みながら、立つて押入を探す。藤さんといふ名はかうして知つたのである。

「そしてあなたが何でお泣きになつたんです？」

「いゝえ、濾ですの、そんな事は。」

「燐寸を探していらつしやるんですか。私が持つてゐます。」

「あら、冗談なのでございますわ。あれは章ちゃんが……」と勘違へをしてゐる。ポケットから燐寸を出して洋燈を點すと、

「まあ、恐れ入ります。」と藤さんは坐る。燈火に見れば、油繪のやうな艶やかな人である。顔を少し赤らめてゐる。

「あしが一番あん。」と章坊が着物を引つ抱へて飛び出すと、入れ違ひに小母さんが這入つて来て、シャツの上から着物を着せかけてくれる。

「さ、これを上げませう。」と下締を解く。それを結んで小暗い風呂場から出て来ると、藤さんが赤い裏の羽織を披げて後へ廻る。

「そんなものを私に着せるのですか。」

「でも他にはないんですもの。」と肩へかける。

「それでも洋服とは樂でがんせうがの。」と、初やが焜爐を煽ぎながらいふ。羽織は黄八丈である。藤さんのだといふ事は問はずとも分つてゐる。

「着物が少し長いや。ほら、踵がすつかり隠れる。」と言ふと、

「母さんのだもの。」と炬燵から章坊が言ふ。

「小母さんはこんなに脊が高いのかなあ。」

「なんの、あなたが少し低うなりなんしたのいの。病氣をしなんすもんぢやけに。」と初やが冗談をいふ。

「女は腰のところを下締で緊げて着るんですから。」と言つて、藤さんは側から羽織の襟を直してくれる。

「何故さうするんでせう。」

「みんなさうするんですわ。おや、羽織に紐がございませんわね。」

「いゝえ結構。」といふと、初やが、

「まあ、お二人で仲のいゝこと。」と言ひさま、急にばた〳〵とはげしく煽ぎ出す。

「まあ。」と藤さんは赤い顔をしてゐる。

蜜柑箱を墨で塗つて、底へ丸い穴を開けたのへ、筒抜けの鏡詰の殼を嵌めて、それを踏臺の上に載せて、上から風呂敷をかけると、それが章坊の寫眞機である。

「またみんなを玩具にするのかい。」と小母さんが笑ふ。この細工は床屋の寅吉に泣き附いてさせたのだといふ。章坊は、

「兄さんを寫して上げるんだから、よう、炬燵から出て下さいよ。」と甘えるやうに言ふかと思ふと、

「ぢきです。直き寫ります。」と、眞面目に寫眞やの積りでゐる。

「兄さんは炬燵へ當つてる方が甘く寫るよ。」

「だつて姉さんが邪魔をしてるんだもの。」と風呂敷の中へ頭を入れる。

「姉さん、ぐづ〳〵してると背中が寫つて終ひますよ。」

「はい〳〵。」と、藤さんは笑ひながら自分の隣りへ移る。

「兄さん、もつと眞つ直。」

「私の顔が見えるの？」

「見えるとも、そら笑つてら。やあい。」

がた〳〵と箱を搖ぶる。やがて勿體らしく身構へをして、

「はい、寫しますよ。」とこちらを見詰める。

「あら、日を閉つてるものがあるものか。……さ、寫りますよ。……只今。……はい有難う。」と手に持つた厚紙の蓋を鏡詰へ被せると、箱の中から板切を出して、それを提げて、得意になつて押入の前へ行く。

「章ちやん、もう夜はそんな押入なぞへ這入るもんぢやないよ。」と小母さんが止めると、

「だつてお母さん、寫眞を藥でよくするんぢやありませんか。」と泣きさうな顔をする。

「それよりか寫眞屋さん、一昨日かしら寫したあたしの寫眞はいつ出來るんですか。」と藤さんが問ふ。小母さんも、

「私ももう五六度寫つた筈だがねえ。いつ出來るんだらう。まだ一枚もくれないのね。」と突つ込む。それから小母さんは、向ひの地方へ渡つて章坊と寫眞を撮つた話をする。章坊は、

「今度は電話だ。」と言つて、二つの板紙の筒を持つて出て來る。筒の底に紙が張つてあつて、長い青絲が眞ん中を繋いでゐる。章坊は片方の筒を自分に持たせて、しばらく何かしら言つて、

「ね、分つたでせう？」といふ。

「あゝ、分つたよ。」といゝ加減に間を合はして置くと、

「萬歳。」と言つてにこ〳〵して飛んで來て、藤さんを除けて自分の側へあたる。

「よ。姉さんもだよ。」といふ。

「よし〳〵。」

「何の事こんです。」と藤さんは微笑む。

「今電話がかゝりましてね、……」

「あゝ今言つちやいけないんだよ、兄さん。あれは姉さんには言はれないんだから。」

「何でせう。人が惡いのね。」

このやうな事を言つてゐるところへ、初やが饅頭を買つて歸つて來る。小提灯を消すと、蠟燭から白い煙がふは〳〵と揚る。

「奥さま、今度の狐もやつぱり似とりますわいの。」と言つてげら〳〵と初やが笑ふ。

饅頭を食べながら話を聞くと、この饅頭屋の店先には、娘に化けて手拭を被つた張子の狐が立たせてあつた。その狐の顔がそこの家の若い女房に可笑しい程そつくりなので、この近在で評判になつた。女房の方では少しもそんな事は知らないでゐたが、先達ある馬方が、饅頭

の借りを拂つたとか拂はないとかで その女房に口論を仕かけて、

「えゝ、この狐め。」

「何でわしが狐かい。」

「狐ぢやい。知らんのか。鏡を出してこの招牌と較べて見い。間抜けめ。」

かう言つたやうなことから、後で女房が亭主に話すと、亭主はこの邊では珍らしい捌けた男なんださうで、それは今頃始つた話ぢやないんだ、已の家の饅頭がなぜこんなに名高いのだと思ふ、などと茶らかすので、そんならお前さんはもう早くから人の惡口も聞いてゐたのかと問へば、うん、と言つて澄ましてゐる。女房はわつと泣き出して、それを今日まで平氣でゐたお前が恨めしい、畢竟わしを馬鹿にしてるからだ、もうこれぎり實家へ歸つて死んでしまふと言つて、箪笥から着物などを引つ張り出す。やがて二人で大立廻りをやつて、女房は髪を亂して向ひの船頭の家へ逃げ込むやら、たうと面倒な事になつたが、とにかく船頭が仲裁して、お前たちも、元を尋ねると踊の晩に袖を引き合ひからの夫妻ぢやないか、さあ、仲直りに二人で踊れよ、おい、と五合ばかり取つて來た。その時の女房との條約に基いて、店の狐は翌日から姿を隱して了つた。ほかの狐が箱に這入つて城下の人形屋から來て、再び店に立つたのはついこの間の事である。今度のは大きさも顔も少し趣を變へるやうに能文したのであらうけれど、

「なんぼどのやうな狐を拵へて來たところで、お孝ちやんの顔が元のまゝぢやどうしても駄目でがんすわいの。へゝゝゝゝ。」と、初やは、やつと廻りくどい話を切つてあちらへ立つ。藤さんはもう先達も聞いたから、今夜はそんなに可笑しくはないと言つたけれど、それでも矢つ張りはじめてのやうに笑つてゐた。

話が杜絶える。藤さんは章坊が蒲團へ落した餡を手の平へ拾ふ。影法師が壁に寫つてゐる。頭が動く。やがてそれがきちんと横向きに落ち附くと、自分は目口眉毛を心で附ける。小母さんの臂がちよい〳〵寫る。簪で髪の中を掻いてゐるのである。

裏では初やが米を搗く。

自分は小母さんたちと床を列べて座敷へ寢る。

枕が大きくて柔かいから嬉しいと言ふと、この夏にはうつかりしてゐたが、あんな枕では頭に惡いからと小母さんがいふ。藤さんはこの枕を急いで拵へてから、仇に十日あまりを持ち暮したと話す。

藤さんは小母さんの蒲團の裾を叩いて、それから自分のを叩く。肩のところへ坐つて夜着の袖をも押へてくれる。自分は何だか胸苦しいやうな氣がする。やがてあちらで藤さんが帶を解く氣色がする。章坊は早く小さな鼾になる。自分は何とはなしに寢入つて了ふのが惜しい。

「ね、小母さん。」と再び話しかける。

「え？」と、小母さんは閉ぢてゐた目を開ける。

「あの、一たい藤さんはどうした人なんです？」と訊くと、

「なぜ？」と言ふ。

聞いて見ると、この家が江田島の官舍にゐた時に、藤さんの家と隣り合せだつたのださうである。まだ章坊も貰はない、ずつと先の事であつたし、小母さんは大變に藤さんを可愛がつて、後には夜も家へ寢すよりか自分の側へ泊らせる方が多いくらゐにしてゐた。はじめそこへ移つて來た翌日であつたか、藤さんがふと塊の扇骨木垣の上から顔を出して、

「小母さま。今日は。」と物を言ひかけたのが元

であつた。藤さんが確か七つ八つに過ぎぬ頃であつたらう。それから四五年してこゝの主人が亡くなつて、小母さんはこちらへ住居をきめる事になつた。別れの時には藤さんも小母さんも泣いた。藤さんはその後いつまでも小母さん小母さんと慕しがつて、今日まで月に一二度、手紙を絶かした事はない。藤さんの家は今佐世保にあるのださうで、お父さんは大佐ださうである。

「それでは佐世保から遙々來たんですか。」

「いゝえ、あの娘だけは二月ばかり前から、この對岸にゐるんです。あなたでも同じですけれど、こんなになると、情合は全く本當の親子と變りませんわ。」

「それだのにこの夏には、あの人の話は一寸も出ませんでしたね。」

「さうでしたかね。おや、さうだつたかしら。」

「そして私の事はもうすつかりあの人に話してあるやうですね。」

「ふゝゝ、それはあなた、家では何とかいふと直ぐあなたの話が出るんですから、あの人だつて、まだ見もしない内からもう青木さん〳〵と言つて、おいでになつてもまるで兄妹かなぞのやうに思つてゐるんですもの。」と章坊の枕を直してやる。

「さつきもね、初やから、お嬢さんは存外人に恥かしがらない方だとかなんとか言つてからかはれたんでせう。さうするとね、だつてあの方はもうよくお知り申してる方なんだものつてさう言ふんですよ。あれでゐてまだずゐぶん子供のやうなところがあるんですからね。」

「私だつて何だか、はじめて會つた人のやうには思へませんよ。――まだ永く逗留するんですか。」

「あの娘ですか。さうですね。……一體今度こちらへまゐつたといふのが……」

仕舞を欠と一緒に言つて、枕へ手を添へたと見ると、小母さんはその後を言はないで、それなりふいと眉毛のあたりまで埋まり込んでしまふ。しばらく待つて見ても容易に再び顔を出さない。蒲團の更紗へ有明行燈の灯が朧にさして赤い花の模樣がどんよりとしてゐる。

何だか煮え切らない。藤さんが今度來たのはどうしたのだといふのか。何か面白くない事情があるのであらうか。小母さんは何とか言ひかけてひよつくり默つてしまつた。藤さんはどうして九月から家を出てゐるのか。この對岸のどんな人のところにゐるのであらう。

池へ山水の落ちるのが幽かに聞える。小母さんはいつしか顔を出してすや〳〵と眠つてゐる。大根を引くので疲れたのかも知れない。小母さんの靜かな寢顔をぢつと見てゐると、自分もだん〳〵に瞼が重くなる。

千鳥の話は一夜明ける。

自分は中二階で長い手紙を書いてゐる。藤さんが、

「兄さん。」と言つて逗入つて來る。

「あの只今船頭が行李を持つてまゐりましたよ。」といふ。

「あれは私のです。」と言つたまゝ、やつぱりずん〳〵書いて行く。

「それはさうですけれど、どうせこちらへ運ばなければならないのでせう？」

「えゝ。」

「ではこの押入には、下の方はあたしのものが少しばかり逗入つて居りますから。あなたは當分上の段だけで我慢して下さいましたな。」

「……」

「ねえ。」

「えゝ。」

「まあ一心になつていらつしやるんだわ。」といふ。

丁度一區切附いたから向き直る。藤さんは少し離れて膝を突いてゐる。

「お召し物も來たんでせう？――では早くお着換へなさいましな。女の着物なんか召して可笑しいわ。」と微笑む。自分は笑つて、袖を解して見る。

「先刻ね。」と、藤さんは袂へ手を入れて火鉢の方へ來る。

「これ御覽なさい。」と、袂の紅紐裏の間から取り出したのは、葉の長い一輪の白い花である。

「この頃こんな花が。」

「蒲公英ですか。」と手に取る。

「どこで目つけたんです？　たつた一本咲いてたんですか。」

「どうですか。さつき玉子を持つて來た女の子がくれてつたんですの。どこかの石垣に咲いてゐたんださうです。初やがね、これはこの頃あんまり暖かいものだから、つい欺されて出て來たんですつて。」

返した花を藤さんは指先でくる〳〵廻してゐる。

「本當にもう春のやうですね、こちらの氣候は。」

「暖かいところですのね。」

自分は もく〳〵と目のさした障子を見つめて、陽炎のやうな心持になる。

「私只今お邪魔ぢやございませんか。」

「何がです？」

「お手紙はお急ぎぢやないのですか。」

「さうですね。――郵便の船は午に出るんでしたね。」

「えゝ、ではあとで直ぐ行李をこちらへ運ばせますから。」と、藤さんは張合が無ささうに立つて行く。

「あ、この花は？」

「え？」と、出口で振り向いて、

「それはあなたにおあげ申したのですわ。」

藤さんが行つてしまつたあとは何やら物足りないやうである。たんぽゝを机の上に置く。藤さんがもう一度や手紙はもう書きたくない。つて來ないかと思ふ。ちぎつた書き扇しを拾つて、くちや〳〵に揉んだのを披げて、皺を延ばして疊んで、また披げて、今度は片端から噛み切つては口の中で丸める。いつしかいろ〳〵の夢を見はじめる。――自分は覺めてゐて夢を見る。夢と自分で名づけてゐる。

馬の鈴が聞えて來る。女が濯ぐのが聞える。不圖立つて廊下へ出る。藤さんが池の側に蹲んでゐて、

「もうおすみになつて？」と聲をかける。自分は半煮えのやうな返事をする。母屋の簷先で何匹かのカナリヤが、焦氣に囀り合つてゐる。庭は一杯の黄色い日向は彼等が吐き出してゐるのかと思はれる。

「一寸いらつして御覽なさいな。小さな鯉かしら澤山ゐますわ。」と、藤さんは眩しさうにこちらを見る。

「だつて下駄がないぢやありませんか。」

「あたしだつて足袋の儘ですわ。」

自分もそれなり下りて花床を跨ぐ。はかなげに咲き殘つた、何とかいふ花に裾が觸れて、花瓣の白いのがはら〳〵と散る。庭は一面に末枯れた芝生である。離れの中二階の横に松が一叢生えてゐる。女松の大きいのが二本ある。その中に小さな水の溜りがある。すべてこの宅地を開く時に自然の儘を殘したのである。

藤さんは、水の側の、苔を被つた石の上に蹲んでゐる。水際にちらほらと三葉四葉附いた蓼の實生えが、眞赤な色に染つてゐる。自分が近づけば、水の面が小砂を投げたやうに瀑れを打つ。

「おや、みんな沈みました。」と藤さんがいふ。自分は、水を陽てて斜めに向き合つて芝生に踞む。手を延ばすなら、藤さんの膝に辛うじて届くのである。水は薄黒く濁つてゐれど、藤さんの髪す袂の色を宿してゐる。自分の袖は黒く寫つて、松の幹の影に切られる。

「また浮きますよ。」と藤さんがいふ。指すところをぢつと見守つてゐると、底の水苔を味噌汁のやうに煽てて、幽かな色の、小さな鮒子がむらむらと浮き上る。上へ出て來るにつれて、幻から現へ覺めるやうに、順々に小黒い色になる。しばらく一しよに集つてぢつとしてゐる。やがて片端から二三四づつ繰り出して、列を作つて、小早に日の當る方へと泳いで行く。ちらちらと腹を返すのがある。水の底には、泥を被つた水草の葉が、泥へ彫刻したやうになつてゐる。稍あつて、ふと、鮒子の一隊が水の色と紛れたと思ふと、底の方を大きな黒いのがうぢやうぢやと通る。

「大きなのもゐるんですね。そ、あそこに。」と指すと、

「どこに。」と藤さんが訊く。併しそれは寫つてゐる影であつた。鮒子は矢つぱり小さく上の方を行く。自分は足元の松葉を掻き寄せて投げ附ける。鮒子は響の如くに沈んで、爭ひ亂れて味噌汁へ逃げ込んで了ふ。

藤さんが笑ふ。

手飼の白鳩が五六羽、離れの屋根のあたりから羽音を立てて芝生へ下りる。

「あの、鳩は綺麗な鳥ですね。」と藤さんがいふ。

「あれは鳩ぢやありませんか。」

「ほゝゝゝ、あれぢやないんですの。あたしね、ほゝゝ。」

「どうしたんです？」

「いゝえ、あたしとんでもない事を思ひ出したんですわ。」と一人で微笑む。

「何を？」

「何でもないことです。――先達あたしがこちらへ渡つて來る途中でね、鳩が一四、小さな板切へ樓つて、波の上をふはり〳〵してゐたんですの。丁度學校なぞにある標本を流したやうでしたわ。」

自分は氣が附いたやうに、海の方を見渡す。遙かの果に地方の山がうつすら見える。小島の蔭に鳥貝を取る船が一群帆を聯ねてゐる。

「ね、鳩が餌を拾ふでせう。」と藤さんがいふ。

「芝生に何か落ちてるんでせうか。」

「あたしがさつき撒いて置いたんです。いつでもあそこへ餌を撒くんです。」

「あ、あれは足をどうかしてるやうですね。」

初やがすた〳〵とやつて來る。紺の半纏の上に前垂をしめて、丈く脹れてゐる。

「お孃さん。」

「何？」

「いゝや。男のお孃さんぢやわいの。」

「まあ。今お着機へなさるんだわ。」

「私がどうした。」

「冗談は置いて、あなたは蟹を食べなんしたか。」

「いつ？」

「ほゝゝ、鳩のやうな話ね。――蟹を召し上れば買つて來る積りなの？」

「えゝ、はあ買うたるのよの。午に煮ようかと思ふんでがんさ。はあ直にお年ぢやけに。――食べなんした事ががんすかいの。」

「食べるけど、あれは厄介なばかりで仕方がないや。」

「おいしいものですけれどね。」

「それや甘うがんすえの。それにこの頃は月が無い頃ぢやけに尚更甘いんでがんすわいの。いいえ、ほんとでがんすて。月夜にはの、あれが自分の影に怖れてびく〳〵するけに痩せるんでもあそこへ餌を撒くんです。」

がんすといの。」

村の水天宮樣の御威德を說く時の都附である。

「ほゝゝ。」

「面白いな、それは。」

「そんなら食べなんすか。」

「食べるよ。」

「ぢや、よかつた。」と、またあちらへすた〳〵と、草履の踵へ短い影法師を引いて行く。

鳩は少しも人に怖れぬ。

自分は外へ出て見たくなる。藤さんは一人で座敷で縫物をしてゐる。一しよに濱の方へでも出て見ぬかと誘ふと、

「さうですね。」と、につこりしたが、何だか躊躇の色が見える。二人で行つたとて誰が咎めるものかと思ふ。

「だつてあんまりですから。」と、稍あつて言ふ。

「何が。」

「でもたつた今これを始めたばかりですから。」

「ついでに仕上げて了ひたいのですか。」

「いゝえ、さうぢやないのですけど、何だか小母さんに濟まないから。――あたし行きたいんですけれど。」

「では行けばいゝぢやありませんか。」

「そんな事は構はないんですけどね、あたしこちらへまゐつてから、いつも働いてばかりゐて、何一つ碌にお手傳ひした事もないんですせう。」

自分は立膝をして、物尺を持つて針山の針をこつ〳〵叩いて、順々に少しづつ引つ込ませてゐたが、ふと叩き過ぎて、一本の針を頭も見えないやうにして了ふ。幸にそれには一寸した絲が附いてゐたので、ぐいとその絲を引くと、針はすらりと抜ける。

「もう一月からになるのですのに、ずつと私そんなでしたものですから、今日は氣分はいゝし、私の方からさう言つて、これを言ひ附かつたのですのに。」

「構はないや、そんな事は。」

「だつて女はさうも……」と、針に絲を通す。

自分は素直に立つて、獨りで玄關へ下りたが、何だか張合が抜けたやうで暫くぼんやりと敷居に立つてゐる。

と、

「兄さん。」と藤さんが出て來る。

「あそこに水天宮さまが見えてるでせう。あそこの濱邊に綺麗な貝殼が澤山ありますから、拾つていらつしやいな。」といふ。そんなに麥まないのだけれど、もう、よさうとも言へないので、干し列べた平莖の中をぶら〳〵出て行く。

五六歩すると藤さんがまた呼びかける。

「あなた、お背に綿屑かしら喰つ附いてゐますよ。」

「どこに？」

「もつと下。」

「この邊ですか。」

「いゝえ。」

「大きいのですか。」

「あ、もう一寸上。」と言ひ〳〵出て來て取つてくれる。眞綿の切に赤い絹絲の絡んだのが喰つ附いてゐたのである。藤さんはそれを手の平で揉みながら、

「いゝお天氣ですね。」といふ。一緒に行つて見たいといふ念が素振に表はれてゐる。門を出しなに振り返ると、藤さんはまだうろ〳〵と立つてゐる。

「お早くお歸りなさいましな。」

「えゝ。」と、自分は後の事は何にも知らずに、ステッキを振り廻しながらと〳〵と出て行つたけれど、二人は遂にこれが永き別れとなつたのである。

勿論この時には、借りた着物はもう着換へてゐた。着換へるまで自分は何の氣もなしにゐたけれど、かうして島の宿りに客となつて、女の人の着物を借りて着たのかと思ふと、脱ぐ段になつて一種の艶な感じが起つた。何だかもう少し着てゐたいやうにも思はれた。そして、しばらく羽織の赤い裏の裏返つたのを見守つた。自分の家なぞでは、こんな花やかな着物の脱ぎ捨ててあることは遂に見られない。姉は十一で死んだ　その後家中に赤い切なぞは切れつ端もあつた事はない。自分の家は冬枯れの野のやうだとつくづくさう思ふ。その内に不圖蛇の脱殼が念頭に浮んだ。蛇は自分の皮を脱いで、脱いだ皮を何と見るであらうかと、飛んでもない事を考へ出した時、初やがやつて来て、着換へた着物を持つて行つた。

今自分は、その蛇が皿を巻いたやうな丘の小路をぐるぐると下りて行く。一曲りづつ下りるにつれて、女の歌つてゐるのが追々に鮮やかに聞き取れる。

「ねんねしなされ、おやすみなされ。鶏がないたら起きなされ。」と歌ふ。艶やかな聲である。

「おきて往なんせ、東が白む。館々の鶏が啼く。」と、丘を下りて了ふと、歌ふめは角の豆腐屋のお仙である。すべてこの島の女はよく唄を歌ふ。機を織るにも島を打つにも、舟を漕ぐにも馬を引くにも、働く時にはいつも歌ふ。朝から晩まで歌つてゐる。行くところに歌の揚らぬ事があれば、そこには若い女がゐないのである。若い女はみんな歌ふ。そしてお仙なぞは一番うまい組のやうである。

お仙は外に背中を向けて豆を挽いてゐる。野袴をつけた若者が二人、島の道具を門口へ棄てゝ竈の前に踞んで煙草を喫んでゐる。破れた唐紙の陰には、天黒頭巾を着たしたまゝ、黒煙りの竈の前に踞んで煙草を喫んでゐる。藤さんが、火鉢を抱へ込んで、人形のやうに坐つてゐる。眞つ白い長い顎鬚は、豆腐屋の爺さんには酒落過ぎたものである。

「をかしかしく柳の葉は白い。今の如の歯は白い。」

お仙は若い者がゐるので得意になつて歌つてゐる。家に隙いて曲ると、

「青木さんよう。」と、呼び止める。人並より餘程廣い額に頭痛膏をべたべたと貼り寒いでゐる。昨夕の干潟の鳥のやうである。

「昨日來なんしたげなの。わしや丁度馬を換へに行つとりましての。」と、手を休めて、

「乗りなんせい。今度のも大人しうがんすわいの。」と言つたかと思ふと、また直ぐに歌になる。

「親が二十で子が二十一。どこで算用が違たやら。」

「ようい、よい。」と野袴の一人が囃す。

横の馬小屋を覗いて見たが、中に馬はゐなかつた。馬小屋のはづれから、道の片側を無花果の木が長く續いて居る。自分はその蔭を縫んで行く。兩方は一段低くなつた麥畑である。お仙の歌は追々に聞えなくなる。ふと藤さんの事が胸に浮んで來る。藤さんはもう一月も逗留してゐるのだと言つた。そして毎日働いてばかりゐたと言つた。何か譯があるのであらう。明夜小舟さんが俄かに默つてしまつたのは、眠いからばかりではなかつたらしい。どういふ事なのであらうかと頭りに考へて見る。

後から鈴の音が來る。自分はわが考への中で鳴るのかと思ふ。前から薬を背負つた男が來る。後で、

「ごめんなんせ。」といふ。振り向くと、馬の鼻が肩のところに覗いてゐる。小走りに百姓家の軒下へ避ける。そこには土間で機を織つてゐる。小聲で歌を謠つてゐる。

「おゝい。」と言つて馬を引いた男が立ちどまる。藁の男は足早に同じ軒下へ避ける。馬は通り抜ける。蜜柑を積んでゐる。

と、

「まあ誰ぞいの。」と機を織つてゐた女が甲走つた聲を立てる。藁の男が入口に立ち塞つて、自分を見て笑ひながら、ちりく〳〵とあとしさりをして、背中の藁を中へ押し込めてゐるのである。

「嗜いわいの。」と女がいふと、

「ふゝゝ。」と男は笑つてゐる。打ちとけた仲かも知れない。

再び藤さんの事を考へつゝ行く。初やは事情を知つてゐるかも知れぬ。あれに喋らせて見ようかしらと思ふ。

このあたりはすべて漁師の住居である。赤ん坊を竹籠へ入れて、軒へぶらく〳〵釣り下げて、時々手を擧げて突きながら、網の破れをかどつてゐる女房がある。鎌先の蔭に擴げた切芋へ、蠅が眞つ黒に集つて、全で蠅を干したやうになつてゐるのがある。だけれど、初やに訊くといふのは、何だか、小母さんが言はないでゐる事を藤へ廻つて探るやうで變である。訊くまい。知れる時には知れるのだ。自分はなぜこんなに藤さんの事を氣にするのであらう。單に好奇心といふに過ぎないのであらうか。

この時自分は、濱の堤の兩側に春丈よりも高い枯薄が暫間もなく生え續いた中を行く。浪がひたく〳〵と石崖に當る。程經て漁手からお長が白馬を引いて上つて來た。何やら丸い物を運ぶのだと手眞似で言つて、一しよに行かぬかと言ふのである。自分は附いて行く氣になる。馬の腹がざわく〳〵と薄の葉を撫でる。

そこを出ると水天宮の社である。あとで考へると、この邊で引き返しさへしたらよかつたのに、自分はいつまでも馬の轡に附いて、山畠を五つも六つも越えて、たうとお長の行くところまで行つたのであつた。谷合の畠にお長の雙親と兄の常吉がゐた。二三寸延びた麥の間の馬鈴薯を掘つてゐるのである。

「まあ、よう來てくれなんしたいの。」と言つてみんなで喜ぶ。爺さんは瓶中を纜にして、

「わし等はあんたが往なんしたあと、いつまでもあんたの事ばかり話してゐたんぞ。」とにこにこする。

「はあ死ぬまで命はれんのかいのと思うたに。」と母親が言ふ。自分は小さい時の乳母にでも會つたやうな心持がする。しばらく色々の話をする。

やがて雙親は掘りはじめる。枯れ萎れた莖の根へ、ぐいと一鍬入れて引き起すと、その中にちらりと猿の臂のやうな色が覗く。莖を攫んで引き抜くと、下に芋が赤く重なつて附いて居る。常吉はうしろからぼきく〳〵とそれをもぎ取つて畚へ入れる。一畚溜ればうんと引つ抱へて、畦に放した馬の兩腹の、網の袋へうつし込む。馬は畠へ影を投げて筵の葉を食つてゐる。自分はお長と並んで、畠の隅の蕭の上で煙草を吹かす。雙親は鍬を休める度毎には自分の方を向いて話をする。お長も時々袖を引いて手眞似で話す。沖の鳥貝を拾く船を指して、どの船も帆を三つづつ横向きにかけてゐる、兩端から二本の碇綱を延してゐるゆゑ、帆に風を孕んでも船は動かない、帆が張つてゐるから碇綱は弛まぬ、鳥貝は日に干して俵に詰めるのだなどと言ふ。浪が畠の下の崖に碎ける。日向がもく〳〵と頭の髮に浸みる。

やがて常吉の若い嫁が、赤い馬を引いてやつて來る。その馬が豆腐屋のであつた。嫁も掘る。自分も掘つて見たいと言つたけれど、着物がよごれるから駄目だと言つて母親が聞かない。嫁は唄を謠ふ。母親も小聲で謠ふ。謠へぬお長は

腑つ伏して蓆の端を挘つてゐる。
　常吉が手を叩くと、お長は立つて、白馬を引いて行く。綱の袋には馬鈴薯が一ぱいになつてゐる。白馬が歸つて來ると、嫁の赤馬が出て行く。赤が歸ると白が出る。
「父やん、はあ止めにしなんせ。」と常吉が鉢巻を取つた時には、もう馬の影も地に寫らなかつた。自分は何時間居つたか知れぬ。鳥貝の白帆も疾くにゐなくなつてゐる。
「旦那は先い往んなんせ。お初やんが尋ねに出ませうに。」と母親がいふ。自分は初めて貝殼の事を思ひ出して、そこ〳〵に水天宮のところまで歸つて來る。
　夕日が遙か向ひの島蔭に沈みかゝつてゐる。貝殼はもう止さうかしらと思つたが、何だか氣が濟まぬゆゑ、せめて三つ四つばかりでもと思つて干潟へ下りる。嫁の皿といふ貝殼が澤山ころがつてゐる。拾ひ出すと中々止められない。たうと片つ方の袂へ大方一つぱいになるまで拾ふ。
　上へ上つて見ると、自分の歩いた下駄の跡が、居坐つた二つの漁船の間にうねすねと二筋に續いてゐる。歸つたら藤さんが一番に出て來て、まあ何をしておいでになつたんですと言ふであらう。そして貝殼を玄關へうつし出すと、おや澤山に、まあと言つて嬉しさうにするであらう。自分はそれをもう有つた事のやうに考へ浮べながら、袂を抱へて小早に歸る。豆腐屋の前まで來ると、お仙が門口でカンテラへ油をさしてゐた。
　丘へ上る途中で、今朝買はせたばかりの下駄だのに、ぷすりと前鼻緒が切れる。元が安物で脆弱いからであらうけれど、初やなぞに言はせると、何か厭な事がある前徴である。仕方がないから、片足袋ぬいで、半分跣足になる。
　家へ歸ると、戸口から藤さんを呼びかけて、しばらく玄關にうろついてゐたが、何の返事もない。もう一度高く呼んで、今度は小母さんと言つて見たがやつぱり返事がない。家中がしんとしてゐて、自分の聲の這入つて行く跡が見えるやうである。勝手へ廻つて初やを呼んでも初やもゐない。變だと思ひながら、有り合せの下駄を提げて井戸端へ出て、足を洗はうとしてゐると、誰かしら障子の内でしく〳〵と啜り泣きをしてゐる。障子を開けて見ると章坊である。足を投げ出してしよんぼりしてゐる。
「どうしたんだ。」と問へど、返事もしないでただ涙を拂ふ。
「お母さんはゐないの？」と言へば顔を横に振る。
「ゐるの？」と言へどやつぱり横に振る。
「どうしたんだ。姉さんはどこへ行つたんだい？」と訊くと、章坊は涙の目を見張つて、
「姉さんはもう歸つちやたんだもの。」と泣き出すのである。
「おや、いつ？」
「よその小父さんが連れに來たんだ。」
「どんな小父さんが。」
「よその小父さんだよ。」と涙を啜る。
　自分は深い谷底へ一人取殘されたやうな心持がする。藤さんは俄かに荷物を纏めて歸つて行つたといふのである。その小父さんといふのは大分年の入つた、鼻の先に痘痕がちよぼ〳〵ある人だといふ。小母さんも初やも一しよに隣村の埠頭場まで附いて行つたのださうである。夕方の船はこの村からは出ないのである。初やは大きな風呂敷包みを背負つて行つた。もう少し先のことだといふ。その小父さんは章坊が學校から歸つたらもう來てゐたといふのである。自分は藤さんの身邊の事情が、色々に廻り燈籠の影のやうに想像の中を廻る。今埠頭場まで駈けつけたら、船はまだ出ない内かも知れな

い。隣村の埠頭場までは二十町ぐらゐはあらうけれど、どこかの百姓馬を飛ばせば譯はない。何だか會つて一言別れがしたいやうである。この儘では物足りない。欺されでもしたやうにあつけない。駈け附けて見ようかしらと思ふけれど、考へると、その伴れに來た人間に顔を見られるのが厭である。何だか無上に人相のよくない人間のやうな氣がしてならない。それが怪しげな眼附をしてじろ〳〵と白眼みでもすると厭である。又船が出た後であつては間拔けてゐる。そして小母さんに自分などは來なくてもいゝのにと思はれると何だかきまりが惡い。かう思つて決心がつかない。しばらくぼんやりと立つて、その小父さんの顔を考へて見る。これまで見た事のある、厭な意地くねの惡い顔をいろ〳〵取り出して、白髪の鬢の下へ嵌めて、鼻へ痘痕を振つて見る。
　やがて自分はのこ〳〵と物置の方へ行つて、そこから稻妻の形に山へ附いた切道を、すたすたと片跣足のまゝで駈け上る。高みに立てば沖がずつと見えるのである。そして、隣村の埠頭場から出る帆があれば、それが藤さんの船だと思つたからである。上れるだけ一足でも高く、境に繞らす竹垣の根まで、刺木の中を無理矢理に上つて、小松の幹を捉へて息を吐く。
　白帆が見える。地の如くに澄み切つた黄昏の海に、白帆が一つ、動くともなく浮いてゐる。藤さんの船に違ひない。帆のない船はみんな漁船である。藤さんが何か考へ込んで斜に坐つてゐるところが想はれる。伴れに來た人は何にも言はないで、鼻の痘痕を小指の爪でせゝくつて坐つてゐるやうな氣がする。藤さんはどんな心持がしてゐるであらう。どういふ事からこんなに不意に伴れて行かれたのであらうか。小母さんのところに一月もゐたのはどうした故であらうかと、いろんな事が一度に考へられて、物足りないやうな、苛立たしい心持がする。船から隣村の岸までは、目で見てもこゝからこの前の岸までよりか遙かに遠いけれど、まだ一里と乘り出してはゐない。自分が畠に永くゐさへしなかつたら、少くとも藤さんが出かけるところへなりと歸つて來たであらうに。それともなぜはじめから出て行くのを止さなかつたらう。一しよにゐる間は別に何とも思はなかつたけれど、かうなつて見れば、自分は何かしらあなたをいぢらしく思ふとくらゐは言つて置きたかつたやうな氣がする。この儘で永く別れてしまふのは何だか物足りない。自分がどんな氣でゐるかは藤さんは知つてはゐまい。別れた後は元の知らぬ人と考へてゐるやうに思つてゐてくれては張合がない。自分は何だかお前さんの事が案じられてならないのである。
　このあたりの見渡しは、この時のみは何やら意味があるやうであつた。暮れて行く空や水や、ありやなしやの小島の影や、山や蜜柑畑や、森や家々や、目に見るものが悉く、藤さんの白帆が私語く言葉をとり〴〵に自分に傳へてゐるやうな氣がする。
　と、ふと思はぬところにもう一つ白帆がゐる。かなたの山の曲り角に、靄に薄れて白帆が行く。目の迷ひかと眸を凝らしたが、やつぱり帆である。併し藤さんの船は是非とも前からの白帆と定めたい。遠い分はよく見えぬ。そして、間もなく靄の中に消えてしまふのである。よく見えて永く消えないのが藤さんの船でなければならぬ。
　はら〳〵と風もないのに松葉が降る。方々の機の音が遠くの蟲を聞くやうである。自分は足もとのわが宿を見下す。宿は小島の逃げた空籠のやうである。離れの屋根には木の葉が一面に積つて朽ちてゐる。物置の屋根裏で鳩がぽうぽうと啼いてゐる。目の前の枯枝から女郎蜘蛛が

下る。手を上げて拂ひ落さうとすると、蜘蛛はすら〳〵と枝へ歸る。この時袂の貝殼ががさと鳴る。今まで傾と忘れてゐたけれど、もうこの貝殼も持つてゐたつてつまらないと思つて、一つづつ出しては離れの屋根を目がけて投げ附ける。屋根へ屆くのは一つもない。みんな途中へ落ちる。落ちて木の葉が微かに鳴る。今のは何とも答が無かつたと思ふと、しばらくして思ひ出したやうにばさといふのがある。目を閉ぢて横の方へうんと投げて、どの見當で音がするか當てて見る。しなければするまで投げる。しまひには三つも四つも握つて無茶苦茶に投げる。たうとう袂の底には、から〳〵の藻草の切と小砂とが殘つたばかりである。

再び白帆を見る。藤さんのはいつまでも一つところにゐる。遠くの分はもう亡くなつてゐる。そして、近く岸の薄のはづれにこちらへ歸る帆がまた一つゐる。どこから歸つたのかとはじめは訝しむ。その内に、これは一番はじめのがこちら〳〵近づいたのではあるまいかと疑ふ。見る〳〵岸に近くなる。それでは藤さんの船だと思つたのは、こちらへ歸る船ではなかつたらうか。今の藤さんの船は、霧の中のがこちらへ出て來たのではあるまいか。自分はわが說が嘲りの中に退けられたやうに不快を感ずる。もしかなたの帆も同じくこちらへ歸るのだとすると、實際の藤さんの船はどれであらう。あちらへ出るのには今の場合は帆が利かぬわけである。けれども帆のない船であちらへ行くのは一つもない。右から左へ、左から右へと限なく探しても一つもない。自分は氣が苛立つて來る。それでは先に霧の中へ隱れたのが藤さんのだ。そしてもう山を曲つて、今に地方の岬を望んで走つてゐるのである。心に極めねば收まりがつかない。無理でもそれに違ひないと、襷紐づくで自說を貫いて、こそ〳〵と山を下りはじめる。

下りる途中に、先に投げた貝殼が道へぽつぽつ落ちてゐる。綺麗な貝殼だから、未練にもまた拾つて行きたくなる。あるだけは殘らず拾つたけれどやつと、片手に充ちる程しかない。下りて見ると章坊が淋しさうに山羊の艦を覗いて立つてゐる。

「兄さん、どこへ行つたの。」と訊く。

「おい、貝殼をやらうか、章坊。」といふと、素氣なくいらないと言ふ。

私は不意に歸らねばならぬ事と相なり候。わけは後でお聞きなさることと存候。容易にはまたとお目もじも叶ふまじと存ぜられ候。あなたさまはいつまでも私のお兄さまにておはし候。靜かに御養生なされ候やうお願ひ申上候。おものも申さで出で立ち候こと本意なき限りに存じまゐらせ候。何卒お許し下され度候。

これは足を洗ひながら自分が胸の中で書いた手紙である。そして實際にこんな手紙が殘してあるかも知れないと思ふ。出ようとする間際に、藤さんはとん〳〵と離れへ入つて行つて、急いで一筆さら〳〵と書く。お家で藤さんと呼ぶ。はいと言ひ〳〵、あら〳〵かしくと書きをさめて、硯の蓋を重しに置いて出て行く。——自分が藤さんなら、こんな時には是非とも何とか書き殘して置く。行つて見れば實際何か机の上に殘してあるかも知れないといふ氣がする。

併しやつぱりそんな手紙はなかつた。

けれども、ふと机の抽斗を開けて見ると、中から思はぬ物が出て來た。緋の紋羽二重に縞紬裏の附いた、一尺八寸の襦袢の片袖が、八つに疊んで抽斗の奥に突つ込んでがあつた。もとより

初めは奇怪な事だと合點が行かなかつた。別に證據と言つては無いのだから、それが、藤さんが竊かに自分に殘した形見であるとは容易に信じられる譯も無い。併し抽斗は今朝初めに掃除をさせて、行李から出した物を自分で納めたのである。袖はそれより後に誰かが入れたものだ。そしてこの袖は藤さんのに相違はない。小母さんや初やや、そんな二三十年前の若い女に今頃こんな花やかな物がある筈がない。果して藤さんが入れたのだとは斷言出來ぬけれど、併しほかのものがどう間違つたつてこんな物を自分の抽斗へ入れ込む譯がない。藤さんのした事に極つてゐる。さうすれば只うつかり無意味で入れたのではない。心あつて自分にくれたのである。さう推定したつて無理とは言へまい。自分は袖を膝して何だかほろりとなつた。

併し自分は藤さんについては遂にこれだけしか知らないのである。あゝして不意に歸つたのはどういふ譯であつたのか、それさへたうと聞かないづくであつた。その後どこにどうしてゐるのか、それも知らない。何にも知らない。

といふと二寸合點が行かぬかも知れぬけれど、それは自分がわざ〳〵心配してこんな風にして了つたのである。千鳥の話が大切なからである。千鳥話とは、啞のお長の手枕にはじまつて、繪に描いた女が自分に近よつて、狐が跳ねどになつて、更紗の蒲團の花が淺んで、蛸が沈んで針が埋まつて、下駄の緒が切れて女郎蜘蛛が下つて、それから机の抽斗から片袖が出た、その二日の記憶である。自分は袖を膝の上に載せたまゝ、暗くなるまでぢつと坐つて色々な思ひにくれた末、一番しまひにかう考へた。話は只この二日で終らなければ面白くない。跡へ尾を曳いてはもう拙らないと考へた。或西の國の小島の宿りにて、名を藤さんといふ若い女に會つた。女は水よりも淡き二日の語らひに、片袖を形見に殘して知らぬ間にゐなくなつて了つた。去つてどうしたのか分らぬ。それで澤山である。何事も二日に現はれた以外に聞かぬ方がいゝ。もしや餘計な事を聞いたり、千鳥の話の中の彼女に少しでも傷が附いてはと惜い譯である。かう思つたから自分はその夕方、小母さんや初やなどに會ふのが氣になつた。二人が何とか藤さんの身の上を語つて、千鳥の話を壞しはしまいかと氣がもめた。

小母さんは歸つて來るや否や、

「あなた、お腹がすいたでせう。私氣になつて急いで歸つたのでしたけど。」と、初やにお菜の指圖をして、

「これから當分は何だかさびしいでせうね。全く不意にこんな事になつたのですよ。」と、そろそろ何か言ひ出しさうであつたから、自分はすぐ、

「あの豆腐屋の親爺さんは、どういふ氣であんなに鰌を生やしてゐるんでせう。長い鰌ですね。」と言つて、話の芽を枯らしてしまつた。

それ以來小母さんたちが一寸でも藤さんの事を言ひ出すと、自分は忽ち二日の記憶を抱いて逃げて行くのであつた。どんな場合でもすぐ逃げる。どうしても逃げられない時には、一生懸命に他のことを心の中で考へ續けて、話は少しも耳へ入れぬやうにしてゐた。後には、小母さんも藤さんの事は先方から避けて一切自分の前では言はなくなつた。初やも言ひ含められでもしたのか、妙に藤さんの名さへも口に出さなかつた。二人で何とか考へての事なのかも知れないと思つたが、そんな事はどうでもよかつた。聞かされさへしなければいゝのである。その後小母さんからよこす手紙にも、いつでも自分がゐた頃の事をあれこれ回想してゐながら、今に藤さんの話は塩程も書いては來ない。

以來永く藤さんの事は少しも思はない。よく

思ふのは思ふけれど、それは藤さんを思ふのではない。千鳥の話の中の藤さんを思ふのである。今でも時々あの袖を出して見る事がある。寝附かれぬ宵なぞには必ず出して見る。この袖を見るには夜も更けぬと面白くない。更けて自分は袖の両方の角を摘んで、腕を斜めに挙げて燈火の前に釣す。赤い袖の色に灯影が透み渡つて、真ん中に焔が蔓るとき、自分はそゞろに千鳥の話の中へ這入つて、藤さんと一しよに活動寫眞のやうに動く。自分の芝居を自分で見るのである。初めから終りまで千鳥の話を詳しく見てしまふまでは、躍す両手のくたぶれるのも知らぬ。袖を叠むとから思ふ。この袖の中に、十七八の藤さんと二十ばかりの自分とが、いつまでも老いずに封じてあるのだと思ふ。藤さんは現在どこでどうしてゐても構はぬ。自分の藤さんは秋の中の藤さんである。藤さんはいつでもあり〳〵とこの中に見る事が出来る。

千鳥々々とよくいふのは、その紋羽二重の袖の紋柄である。

（明治三十九年五月）

敷石ー以上ニ出テイナイ
ワダラナイ。
ケレドモ、ダイ
ケイ。

月夜（一）

自分は實際に、さうした女の西洋人の形を見たのである。

それは自分が十六の時であつた。寄宿舎に入れられてゐた自分は、父が死んで、長煩ひをしてゐる叔父の教官をしてゐる叔父のところで面倒を見てもらふ事になつてからは、八月の休みには自分も叔父の處にかゝりものとなつて、母と共に一月ばかりゐた。九月になつて再び學校へ帰るのに、行李も出來てもう立つといふ日になると、母は何だか別れたくないからもう一週間だけ學校を休んで、こゝにゐてくれないかといふ。叔父もさしてそれを悪いとも云はなかつた。自分は母と永久に別れる日が來るのだとはもとより分らない。たゞ、母のために心の重たい日のみが續いた。

自分は母が眠つてゐる間は、もう飽き〳〵した官舎の構内に、一人淋しく立ち盡したりしつゝ、する事もない休日を見てゐた。

官舎といふのは、學校の裏に、二筋の續きに並んでゐた。どれも同じやうに、低いからたちの垣にオリブ色の小門がついて、表から見える階下の二間と、二階とは、白い色に塗られた西洋造りになつてゐる。短劍を帶びた教官たちは、黄の鞦つたりしてゐるバルコニーの下の上り口から、靴の儘で出入りをした。門の内は青々しい芝生で、西洋梨の木なぞが二三本植つてゐた。

このやうな小綺麗な官宅が、通りを挟んで、背中合せに、物靜かに二三十戸續いてゐた。裏口には互の見通しを妨げるやうに、いろいろの立木が厚く立つてゐた。

自分はする事もなく、かうした校内の通りを一人でぶら〳〵と歩いた。よその家にはどのやうな人たちがゐるのか、外を通つたのでは中に人影の見えた事もなく、たゞカーテンの下りた窓なぞに、火を點したやうな、赤い一輪の西洋花の鉢なぞが出てゐたりするだけで、人の話も漏れないくらゐ上品に住ふ人々であつた。

山彦

一

城下見に行こ十三里、炭積んでゆこ十三里、と小唄に謡ふといふ十三里を、城下の泊りからとぼ〳〵と、三里は雨に濡れて來た。

これぢやいの、こつち〳〵行くと門ががんすけ、と言つて、伴の女は、大きな立木の覗いた、古ぼけた練塀の角へ來て止る。この楓が三百年、淡名屋が出來てから三百年と言ひながら、馬の合羽をめくつて風呂敷包みを出してくれる。楓の雫がぱたり〳〵と洋傘に落ちる。尚う角の小店の、赤い天狗の面を書いた障子の灯が、泥濘へぼんやり寫つてゐる。この藁はこちらから返させるからと言へば、何の、わしにくれなんせ、ついでががんすいの、と言つて馬へ附ける。

横へ這入ると片方は畠である。眞つ黑い夜の小雨の奥に、高い木立が夜よりも黑く淀んでゐる。眞赤な火が、間にちらと見えて直ぐ隱れる。門口へ來る。

「あはな屋」と書いた四角な金燈籠がどんよりと柱に下つてゐる。小門を押して見たが締つてゐる。早く姉に會ひたくて、とん〳〵と叩いてゐる間も飛ぶやうである。やう〳〵、あいあいといふ若い女の返事が聞えて、石の上を足音が來て、ぱさと大戸へ傘を縋らせる。小門が重たげに半分開くと、赤い襷をかけた小女が、下へ設いた手燭を取り上げて、どなたでござんす、といふ。小鼻の脇にぽくろがある。

奥の障子にあかりがさしてゐる。手燭について松の中を這入つて行く。途中の小屋に、水鐵砲や梯子のかゝつてゐるのが見える。小屋の横の百日紅が、編竹を被せた石の井戸を落花で赤く閉ぢてゐる。玄關を横に見て臺所口へ這入る。

何をしてゐるのか、姉は一寸出て來ない。二十ばかりの正直さうな下男と小綺麗にした年増の女中とが、上つたり下りたりして世話をしてくれる。黑ずんだ、だだびろい臺所に、暗いらんぷが眞ん中にたつた一つ點いてゐるばかりだから、何だか岩屋の中へ這入つたやうな心がする。赤い顔をした逞しい下女がゐる。鹽を土間の眞ん中へ持ち出して、大釜から鍋が抜けたやうな湯をうつす。裾を紮げてその中へ立つと、下女は鮫の皮のやうな手の平でごし〳〵と踵を擦る。下男が側へ來て、提灯を見せる。何か茹でたあとの湯と見えて、菜つ葉のちぎれが交つてゐる。さつきの小女は板の間の圍爐裏の鍋の下に粗朶を焚く。向うの、黑光りの戸棚へその火が映つて搖れてゐる。裏口の方に早いこほろぎが二匹、まだこそ〳〵と啼いてゐる。姉はどうしたものかまだ出て來ない。

女中に足を拭いて貰つて上へ上りかけると、眞つ白い頸巻をしたお爺さんが出て來た。さあさあお上り、どんなに疲れましたろぞいの前から知れてゐれば迎へを出すのに、えらかつたぞいの、こんな山の〳〵奥で……まあま、挨拶はあとからにしませうい、と、にこ〳〵して、こつちへおいで、姉さんがびつくりするぢやろ、と言ひつゝ、薄暗い間を二つ三つ拔けて、その障子を開けて縁側へ出ると、禮さんかい、まああんたは、と取り縋るやうに呼びかけて、姉が小黑く馳せて來る。

二

頭のところに手拭と楊枝と齒磨の函とが置いてある。姉の寢床はいつの間にかすつかり片附けてある。何時だか分らぬけれど、大分朝寢をしたらしい。

起きて緣側へ出る。曇つた空が低く小庭に被さつて、今日もまた雨らしい。手洗ひの水が八手の中の竹の筒からちよろ〳〵と水引花の中へ落ちる。かたへの小窓の青桐の間から、裏の花畠が見える。手水を使ふと、蓬杉の下駄を突つかけて行つて見る。浮くやうにして歩かぬと、足の裏の豆が痛くてならぬ。

杉垣を出ると、裏は廣い蔬菜畠である。眞ん中の一仕切が花壇になつてゐる。大きな倉が七戸前、向ひ側に白く續いてゐる。畠の右を限る果物の林の後から、昨夜の榎が二股に高く空に突き出てゐる。花壇の中の亭へ這入る。白い蝶々が三つ四つ、花へは來ずに、畠の大根に飛んでゐる。

しづかに腰をかけてゐるうちに、向うの青柿の間から、色の白い女がふと現はれて、畠の中を眞つ直にこちらへ向いて來る。姉である。白米の三寶をさげてゐる。いつの間にか艶やかに髮を結うて薄化粧をして、帶をきちんと締めて、小ざつぱりした若女房になつてゐる。微笑む目元も活き〳〵して昨夜とは全く見違へるほどである。

側へ來て、疲れが出たら、と言つて肩にさはる。ほかはないが足が痛い、ぢつとしてゐても石の上を走るやうだ、その三寶は何だ、と言へば、まだ母さまから聞かんなんだが、三百年このかたの掟で、目に一度、あの榎の下のお社へ片手に一掬ひのお米を供へるのが、家の女房の大事な勤めの一つになつてゐる、雨のふる日は樓をからげて傘さして來る、といふ。姉さんが寢て居た間は誰がする。ほかのものではいけないのだ、こゝの母さまは二十七とかで亡くなられて、それきり二度目のも見えなんだゆゑ、わしが來るまでおほかた三十年の間、神さまはただ年に一度、二月の十八日のお祭の外には何にもお貰ひなされなんだ、神さまもお不仕合せでいらつした、三十年してわしが來ても、といひかけて、姉は一寸銀の簪に手を障へて、祀つてある御神體は鏡ださうだといふ。

ぢつと見てゐると、姉はやつぱりやつれてゐて、どことなく力が抜けてゐるやうである。もう起きてもいゝのかと訊くと、あんさがかうしてはる〳〵來てくれたのに、寢てゐてはすむまい、といふ。それではわしに到して我慢するのか。いや〳〵、あんたが來てくれたので直つてしまつたのだと言ふ。ほんとかしら。緣側へ來て間もないのに、二月も續いて寢てゐても、それを家の方へは知らさなかつたのである。わしにも默つてゐた、あんたは隨分だといひ〳〵、花壇のはしの白い花をうつかり摘る。その恨みごとは晝夜よう聞いたぢやないか、そんなにたいした病氣ぢやなし、たゞ何となく氣分が惡いだけであつた、かゝさまが氣遣はれるゆゑ、あんたこゝへ寄つて行つたといふ事を知らせても、わしが寢附いてゐたとはいうておくれるな、いゝかと、念を押して、わしや先へ行く、もう直ぐお年だ、と歸りかける後姿へ、指先の花びらをふつと吹きかけると、五ひら六ひら、ひらひらと、一つが辛うじて帶の色へ白くかゝつて直ぐ落ちる。

鏡を祀つたといふ社が行つて見たくなる。姉が出て來た柿の木の間から、深い果物畠を抜けて、例の榎の立つてゐる、塀骨木塀の中へ這入つて行く。向うの隅の榎の下に、小さな茅葺の社がある。榎の、眞つ黑い、じめ〳〵した太い幹の眞ん中を、青い蔓草が二尺ばかりの幅に、二

股のところから高く社の屋根まで這ひ下つてゐる。古ぼけた柵柳に亂れ續いた、花は枯れ〳〵の蔓の中に、一基の石碑が小晴く立つてゐる。こちら側には、小さい石燈籠が向うに丸つ、ふり返つて見ればすべてで十四、垣に沿うて列んでゐる。一ぱんはしの一つはまだ新らしい。あたりは一面に深い苔で、雨上りはつる〳〵して滑りさうである。石に刻んだのは社の緣起であつた。

此祠祀我遠祖　去今三百三十年前

と書き起してある。古き代の物語は繪卷物の繪を見るやうである。三百三十年のその昔、永祿丙寅三年閏八月、雲州富田の居城陷落して、尼子氏の一門悉く〳〵こゝに亡ぶ。併し、さるところの土豪の家に、宗徒のさる重い大將の血を分けた、七八つになる子供があつた。勝に誇つた毛利の軍兵が、追付その方へも押し寄せて來ると聞いて、この子にかゝる災を恐れた母は、腹心の家の子を輔んで、紐を兩ぶものの夫婦に裝うて、密早く里を落ちて出た。二匹の馬に積んだ荷包みに紛らして、一包みは親が分けてくれた千兩の小判、もう一つには、昔一夜の殿御から、もし生れた子供が男なら、十五になつたら、二人伴らつて名乘つて來いと、その印に遺された、今は悲しき形見の緋威しの鎧を携へて、いづこからいづこへ渡つてか、百十何里を落ち延びて、この山中へ出て來た時、女はかりそめの煩ひから遂にこの世を去つた。下男はたうとこの里に炭商人となつて、殘された子を手一つに育て上げ、十七になると家を繼がせた。これが濱名屋の初代七郎右衛門である。當時この邊もやはり敵の領内であつたので、胡亂な鎧は下男が早く石棺に納めて中庭に埋めてしまつた。二代に至つてその上に小祠を建て、胡子社と稱して竊かに尼子氏を祀る。時に元和乙卯元年二月十八日。二百六十一年の昔である。古き代の事はこれだけしか分らぬ。ほかに記錄も何もない。戰亂の世にゐては、いろんな事が、胴の種になり易いゆゑ、名門の血を引いてゐるといふことは深く世に祕めてゐたのである。たゞこれだけの事を親々が傳へて來た。この榎は、たしかには分らぬが、古くこの社の出來た頃からあつたのだといふ。

こんな謂れが書いてある。裏を見ると、二十年前に建てたのである。十三代七郎右衛門とあるのは今のお爺さんの事と見える。石の肩の窄みに蟲が赤土で巢をくうてゐる。萩の枝をむしつてつゝいて見たが、中には何にもゐない。中指で押へたらげちやりと潰れてしまふ。

小さな鳥居をくゞつて堂へ上る。菲を覗くと、豆粒ほどの燈明が青く消えかゝつて、小暗い中に、お鏡が物の目玉の如く仄白く光つてゐる。三寶に供へたのは白米であるとはしかと分らぬ。榎の後へ廻つて見ると、蜘蛛の足のやうになつて浮き出た太根の間に小笹が生え詰つてゐる。幹は四抱へも五抱へもあらう。この木の下を掘れば石棺がそのまゝ出るであらうか。その緋威しの鎧が見られゝばいゝにと思ふ。上から何やらばたりと足もとに落ちる。見廻したが何が落ちたのか分らぬ。蓍の中に黃實が黑くなつてちら〳〵埋つてゐる。咽を釣り上げて上を見ると、高い〳〵梢の眞つ先に、鳥が一匹棲つてゐる。嘴を頸りに枝へ搾つてゐる。甄が痛くて見てゐられぬ。鳥居を出しなにかあと啼く。

三

お爺さんのところから薄れを切らして出て來ると、姉が向うの唐紙をあけて招いてゐる。鮎が澤山獲れて來たといふ。それから栗が落ちてゐると言つて、奥の廊下へ伴れてゆく。

井側の栗の木の下に、青栗が五つ六つ落ちて

ゐる。果つてゐる栗にも小雨が白く塗れてゐる。まだ拾つたつて駄目かと訊いたら、一昨日下女に剝らせて見たが、中はまだ白かつた、そのうち山へ探しにやろ、山にはいゝのがあるかも知れぬといふ。

廊下の突き當りは硝戸が締つてゐる。お天氣になつたらあそこを開けさせて庭を見せよう、いつもあゝして締つてゐるゆゑ、掃除をせねば汚くて這入れまい、わしが來た時には、あそこで祝言をしたのだつた、そして父さま母さまが一番奥の間へ五日泊られた、さあ、鮎を見にゆこと、姉は帶揚を締め直す。

盞所にはもう灯をつけてゐる。緣側へ出て見ると、井戸端に四斗樽へ六本の鮎が獲れてゐる。大川の築へかゝつたのださうである。筒袖に縕の帶をした若い男が、口を尖らせて、景氣よく歌を讀みながら、大きいのばかりを選り分けて、蓆へ出す。二人の男がそれを一つづつ竹の串へ刺して籠へ入れる。向うの風呂場の後から、蓑を着て、背中に粗朶を負うた女が五六人、ぞろ〳〵と這入つて來る。こちらを見て、今度は大層獲れたいの、あれで何遍目ぢやろ、もう今年はお仕舞ぞの、と黄色い聲で評し合つて物置の後へ這入つて行く。小さいのは鹽漬にし、大きいのは、あゝして串へ刺して、お午に食べたやうな干鮎にするのださうである。あの小屋へ行つて見て來いと姉がいふゆゑ、下りて傘をさして行つて見る。

小屋の中には昨夜の下男が、大きな二つの火鉢に火を拵へてゐた。串の鮎を、頭を下に、背を内へ向けて、この火のまはりへ插し列べて、上からこの桶をかぶせて五六時間放つとくと、鮎は乾いてかち〳〵になる、桶が焦げないやうに、時々上の底へ水を注す、かう言つてしまへば造作もないやうだけれど、その火の加減といふものが中々骨である、鹽漬の方は早く食つてしまふのだが、干したのは來年まで一年中の食料になる、けふは七十貫とれた、大凡要るだけ拵へたら、そのあとはなんぼ取れてもすつかり村中へ分けてやるのだ、といふ。

下男は話しながら蝦蟇草を吹く。松の木の根で旨く拵へてゐる。作つた蝦蟇草入で、筒も木の根で旨く拵へてゐる。お前の細工かと訊いたら、まだもう一つ拵へかけてゐるから、今夜わしの寢るところへ來て見ぬか、面白ければあげる、といふ。

小屋を出ようとすると、さつきの女たちが、臺所の戸口で一人々々縞や型の袋を拔げて、下女に米を貰つてゐる。後に聞くと、これがこの日の勞銀ださうである。縁側へ笠を脱いで、黄楊の小櫛に鬢の解れを掻き上げてゐる、日もとの涼しい、十六ばかりの娘がゐる。びしよ〳〵に濡れた着の裾に、赤い襟が覗いてゐる。どこかで見た事があるやうな氣がして、傘を拔げかけてぢつと立つて見てゐると、女は櫛を手に持つたまゝ、うつとりと宙を見詰めてゐたが、およしや、おい〳〵、と、せぎ〳〵に向うへ歸つてゆく一人に振り返られて、急いで笠をかぶり、紐を結び〳〵走つて行く。風呂の軒下に、砂に埋つてゐた鶏が跳ね起きて、小雨の中に體を振ふ。砂がもうつと背中を包む。

この夜、姉と二人で青桐の雨に掻餅を燒いて食べながら、いろ〳〵昔話をして、もう小早に寢ようと言つてゐるところへ女中が來て、乙吉が何か言つて來たといふ。櫛の蝦蟇草入の男かと訊いたら、あの男仕でござりますと笑ふ。この下男は七つの年からこの家へ來たのださうである。裳舟の船頭をしてゐるのだといふ。早く行つておいで、そのうちに床を取つて置く、今宵は二人でこゝへ並んで寢ようかと言ひつゝ、姉は針箱の上の水藥を飲む。

提灯をつけて、乙吉と伴つて、屋敷の隅の男仕長屋へゆく。三つ目の部屋へ伴れられてはひ

る。破れ疊の八疊である。眞ん中の圍爐裏の側に、白髮の爺さんがカンテラの灯で草鞋を作つてゐる。この爺さんは蟇ださうである。後の古壁に仕事着がづらりと懸けてある。

乙吉は拵へかけの蝦蟇草入を見せて、このでこぼこさへ落したら、あとは椋の葉で磨きをかけるだけだから調はないと言つて、赤く焼けた古釜を火の中から拔いて、刻つた櫛の中を焙く。濃い煙がじう〳〵と立つ。カンテラの臺もこの男の考案と見えて、三叉になつた女松の小枝を逆さに立てたものである。稍あつて格子の障子の外から、乙やと、五十ばかりらしい聲が呼びかける。濱の方のお米がなくなつたと言ふけ、あした爲さんにさう言うて、誰でもえゝけ一馬御苦勞してくれんさいの。乙吉は、あい、といふ。この影法師は誰ぢやろ、勘一、われやいつ毬栗になつた。ふゝゝ、勘ぢやがんせん、勘は夜番に出とります。さうぢやろてい、勘がうかうか坊主になると、例の饅頭禿が出るのでの、誰ぞの、そいでは。ふゝゝ、こなさんぢ、あれや奥さまのお里の方の、といふと、あゝ、これはこれは、眞つ平御免なさいませ、と言つて這入つて來て、びか〳〵の頭を撫でながら初對面の挨拶をする。濱の炭倉の方の番頭ださうである。青い盲目縞のごは〳〵した太綿羽織に、紙紐を紐に結んでゐる。

この製爺が、こゝの家の事をわが自慢のやうにあれこれと話して聞かせる。家の山は凡何萬町歩ある。こゝから奥へ六里這入つても七里這入つても、よその家の山は一つも歩かぬ。九里行つて國堺のところまで這入ると、昔から足一本踏み入れぬ大森林がある。多くは杉と檜で、その大きい事と言つたら、家の樹なぞは容易にその孫にもなれぬ。この頃は、そこから二里ばかりこちらで杉を切り出すので、杣や人夫が五六十人も籠つてゐる。若旦那も行つてゐられる。切り倒した木は、枝を拂うて轉がして置いて、雪か積んだ時に谷を滑り落すので、それを木挽が板にして、筏に作つて川を下す。これから冬の半へかけては方々の炭竈で炭を燒く。一昨日も五十駄積んで來た。炭のいゝ惡いは木によるが、それも落葉の頃に燒くのが一ばんいいのである。三里ばかり行くと一寸した窟があるゆゑ、その内荷馬に乘つて行つて見ぬか。そこらへ行くと愈々山ばかりで、家なぞは三里の間に一軒もない位だから、猿が獨りで威張つてゐる。用心しないと、うつかり先生たちにからかつて腹でも立てさすと、行くうちに途中を澤山集めて來て、山の曲り角なぞに待ち伏せしてゐて、見張りに立つた奴がぎゃあといふや否や、一度にばら〳〵と石を投げつけたりする。中々手に合ふ奴ではない。夏なんかは、馬方が馬を繋いで寝て寝て、さあ行かうといふ時に、俄へ置いといた鞍當行李がない、笠がない。見廻すと、それが頭の上の高い〳〵木の先つ頭へぶらさげてあつたりする。現に一昨年の春であつた。わしたちがこの邊の山林を見廻りに行つて、山の木挽小屋に住んでゐた時である。或日みんなはそれ〳〵持場へ出て行くし、わしは留守居に殘つて飯を炊いて——二升であつた——それをお櫃へ取るなり棚へ仕舞つて置いて、日向の蓆で顎の鬚を拔いてゐたら、一時してみんながわいわい騒いで歸つて來るから、どうしたのかときよろついてゐるうちに、屋根から茶碗が二つ三つ轉がり落ちてがちや〳〵と碎ける。びつくりして上を見たら、お櫃が屋根の眞ん中に乘つかつてゐる。箸や漬物が散らばつてゐるといふ體たらくだ。猿奴が飯を食うて蓋げたのだ。いつの間にお櫃なぞを盗み出したのか一寸も知らなんだ。小面が憎かつたのは、そんな事をして置きながら、すぐ後の松の木へ遁げ上つて、すまし込んで蚤の取りつくらをしてゐる。小猿奴は

小猿奴で、親の赤いおけつへぶら下つて、ぶうらぶうらぶらんこをしてゐる。

番頭は講談のやうにいろんな手眞四なぞをして、乘り氣になつて喋る。大變面白い話だが、二升飯のお概は猿には少し重くはないかと言ふと、はい、でもほんとでござります、現に誰かが下しに上つたのでござります、なら、これ乙吉。わしや知りません、船頭は山へ行かんけに、と細工の手の小刀がぴかりと光る。はゝゝゝゝ、これはしくじつた、さうだ〳〵、勘が知つとるわい、と少しへこんだ氣味で煙管をはたく。鞳は草鮮を二足作り上げた。

四

掃除が出來ましたと言つて來たから、讀みかけてゐた本を伏せて、姉について立つて行く。廊下の栗はあれからまた澤山落ちた。小女が、手拭を被つて雜巾桶を提げて出て來る。厄介だからこちらは開けさせなんだと言つて、二十五間だといふ長い緣側が眞つ晴である。火吹竹を覗いたやうに、向うに小さな潛り戸が開いてゐる。そこから出ると、更に三四間の廊下が彎めに奥の一間に導く。

欄干の下は水である。仄白き花の萍に、絹絲のやうな小雨がかゝる。水の向うには、杉の大木が何十本と立ち重なつて、用邸花女郎花なぞが、間にちらほら咲いてゐる。こゝは百十何年とやら昔に、國の殿さまが來られた時に建てたのだ、この上へ上れば庭がすつかり見えると言つて、姉は襖に兩手をかけて、寂びた銀箔の色を左右に開くゝ中は小暗い四段の段々になつて、黑漆の障子が高く候つてゐる。上へあがれば、古い繪草紙の中へ這入つたやうな心持がする。床の間の虎の皮や、脇息や、紋のついた大きな黑塗の煙草盆なぞを取り出して、殿さまがたつた今まで坐つてゐたばかりのやうに並べて見る。姉が下の間に疲れたやうに膝を崩して坐つてゐるのを見て、姉さんこれをお見、あゝ、まだこの刀かけをこゝへかう置くのだ、と抱へて來る。ふゝゝ、昔は可笑しかつたのね、と言つて、姉は傾きながら微笑んで、二つの袂を膝にかき合はす。

障子を開けば、欄干に赤く覗いた芙蓉の花に、絲櫻の枝が雨の如くにかゝつてゐる。滿庭すべて風の古木のみである。後に女松の茂つた小山を負うてゐる。問近く鎖す靄の中から、頂上の岩が危く肩に迫る。山めはづれに外が少し見えてゐる。たゞ眞つ白の霧の中に、二本の高い銀杏の木と、赤瓦の寺の屋根とが、半分ばかり覗いてゐる。

姉も上つて來る。高く水に架す橋の欄干へ、一羽の翡翠が下の河骨の中からつと上る。

自分はこの一間が大變好きになつた。姉が用事をしてゐる間や、向き合つてゐても話が切れてしまふと、すぐのこ〳〵こゝへやつて來る。毎日々々小雨が降つて、外へ出ることも出來ないし、仕方がないから、後にはこゝへ火鉢や、机や、そのほか姉の部屋の調度をいろ〳〵運ばせて、書間はこゝをゐどころにする。姉も用事をして置いてはこゝへ來て、二人で物の本を讀む。家へはこゝへ寄ると言つて來たのではないし、いろんな事も氣にかゝらぬではないが、姉と別れるのがいつまでも惜しい。雨が續いてくれるのが却つて仕合せである。姉は、雨か霽れば自分はこゝを出て行くのだといふことを全く考へもしないらしい。たゞ、あんたがゐるから嬉しい、と何かいふとすぐさう言うて、自分はいつまでもこゝにかうしてゐるものだといふ氣でゐるやうに見える。雨はしめ〳〵と四日つゞく。

四日目の午まへの事である。やはり例の好きな一間へ來て、退屈して火鉢の灰をいぢくつてゐると、どこから出て來たのか、小さな鼠の子

が一匹、横の障子の根をちよろ〳〵と走つて來る。毛皮の縞まで來て、一寸立ち止つて、小さな粒々の黑い目を上げてぢつとこちらを見てゐたが、そのうちにくるりと向き換はつたかと思ふと、大急ぎに走つて段々の方へ這入つてしまふ。和あつて、一寸頭だけ出してまた引つ込む。

立つて見ると、どこへ這入つたか、もう影が見えぬ。をかしいと思つて見廻してゐると、段々の横の、小さな押入の戸襖の下の方に、小さな穴が開いてゐる。あそこだと思つて襖を開けて見ると、中はがらん洞で何にもない。ほこりの中に鼠のふんがぽつ〳〵落ちてゐる。さつきの鼠の逃げたところを突き留めなければ氣がすまぬ。下の間へ出て行つたのかしらと考へてゐると、戸棚の天井でちい〳〵と鳴く。見ると、天井の板の合せ目に二寸ばかりの隙間がある。爪立ちをして手を當てると、板がずらりと横へいぢると同時に、砂のやうなごみがじやり〳〵落ちたから飛びのいた。上から藁が一本下つてゐる。こんどは段々の二段目へ上つて、腐めになつて手を入れて探つて見ると、紙屑のやうなものがぐちや〳〵とある。奥の方で親らしい奴がごそ〳〵言はせる。鼠をしかめてぐいと手を突つ込んで掻き廻して見たら、何かしら固い物がある。

取り出して見ると一たばの封書である。上になつてゐた方は、鼠が齧つてぼろ〳〵になつてゐる。どうしてかういふものがこんな襞なところに這入つてゐたのであらうか。あゝして誰かが匿して置いたものであらうか。變だと思ひながら、煤だらけだからそつと緣先へ持ち出して、どうせ汚れついでに手の平ではたいて、裏を返して見ると、民さまゐる、ちゐよりと書いてある。女の文である。八通ある。よほど古いものだと見えて、眞ん中を括つた紙紐なぞは、醬油で煮締めたやうな色をしてゐる。上包みの白紙も眞つ黄になつてゐる。手を洗つて机のところへ持つて上る。探して見れば奥の方にこんなのがまだいくつもあるかも知れぬと思つたが、きたないから止めにする。

火鉢に絶える火種をついで、ぢつとこの古き戀を見詰めて坐つた時には、丁度春の日のそゞろ歩きに、菜の花の中に分るゝ路の、いづれへ曲ろうとためらふやうな心がする。文の文句が披いて見たい。披かうか。披いたら若き昔の二人が羞かしがらう。披かずに置かうかと思案したが、それではやつぱり心殘りである。自分へ來た手紙を封を切らずに捨てて置くやうな氣持がする。どうしようかと迷ひながら、紙紐の下へ指を通さうとしたら、紙紐は線香でも折るやうにぽくりと切れる。

下の一通を手に取る。下のもやつぱり、民さまゐる、ちゐより、とある。裏を見ると、この分はまだ封がその儘になつてゐる。變だと思つて次のを取れば、これも封が切つてない。次のもやつぱりさうである。最後の二つはぼろ〳〵だけれど、全き六通は六通ながらみんな同じに、封を開けない儘である。中には蟲かはひつてゐるのがあつて、黄粉のやうなふんが落ちる。それほど古い手紙が一つも封が切つてないのである。これはたゞの嬉しい戀ではあるまい。開いて見よう。古い昔の手紙を見るに誰に濟まぬもない事だ。ぢいと一つをちぎりかけると、廊下にとん〳〵と足音がする。悪い事をでもしてゐるやうにどぎまぎして、机の下へ隠してしまふ。女中が來たのである。下の間に手をついて、御飯でございますといふ。

五

例に手紙の事を話さうかと思つたが、妙に自分の事ででもあるやうに恥かしい氣がして默つ

てゐた。食事がすむと、お爺さんが、梨のいゝのを貰つて來たからと、姉と二人を部屋へ伴れて行く。姉は山の兄のところへ送るものを整へねばならぬと言つて、ぢきに立つて行く。例のやうに長たらしい話に捕へられる。今日は笛の講釋である。お爺さんは箒が出來るのである。若い時に寺の院主から教はつたのだといふ。さつきの手紙の事が氣になつて、しまひはもぢ〳〵して坐つてゐた。やうやくの事で話が切れる。

再び奥の間へ歸る。向うの水のほとりの草叢に、蟲が一匹、かすれ〳〵に畫の小雨に啼いてゐる。杉の木間に湧く霧が、煙のごとくに水を渡る。

自分は古き代の戀の封を切る。しめ〳〵と小雨のごとき筆の跡である。

けふの牛いちへお里からまゐりし人のいふ

よし、うけたまはり、また〳〵かひなき

うらみをことづてまゐらせいふ。

と、走りがきに綴れた假名が、考へ考へて五行ばかり讀める。途中で先まで開いて見る。一尺ほど開くとばらりと紙の繼ぎ目が切れる。摺つた模様のもつれ絲が、紅紫の色も仄かに古りて、絶え〳〵に文字の間に絡んでゐる。最後に、きさらぎ、中の七日、ちゑより、こひしき〳〵民さままゐるとある。恨みをことづてまゐらせいと、再び前から辿つて行く。讀めぬところが多くてもどかしい。苛だつばかりなくなる。たゞ飛び〳〵に二三行づつ辯りくさしたまま、ずん〳〵六つの封を開く。

それでも、氣を落ち附けてよみ返すと、しまひにはだん〳〵に少しづつ分つて來る。時々後へ返つては字を較べ合せて見たりするうちに、すべてがやう〳〵頭に這入る。

叶はぬ戀の恨みである。女は夜晝涙に伏して、袖を噛みちぎつて悶えてゐる。何ゆゑか男は取合はぬ。いくたび文の數をかさねても、たゞ一ことの返事もくれぬ。昔は昔、添はれぬ戀は互に忘れてしまひたいとばかり、投出すやうに返事して、その後またいくたびも出す文は、こんどは〳〵と、待ちに待つのがいつでも仇だ。あれだけの數々を一つに繫げば、何十丈といふものになるであろ。その中に、一寸ぐらゐは不憫な女の願ひが見えてゐさうなものだ。添うてくれなぞとはもう疾うから言ひはせぬ。わしが厭におなりたのか。大方それはさうぢやろが、厭になつたならなつたのだと、たゞそれだけ聞かしてもらひたいばつかりに、この三年を生きてゐた。それだけ書いてよこす一言が、なぜそのやうに惜いのか。わしが恨めしさもどかしさは、水を掬へば火となつて落せば再び水となる、地獄の底の責苦に、生きて遭ふのかと思はるゝ。緣側に立つて北の空を見つゝ泣けば、涙の目に迫るあの山々が、嚙んで〳〵嚙み碎きたい程やるせない。果はいつもそのまゝそこに伏し倒れて泣くのである。

女は誰にも話さずに、この苦しみを秘き胸一つに押しこめて悶えてゐる。母親は何にも知らぬゆゑ、病はわしが念力でも取つて除けると言つて、三年の長煩ひを力をつくして介抱してゐるのに、女はいつまでも直らぬやうにと祈つてゐる。直つたらまた緣附きの話で血を絞られなければならぬ。

されど母さまが、わしの介抱に痩せてやつれてゐられるのを見れば天罰が怖ろしくなる。光夜も次の間でしく〳〵泣いてゐらるゝゆゑ、よろよろ起きて行つて見たら、鐘筒からわしの衣裳を出して泣いてゐられる。丹年三村屋から話があつたとき、なぜそなたはこの衣裳を着て緣づいてはくれなんだかと責められる。あの時にはお前さまから内證でくる文が、帶の間に絶えたことがなく、いちんちたゞそは〳〵とく

らしてゐた。仇し男にどうして添はれよう。母さまは再び涙を飲んで、三人がかりで十日も寢ずにこの衣裳を仕立てた時には、わしや手足も浮いてゐるやうに嬉しかつた、あの時素直に行つてさへくれたなら、たとひその後こんなに煩うて寢ようとも、それは實家へ歸つて寢てゐる病いまはそなたは年頃すぎて、いつまでも緣づかずに煩うてゐるのだと泣かれるゆゑ、母さま堪忍して下されませと泣き入れば、いゝや、わしや叱るのぢやない、不憫なからだ、たとひ今すぐに直つてくれて、すぐによそから貰ひに來てくれるとしても、これ見や、十七の春のこの花のやうな振袖は、もう着ては行かれぬぢやないか、たうと生涯着られぬぢやないかと言はれた時は、わしや勿體なうて切なうて、生きてゐるのが辛くなつた。

六つの文はかゝる痛ましき繰りごとを聯ねて、返事を〳〵と、足に取り縋らぬばかりに頼んでゐる。いやになつたのだと一ことつぶやけば、それで未練も遺さずに、このまゝ絶え入る事が出來ると言ふのである。六つ目の文には、追て書に、小十は大井さまとやらいふ三百石のお侍へ仲間に這入つたと書いてある。

雨はいつしか小晴くなる。

六

民さんといふのは誰のことか、お爺さんに話せば分るだらうが、何だかそんな事も訊きにくい。お爺さんの恥でもさらへ出さうとするやうな心がする。考へて見ると實際又、お爺さんの親か叔父か兄弟かであるかも知れぬ。事によるとお爺さんその人かも分らない。滅多なことは訊かれはせぬ。そして一方から言つても、誰だといふ事が分つては興がなくなつてしまふかも知れない。日向へ出しては味が拔ける。やつぱり月夜の霧の奥に、仄かに仕舞つて置かねば損だ。だれだといふきまりはない。たゞ國々に嚴さまといふものが治めてゐた古き代の戀である。民さまは世話物に出て來るやうな若い綺麗な男なのだ。

だからお爺さんには言はぬけれど、姉にだけはこつそり話したい。情深い姉が同情すれば、はかない文の女は嬉しがるに違ひない。手紙は懷に包んで持つてゐる。言はうか〳〵と思ふけれど、女中がゐるから何だか言ひ出しにくい。二人はらんぷの向ひ側で、奥山の兄へ送る絲入の寢間着へ絲を入れてゐる。今夜中に仕上げて置かねばならぬといふ。けふの便りに、今年は山はもう霜が降るとあるさうだ。

自分はこちら側へ轉んで物を讀む。しばらくして女中は、さあすみました、あとは私がいたしますと言つて、着物を抱へて立つて行く。姉は疊に落ちた絲屑を拾ひながら、けふは午から中ぢつと縫物ばかりしてゐたから、あんたとは永らく會はなんだやうな心がする、少し肩が凝つて來た、久し振でお針をすると第一にこゝが痛くなる、と言ひつゝ、親指の先を見詰めてゐる。お京が行つてしまつてもやつぱり言ひ出し悪い。何ゆゑか妙に、あんな話をすると姉が羞かしがるだらうといふやうな心がする。ぐづぐづしてゐるうちに、姉は氣が向いたからと言つて、床の間の琴を下して調子を調べはじめる。それからいろ〳〵の話が出て、手紙の事はたうと話さずに寢てしまふ。

羞んで寢てゐる姉は、羨しいほどすや〳〵と寢入つてしまつたのに、自分は目が冴えていつまでも寢附かれない。寢よう〳〵ともがくほどなほ寢られない。しよぼ〳〵と降る雨の音に、二間三間隔てた柱時計が、十二時一時と更けて行く。その間、例の女の事が引つ切りなしに頭に纏はる。色々の場面が、一度見た芝居を想ひ出すやうに目の前に浮く。ほかの記憶が入り

代り間へ這入つて來ても、塗物へ息を吹くやうに、曇れば乾いて、しまひはすぐこの女のことになつてしまふ。

昔七八つの頃に伸よくしてゐたお紺さんの事もひよつくり思ひ出した。南京鼠の箱を提げて、何とか言つた建具屋の店の鉋屑の中をばさばさと這入つて行つて、無花果の木のところから、お紺さん〳〵と呼び出す。障子の内では三味線のお稽古をしてゐる。誰かいの、譲さまかいの、おはひりなさいやとをばさんが呼ぶ。お紺さんが縁側へ出て、頭で何か言ふけれど分らない。白足袋へ鼻緒の赤い跡が附いてゐる。お紺さんは抜け出るやうにしてやつて來て、こゝへ來ては厭ぢやといふ。こんどがわしの番ぢやけに、直ぐぢやけに、門口へ出て待つてゐておくれなさいの、とみんなにきまりが悪いといふやうな素振をする。お紺さんが中へはひると、をばさんが、譲さんはもうお歸りたかと訊いてゐる。無花果の木の蟲が吐き出した、銀屑のやうな困まりを指先でいぢくりながら、往かずにやつぱり立つてゐると、片手の結の南京鼠ががらがらと車を廻す。だれだつたか、大きい女の人が出て來て、譲さん、帶が解けとるにと言つて、後へかゞんで結んでくれて、かはいゝ鼠ぢやいのと言つて出て行く。やがてお紺さんが赤い扇子を胸に插して出て來る。お不動さんのお祭へ詣つてこれを買うたんだと言ふと、あらあら車を廻すと言つてお紺さんがよろこぶ。あと先になつて鉋屑の中を駈けて出る。家へ行かうとわしはいふ。お紺さんも自分の家へ來いといふ。

それから日を置いて、巴屋の奥座敷でおさらひがある。いゝ着物を着て母さまと伴つて行く。庭の櫻に雫洞が點してある。みんなの中へ坐つて見物する。お紺さんとこのをばさんが見附けて、卷壽司を鮑の貝へいれて持つて來てくれる。傘屋の爺さんが蠟燭の心を切つて廻る。三味線が鳴り出して、白と赤のだんだらの幕が開くと、お紺さんがきら〳〵した簪を一ぱいさして、振袖に長い帶を後へ下げて、おくみになつて出てゐる。わしは嬉しくていよ〳〵お紺さんが好きになる。もう一人のおくみは蟲が好かない。そのうちにぺろりと舌を出したりなんかして可笑しな風をするから厭になる。お紺さんだけで舞へばいゝのにと思つて歯痒くてならぬ。やがておくみのお紺さんがその盃ずん〳〵大人になつて、どこの家とは知らぬ小暗い窓の下に、振の袂を押し當てて泣き伏してゐる。緋鹿子の鮨がゆら〳〵と搖れて、なぜに返事が貰はれぬ、會ひたい〳〵と泣いてゐる。――何でもすぐに文の女の事になつてしまふ。

そのうちにぼろ〳〵の二通の事を考へて、寢られぬついでに一行でも拾つて讀んで見ようといふ氣になる。姉はいつの間にかあちらへ向き變つて寢てゐる。目をさましてくれねばいゝがと祈るやうにしつゝ、除かに蒲團を拔け出して衣桁のところへ行く。着物の袂が脱れてゐる。手紙を取り出すと、再びそつと蒲團へはひつて、有明行燈を少し掻き立てる。

鼠に喰はれた分を披げて見る。一つは下の半分迫きしか形がない。薄墨で小貝の繪が摺つてある。一つは貝の白い紙である。この分は全でめちや〳〵で、開けばばら〳〵に小さく切れてしまふ。小貝の間に拾へる言葉に後先を足すと、この手紙の屑かぬうちに、わしは十萬億土へ行くかもしれぬ。……何かしら、一品はお淘さまの形見に持つて行く。――髪は剃り落さずに置いて貰ふ。……一つ合點ゆかぬは、お阿さまはお家の總領でありながら、なぜに今日までお嫁を取らずにおいでなのか。萬々一、時を待つてわしに添うてやるといふお積りであるのら、わしやかうして死んでゆくのが口惜い。併しそれ

は愚かな心の迷ひである。……おまへさまはわしの事はすつかり忘れて、いゝ嫁さまを貰うて千代八千代まで榮えて下さい。遠くからお二人の息災を祈つてゐる。……わしや少しもお前さまを恨んではゐぬ。いつ〳〵までも、おなつかしい方だと思つてゐる。これまでかず〳〵はしたないことばかり言うたのは、どうぞ〳〵お許し下され。いまはの際にたつた一日、遠くからでもお顔が見たい。……何月かの十一日と、さゝがにの絲の如くにかぼそき文字が、かすれ〳〵に亂れてゐる。女は一息々々に近づく死期を待つてゐるのであつた。

はじめて氣がついたが、切々になつてゐる方は手が違ふ。たしかにほかの女の手だ。肉太にこれくつた拙い字である。日附のところには文月十二日と、前の分の日附の翌日になつてゐる。切々の中から取れるところだけ拾つて見る。見馴れない字だから中々讀み悪い。

……は女はそだち不申候。また、よめいりいたしまゐりそうろもの……

といふのがある。

……これは根もなき世の口のうはさにてそうろへど、萬一これが……

と、問が蟲が喰つてゐれど、まことにてそうろとき……

と綾くらしいのがある。

……がいよ〳〵せまりまゐらせそうろ。……これは書き出しのところらしい。

……これを申しのこしそうろゆゑ、それが氣にかゝりて……

とだけで切れたのがある。あとは枯葉を揉みちぎつたやうな切々や、鶏のやうに裂けたのばかりで、もう拾へるところは一行もない。拾へたのだつてさつぱり何の事かわからぬが、代筆を頼んでゐるといふのは最早からだが利かなくなつたのにちがひない。かくて遂に息が引けたのだ。枕元に嫁入の衣裳がならべてある。紅友禪の蒲團の襟に冷たく亂れた、さびしい黒髪を片手にたぐつて、泣き〳〵燈火に黄楊の櫛を扱いてゐる、附き添ひの女の懐に、この手紙は握されてゐたのかも知れぬ。

ちぎれを集めて、小貝の模様の一通へ卷き込んでゐると、またもう一つ大きいのが出て來た。

……れそうて、たゝりをはらひなされそうや

う、くれ〳〵もねんじ上げ……

眞ん中が破れてゐる。

……その二十七にてみまかりそうと申そうこと、いと〳〵氣がかりにぞんじまゐらせそう。それではお家のさかえおぼつかなく……

といふ文句である。何か男の家には祟りがあつて、それでは家の榮えが覺束ないから、何とかしてその祟りを拂はなければいけないといふのらしい。自分は不意に冷たい水の中へ漬けられたやうな心持がする。再び前の切れを選り分けて見る。女は育たぬ。――やはり祟りのせゐであらうか。そして嫁入して來た女は――それが二十七で死ぬといふのではあるまいか。こゝの母さまは二十七で亡くなつたと聞いたやうである。そして三十幾年して姉が來たのである。――自分は愕いて、もつとで、姉さん、と呼びかけようとした。姉はすや〳〵と小さい息に寢入つてゐる。

七

晝寢をしてゐた間に四日の小雨が霽つて、午後の日がかん〳〵さしてゐる。目隠しを取り外したやうにからりとした心持がする。大空は產毛一本ほどの雲もかすれずに、高く深く、眞つ碧に澄んでゐる。裏の方で小鳥がちい〳〵と啼いてゐる。水の白く落ちる水引花の小緣に兩足を垂れて日向を見る。からだが輕くなるやう

ないゝ天氣である。

姉がやつて來て、たうと起きたのね、といふ。おろし立ての手拭を帶へはさんで、小急がしさうな樣子をしてゐる。お午に起さうかしらと思つたが、それでは寢が足らぬからほつて置いた、もう四時すぎだ、といふ。昨夜はたうと寢んづくで二人で話してゐたのである。わしが目をさました時、あんたは何であんなに目を開けて考へ込んでゐたのか、とまた訊く。何でもなかつたのだと言つて、下つた手拭をいぢくる。どうしても言つてくれないのだからなほ更聞きたい、と言つて微笑んでゐる。いま考へればもう何の事もない。祟りとかなんとかいふのは暗い昔の事だ。こんなに日のかん〳〵してゐる中に、そんなだだ黑いものが潜んでゐさうなわけがない。手紙の文句を繰り返して見たつて怖くもない。あれは昨夜中で雨が降つてゐたからだ。行燈の灯で考へたからである。寢つかれないで頭が變になつてゐたせゐだ。姉は、けふは舊の十五日で、夕方から振まひの酒事をするのだから、その支度を手傳つてゐるのだと言つて、いそ〳〵して直きまたあちらへ行つてしまふ。

ひとりでとぼ〳〵裏へ出て行く。例の梶が、ちい〳〵と啼きかはす何だ十羽の鶺鳥を包んで蜚えてゐる。花崗に白い蝶々が出たり這入つたりしてゐる。

花を一廻りして、向うに並んだ倉の後へ行つて見ると、そこのところに外へ出る小門が附いてゐて、戸が半分開いてゐる。下は一面の苗木の畠で、向うに延びた、大きな杉の茂つた小山の籠まで、だん〳〵に高くなつてゐる。杉の苔は下が赤枯れた色になつてゐる。左を限る樹林の後から、すぐに高い山が迫つてゐる。右の方は六七町の青い稻田が、中宮の段々になつて、正面の小山の後から延びた、高い山の根まで展つてゐる。田の中に圍れ〳〵に藁家が五六軒ある。全く擂鉢の底のやうな山中である。

苗木の中へ下りてぶら〳〵と田の方へゆく。籾はみんな穗が立つてゐる。ちよろ〳〵と流れる水のところへ來て、しばらくの間犬蓼の花を摧つて投げ〳〵する。それから畦の豆の葉を取つて、一寸置きに並べて、蓼の花を一つづつそれへ載せて見たりする。十人前の皿が並ぶ。一二間行つては、同じやうに野菊を載せたり溝蕎麥を載せたり、しまひには固つて畦豆を摧つて載せたりする。もう厭になつたから、稻の穗を一本取つて、粒々を一粒づつ前齒で噛んで、牛乳のやうな汁を嘗めながら、ぶらり〳〵引き返す。振り向いて見ると、豆の葉の皿を知らずに踏んだり蹂躪らしたりしてゐる。

苗木の中へ歸ると、向うの小山から、頰被りをした爺さんが、小籠を肩にしてとこ〳〵下りて來る。その方へ向けて行く。

行き會ふと、爺さんは手拭を取つて、お許しなされませと言つて丁寧にかゞむ。乙吉のところにゐた爺さんであつた。魚の小骨を植ゑたやうな頰髯が、日にきら〳〵と光る。何だと言つて籠の中を覗くと、椎茸を澤山採つてゐる。この山に生えたのかと顎で指すと、爺さんは小腰をかゞめて、はい？　お墓へおまゐりでござりますか、はい〳〵、お墓はこの山の上でござりますと、計樓の合はない返事をする。墓だからである。併しこの山に誰の墓があるのだらうと思ふと、ついでに上つて見る氣になる。

雜木の中をうね〳〵と上る。木の葉を漏る日影は、もはや、赤さがかつた夕日の色である。松林の中の赤い土の平みへ來る。こゝへ來ると景色がずつと開ける。

すぐ向うに險しく峙つ山の裾を、二三町幅の大川が、ゆる〳〵と渦を卷いて眞つ青な淵になつてゐる。大きな岩が兀々と覗いてゐる。こち

らの岸の稻田は、足もとから左の方へだん〳〵と幅が廣くなつて、三四町ばかりで盡きると、また山の續きが横合から出て來て、兩方から川をくの字にはさんで遠く走せてゐる。水の青みは日影を受けて薄紫や赤みを帶びて、やがて川中の女松の林のところから二つに割れて、白き瀨と碎けて落ちる。それが一つに合すると小幅になつて、末は小黑い山あひに淡く煙つてゐる。川の緣に沿ふ一筋の細路に、四五寸の薄墨色の小舟を水に曳いて、小指ほどの黑影が二つ上つて來る。

後を見れば、向うの山の麓に續く古ぼけた一筋の町が、小さい丘の兩方から、長短に覗いてゐる。右のはづれに赤瓦の寺がある。銀杏の木が三本立つてゐる。小山の左の角から、姉の家の練塀の一角が見える。例の梶がこの山里を領し顏に突つ立つてゐる。

また川の方を見る。橫手の間近い葉蔭に油蟬が鳴き出した。みんなのあとに立ち後れて、たゞ一匹、しんとした山の秋に封じ込められてゐるのである。何やら憐れな鳴聲が、日影を赤く顫はせて、向うの山まで響いて行く。小路について、丁度その聲の出て來る方へ這入つて行く。高い女松がこんもりと立ち詰つて、蔭の日影も漏れぬ。蟬はどの木へ縋つてゐるのか、路が曲れば後になつて、やがてもう聞えなくなつたと思ふと、仄暗い路は樫の大木に盡きて、右手に石の鳥居を見る。そこから小高い石の段々が附いて、上に石燈籠が二つ立つてゐる。上つて見たらそこが姉の家の墓場であつた。

杉の中が小暗く開けて、深い苔の兩側に、墓が高低に並んでゐる。正面に、初代七郎右衞門と大きく刻んだのが、梅擬で赤く包まれてゐる。森閑として木の葉一枚の音も立たぬ。仄暗いあたりの色に、からだも古く染まるかと思ふ心がする。上を見れば、疎く蓋をした夕空に、白い雲がちぎれ〳〵に迷うて行く。

右の取附きの最も十二代七郎右衞門の後妻とある。お爺さんは繼母にかゝつたのだと見える。その次の墓の花立の間から、小さい蟬の抜殼が覗いてゐる。摘んで引つぱり出さうとしたらぷつりと切れる。石の間を覗くと、一寸ばかり下を、胴中がずつと挾まつてゐて、向うへ出たところに、頭の方がだらりと二三寸下つてゐる。蟬の抜殼が丁度その頭と上下に向き合つて、斜めに喰つ附いてゐる。何事か冷たさうな話をから〳〵囁き合うてゐる。指で障れば、蟬はふは〳〵と動く。蟬は力を込めて齧り附いてゐる。後の梶の根元に火を焚いたあとが殘つてゐる。この墓の裏面には、

……元治甲子元年四月十日歿　行年七十　有二男　文政戊寅十二年　投袁修八津川陣防八里　藩侯賜白厩一雙嘉賞焉　弘化丙午三年歲大饑　散穀救二十一村　藩侯再賜銀十枚……前妻名加久……

二十七で死ぬとかいてある。表を見るとお爺さんの雙親である。變だと思ふ。お爺さんの妻も二十七で死んで、生みの母親――繼母の方は七十四まで生きてゐるが――生みの母親がやはり二十七で死んでゐる。向う側の角にあるのがおばあさんの墓である。行つて見るとちやんと行年二十七とかいてある。變だなと思ふと、昨夜の手紙の文句が影の如くに想ひに浮ぶ。何だか頭の中が土で詰つたやうな心がする。またこちらへ來て二十七と讀んで、それからつぎつぎにほかの墓を見て廻る。合靈といふのに、十二代の女の子が二人、一つと六つで死んでゐる。十一代の娘が十六で死んでゐる。女は育たぬといふ文句がどこかに刻んではないかといふ氣がする。十一代の妻は、後妻は六十いくつだが、先妻の方は早く三十二で死んでゐる。

順々に見て歩く。字の讀みにくいのは石の角を押へて透して見る。そのうちに、また殺年二十七といふ女房がゐる。十代の嫡妻だ。これで二十七が三人である。ぢつと立つて考へてゐると、まはりの暗い杉の後に夜風の如きものが呪ひだ〳〵と黒く唱んで走つて行くやうな心がする。これはわが神經だと思ふ。何だか早くこゝを立ち去らねばいけないといふ氣がして來る。あとの墓の事は忘れて、知らず〳〵石段の半まで下りて來る。あたりはすでに大分小暗くなつて、蹈む石段ばかりが仄かに白い。

ふと姉の姿が物の匂ひのやうに心に浮ぶ。ひとりでに振り向いて見た石燈籠の片はしに、目の迷ひか、蜘蛛の絲のやうなものが一本下つてゐる。一尺ばかりで切れてゐるけれど、下の切れ口が土の下にあつて、それが眞つ黒い土の中を、切れるか〳〵と思へど、うね〳〵とどこまでも續いて、末は家の練塀の根まで傳はつて、そこから目に見えぬほど小さくなつて、姉の袂の先へ絡まつてゐはせぬかと思ひつゝ段々を下りる。姉の袂が搖れゝば絲はふは〳〵と白く動く。——そんな事がある譯もない。併し兩親にさう言うて、早く姉をあの家からつれて出ぬと、わしが歸るとまた炬ひ出して、二十七になつたら死にはせぬかといふ氣がする。まさかそんな事もあるまいけれどと思つて見ても、それでも油斷がならぬといふ氣がして來る。ばかな事を考へるものだと自ら打消しつゝ、はじめの入口のところへ出ようとして、ふと横の透間を見れば、薄青く暮れかゝる遙かの空の下に、眞ん圓に淡く出てゐる夕月の中へ、水が二甲、白く煙つて流れて這入る。今夜はいゝ月夜である。

八

外の夕闇から這入つて、豪所へ上ると灸の間の襖の透間から赤々と灯影が見えて、大勢が賑やかに酒を飲んでゐる。わつはつはと一度に笑ひ出す。はじめて厭な夢からさめたやうな心がする。お京が見附けて、お歸りなされましたか、すぐにお風呂へお召しなさりませ、奥さまが先刻から探しておいでぢでございます、といふ。

酒を飲んでゐる緣側を通ると、障子に五六人の影法師が寫つてゐる。大きく擴がつた女の影が、何かしら皿へついでゐる。肘を張つてつるつると素麺かしら啜るのや、年取つた聲でねちねちと理窟を捏ねて、まあ聞かんせ聞いてくれなんせ、と手を動かすのや、互に酒を注ぎ合ふのや、いろんなのが影畫のやうに寫つて、わいわい言つて飲んでゐる。どこかの娘が手傳ひに來てゐるやうである。一番先の障子が少しあいてゐる。顔を反けて通り過ぎると、あゝ、もしもしあなたさま、と、屋根のお櫃が呼びかける。風呂へ召すのぢやわいの、と、後から來るお京がいふ。

風呂へ浸つてゐると、乙吉や、與平やと、お櫃が聲を絞つて促してゐる。一座がしんとなつたかと思ふと、二人の若者が袖を揃へて小唄を謠ひ出した。黄色い聲と胴滿聲とがうまく一つに調和してゐる。駈け出して行くやうな、景氣のいゝ唄である。黄色い方が乙吉かと訊いたら、お京は、はい、と言ひつゝ着物を片寄せる。落舟の唄ださうである。何とかよおゝいと、しまひを細く長く投げる。

「落ちてゆく時や、よおゝゝい。」とまた謠ふ。

じやぶ〳〵〳〵と、側から口早に川瀬の音を入れる男がある。

「落ちて行く時や、鷺鷥が赤い。着けば大濱の、よおゝゝい、灯が赤い、よおゝゝい。」と謠ふ。

お京が背中を流してくれる。大濱の灯といふのは何かと訊くと、何でございませうと言つてくす〳〵笑ふ。女のゐるところらしい。

九

二十五間の緣に月夜を蹈んで、奥の間へ這入つて行く。上の間に點した朱塗の雪洞の灯が、黒びかりの段々にゆら〳〵と流れ落ちてゐる。雪洞の向うに、袂の振に紅友禪の覗いた姉の後姿が、待ちわびたやうに火鉢の灰を掻いてゐる。

上つて行くと、こちらを向いて、まあどこへ行つてゐたのかといふ。その邊を歩いたのだと言うて、赤い高足膳を向け合して坐る。火鉢の小鍋がくつ〳〵と煮える。なんぼ探しにやつてもゐやせぬし、いつから待つてゐたか知れぬ。今夜はお爺さんのところへは院主さんが見えるのだし、こちらは二人で面白くお月見をしようと思つて、通ふに遠いから、いつそ何もかもすつかり持つて來た、御馳走は何にもないが、今夜のはわしが拵へたのだから、と嬉しさうにしながら小鍋を下して、もつとこちらへからお向き、あら、あんたは赤い顔をしておいでぢやないかといふ。少しほてり出した、風呂から出ると、何とかいふあの頭の禿げた番頭に無理矢理に引き入れられて、たうと四五杯飲まされて來た。まあ、いらぬ事をする爺さんだ、それではもう飲まれまい、とはずみが拔けたやうにいふ。まだ飲める、もう少しぐらゐ。そんなら折角だから、雞儀にならぬやうに、一つか二つお重ねや、と小穗利に燗をして、鍋の湯豆腐をついで、胡麻味噌をかけて赤い刺み生姜を入れてくれる。姉も箸を取りながら、いゝお月夜ぢやないかといふ。

障子の外は、深い水の底の國のやうである。一面に碧くさした月影を掻き分ければ、手に白き泡と刺れ返るであらう。池の面が絹蒲團の上を行くやうに歩かれさうで、木間に滑り入れば、枝は藻草の如くにゆら〳〵と靡きさうだ。小黑く向うを限つた松山は、撥れば薄紙の如くにべりべりと破れてしまつて、二三十里のたゞ碧白き國が、この高殿の欄に入るだらうと思はれる。山のはづれから庭の色は白みがかつて、上へ延びると再び碧く空となる。影のごとき阿妻屋の屋根の上に、星が一つ見えてゐる。靜かな月夜である。もの言へば、わが聲が水の上を渡つてゆく。

それはさうと、紙屋のおようさんはどうしてゐてぢやろ、と姉が突飛な事を言ふ。今ふいと思ひ出した、あんたはあの人が大好きぢやつたろ。なぜ。ほゝゝ、一寸ぐらゐ好きぢやつたろ、あんたがどこかで貝殼を澤山もろて、それを入れる袋をおようさんが拵へて來ておくれたことを覺えてゐてか、桔梗紫の甲斐絹で裏が白で、緋縮緬の紐がついてゐた、それからおようさんが家の二階で泣いた事があつたろ。それは知らぬけれど、ともかくあれからもう五年ばかりになる、あの頃わしは兎を飼うてゐた。今ゐるところはさびしい鳥ぢやと聞いた。あゝ、この夏救母さんのところへ行つた時に、山へ上つたら、おようさんのゐる鳥が、潮路のはてに微かに見えた、その時はおようさんの事は忘れてゐたが、今考へると、あの鳥がさうだ。さういへば會ひたうなつた、この山へのぼれば沖にその鳥が見えさうな心がする。

月がきら〳〵と橋のかなたの水草の中に碎ける。おようさんといふのは姉のお針のつれである。お京が饅を燒いて持つて來る。お湯へ這入れと姉がいふ。只今富やが這入つて居ります、誰とかが、見つけないお方が八幡さまの方へ行かしやつたといふのを聞いて、あそこまで行つて見ましたさうでございますといふ。まあ、かはいさうに、禮さん、あんたを探して歩いたのだ。

梅の蓋を取れば中に椎茸と玉子の黄味を着た

高野豆腐とが這入つてゐる。これはあそこの山で採つた椎茸か。あら、あの椎茸のところへ行つて見たの？　日に干さないと直ぐは食へないのだろ？　まあ、あの山へ上つてゐたの？　ああ。ひとりでか。一人で。どうして椎茸のあるところが分つたの？　椎茸は見ない。あしこの杉の中へ這入つて行くと、奥に墓場があるが知らんぢやろ。墓か、と、それとなく雪洞に姉の面輪を透して見る。わしが追つつけ埋まるところぢやから、いつか行つて見て置いておくれ、といふ。いやだ姉さん、と盃を置いて、もしや二十七の事を知つてゐるのぢやないかと考へも。姉さんがそんな死になんかするものか。ほほゝ禮さん、なぜそんな顔をしてゐるの、酔うたのか、と嬉しさうにさし覗く。姉は何にも知らぬらしい。いつまでも知つてくれなければいいがと祈るやうに思ふ。

あれ、と姉がいふ。笛の音が月夜の中から傳はつてくる。お爺さんか、院主さんか、と姉は耳を欹てる。姉の白粉の匂ひが来る。目を閉ぢると、ふと文の女が芝居のお染のやうな姿で想ひに浮ぶ。丁稚がそつと出す文を、あたりを見る見る受取つて、帶へはさんでそは〳〵と、二重の吸籠へ這入ると思ふと、女は烦ひに艶にやつれて、床の上に鬢のほつれを掻上げる。白い小肘に紅友禪の襦袢の袖口が絡まる。目を開けば、姉は宙を見る目で聞いてゐる。笛の音は融けて月夜と雲むのかと思はれる。

お京がまたやつて来る。あの乙吉があなたに、と言ひかけて、一つ私にお酌をさせて頂きませう、と莞爾やかに迫つた後、乙吉が、舌が縺れてよく分りませぬが、あすは舟を出すと申します。それが？　と姉が訊く。あなた、あすお立ちなのでござりますか。あら、と姉は愕いて、禮さん、まあ、わしには知らぬ顔をしてゐて、あの、いつ乙吉に約束したの？　こなひだ藁んで置いた。いやぢや禮さん、あすはまだ水が引かぬから船は出ぬ。水はもう大丈夫でございますさうな、淵が青うになつて居ると申します、しかしお歸るのはあすには限りませぬ、とお京が口を添へる。

愚圖々々してゐてはいつまでも切りがつかぬ、いつそあすにしようかと考へる。わしやも少しは泊つて貰へる筈でゐたのに、と姉は訴へるやうにいふ。それにあしたは炭を積んで落ちるんでござんすけに、汚うござんすに、と雪洞の蝋燭を覗いて見てお京は立つて行く。それは面白い、唄の文句をその儘だ、炭積んでゆこ十三里、といへば、ほゝゝゝ、さつきのあれで、もうお覺えなさいました、とお京が段々のところで振り返る。なに、これや今山聞いたんぢやない、こゝへ来ぬうちに疾うに城下で聞いて来た、城下見にゆこ、よおゝゝい、と先刻の節の眞似をして、お京の据ゑ注ぎにしたのをぐいと飲む。ほゝゝゝ、とお京が笑ふ。酒が頭へ上つた。笛はまだ絶えん〳〵に積いてゐる。

お京が行つてしまふと、禮さん、と姉が縋り寄つて、あんたが歸つたら、わしや、――ほんとに、あした歸る氣か、と膝に手をかけてさし覗く。姉の兩の瞳には見る〳〵涙がにじみ出る。

（明治四十四一月）

月夜（二）

一しきり飛びかはしてゐた赤蜻蛉も、もう終りとなつて、稀に生き長らへてゐるのが一匹、黄色い冷々しい日影の中に、門口の小溝のふちの石にとまつて、自分の影と重なり合つてぢつとしてゐる。人が通るとちら〳〵と立つけれど、また同じところに歸つて石の上に影を落してぢつとしてゐる。

おみつさん

一

緒の切れた片方の下駄を、帶へ通して腰に下げて、女竹を二本、じい〳〵と後へ引き摺つて、片跳足で、跛を引いてのらり〳〵歸つて來る。表の提灯屋は、もう店をしまつて門口を掃いて、剃げちよろの戸が下りてゐる。露路へ這入りかけると、提灯屋の障子戸ががらつと開いて、

「丁さん〳〵。」と、誰だか、白粉を附けた若いをばさんが、麻取を提げて出て來る。

「丁さんでがんせうがの。まあ〳〵すつかり見違へた。こつちへおいでい、丁さん。あたしぢやのに。――もうあたしをお忘れたか。――ほゝほゝ、分つたの？」と嬉しさうにして、麻取を置いて側へ來る。おみつさんだ。知らない間にをばさんになつてゐるのだから分らなかつた。綺麗な着物を着て、黒い帶を結んで、綺麗なをばさんになつてゐる。

「まあ大きくおなりたいの。お親母さまがいつの間にこんなにしなんしたろ。いくつにおなりたの？　え、丁さん。」

背中へ手をかけて、覗くやうにして訊くけれど、何だか恥かしくて、電信柱を爪で擦りながら默つてゐたら、おみつさんは後から兩方の手頸を握つて、

「丁さん、なぜそんなに恥かしがりなんす。」と、色さりかゝるやうにして、重たく二足三足たじたじと歩かせたが、

「あら、あんたは跛足でゐてか。――下駄は片つ方だけかいの。――ほゝゝ、こんな事をして丁さん、着物が汚れるに。除けなさいよ。もつとかう向いて見なんせ。――好え帶ぢやのにくちやくちやに結んでおいでるいの。」

下駄をはづして、屈んで帶を結び直して、着物の土を拂つてくれる。

「丁さん、おみつさんがよくおんぶして上げたのをおぼえておいでるか。え？」

おみつさんは齒を黒く染めてゐる。昔のおみつさんとはすつかり違つてゐる。

「忘れたの？」

「いゝえ。」とかぶりを振つて、頭を縮子の帶へ擦りつける。

「夕方にはいつでもおみつさんとお湯へはひりましたぞのい。あら〳〵、また砂塵煙。こつちへおいで、こつちへ。」と、二人で軒下へ駈け込むと、じやり〳〵と襲うて來て、向ひの生藥屋の看板ががた〳〵とかち合つた。目を開けたら町の東ほ黄色い煙でかくれて向うが見えぬ。おみつさんは袖をはたき合つて、

「あゝあ、汚いこと。」と顰をしかめて簾を取つて、片隅に掃き寄せてある提灯看の割り屑を麻取へ取る。

「丁さんはあの時はまだお餓頭ぢやつたいの。そしておみつさんとこがこの向ひで、隣がお魚屋で。――おぼえておいでるかい。」

「少し知つてる。」

「お魚屋はなくなりましたぞの。向ひはいつ普請をしましたい？」

「疾くに。去年。」

「さう？　まあすつかり變つたいの。丁さんとこは今裏座敷においでるの？　ほんに。二階の下へ露路が附いたいの。」と、おみつさんは往來の眞ん中へ出て、簾へ櫛を入れながら、こちら

の家並を見てゐる。
荷車が來る。
「丁さん、竹を引つ込めて置きなさい。」
「一人で川のところへ行つて取つたの。屋根まである。これお見。屋根とは高いがの。」と立てかけて置く。おみつさんは、默つてつく〳〵背を考へるやうな目もとをしてゐる。藥屋で店をしまふ。
「丁さん、お祖母さまは毎日どうしておいでるの？」
「家にゐる。」
「まだ繼母さまが來られんのかいの。」と言ひつつ、物を考へるやうな顏をしてゐる。自分は戸に縋つて、横町のお稲荷さんの松の木の上にたつた一つ出てゐる、大きな星を見つめてゐたが、何だかさびしいやうな氣になつて來た。おみつさんが自分の家の子ならいゝのにと思ふ。
と、
「おみつや。——おみつ。」と後からおばあが呼ぶ。
「お前そんな薄着で外へ出とつちやいけんに。早う這入んないや。」と戸の内から呼びかける。後を向いて見たら、戸の節穴に灯がさしてゐる。もうランプを點してゐるのである。

二

薄暗がりの中に佛さまの線香が一粒、短く點いてゐる。お祖母さんは炬燵の向ひに寢てゐられるやうである。
「おばあさん。」と言つたが返事をなさらぬ。ランプを探して灯をつける。お祖母さんは、もう、本當に床を延べて寢てゐられる。頭のところにはわしの夜具も出してあつて、寢間着が炬燵の上に置いてある。枕もとへかゞんで、蒲團の緞絲をいぢくりながら、
「おばあさん〳〵。」と言つたが、やつぱり寢てゐられる。おばあさんの額には、丁度兩の眉毛の眞ん中に黑いほくろが一つある。わしが時々その上を指で押へると、目を堅く閉つて、もういゝもういゝと言はれる。そのほくろをぢいと突いて、指をぐる〳〵動かしたら、
「あ。」と言つて目を開けて、
「丁さんか。戻つたかい。」と言はれる。
「わしや寢入つたさうな。もう夜ぢやいの。今まで何しておいでた。こんなにいつまでも歸つて來ぬとお祖母さんはどんなに氣遣ふか知れんがの。板の間にお膳が下してあるから、そつとこつちへ持つておいで。——お止し〳〵。ランプを動かしてはいけん。丁さんぢ扱ふとついつ引つくり覆すけ。お膳をこつちへ揚げて來れやいゝのぜい。下におかずが入れてあゝ。そいから、この中をお見」と言はれるから、炬燵へ手を入れて見る。
「下つとるぢやろ。」
「何が。」
「上に〳〵。眞ん中に。」
蒲團を剝いで見たら、小さい蓋物がハンケチで包んで釣してある。御飯が温めてあるのである。
「あとをとん〳〵叩いて置かんと、すう〳〵する。さう〳〵。もういゝ。」
おばあさんは、今夜は何だか力なげに、途切れ途切れに物を言はれる。小さい赤いお膳を下して、赤い箸で、胡麻鹽の振つてある御飯に筍の煮たのを副へて食べる。おばあさんは目を閉つて頻に苦しげな皺を寄せてゐられる。
「おばあさんは工合が惡いの？」
「お茶かい？　そつと下さんと重たい土瓶ぢやから。——手へかけてはいけんぞの。火傷をするからの。おばあさんは足が立たんから、お給仕がしてやられぬ。」
「なぜ足が立たんのぢやろ。」

よく見ると顏の色も少し惡い。
「さつき物置から重たいものを提げて來しなに、どうやらしたらつい踉ついて轉んだいの。たゞ輕うに轉んだけぢやのに、足やらそこいら中が痛いのぞい。少し風邪も引いとるのぢやろ。氣分が惡いのぞ。」
「いけんなう。どうおしる。」
「なんの、もういゝのぜい。かうして寢て起きたら、あしたになれや早や世話はない。併しもうわしもつまらぬものになつたわいの。」
「お父さんが早うお歸るとえゝのになう。」
「とうさんかい？　とうさんはまだ中々戻りやせぬ。けふは十六日。いよ〳〵あさつてからお彼岸ぢやいの。丁さんや、すんだら板の間へ出してお置き。さうして、あとでこの蒲團をそつちへ引摺つて行つて、丁さんの寢間を敷いておくれよ。どうでも早うお母さんを貰はねば、わしやもう世話が出來まいて。女を置いて見れば不束なわしでは切り廻しが出來ぬし、——嫁が來ねばいけんぞの。おふさがもう少し生きて居つてくれたら言ふ事はないのに。」と獨り言のやうに言はれる。お膳を片づけて、ランプの前へ膝を組んで、側にあつたマッチを取つていぢくつてゐると、
「丁さんや、おばあさんはいつぢくならうも知れんぞの。あとでどんなお母さんが來るやらもうつまらぬ。」とあとは口の中で言はれる。ぢつと向うの灰暗い煤けた壁を見てゐると、涙がひとりでほろ〳〵と零れる。おばあさんは目が見えぬゆゑ、
「おまへ、ランプをいぢくるのではないかい。」と言はれる。
「いゝえ。」と言つて、唇を噛みしめて內證でしく〳〵泣く。
さうしてゐる內に、玄關に誰か來たやうな氣がする。ぢつと聞いてゐても何とも言はぬ。誠だつたのかと思つたら、本當に、
「ごめんなさい。」といふ。立つて行つて襖を開けると、
「あたしよ。」と言つて、おみつさんが障子を開けて上つて來る。
「お父さまは？」
「ゐない。」
「おばあさまは？」と言ひ〳〵居間へ這入つて、「あら、もうお寢み？　御隱居さん。いえ〳〵、さうしておいでなさんせ。お久しうござんす、みつでござんす。」と、なつかしさうに言ふ。自分は、泣いた顏を見られるときまりが惡いから、入れちがひに玄關へ出たきり、いつまでも暗い中に立つてゐる。おみつさんの言葉は急に低くなつて、
「まあま飛んだ事でござんしたいの。ほかにどつともお怪我はござんせなんだか。」と訊いてゐる。自分は知らないで手にマッチを持つてゐる。何の氣もなくしゅつと擦り附けて、半分燃やしてふつと消す。先の赤いのが落ちかゝる。急いで障子を開けて玄關へ投げたら、赤いのがわしの下駄へ當つてすと消える。下駄の緒を切つてゐる事を思ひ出す。わしが直して見ようと思つて、襖の右側を開けると、上がばつと明つて、居間の重箪笥の背中が出る。下の片隅に板切が當ててあるのを取ると、鼠の齧つた穴から小抽斗へ手がはひる。掻き廻して、心覺えのある、丁度いゝ麻繩を出して、玄關の下駄箱の上の豆ランプを點して、切れた鼻緒をすげかける。心配して癪に結んだかと思ふと、上から引張つて見ればすぐ抜けてしまふし、大分ひねくり廻したけれど、たうと手に合はぬから、打棄つて、おみつさんのゐるところへ行つて、炬燵の横に坐つてゐる後姿へ負さりかゝる。
「ほゝゝ、どうしなんすの、重たいに、丁さん。」

と後へ手を廻して捉まへる。わしは素直に抱かれて、横に膝へ腰をかける。

「ぢやから御隠居さん、まあ、そんなこなんでどざんすけど。」と、おみつさんは、何か話してゐた縞きをかう言つて、瞳に涙を溜めてゐる。

三

起きて見たら、おばあさんは板の間であらいを炒つてゐられる。足はだいぶ直つた。おみつさんが、まだ寝てる内に來て、御飯を焚いてお汁も拵へて置いてくれたから、おばあさんは起きずに先刻まで床にゐた。昨日また下駄の緒を切つたのか、なぜそんなによく切るのぢやろ、おみつさんがそれも直して行つた、と言はれる。

「おみつさんは？」

「もう家へ去んだいの。」

おみつさんはこんなにして毎日家へ來て世話をしてくれるのだつたらいゝのにと思ふ。御飯を食べると、直ぐとん〳〵と走つて出て、捉灯屋の店先へ行く。赤い鋼を十文字に書いた、大きな、お祭の捉灯が、軒に繋がつて下つてゐる。お爺がいつもの淺黄木綿の筒袖を着て、汚れた絣の袋を、組んだ膝へ被せて、濃色のつる〳〵頭に、大きな目玉の眼鏡を鼻の先へかけて、番傘へ字を書いてゐる。お婆は奥の方で、手拭を被つて、捉灯の餅を赤く搗つてゐる。日向へ片足の先を出して、默つて、古畳の端に腰をかけて見てゐたら、お爺は字を書き〳〵、

「誰かしら小坊主が來たぞ。」といふ。

「ふゝゝゝ。」と笑つたら、

「えゝつと、こんなはどこやらの坊主ぢやつたいの。」と、やつぱりこちらを見ないで言ふ。

「やあい、わしや坊主ぢやない。お爺の方が坊主ぢやい。」

「あら。お爺は坊主かしらん。」

「そいでも頭の髪が一つもないわの。」

「なんのい。髪は一ぱい生えとるい。」

「うゝそ。一つもない。どつこにもない。」

「いんにや。ある。」

「やあい。」

「そいではこの小坊主は明盲目ぢや。黒いのがちよん髷に結うたろが。」

「やあい。嘘ぢやい。」と言ふと、頭へ手の平をやつて、

「あゝれ、ないぜ。ない〳〵。あゝ〳〵大髪ぢや大髪ぢや。一つもないわの。」

つくりして、

「しまつた〳〵。さつきまでちやんとあつたのに、どうなつたろ。はあての。」と言つて、傘をくるりと廻して、

「はゝあ、分つた〳〵。丁さんが後から來て徐と食べたんぢやわい。」

「やあい。」

「食べた〳〵。ちよいと舌を出してお見せ。」と、眼鏡の上から白い目をしてこつちを覗いて、

「ほう。長い〳〵舌ぢやの。あゝ丁さんは歯抜けぢやなう。可笑しいなう。前抜けぢやい。」と言ひ〳〵字を書く。お爺が字を書くのは一遍に書かないで、同じところを何度も繰取つたり、後から眞ん中を撞つたりして、たうとしまひに大きな字にするのだ。お婆が、

「丁さん、おばあさんは足は直りなんしたの？」と訊く。

「まだ大分直らん。少し直つた。」

「癪かつたいなう。」

自分はおみつさんはどこへお行きたと訊かうとしたが、何だか氣が引けるやうだつたから、默つて墨の解れ口を引つ擦つてゐる。

「お婆や。」

「なあに。」と訊く。

「あのう……おみつさんは？」と言ふと、お爺

が、

「おみつはこの上に居るいの。」と言ふ。

「どこに。」

「ん？　天井の中に踊んどるい。」

「うふゝゝゝ、さうぢやないえなう、丁さん。おみつはの、裏の小母さんとこへ行つとるんぞの。」とお婆が本當を教へる。裏の二階の縫物屋である。わしの家が捉灯屋を捉灯屋へ貸して、捉灯屋が捉灯屋の裏二階を縫物を教へるをばさんに貸してゐるのである。

「丁さんも行つてお見。あねさんたちが大勢ゐてぢやけ。」といふ。だつて恥かしいから、

「厭あ。」と言つてこそ〳〵家へ歸つて行く。

歸つて、露路の横の猿戸を押して、座敷の庭へ廻入ると、頭の上が捉灯屋の小二階である。竹垣の根の、赤い芽の出た牡丹の木が、戸が障つたと見えて、這入る後に微かに搖れる。剡めになつて尻を紮げた松の木の下に、苔の生えた雪見燈籠があつて、そこから蒸石が飾盞ひに、大股で跨げて五つ六つ、順々に大きくなつて行つて、緣側に腰をかけると、擴がつた松の葉の上に、二階の障子が白く嵌つてゐる。切れ〳〵に低い話聲が聞える。おみつさんだか誰だか分らぬ。手水鉢の下の苔の上に、椿の花がぽたぽたと赤く落ちてゐるのが目につく。小さい木なのだけれど、花はお椀の蓋ほどある。はじめて落ちた花である。一つ〳〵拾つては、燈籠の臺の緣へ順々に並べる。こんなにして、落ちるのをはしから並べると、しまひには燈籠の下がぐるりと赤くなる。まだ五つしかないから、少し間を開けて片つ方へだけ並べてゐると、

「丁さん〳〵。」と上から呼ぶ。四郎さんとこの小さい姉さんが、赤と紫とになつた片袖を垂らして、二階の手摺に縋つてゐる。

「それをあしに一つおくんなさいの。」といふ。

「へ。」と言つて、一つ取つて突き出したら、上から白い手を伸べて、

「あゝれ、屑くものかいの。」と言ふ。裏から見ると花屋の眞ん中に穴が開いてゐる。兩手で摘んで穴から姉さんを覗いて見て、

「見えん〳〵。」と言つてゐると、

「早うおくんなさいの。」とせか〳〵いふ。

「何に。あれ、あしも欲しいえの。」と、また誰かしら出た。紺屋のおくにさんだ。花びらを一枚むしる。つ張りおくにさんだと思つたら、矢

「丁さん、壞しては厭いの。」

「いゝ事があつた。丁さん、待つてゐていの。」と四郎さんとこの姉さんが内らへ這入つて、それからおくにさんも這入つて、大分して、おくにさんが針箱の蓋を黄色くなつた紙綿の郷で十文字に紮げて手經り下す。壁の半分までも屑かぬから、四郎さんとこのが、緋羅紗の下綿を解いて、まだ足りぬから、更紗の風呂敷を持つて來て角をつないだ。箱は山吹の花の上へ下りて來る。更紗はおくにさんの手元に餘つてゐる。

爪立ちをして花を一つ入れる。

「も一つ入れぬと傾くから駄目いの。」

「ついでにも一つ眞ん中へお入れいの。丁さんのはまだあるのでがんしよ？　おまち〳〵、ゆつくりゆつくり。」

「ほゝゝゝ。」

「どつこい〳〵。」

「も少しえの。ほゝゝ、あぶない〳〵。」

「ふゝゝゝ。」と、赤い袖口と綿の袖口と、たがひちがひに、びく〳〵してたぐり上げて、わゝわい騒いで這入つて了ふ。

「丁さん。」と、また呼びかける。

「あゝ？」と言つて、上を見たら、おみつさんだ。

「あたしにも、一つおくんなさいの。」と、につこりして手の平を出す。默つて一つ突き出したら、

「ほゝゝ、うそ〳〵。二階へおいでんか、丁さん。表から廻つておいで。あんた、お着物が黄色うなつとるぞいの。こゝんところ。こゝ。胸のところをお見なんせ。」

指の先にも花粉が黄色く附いてゐる。

四

大切なお披露だから、お寺へ詣つてくれねばいけぬ、詣つてお母さまを拜んで來い、とお祖母さんが言はれる。

お午を食べると、袂の附いた絹の着物を着て、いゝ帶を貝の口に結んで貫つて、きんきらの巾着を横へ下げて、十錢貫つて紙へ包んで帶へ挾せる。

玄關へ下りて、いゝ方の下駄を出してゐると、おばあさんが襖をつらまへて出て來て、お包みとお米を入れた袋を包んだのを渡して、

「いゝかい、丁さん。信龍さんにでもいゝから、おばあさんが詣るのでござんすが、少し工合が惡うござんすからと言うて、それから永田のをぢさんに言うて、これへ上書きをして貰ふのぞの。をぢさんが一寸見えなんだら、信龍さんに報んでもしてくれてぢや。いゝかい。まご〳〵しとるんぢやないぞえ。」と、同じ事をまた言うて、

「そしてお經が始まつたら、ちやんと靜かにして坐つておいでよ。足が痛うなつたら外へ出て遊んで來てもえゝが、よその家の子のやうに、本堂の緣をとん〳〵飛び廻つたりなんかしちやいけんぞの。庭へ下りて森鐵のところへでも行つて、離れてお遊びや。それから、紙屋のをばさんが、おばあさんの事をお訊きたら、少しお頭が痛いだけぢやから、寢てはおいでんとお言ひや。氣遣うて尋ねて來てぢやといけんから。――まだぢや〳〵、丁さん。皆言ふまでよう聞かにや。――しまひに菓子盆で豆の御飯かなんぞ。何かが出るからの、よく零さぬやうにして食べるのぞの。あれは丁さんは片手ぢや提げられぬから、下へ置いて、屈んで食べるのぞの。」と、もぢ〳〵して敷居の上に立つてゐるのに、ずんずんいくらでも言はれる。

行く途中で、本町のびら屋がびらを書いてゐるから、永い間店先へ立つて見てゐるうちに、誰かしら後からわしの耳を引つ張つて、そつと隣りの店の暖簾の後へはひる。誰だらうと思つて直ぐ附いて這入つて行くと、くるりと表へ廻る。下から黄色い天鵞絨の鼻緒が見える。

「やあい、おみつさんぢやい。」

「ほゝゝ、ばあ。――まだこゝいらにぶらついとるのいの。」

おみつさんはいゝ着物を着てゐる。直ぐ手を繋いでくれて、

「おばあさんは、もう疾くに出たとお言ひたのに、今まで何をしておいでた。」と言ひ〳〵一しよに行く。

「もう途中でぐづ〳〵せずに、せつせとおいでや。いゝ着物を汚しなさんなや。ちよいとこつちを向いて見なんせ。大層いゝ子におなりたこと。湯を使うて貰うたのいの。鼻を拭く紙を持つておいでかい。」と、立ち止つて、袂から廉紙を出して、二三枚はなして、小さく疊んでわしの懐へ押し込んでくれる。郵便局の角のところへ來ると、おみつさんは手を放して、

「こゝから獨りで貰つ直ぐおいで。おみつさんはこつちへ行くの。」

「どこへ？」

「ちよいとこの先まで行つて、ついでに畳を貰ひに行くの。それで蒸すとおばあさんの痛いところがすぐに直るから。」

「畳た何？」

「憑のやうなものいの。早うおいでや。」と、おみつさんは横町へ這入つて、一寸こちらを振

り向いて見て、局の板塀の下をずん〳〵足早に行く。紫がかつたやうな羽織の兩脇につぼめ合せた袖の八口が二すぢ赤い。やつぱりぐづぐづして立つて見てゐると、蕗を積んで通る荷車から、だし抜けに叱られたので、急いで寺の方へ向けて行く。

五

しめ〳〵と降る夜の雨。寺の門口で、由公の大きな背中から下りる。

「お待ちなんせ、ついでに奥まで附いて行かにや濡れますに。丁さま〳〵。」と言ふのを、

「もうえゝ〳〵。」と言ひ〳〵、深い露路を駈けて玄關へ飛び込むと、居間に三味線を彈いてゐる。

「だれに見しよとて紅かねつきよぞ……」と、低く謠ふのはおみつさんである。襖を開けると、

「あゝ丁さん、お歸りたかい。」と三味線を置いて、

「永うお遊びたいの。何をしてお遊びたいの。」

といふ。おばあさんは炬燵の側で、火鉢にかけた土鍋で布切を絞り〳〵して、足の甲を蒸してゐられる。

「由さんが伴れて來てくれたのかい。濡れはせなんだかい。」と言はれる。

「いゝえ、一つも濡れてはおいでません。肩のとこころに只ばら〳〵と雫がかゝつてるだけでござんす。さあ直ぐにお着換へなさいの。おいで。帶を解いて上げるから。――何が懐へ這入つてゐやんすの？」

「こうれ。」と言つて引き出す。

「何に？　あゝ、千代紙を貰うて來なんしたの。」

「これお見。猫がたんと〳〵お湯へ這入つてる。猫のお湯屋ぢやいの。ほうれ、こいつは背中を擦つてるがの。こいつはこんな事をしてるい。」

「さ、早くお着なさい。風邪を引きますけ。それは後で見やんせうえの。」

「丁さんはお寺で、言うた通りにおとなしくしておいでたかい。豆のおまんまが出たろ？」と、おばあさんが訊かれる。

「いゝえ。小芋と蒟蒻のおまんまぢやつた。蒟蒻は甘うないから、みんな遠り出して、紙屋のをばさんのおまんまへ入れてやつたい。」

「ほゝゝゝ、まあ。」と、おみつさんが笑ふ。

「これからはそんなお行儀の惡い事をするもんぢやないぞえ。」

「それから、歸りに雨が降つて、紙屋のをばさんが家へ來いとお言ひたから、――そして由公をおばあさんのところへ言うてやらすから、すつと夜までお遊びとお言ひたんぞの。」

「それはいゝが、また風呂敷をどこかへ忘れて來はせぬかい。」

「風呂敷はこゝにござんす、お隱居さん。――あの先刻、男仕が來た時に持つて來ましたいの。」

「由公が歸りに、丁さんを泥溝の中へ落さうか落さうかと言うたから、落して見ノ〳〵と言つてやつたあ。」と言ひつゝ、炬燵の布團の裾を枕にして轉んだら、おばあさんが、見え惡いやうな目をして覗いて、

「丁さんや、今夜からおみつさんは家の子になつたんぞ。えゝぢやろ。」と頭へ手をかけられる。

「うゝそ。」

「うそぢやないわの。」

「詐ぢやいなう、丁さん。」と、おみつさんはわしの着物を掛竿へかけて置いて、

「丁さんはおみつさんが嫌ひぢやから、そいで詐ぞいなう？」と微笑みながら、ランプのところへ坐つてわしを見る。

「うゝん。そんなら本當ぢやい。」
「ぢやあ、おみつさんは嫁ひぢやないの。」
「あゝ。」
「いや〳〵。嫁ひぢやろい。」と、おばあさんが顰られる。
「あゝれ、足をそんなにするんぢやない。ぢつとしておいで。おみつさん、どういふところまでぢやつたいの。」
「どこやらでござんした。」と三味線を取つて構へて、
「とんと言はずにすまそぞと、あそこでござんしたかいの。——いや、あそこはまだぢやつたいの。何にしても、御隱居さん、もう久しう持たんのでござんすからまるで忘れてしまひましたいの。」と、つん〳〵と調子を見て、棹の手に赤い補口をちよと引き出す。
「おみつさん。そんなら毎日家へ來てゐておくれるの。」
「えゝ〳〵。わしやもう丁さんとこへ來たんぢやから、夜もずうと泊るんぢやいの。」
「今晩も？」
「えゝ。」
「あしたの晩も？」
「えゝ。これからいつまででも。丁さんやおばあさんがもう往んでくれとお言ひるまで。」
「そんならもう他家のをばさんにはおなりんの？」
「えゝ、もう誰がをばさん何かに行くもんぞい。なら御隱居さん。——えゝつと、それぢや、戀の手習ひつい見習ひてから、も一度やりませう。はあつ。」と、にこやかに掛聲をして誘ひはじめる。
雨はいつしか本降になつて來た。

（明治四十年五月）

月夜（三）

片側の土手には、蕣顔が小さい花になつて、草の中には晝でもこほろぎが啼いた。下の溝には犬そばが咲いて水に動いてゐる。
自分はだれか話しかけてくれる人をでも求めるやうなムードを包みながら、オリブ色の門口に覗き〳〵して歩いた。
家のはづれから路は爪先上りになつて、或教室の煉瓦造りの建物の方へ行けるのであつた。その途中に西洋人の居る官宅が一構あつた。
そこの處を北へ曲入ると、棕の大木が兩側を挾んで、晝も夕方のやうな色を包んだ、表の正門の方へ續く大きな路へ出る。棕の木は一町ばかり續いて、その先に、操帆を教へるマストの立つた海の面が、向うへ貼つたやうに木の間に擴がつて淸く見える。
片側には小さい川が走つてゐた。
こゝは校内の山の手になつてゐるのであつた。
九月も下旬の月の夜、自分は母の寢入つた後、一人で拔けるやうにして門を出て、水の中のやうな、靑い月夜の中に立つた。
自分には母には隱して考へる事があつた。子供の癖によく考へ沈む自分であつた。それの一つは、もし母が亡くなつたら自分は一人で何うなるのかといふ事であつた。それから、もう母がゐない日になれば、だれが、あんな黑いしつとりした目をして自分を見守つてくれるだらうと考へると淋しかつた。門内を見ると、母の寢室の枕元に點けてある蠟燭の灯が、海の中の船の火をでも見るやうに隔つて見えた。夜露が深いからであつた。もう校舍の門の點鐘が先に十一時を打つた時分であつた。

鳥物語

小さい自分は、何の譯も知らなかつたゆゑ、灰白い水に臨んだ、生綿を取る古里に、母の伯母の家を自分の家のつもりでゐた。それは、五六本の榎の大木が、門の内を古い代の色に薄暗くした、大きな構への家であつた。これを自分の家だとばかり信じて、母の從兄を父さまと言つてゐたけれど、本當は母が十九の年にこの家のかかりものになつて來て、腹の中の自分を生み落して、二人でそこの厄介になつてゐたのであつた。城下の娘であつた母が、こゝへ來てから里の仕事の稽古をして、かよわい體で、家のものと同じに働いてゐた不憫な胸の中を、自分は少しも知らなかつた。考へて見ると、自分の若い母の名は、悲しい女の名であつた。
それは母が亡くなる少し前の事であつた。自分は母に伴れられて、水の向ひへ灸をすゑに行つたことがある。自分は生れ附き體が弱くて、小さいうちから煩つてばかりゐた。それがために母の辛い心をどれだけ痛ませたか知れなかつた。母は何事も私の乳が惡かつたからだと言ひ〳〵して、自分の寢入つたあとなどで獨りし〳〵泣いてゐることがあつたといふ。早くからいろ〳〵に手を加へて見たが、どうしても心が丈夫にならないので困つてゐた。すると、そのとき水の向うの町に、北の方の國から、年取つた爺さんで上手な灸をすゑるといふ話を聞いて、母は最後にこの灸へ當つて見ることにしたのである。
丁度五月の蠶のあがりかけてゐる大事な場合なのに、家の妻女は子供が出來るので寢てゐたから、母は一人で蠶室の指圖をしたりして、忙しい時だつたけれど、自分が下女なんぞと一しよにせ行かないと拗ねるので、ぐづ〳〵してゐると灸者は去んでしまふといふことだから、仕方なしに母が自身で伴れて出たのであつた。
二人は裏の桑畠に、夜中から桑を摘んでゐた女たちの、帶に插した提灯の灯が、薄淡く白みかゝつてゐる時刻に濱へ出た。久吉といふ十五六の下男が供に附いて來た。自分は、向ひの町といふと、樋口のをばさんの家があるといふことと、藤さまの祀つてあるところだといふことだけは知つてゐた。藤さまといふのは、いつの代のことか、水を圍んでゐるこの古里の浦々へ、はじめて蠶飼を敎へたといはれてゐる、何々藤姫といふ長い名の女の神さまである。里の家の戶口々々には、小さいそのお社の繪が、ちびた版行で黃色い紙に摺つて、お護りに貼つてある。
船は四角な帆を張つて、仄かな淡水を斜に渡る。二十二三の、お齒黑を附けた、色の小白い小間物賣の女と乘合せる。女は母と話をしたり、自分に紙絃で犬を拵へてくれたりして、何だか家のもののやうな氣のする女であつた。この女は途中の村へ着けて貰つて、大きな荷物を背負つて上つた。水の上は四里。向ひの濱へ着くには大分かゝつた。
自分等の上つた一筋町では、小暗い家々のかみさんたちが、いゝ着物を着た自分の若い母を、わざ〳〵戶口へ出て見た。何にもしてゐない家には、木目のざら〳〵に擦れ出た下し戶が半分下りて、垢じみた着物が掛けたりしてあつた。兩側の雨溝の緣に草の生え續いた、灰色に古びた町である。母は灸がすんだら樋口のをばさん

のところへ寄るのだといふ。自分は樋口といふのはどういふ家なのか知らなかつたが、をばさんは以前に自分の家へ來て泊つたことがあるからおぼえてゐた。灸者の泊つてゐる宿は、分るのは直ぐに分つたが、肝心な爺さんは、急な用事が出來てどちらかへ向けて昨日出かけたさうで、四五日しなければ歸るまいといふ事であつた。母はがつかりして、いろ〳〵訊き返して見たけれど、何と言つてもしやうがない。しをしを引き返して樋口へ行くまでのことになつた。自分はたど樋口がどんな家かといふことばかりを考へつゝ、面白く附いて行くだけの子供であつた。

そのをばさんの家は、町の中程の、大きな石燈籠の立つたところから横へ這入つて四五軒目の、竹の格子に黄色く煤けた障子の嵌つた、小さい家であつた。向ひ側はずつと向うまで大きな桑畠になつてゐる。剝つ子のちやん〳〵を着て上り口へ出て來たをばさんは、

「あゝれ、まあ出し拔けにどうした事い。」とそはそはして、取り散らしたものを片寄せたり、箪笥の鎖にかけた小帶を押入へ投げ入れたりして奥の間の澁紙の上を小忙しく片づけた。何事も後になつて知つたのだけれど、この家は母の一寸した續き合ひで、昔は大きな造り酒屋だつたのが、この時はをばさんがたつた一人になつてこゝに逼塞してゐたのである。伯母の家へかつてゐた母は、生れた家は國より、親類中へだつてどこへも出入りが出來なかつたのだけれど、このをばさんだけは内證で母の味方をしてゐたのであつた。

物柔かい、親切なをばさんは、母が、今日はこれ〳〵の譯だと話すのを、ふん〳〵と言つて母親のやうに聞いた後、それでは灸者の歸るまでゆつくり泊つて下さい、丁度いゝ幸だと言ふ。母は蠶の方が薬つて置けないから、ぜひ夕方の船で立つといふと、それでは綱さんは私が預つて、灸をすゑてから伴れて行くと、譯もない事のやうに言ふのであつた。母は、自分が母と別れてよその家に泊つたりする事の出來ないと事を話したが、

「だつてこゝはをばさんの家だもの。」と、もうそれに極つたつもりでゐる。久吉は藤さまの神主のところへ母のお供へを持つて行く。あとでは母とをばさんと何事か話す間、自分は縁側へ出てゐた。小さい庭の竹垣に、豆の花が這ひ上つてゐる側に、茶碗の破片が白く土に埋まつてゐる。母の話し合つた事は何の事か知らなかつたけれど、何か悲しい話であつたらしい。母は涙ぐんでばかりゐた。この程の何日かは、蠶で忙しい目をして、夜もろく〳〵寝なかつたゆゑ、痩せた母はいつもよりも非度く顔色が惡い。自分は重たく涙の濕つたその目元を見て、何の譯とは知らぬけれど、何だかいつになく母がいたはしくなつた。これからは母の言ふ事は何でも素直に聞いて、もう決して困らせはせぬといふ事を告げたかつた。久吉が歸ると、母は一緒に藤さまへ詣りに出る。詣つても何にも見るものはないのだからと言つて、自分を家に待たせて置く。

母の出たあとを、をばさんは自分に鉄餅を燒いてくれながら、綱さんはもう追つ附け八つになるのだから、よつく〳〵お母さまを大事にして、お母さまの氣を助けて上げなければいけないといふ事を、温やかに言つて聞かせた。そして、

「綱さんは獨りでこゝへ泊つて灸をすゑて貰ふえのい。今晩だけはをばさんと二人だけれど、あしたは久吉にまた出て來て貰ふからいゝぞのい。」と靜かに訊く。自分は素直にさうすると言つた。さうすれば母の足しになるやうな氣がしたからである。

母は歸つてこの話を聞いたが、自分を置いて

行くのが心許なかつたと見えて、をばさんに聞えぬところで、

「綱さんは本當は歸りたいのだらう？　をばさんが何だつて仰しやつたの？」と訊き、

「いゝのかい？　本當にゐるのかい？　それではもしあとで歸りたくなつたら、をばさんにさう言つて伴れて來て貰へばいゝわのい。」と言つて慰しがつた。

夕方に、自分はをばさんと一緒に母を濱へ送つて行く。をばさんは留守を頼んで置くと言つて、町角の小さい家へ立ち寄つた。

濱へ出ると水は黑く黄昏れかけてゐる。自分の村の方はもう何にも見え分かぬ。母は別れを告げて後、石段に立つて、藤さまへであらう、目を閉ぢて何事をか祈るやうに拜んで船へ這入つたが、

「綱さんや。」と呼んで再び上つて來て、二三段下りて行つた自分の耳へ口を寄せて、

「綱さん、お母さまが惡かつた。もう灸はいゝから一緒に歸りませう、のい。お前一人でゐるのはいやでせう？」と、小さくいふ。自分はやつぱりゐると言つた。

「それではお母さまがまた伴れに來るからのい。さつきのあれはちやんと持つておいでかい。」と自分の帶を押へて見る。母と別れてゐる間大事に持つてゐよと、小さいお守の袋を渡されてゐたのである。

母は再び船へ這入る。自分は一緒に歸りたいやうな心もする。さう言はうかしらと躊つてゐる内に、雑巾のやうな着物を着た船頭が船を突き出した。もう仕方がない。いつまでもこちらを見てゐるらしい母の姿は間もなく見分け難くなる。久吉は屋形の上に腹這つたまゝ黑くなつて行く。一人殘つた自分は急に物足りなくなつて來た。何だかこれきりでたうといつまでも二度と母に會ふ事が出來ないやうになるのではないかと、先の事が示されるやうな氣がして、をばさんと歸る途々一人で悲しかつた。

家へ歸ると、小暗い門口に、自分よりか少し年上の女の子が、足に餘る大きな草履をはいて、戸口に腰つて、人影のない向うの往來を見詰めながらしよんぼりと立つて留守居をしてゐた。をばさんが一寸這入れと言つたのに、何にも言はずに、とぼり〳〵草履を引きずつて、さびしさうに歸つて行く。あれは物の言へぬ子だとをばさんが言ふ。大人の櫛の缺けたのを插して、貧しいなりをしてをつた。

夜になる。

をばさんは、母の供へたお灯がお社の燈籠に點くから一緒に見に行かうと言つたのに、ねつから伴れて出ないので、所在なさに門口へ出て見ると、町の角の石燈籠に、知らぬ間に灯が點つてゐるので、側へ行つて見ると、火を入れる口に下つた紙がふは〳〵と搖れて、中のくすぶつた天井に蜘蛛の絲の固まつてゐるのが見える。通りの商ひする家々も、夜は早くすつかり戸を閉めて、町筋は暗い。見ると暗い町の半町ばかり彼方に、もう一つ燈籠が點つてゐる。またそれへ向けてとこ〳〵行つて見たら、そこのところの小路の奥に、また一つ燈籠が點つてゐる。またずん〳〵這入つて行くと、ひとりでに濱の藤さまのお社へ來て了つた。

薄暗い夜の中に、岸に續く松の木と、その間々の小さい石燈籠とが、闇の中に影の如く浮いてゐる。燈籠の灯は黄色く刻り拔いたやうに點つてゐる。松の中の社の横に、星が一つ下に映つてゐる。――社殿は水に浮んでゐるのであつた。

神殿に雪洞が一對仄暗くともつてゐる。自分は小さい廻廊に立つて、水を隔てて、町筋の家の後に漏れる灯影を見た。だれだか女の子が一人鳥居を這入つて來る。夕方に門口にゐた

女の子である。階段の下へ來て、何にも言はないで道入つて來た方を指して、分つたかと言ふやうに小首を傾げる。すると向うから提灯が來る。それはをばさんであつた。をばさんが自分を探しに來たのである。綱さんはどうして藤さまが分つたのか、をばさんに黙らないで出て來るから心配して、おつうと二人で尋ね廻つたと言ふ。をばさんは提灯をおつうに持たせて置いて、下から藤さまを拜んで、格子戸の中に下つた生絲を、もう覗いて見たかと自分に訊く。覗いて見ると箕に取つたいろ〳〵の色絲が、左右の壁に繋がつて下つてゐるのが、ぼんやりと(雪洞の灯)影に見える。をばさんはこの絲の事を歸る〳〵話した。あれは村々の娘たちが上げたのだ、娘たちは、あゝして、絲の取れる女になつたといふ事を藤さまに見て貰つて、それから嫁入をするのだといふ。おつうはやつぱり大きな草履を履いて、默つてとぼ〳〵と後について歸る。

この夜は生れてから初めて、母に別れてよその家へ寢るのであつた。をばさんが箪笥から出してくれたをばさんの襦袢を寢間着に着て、座蒲團を卷いて枕にして貰つて、小早く床に就く。片隅に置かれた有明行燈に、燈心押への狐の影が擴がつて寫つてゐる。自分は母を目に浮べながら寢入つた。

翌る朝御微が濟むと、をばさんが、通りへ行つてお煎餅を買つて來いと言ふ。數へられた店は、昨夜の二つ目の燈籠のところである。日の腐つたかみさんが、黒い壺の中から出してくれた、反り返つた煎餅は、一つ〳〵眞ん中に紙縒が通してある。羽根を拔げた鳥の形の煎餅である。紙縒を摘んで一匹ぶら下げて、

「これは鳩ぢやのい。」と訊くと、

「いやいの、お前さん、烏えの。藤さまのお使ひの烏えの。」と言ふ。歸つてをばさんに、なぜ烏が藤さまのお使ひかと訊いて見る。をばさんは目を小さくして縫物の針へ絲を通しながら、

「あゝ烏かい。」と言ふ。

「藤さまにゐるえの。まあま、昔は羽根が白かつたのに、たうとこんなに眞っ黒になりました。」と、をばさんがその烏になつたやうに言ふ。

「たうと訊が當つたいの。」といふ。

どうしてかと訊くと、

「藤さまの訊が當つたの。」と、やつとの事絲を通して、針先へ頭の油を附けて縫ひ續けながら、

「藤さまの烏は一匹だけゐるのえの。をばさんが綱さんのやうな時分から一匹。をばさんがこんなにお婆さんになつてもやつぱり一匹。」

いつでも一匹しかゐないのかと訊くと、

「えゝ、たつた一匹ゐるの。綱さん、おせんをお食りな。」といふ。

「なぜ烏は訊が當つたの?」

「それはのい……」と、丁度自分が一枚を割つて食べかけたのを見て、

「おや〳〵、烏の羽根が取れましたのい。痛い痛い。羽根が取れたらもう飛べぬ。」と、しまひは鋏をつけて言ひ〳〵縫ふ。自分は訊の當つた譯が分らないなりに、ぼしり〳〵と續けて食べる。

それから默つて寢轉んでゐると、をばさんは、

「烏を二三匹おつうにやつておいで。」と言つて自分を紛らす。自分は出て行つた。

おつうの家は破れた障子戸が閉めてある。こねくつて開けて這入つたが、内には誰もゐない。上り口の板の間に、竹の割つたのが小桶の水に浸けてある。奥の一間の古畳に、反古紙がべたべたと破れ目に貼つてある。

「おつうや。」と言つて見たが、やつぱりゐないから、烏を板の間へ四つ並べて置いて歸つて來る。

午後になると、もう久吉が來さうなものだとをばさんが言ふ。ひるからは門口で蟻に食物を挽かせて見た。それからをばさんの縫絲を卷いたり、あられを煎つて貰つたりしたが、直きに所在がなくなつて來る。町の角へもいく度も出て見た。外へ出て見ると、お日さまはいつもどんよりと家の甍屋根の上に淀んでゐられる。自分は久吉が來るのをばかり待つてゐた。

その夕方、町筋の桶屋の前に立つて、猿をかけてゐるのを見てゐる時、向うから、荷臺を擔いだ逸さんが、團扇太鼓を叩いて來た。行つて見ると、それは猿を使ふ爺さんである。後へ尖つた茶色の頭巾を着て、山袴をはいてゐる。兩方に擔いだ荷臺の片方に、小猿が一匹振袖の娘になつて乘つてゐる。着物の裾を噛んだりしながら、ぞろ〳〵後へ喰つ附いて來る子供の中に、おつうが交つてゐる。手拭で髪の解れをからげて、小さい子を負つてゐる。爺さんは自分を見ると荷を下して、

「あい、いゝ着物を着た子供し、一つ見なんしな。」と、提綿を紬つて二つの荷臺を喰つ附ける。それから一寸口上を言つて、風枕齣をがくがくさせながら唄をうたつて、喰つ附けた臺の上に猿を踊らせる。猿は日傘をさして踊る。おつうは自分の側へ來て見る。それがすむと、爺さんは猿を荷臺の下へ引つこめて、今度は坊主に仕立てて出した。黒い衣の股くらに、張子の德利をぶら下げて、いろ〳〵のおどけをする。集つて來た女の子なんかがげら〳〵笑つて見物する。爺さんは、

「さあ、これでおしまひだ。はい、その子供し、お錢を出さんし。」と自分にいふ。坊主の猿が坐つて手を受ける。自分はお錢は一つも持つてはゐない。どうすればいゝかとまごついてゐると、爺さんはにこ〳〵して太鼓を叩きながら、

「早くお母さまに貰うて來なんせや。」と言ふ。自分は悪い事をした時のやうにどぎまぎして、急いでお錢を取りに歸りかけると、おつうが自分の袖を引いて、こゝにゐよといふ素振をして、ひとりで向うへ走つて行く。どうするのかと角の石燈籠のところに立つて見てゐると、おつうはをばさんの家へ向けて行つたけれど、中へは這入らないで、入口の横の壁に喰つ附いて手を延ばすと、直ぐに引き返して來て、振つて來た五六枚の一厘錢を、子供の間を分けて猿に渡す。爺さんは、

「はい〳〵有難う。」と臺を放して兩方に擔いで、太鼓を叩いて向うへ行く。おつうはまた他の子供と一緒に、夕方の淋しい町に草履の踵のほこりを立てて附いて行く。

家へ歸つて戸口のところを見ると、この時まで氣が附かなかつたが、柱の横に竹の串が打ち附けてあるのへ、一厘錢がまだ二三枚殘つてゐた。をばさんに猿の事を話したら、串のお錢は、あゝして來る爺さんなぞが、自分で一枚づつ取つて行くやうにしてあるのだと言つた。

その日も夜になつたが久吉はたうと來ぬ。をばさんは、けふは船が出なかつたのだらうと言つて慰めた。自分はもう恐のところへ歸りたくなつた。

翌る日はしと〳〵と雨のふる日であつた。昨夜箪笥の上に置いて寝た烏の煎餅が、濕つてべたりとなつて了つてゐる。しぶきがかゝると言つて縁側の戸が閉めてあるゆゑ、家中が小暗い。をばさんは表の格子の間で用事をしながら、いろんな昔の話をしてくれたりしたが、午後はもう話がなくなつた。自分は獨りで何をしても面白くない。久吉はいくら待つても來はしないし、雨だれの軒下を傳うて、おつうの家へ行つて覗いて見ても、母親がわびしい内職の竹篠を削つてゐるだけでおつうはゐない。雨溝に流れる赤土色の水に、蒲鉾の板へ絲をつけて流した

りしたが、それが厭になると、もうする事もなくなつた。外にはいつまでもしよぼ〳〵とふる雨が、桑畠に淋しく煙つてゐる。自分は母のところへ歸りたくて堪らなくなつた。をばさんにさう言ふと、をばさんは仕事をやめて、いろ〳〵まぎらしてくれるけれど氣が乗らない。直きに重たい息が胸に溜つて、早く家へ歸りたいとばかり考へる。

その内に雨だけはだん〳〵にかすれて、夕方には本當に霽つた。白い雲がずん〳〵山の方へ走せる。自分は往來へ出て、知らず〳〵家の前の桑畠の中へ這入る。桑の若葉に雨がびしよびしよに溜つてゐる。小路を少し這入ると、濱に切れた路の角へ來る。左の方から水色の帶をした若い女が、番傘を肩にさしてぶら〳〵來る。見ると一昨日船で一緒になつた小間物屋の女であつた。荷は負うてはゐない。當り前の若いをばさんである。自分を見ると、

「あゝれ坊ちや。」と親しげに側へ來て、

「坊ちやはあれからまだ泊つておゐなんすのかい？　お母さまと宿屋におゐなんすの？」と言ふ。自分は何だか家のものに會つたやうな心がする。女は髮をかき上げて、

「お母さまと毎日どうしてゐなんした？　いつお家へ歸りなんすの？」と訊く。自分は歸りたくてならないものだから、ついうか〳〵と、けふ歸るのだと小さく言つた。そして本當にをばさんにさう言つて、これから直ぐ伴れて行つて貰はうと考へた。

女は、

「けふ？」と訊き返して、

「この夕方の船に乗りなんすの？　それではまた私と一緒えの。私はこれから荷物を取つて、直ぐに船に行きやんす。」

お前さまも、もう支度をしなければいけまいと言つて、自分に別れて、肩で傘を廻しながら、足早に向うへ行く。少しして横の方へ這入つて了ふ。自分はやつぱり一つところに立つてゐた。桑の雫がぱら〳〵と落ちて、小さなさびしい心に浸みる。

再び往來へ出る。何だか濱の方へ行つて見たくなる。雨上りの往來をぴちやり〳〵と町筋へ出る。おつうが戸口に踏んで一心に足駄の緒をすげてゐた。自分はたうと濱のところまでずんずん來た。

濱には苫の船が三ばいゐる。眞ん中の船から土銅のくすぶりが上る。水の上は白い雲が間近に低く散つて行く。石崖の下から、若い男が竹竿で二匹の鷺鳥を追ひながら、膝頭までの水をざぶ〳〵と出て來る。鷺鳥はがあ〳〵啼いて、濡れた石段を上つて來る。自分はこの水鳥を珍らしく見てゐると、後から、

「坊ちや。」と言つて小間物屋の女が來た。

「さあ乗りやんしよ。」と、家の方へ出る船を呼ぶ。右の端のが、

「あゝい。」と言ふ。女はお母さまはまだかと訊く。母はもう一昨日家へ歸つたと言ふと、

「あゝれ。ではお前さんは今日ひとりでお歸るのか。あゝれまあ。」

お前さんは賢い子だと、自分の手を取つて船へ下りる。

自分はその儘一緒に乗つてしまつた。船には下駄や疊表の荷が積んであつた。女は背中から下した荷物を裸にして、その風呂敷を疊んで自分の下へ布いてくれる。

船は間もなく帆を上げて出る。自分は家へ歸るのが嬉しかつた。をばさんに默つて歸るのだといふ事に氣が附いて、何だか惡い事をするやうな心がして來たのは、もう大分走せて水の上の夜になりかけてからの事である。しかし女がいろ〳〵親切にしてくれるから、をばさんに濟まないといふ事は直きに忘れた。

夜が段つ暗になると、船頭が小さい箱行燈を附ける。女は灯がつくと、帳面を出して賣上げを控へてゐたが、自分が足へ痺れを切らしたのを見て、おまじなひだと言つて敷莫蓙の端を拵つて自分の懐へ入れて、兩足を伸ばさせて、親指の頭をぐい〳〵と押へ曲げてくれる。さうして痺れが直ると、それでは先刻の藁屑を出すのだと言つて、自分の懐へ手を入れて探つたが、

「坊ちや、何かしらこゝにこびり附いてゐますえの。」と、それを一緒に取り出して、灯影で一寸見て、

「ほゝゝ、小さいお煎餅の切だつた。」と、行燈の臺へ置く。昨日食べた鳥の煎餅だと言ふと、

「あゝ鳥の煎餅え、これは？」

「紙袋で下げた……」

「藤さまの鳥のおせん。可哀さうな鳥えのい。」

かう言ひ〳〵また帳面を出して附ける。なぜ藤さまの鳥は可哀想な鳥かと訊くと、

「あれ。坊ちやはまだお知りでないのゝ？　さうかいの。……あの鳥は女えの。あれは昔藤さまが山におゐなんした時分にの……」と、帳面を片づけて、鳥の話をしてくれる。

昔々藤さまが山へ下りて鷺飼をしてゐられた時、男と女の二羽の白い鳥が仕へてゐた。それが日々一つは北の谷間へ、一つは南の谷間へ飛んでゆき、桑の葉を探しては口に咬へて來た。藤さまはそれで鷺を育てなされて、三年の間自い紐をお織りなされた。今度は赤い紐を織らうといふ年になると、鳥は谷間へ別れ〳〵に飛んでは行かずに、内證で一緒に後の山へ這入つて、二人でお話ばかりして、桑は一つも取つて來ぬ。いつの間にか、そんな鳥になつてしまつた。

それゆゑ藤さまは、いく度も〳〵言つて聞かせて見なしたけれど、いつまでもやつぱり桑は取らずに歸る。しまひには小言を聞くのがつらいと言つて、二人で谷へ隱れたなり、何日しても歸つて來ない。藤さまはたうと怒つて探しにお行きなされて、片つぽの鳥を、山の山のそのまた山のその先の、谷を越え、山を越え、いくつも越して、遠い〳〵暗い國へ追ひなされた。

あとの鳥は女である。それは後の山へ閉ぢ込められた。藤さまはそのうちに里の娘が松葉を掻きに來たのを呼んで、蠶の種を一粒與へ、生繭を取る事を教へて置いて、もう空へ歸つてしまひなされた。

里の娘はそれから神妙に生繭を作つて、大切に七つの籠に卷いて置くと、一日小雨のぱらぱら降つた日に、藤さまが空へ七色の虹の繭を渡して見せて、一籠づつをこの色々に染めよと教へなされた。それからみんなの娘がだん〳〵に習ひつたへて、浦々が鷺飼の村になつたのである。

それは古い昔の事だけれど、内證のお話をした女の鳥は、いまだに山から出られない。向うの鳥に會ひたうて、日々泣いてばかりゐるけれど、どうしても藤さまがお許しなされぬ。それゆゑ悲しんで〳〵、悲しみのために胸の中が黑うなつて、たうと羽根まですつかり黑うなつて了つた。

「坊ちや、このつぎのお祭の時に藤さまへ詣りなんせ。その日は鳥が山から出して貰ひやんす。神主が笛を吹きなんすと、山から下りて來て、お團子を口へ咬へて往にやんす。」

いつもはたつた一人で山にゐるのである。

「山にゐて、會ひたい〳〵と泣いてゐやんすけれど、泣いたとて會へやんせう事か。のい坊ちや。可哀想な鳥えの。」

かう言つて、女は髮を掻き上げる。

自分はこの話を聞いて、なぜ鳥は内證の話を

したのかと女に訊く。女は、
「ほゝゝゝ。」と笑つて、
「それはまだ功ちやには分りやんせぬ。」と言ひながら、自分の手を兩手に挾んで、
「まあ小さいお手。」と言ふ。自分はその内に女の膝にもたれて眠つた。
揺り起されて目をさますと、女は、船が着いた、もうお母さまのところへ歸つたのだと言ふ。自分は女に附いて船を出た。どつこも眞つ暗い。星さへ黑い夜中である。女は小さい提灯をつけて、自分の家まで附いて來てくれる。どこの家もみんな寢靜まつてゐる。
女は家の門口をとん〳〵と叩いて、
「もしえ〳〵。」と、いく度も呼んだけれど、いくらしても内へ聞えない。自分は横手の桑畠を拔けて、裏の蠶室の下へ廻つて行く。その一棟の角のところに、母が養蠶中夜更けて一寢入りする部屋がある。女は背中の荷物を下して、提灯を持つて附いて來てくれる。行つて見ると、櫺子の障子に灯影がうつすら射してゐる。自分は、
「母さま〳〵。」と言つて見たが、返辭がない。よく惡戯にする時のやうに、その石崖を上つて、障子の下を指で破つて覗いて見ると、板の間の片隅の箱の上に、蠟燭が桝の中に短く點つてゐて、そこに二枚だけ敷いた疊の上に、やつれた母が、斗桝へ片肘をかけて、疲れたやうにうたゝ寢をしてゐるのが見えた。蠶はもう早いのは上つたのだと見えて、蠟燭の火の蔭に繭が仄白く積んである。
「お母さま。」と言ふと、母は直ぐに目をさまして、不審げにあたりに耳を澄ましたが、再び、
「お母さま。」といふ聲を聞くと、
「あれ。」と愕いて立つて來た。
自分が石崖を下りかけると、母は障子を開けて、
「まあ綱さん、歸つたのかい。」と、突き出した蠟燭から蠟がぽと〳〵と下へ落ちる。母は急いで裏門を開けて出て來た。自分に代つて、一緒に歸つて來た事を母に話した女は、この時はじめて自分が無斷で歸つたのだといふ事を知つて、
「まあ。」と言つて呆れた。
母は繰り返して女によく〳〵禮を言つた。
その夜自分は、母と二疊の疊べり布を被つて寢た。母は、をばさんがどんなにか心配してゐなさるだらうと氣遣つたが、自分の惡い事は叱らなかつた。
「はじめからお母さまが惡かつた。蟹る日久吉をやらうと思つたけれど、忙しい時だから、お父さまに言ひ惡かつたから。」と言ふ。自分は母へ歸つた嬉しさに、お嫁の坊さんや、おつうの事や、小間物賣の女が親切にしてくれた事なぞを、息をはずまして詳しくつぎ〳〵に話した。
そしてしまひに船の中で鳥の話を聞いたと言つて、しつかり譚の分らないなりに、巻さまの鳥は泣いても〳〵會ひには行けない鳥だと言ふと、何の返辭もしずに、遠くの事を考へるやうな目もとをしてゐた母は、見る〳〵睫に涙を浮べて、
「綱さんや。」と自分を抱きしめて、
「そんな悲しい話を綱さんは聞くんぢやありません。」と言つてしく〳〵泣いた。
話はこれだけの事である。若い母は蟹る年に、八つになる自分を置いて亡くなつた。
自分が亡き母と自分との身の上を知つたのはずつと後での話である。それは訊かれても話されぬ。いろ〳〵悲しい譚のある事である。

（明治四十一年七月）

黑髪

宿の向ひに煮豆を賣つてゐた年寄は、いつも夜になると自分のところへ來て、いろんな話をした。自分は立つて行くといふ前の晩に、その年寄を呼んで別れの酒を飲んだ。年寄はしまひに、お前さんもこんな四十里も渡る海の上へはもう二度とは來られまい、來てもわしはゐなくなつてゐるかもわからぬ、今宵はあとにたつた一つ殘つた話をすると言ひ出した。蟋蟀の切れ切れに鳴く黑い夜であつた。戀の話ぢやよ、戀は怖ろしいわの、と杯を置いて、ぢつと目を閉つて考へてゐたが、やがて、今のものは知るまいが、昔は國の果に商ひをして廻る、家船の衆といふものがゐた、と話に這入る。
昔の事だからだれも知るまい。船を生涯の住居にして、七八艘が一緒になつて、物の乏しい僻郡な浦里へ商ひをして廻る商人である。小間物、藥、反物、酒、陶器、それから乾物、線香、絲類、袋物と、日々使ふさま〳〵の物を載せて國々の浦里を渡るのである。わしは十八の年に佐渡へ行く船でこの海の上に下されて以來、自分が家船の子だといふことは、この年になるまでただの一言も人には言はなんだ。生れたのはどの國の浦の夜か晝か。父親の名さへ慥かには知らぬ。たつた一人の母親が亡くなつたのはまだ三つに足らぬ子供の時分であつたと聞いてゐる。わしは紙類、筆、墨、蠟燭、絲物を賣る家船へ貰はれて行つたのである。後の雙親が、おすが〳〵とよく言つたゆゑ、生みの母親の名がおすがと言つたといふ事だけは僅かに知つてゐる。
私が戀をした女はおふさと言つた。おふさが船は酒、煙草、詩司などを賣つてゐた。大きな浦へ着けた時には、おふさが船は石崖の上に崩けるまで清酒を飲んだ。濱の若者等はそこへ來て夜更の小屋を建てた。母親は三味が彈けた。
時々自分で浮かれると、客にまじつて小唄を彈いた。わしがおふさは十七であつた。ふとした二人が戀は、或薄曇つた四月の月夜が初めであつた。わしの雙親がおふさの母親と妹とをつれて、珍らしく泊りの浦の夜芝居へ行つた留守に、おふさが父親は早寢して、おふさとわしと二人がわしの船で雙六をした。互の船は直ぐ並んで繋つてゐた。二人はその夜たうと戀に落ちた。
それからといふものは、わしが水の上の戀はもどかしかつた。晝のうちは、船にゐて商ひをするのは年寄と女とだけで、男は荷を負うて、いちんち三里四里と陸を商賣して廻るのである。船へ歸つて戀しい夜も、人目があるゆゑやつはり言葉が替はされぬ。たまに雨で商ひに出られぬ日など、用事を設けて、傳馬を寄せて船に上り、母親の帳合せの、だれかが急いで附けた詰めぬ字を、それは十六文だ八文だと目を入れて、僅かの間、女の側にゐる事もあつたけれど、そんな時も、小暗い軸の寢床に崩れ着て、すば〳〵と煙草吸ふ父親に氣が置けて、戀しさを素振でも知らす事さへ出來ぬ。おふさは生れつき内氣な性分だつたのだけれど、烙り立てられるやうなわしが戀の目には、何の問えもないさまに横向いて、しづかに紐ひ解きなぞしてゐるものごしは、わしに到してもう心が冷たくなつてゐるやうに見えた。わしはいつも、氣の毒を裏悲しく歸つて來た。浦によつて、船が出て行く時の引汐を見計らつて、わしたちが商ひに出た間に、船を沖合へ出して諸合つてゐることがある。そ

んな夕方歸つて來ると、合圖を聞きつけて傳馬で渡しに來るのは娘子供であつた。八つの船には娘が三人ゐた。おふさが渡しに來てくれゝばいゝがと念じ祈つて、稀に嬉しく來合はす時には、わしが代つて櫂を取り、出來るだけ緩く漕いでゐても、水の上は二町に足らぬ。女は袂を噛んで、

「戀しい夜は息か重たうて寢られぬ。」と言ふに、

「女は戀の心が足らぬ。なぜわしの船の側へ來ても、こちらも向かずに歸つて行く。」

「でも小父さんが叱るやうに見えるもの。」

「それはお前の氣のせゐだ。一體お前はつれない。」と恨めば、何にも言はずに涙ぐんで、船路に搦れる藻草を見つめてゐる女を、

「おふさ、何が悲しうて泣くのか。」と訊くうちに、傳馬はもや親船に着く。このやうな心ならぬ明暮ゆゑ、切ない戀は募りまさつた。

たうと三四十日した或闇の夜中に、わしは竊かに傳馬を出して、四つ隔てたおふさの船へ、底板で水を掻いて附け寄せた。おふさも寢ないで箱行燈の側に悲しさうに坐つてゐた。わしを見ると愕いて、灯を吹き消して傳馬へ下りて、

「どこへ伴れて行く。知れたら怖い。」と取り縋る。家船の習はしは、妻合はぬ先に添うた男と女とは一生親から見放されるのであつた。わしも何だか怖ろしい氣がしたが、押へ切れぬ戀は傳馬を岸へ漕いで行く。女はわしが裾に縋へてゐた。

それからは半年ばかりの間、このやうにして幾たびか闇の夜に紛れて會うた。女を背中に負うて、藻草の中をざぶ〳〵渡つた夜もあつた。船は二人が戀を積んで、浦から浦を廻つた。

その内におふさは病氣で寢てゐるとかいふ事で、五六日姿を見せなかつた。氣になる餘り、或夕方そつと忍ねて行つたら、おふさは亂れた髪をしてよろ〳〵と出て來て、

「來てはいけぬ。どうやら母さんが知つてゐらしいから。」と追ひ立てた。

それ以來おふさは病氣が癒つてからも、わしが夜中に忍んで行けど、たしかに知つてゐながら出て來ない。雲問出會つても、これまでのやうにわしを戀しい日閉もしない。何だかいつも出來るだけわしに顔を合せまいとする容子が見えた。もしやわしを嫌ひ出したのではなからうかと心配して、十日許りの間、わしは夜晝悲しく恨んでゐたが、一日、雨で商ひが休みの午後、薩へ將供をさしに出かけて行く後から、おふさが傘もさゝずに追ひかけて來て、

「一寸待つておくれ。」といふ。わしはこの間から胸が鬱いでゐる時ゆゑ、

「お前にはもう口は利かぬ。」と、つれなく言ふと、

「千さんにはなぜわしの心が分らんのぢやろ。」と悲しさうな顔をする。

「お前こそわしが心を知らんのだ。」と言ひ返せば、おふさはさめ〴〵と泣いて、

「どんな難儀を見ようともわしに添ふ氣があるのなら、相談したいことがある。」と言ひかけた時、船からおふさの母親が、

「おふさ〳〵。」と呼ぶ。わしは急いでさつさと向うへ行つた。

同じ日の夜、

「今宵はまだお灯が上らぬ、どの船の番だ。」と父親が訊く。わしは纜へ出て、

「お灯はまだか。」と、晴い小雨の中へ聲高く呼んだ。神神さまへ捧げる燈火である。

「おゝい。」と答へたのはおふさの父親の聲であつた。おふさの船は一番端にゐたのである。待つてゐると、ぼろ〳〵と炉の燃える松火が、櫓の上に現はれた。持つて出たものの姿は闇ににじんで定かには見えねど、やがてその火を

くる〳〵と廻す筒袖の工合が、どうやらおふさらしいと見てゐると、火は三度圓をかいて水へ投げられた。投げられて落ちる時、ちらとおふさの顔が闇かに見えた。おふさはたうと、この閃きに似たはかない一目が、わしには一生の見納めになつたのである。

その晩わしはおふさの事を考へて、夜更けるまで寢られなんだ。やつぱりわしを忘れてはゐぬものに、雲問なぜあんなに辛く當つたのだらうと後悔した。おふさが雨にぬれて、涙ながら立つた姿を想ひ浮べれば不憐であつた。考へて見ると、おふさがわしにつれなく見えたのは、容子を喫いだ母親に叱りつけられたからではあるまいか。そしておふさはそれから毎日母親から責められてゐるのではないかしらと氣にかゝる。おふさが父親は不斷から何だか怖い。もしも父親がわしたちの仲を知つたらどうなるだらうと續いて考へ廻らすと、何だか黒い影に追ひ詰められるやうな氣がして胸が閉がつて來る。すると纜の方で、だれだか小聲でわしを呼ぶやうな氣がする。まさかおふさが來にすまい。心の迷ひかと考へてゐると、

「おい〳〵。」と再び呼ぶ。たしかに年の入つた男の聲だ。そつと出て見たが、晴いから何にも分らぬ。雨はいつしか止んで、苫の雫がぽたりぽたりと落ちてゐる。

「だれかい。」と低く訊くと、水の中を一足近づく音がして、

「わしぢやよ。」と言つたのはおふさが父親の聲であつた。わしははつと逆せ上る程どぎまぎした。

「悪い事ぢやない。一寸内證でそこまで來ておくれ。」といふ。わしは仕方なしに素直に水へ下りた。おふさが父親はぢつと聞き耳を立てて、

「あの鮃は父御か。」と安心したらしく言つて、わしを導いて、七八間先に碇を下した小舟へ載せた。わしは何だか薄氣味が惡くてならなかつた。

「わしをどうする積りか。」と訊くと、おふさが父親は私の肩を押へながら、

「氣づかふな。小父に任して置けよ。」と柔しく言つて漕ぎ出した。どうやら三四町向うの見當に見える、雲問見た大船の灯もしい。小さい燈火を目當てに行くやうであつた。

「どこへ行くのか。」と訊いて見ると、

「大船だ。」といふ。わしは合點が行かなかつた。

「何しに行くのだ。あれは明日の朝佐渡へ出る船ぢやないか。」と云へば、

「さわぐなよ。お前をおふさと添はせて一緒によそへ遁してやるのぢや。お前も男ぞ。これからしつかり一人前になり上れよ。たゞ知らぬところへ出てはからだが大事だから、用心せいよ。」と、涙に濡れた聲でしみ〴〵といふ。

「そんならわし等はどこへ行くんだ。」

「それは船頭がよくしてくれる。」

「そしておふさはどこにゐる。」

「おふさかい。」と、問ひ答へするうちに、大船が目の前に仄暗く見えて來た。おふさが父親はそれきりずつと默つたまゝ、ことんと大船へ横着けにした。

「お前、譯を話すから怖れちゃいけんぞ。」と船を向うの舷へ繫いで置いて、わしが側へ來る。

「何もかもわしがうまくやるんだから、お前怖れちゃいけんぞ。おふさは腹を氣にして自害した。——千さん、何をそんなに顧へる。見つともない。もう仕方がないよ。この蓆の下に寢せてある。海へ沈めるんだ。それで千さんは氣の毒だが船にはゐない方がいゝ。おふさの事は誰も知らん。あすは二人が遁げたといふ騒ぎになな

るだけぢゃ。さあ上つた。」といふ時に、上からぱたりと綱が落ちる。わしは初めて深い息をついて、

「それではおふさを一目見せておくれ。」と、どれが蓆か暗闇に探つたら、

「おい、いけない。血が附く。上れ。」と引つ張られて、綱に縋つて船端を上つた。

「親方んだぞ、親方。」と、おふさが父親が下からいふ。

「おゝ、引受けたよ。」と頭の上に船頭がゐた。

「待つた。忘れたものがある。棹を下してくれい。」と、父親は下でべり〳〵と何か裂く。やがて棹に結び附けられて上つたものを船頭が取つて、わしを中へ伸れて這入つた。

船は翌る日佐渡へ向けて出た。それから丁度七日目に、

「今日はあの子が一七日だ。もう女には迷ふなよ。」と言つて船頭は、わしをこゝへ下してくれた。

これはもう何十年といふ昔のことだ。その時棹に結ばれて上つたのは、三十兩の金と、血に染つたわしへの書置と、長い黒髪の一束とであつた。その形見の髪はおふさが父親の手拭の裂けたのと一しよに、久しい間わしが涙を吸うたものだ。——言へばたゞこれだけの話だけれど。

年寄は目を潤ませて杯を取つた。

自分はこの話を、いつまでも自分の事のやうに忘れ得ぬ。年寄はまだこの世に生きてゐるであらうか。

（明治四十二年一月）

月夜（四）

自分はいつしか一人とぼ〳〵と、青白く眠る夜の小路を、たゞ一人物に考へ入りつゝ、何のためともなく、上の方の西洋人の官宅の前まで來たのに氣がついた。

そこの黒ずんだ影のやうな二階には、まだ灯影がカーテンに寫つてゐた。自分は水の深みに入るやうな月夜をくゞつて椋の木の方へ行つて見る氣になつた。稍小暗い木の下だけれど、そこを通り拔けるまでは、西洋人の家に寫つてゐる灯影が自分を見てゐてくれるやうな心持がした。向うへ出れば、まだ見た事もない、月夜の海の面も見られるからと考へた。

と、自分の五六間向うを、すらりとした女の西洋人が行く。若いたわ〳〵しい女で、足早にせか〳〵と行くらしく見えた。たゞちらりと、漂ふやうな白いスカートが見えただけではあるけれど。

ちらと見えてもうそれきり形は隱れた。妻にマストの見える方角は、先もなく青く慘つてゐる。木蔭を選んで行くのか、形は見えないけれど、小さい靴でその女は歌をうたふ。ゆつくりさまよひながらうたふ調子のやうだのに、それをはつきり聞き得るやうに寂かに小走りに行つても女には追つ附かれない。餘り近附いては人がゐるのに氣が附いて歌をやめるに違ひないからと思つて、一寸足を止めて窺ひ見た。

まだ謠ふ。月夜に似合しい歌を長く引いて、謠ふのである。そのために、一人でさまよひに來た女なのかと考へつゝ、そろ〳〵と行くと、いつしか歌は自分の後の方に隔つた。自分は變に惑はされたやうな心持に振り返つて見ると、後に眞白い服を着た女の、肩からへた。

小猫

一

三つになる父なし子を伴れたお岸は、町へ馬鈴薯を積んで來た、問子船が歸るのへ乘つて、十一月下旬の暗い夜の船着へ上つた。

そこからは、彼女は力のない背中に子供を括り附けて、夜道を一人とぼ〳〵と歩かなければならなかつた。子供は暗がりを怖れて背中で泣き泣きした。それがやつと寢入ると、お岸は自分の前掛をほどいて頭へかぶせてやつた。さうして、休み〳〵して山路へかゝつた。

お岸は、かうして二里以上の路を歩いて、自分の村へ着いた。お岸が十九の年までゐた彼女の家は、背の低い、山麓の崖の下に、小さく、黑い夜の中に沈んでゐた。疲れたお岸はもう寢て了つてゐる戸口に子供を下したが、何と言つて中へ這入つたものかともぢ〳〵した。作一は、寢た間にどこかへ落した團扇を尋ねてぐづ〳〵言ふ。お岸はそれをそつと宥めながら、よその軒下に鶏かに立つてゐるやうに、息を小さくして考へ込つてゐた。

すると、横合からふいと灯影が射して來た。見ると、腰の曲つた自分の祖母やが、油燈の上をカンテラ正頭の先へ突き出して、見え惡い目をしながら、何か失くした物をでも探す容子で、物置小屋の横から出て來て、のそ〳〵小屋の中へ這入りかけるのであつた。

「祖母や。」と、お岸は憚るやうに後から呼んだけれど、祖母やは耳が聞えなくなつたと見えて、振り返りもしずに、そのまゝ小屋へ這入つて、がた〳〵の破れ戸を閉めた。行つて中を覗くと、畠の道具をごた〳〵入れた狹い片隅に、藷數の小さい床が出來てゐて、その上にどす黑く綿の裂け出た蒲團が擴げてある。祖母やはそれへ這ひ上つて、床の足へ括り附けた小紐をたぐり寄せて、落ち附かない容子で頻りとぐるりを撫で探る。祖母やが床の角へ置いてたカンテラの下には、頭を藥で束ねた見知らぬ若い女が、芋俵を拵へる仕掛をしたまゝで、正體もなく寢倒れてゐる。お岸は作一に來いよ〳〵と言つゝ戸を開けて這入つた。

祖母やは、けろんとして見上げてゐたが、やがてそれがお岸だと分ると、

「まあお前さけい。」と怨いた。お岸は祖母やに變りはないかと訊いて、久々で言葉をかけるのだけれど、祖母やにはそれが少しも聞えないらしい。四年の間會はずにゐた間にすつかり年取つて了つた。もう何の役にも立たぬやうに老いほうけてゐる。お岸が言ふ事にちぐはぐの返事ばかりして、

「何、お前さ、こゝにからしちよる方がどれ程ましだか。うろ〳〵すればがみ附かれるけのい。お前さ、用のない時にはこゝへ來て話さつせ。」

かう言ひながら、氣が附いたやうに、蒲團の下から、反古紙に包んだ黑砂糖の固まりを取り出してお岸に食べろ〳〵と言ひ〳〵、指先を嘗める。

「これはないしようで買うたのぢやけ、母やへは言はずにゐてくんなさろよ。」

かう言つて、口の中で母やの惡口を幷べかけたかと思ふと、ふいと、どこからか來た宿無し猫がこの床の下で子を生んだ話をし出すのであつた。それをお母が目つけて放り出して了つた。

その子猫の一匹に違ひない、或日ふいとわゝの足元へ来て踞んでるから、そのまゝ置いて養つてゐると、またお母に目つけられて撲つ放されたのぞと、どうでもいゝ話ばかりを續けて、お岸が家を逃げ出した後、どうしてくらして来たのか、どういふことから歸つて来たのか、さういふ事は全で訊いてもくれない。お岸は、壁の根に轉がつた、流物の切の殘つた缺皿を一人見つめながら、ぢつと默つて突立つて、深い、暗い穴の下に落ちて行くやうな心持に涙ぐんでゐた。

やがて子供の這入つて来ないのに氣が附いて、お岸は急に小窓を出た。裏口の筧の水が落ちるのが、人の話のやうに聞える。

作一は下して置いたところにゐない。戸が少し開いてゐて、中に灯影が動いてゐる。

「お岸、早う這入れいよ。のいお前。」と、中から母やが呼びかける。

二

ずゐぶん、口汚く、ひどいことばかり言つて罵るだらうと思つた母は、待ち受けたものが歸つて来たやうに、素直にお岸母子を受取つた。さうして、急いで圍爐裏に火を掻へて、お岸が家を出てゐた間のいろんな事情や、自分のまだ知らない、町の生活のことなぞを珍らしさうに掘じくつた後、自分の力頼りになるものが歸つたのを心丈夫に思ふ容子で、自分の毎日の苦勞を話した。お岸はそれをわがことのやうにしみ〳〵と聞いた。六疊一間の淡色の古疊は、坐つて話し合ふ二人と、取り散らしたごだ〳〵物と、寝入つてゐる子供の一團とで一ぱいであつた。さつき戸口をがた附かせてお岸の母の目を覺ませた作一は、お岸の留守の間に出來た母やの女の子と、口の利けない嫂の二人の子と、七つばかりになつたお岸の妹の中に頭から埋まつて、小さい寝息をかいてゐた。

母やの話では、父やはこの小半年ばかりこつち、村の片栗の製造場へ夜廻りに雇はれてゐるのださうであつた。お岸のたゞ一人の兄は、いつまでもこんな小作の百姓では浮ばないからと、酒落れた事を言ひ出した末に、何とかに成るのだと言つて去年の四月に飛び出した切り、鉦一文も送つてはよこさない。だいぶ遠いところにゐるのだといふことしか母やは知らないのである。父やは村の道普請に雇はれて、石に撲つ附かつた右肩が痛むので、畠の仕事がはき〳〵出來ないといふのから、あゝして夜番に這入つたのだけれど、さういふ意氣地のない癖に、儲けるだけのものはすつかり飲んで了つて、まだ方々へちよい〳〵小借りを掛へてゐる。そして、夜寝ないといふのを楯にして、晝はいちんち寝込んでばかりゐる。昔から自分ばかり嫌着をしてゐれば文句はない代物である。結局が、晝ぢう寝つくばるために夜の仕事をするのだ。それも白馬をぐい〳〵飲つて、いゝ心持になつてうろつき廻つてゐるのだから世話はない。嫂のお幸だけは、働く事は粉になつて働くけれど、何しろ自分の、生んだ子供の世話さへも出來ない女だから情ない。母やはこの四年に續けて三人の子を掛へたのと同じことで、面倒が餘計で仕事が一寸も捗らない。祖母やと來ては丸で話にならぬ。小屋に生み溜まる玉子を盗んでは子供に賣つて來させて、それでもつて買食ばかりしてゐる。そしていつもろろ〳〵とこつちへ出て來て、そこいらに轉がつてるものは何でも取り込んで隠して、知らん〳〵といふ。いくら言つても、矢つぱりないしようで盗人猫を飼つて、食物を食はせてゐる。

「本當にわしは早お前、食ひ潰す口ばかりが六つもあつて、働く手が二つしけやないのぢやらうがい？　この盗ぢやもうお前何としらあに。」

母やは額口の翼の中へ出來た、田蟲のやうな吹き出ものを、赤身が出るまでがし〳〵と掻き廻した。

「考へて見ても分らあに。わしがお前、たゞの一ん日でも寝附けばお前、家のもの等は泥でも舐つて喜んぢよる氣かに。——わしや本當に早く長生きをすれやするだけ損だぞのい。」

かう言ひ〳〵母やは欠伸をして、半纏を脱いで、一つ倦つてゐる寝床に這入つた。

お岸は重たい深い息を吐いてゐたが、やがて、襦袢と下の物だけになつて、母の横へ一緒に這入つた。何か枕にするものはないかと思つても、探しに出るのが面倒臭い。蒲團を少し引つ張つて、はみ出た肩を隠さうとすると、そんなに！てはお前、私が半分外へ出て了ふと母親が苦情を言ふ。お岸は容易に寝附かれさうにもなかつた。ぢつと目を閉つてゐると、昨日からこつちのことが、水の中のものをでも覗いて見るやうに、目に寫つて来る。

「母や、寝たかい？——なう、母や、わしがこゝへ這入つて了へばお幸やの寝床があるまいが。」

ふいと氣になつたので母やに訊くと、

「おゝ冷たい足だ、お前の足は。——お幸はお前、藁でもかぶつて氣樂に小屋へ寝らあ。小屋へ寝たくなけれやお前、どこへでも寝らあ。若いうちは誰がとこへでも寝かせてくれらあに。」と、むにや〳〵言つた母親は、すぐに高い鼾になつて了つた。

お岸は整る日を開いて見ると、障子へ曇つた薄白い日影が射してゐた。母親も子供たちもすつかり家にはゐなかつた。お岸はいつまで寝入つてゐたのかと考へた。疲れが出たといふものか、昨日よりか體に力がなくて、頭が土で拵へたやうに重かつた。

着物を着て、戸口へ出て見ると、祖母やが唐辛子を釣り下げた物置小屋の壁の根に蓆を敷いて、煮た鰍のやうな口をあぶ〳〵させながら、薄蟄りの日向の中にしよんぼりと坐つてゐた。側に二つばかりの小さい子が、お臀を剝き出して這ひ突く蝨つてゐる。小屋の前の、小さい桑畠には、葉のがざ〳〵に枯れ腐つた桑株の中に、裸足になつた作一が、たつた一人踞んで土を掘じくつてゐた。お岸が傍へ行くと、桑の向うの石崖の下から、四つばかりの、同じ年恰好の男の子と女の子が、汚れた顔を并べて突き出して、直ぐまた引つ込めて了つた。二人とも小路に沿うてすた〳〵と駆け出して行く。見ると、女の方は作一のちやん〳〵を自分のもののやうに着込んでゐる。一人の子は、一昨日買つて展かせて来たばかりの作一の下駄を、垢だらけの黒い足に履いて得意さうに走せて行く。作一は二人の逃げて了ふのを見て泣き出した。

子供等は追ひ立てられるやうにどん〳〵小惡らしく走つて、ぢき下の元造の家の向うへ這入つて了つた。お岸は、泣いたやくる子を自分半纏で包むやうにして立ちながら、濁つた空の下に、寒く薄黒い色に打ち返された畠の一面を見渡した。すぐ下の一仕切は、最早麥を蒔いて了つたと見えて、筋目々々に腐つた藁が入れてある。方々の高い木は大方葉も落ち盡してゐる。左手の竹藪の下を行く小川の、動くとしも見えないだぶ黒い水の中に、着物が纜で繋いで漬けてある。水が眞つ直に續いて向うに街道の家並が斜に聯つてゐる。薄皮に包まれたやうな、色目の惡い太陽は、小さい玩弄品に似た、酒屋の白壁の倉の上にどんよりと懸つてゐる。小川は倉の五六軒先へ這入る。

お岸は先程から、その小川に附いて段々と大きくなつてこちらへ向いて来る灰黒い、男の姿が、どこかの親爺だとわかり、たうと自分の父だと認めるまで、一人ぼんやりとそこに彳んでゐた。

三

「もうおつ母から聞いたい。親を三文とも思はねいで、さんざいゝ眞似をしちよいて、くたぶれたら歸つて來れや世話はない。おまけにがきまで土産に持つて來たちふぢやないか。そねえなものは叩き潰して犬にでも食はせやいゝんだ。何だい、水ぢやないか、これは。のらいつてる間に飯位は食へるやうにしちよいても損は行くまいがい。鳥の死に損ひめ。何が怀へて下せいしだ。退けよそこを。退けちふに。」

父親は火の消えかゝつた圍爐裏の側に坐り込んで、がみ〳〵言ひながら冷たい茶漬をがぶがぶ食べた後、ぼろけた足袋を脱いで、小砂を振ひ出して、上り口の壁に釣して置き、蒲團を引つぱり下して頭から被つて、毛の生えた錘を覗かせて寝込んで了つた。お岸は背中に子供を括り附けた儘、土間に立つて涙ぐんでゐた。手拭を被つたお幸が、畚へ馬鈴薯を擔いで歸つて來て、土間の隅へ撲ち空けた。そして、被つた手拭の片端で小鼻の汗を拭きながら、父親の食べたあとの飯櫃を見て、

「もうお前は濟ましたか。」と、親しさうに手眞似で訊く。年は幾つだか、二人の子持なのに、自分よりか三つも年下で二十ばかりとしか見えない。薄い眉毛の下に、少し落ち込んだ何だか泣いたあとのやうに黑く潤ひを持つた目をした、色の蒼い、素直さうな、小柄な女である。お岸には、一日見るとから、もう永い間知り合つて來たやうな心持がする。お幸は、お岸の背中の作一に笑ひを見せて、再び畚を擔いで出て行つた。

嬰に吐きたいやうな心持がして、腹は減つてゐるのに何こそ食べたくなかつたお岸は、父やが惡さうに溜せかけた小言を心に繰り返しながら、力なく上り口に腰を掛けて、眞つ黑に煤けた向うの壁を見詰めてゐた。考へると、何だか取り返しの附かぬ事をして了つたやうな心持が浸み上つて來る。紺屋の定には全く欺された。口數の少ない、分別深い親切な男だとばかり考へてゐたのが間違ひであつた。親の家を飛び出させて、三年近くも伴れ合つて、かうした子供までも出來たのに、他に女を拵へて、こちらの着てゐるものまで剝がせて持ち出した果が、たうと子供と二人を長屋に置いた儘で逃げ出してしまつた。

村へも歸れないお岸は、仕方なしに僅か許りの元手を拵へて、或裏町に店借りをして、駄菓子の店を出した。そして、もう一生男といふものは持たない積りでゐたのだけれど、毎日買ひ食ひに來る、中根といふ子供上りの郵便配達に何かの世話をしてやつてゐる内に、今度は自分から持ちかけて、怖がる中根を自由にして了つた。しまひには引き入れて寝泊りまでさせて、しばらくふは〳〵した日を送つてゐた。ところが中根はそれから四五箇月すると、何かしら間違つた事をして勤めを奪はれた。もと〳〵氣の小さい男だつたので、毎日それを苦にして、かう居食をしてゐてはすまないと言ひ〳〵しつゝ、他の勤め口を探してゐたが、さうかうしてゐるうちに、生れた村から中根の伯父とかが探し當ててやつて來て、厘だといふ中根を無理矢理に伴れて歸つた。

それでも、中根はやつぱり戀しかつたと見えて、その後二三度はこつそりと戻れて來たが、最後に、この頃は役場へ手傳ひに出てゐると言つた時から、それきり一寸も出て來なくなつた。最早二月ばかりになるのに何の便りもしない。お岸はそのうちに體が惡くなつて、市場へ仕入れに行くのが苦しくなつた。町筋の醫者に見て貰ふと、どことかが惡いのだと言つた。少しでも歩くと直ぐに息が苦しくなつて、どき〳〵と

動悸が烈しくなつた。たうと一月といふものは全でふら〳〵と寝附いてゐた。

さうしてる間には店賃も溜つた。稅も來た。卸し屋からは掛けを取りに來て、いろんなものを形に取つて行つた。後には内職も出來ないので、その日〳〵の食料にも困るやうになつた。お岸はそんなことから、少し體の加減のよくなつたのを幸に、たうと村へ歸つて來る氣になつた。そこへ或日表を通る古ひ屋を呼び入れて見て貰ふと、どうしてももとの土地へ歸らなければいけないといふ判斷をした。この儘かうしてゐては、また何かかんかろくでもない災難に會ふ。病氣のところも、一時は癒つたやうに見えても、また押し返して來る。一寸は全快しさうもないと言ふ易であつた。その他色々自分の身の上を訊くと、一々見て知つてゐるやうに言ひ當てた。お岸はそれと共に一途に何もかも賣り放して、僅かの餘りの中から、子供に下駄を買つて穿かせて、背中に括りつけて、河岸へ船の都合を訊き合はせに出て行つたのであつた。

あの煩つてゐた時分に、たつた一人で店賃の後に寝てゐたことを考へると今でも情ない心持がこみ上つて來る。四五軒置いた車屋の家の女の子がよく店先へ來て、ラムネの玉を彈いて遊んでゐたのが、家と一緒にどこかへ越して了つた後は、誰一人寝てゐるお岸の用を足してくれるものもなくなつた。後の六疊を貸してゐる、年取つた渡り者の夫婦は、夜は夜店に出て、遅く迄歸つて來なかつた。晝間だつて、二人でせつせと色んな秘傳を書いた版行を摺つたり、搨つて畫寝をしたりするだけで、口の一つも利いてはくれなかつた。向ひは倉庫會社の古けた煉瓦塀なので、夕方迄陽が靜かになると、何だか話に聞いた、宇屋の中にでも閉ぢ込められてゐるやうな思ひがした。

歸つて來てよかつた。やつぱり歸つたのがよかつた。かうして父親にはひどい事も言はれるけれど、いちんち一緒にゐる譯でもないから構はない。たゞ再び寝附くやうにさへならなければ、母やも困りはしまい。どうにかして子供と二人の食料だけは取れるだらう。さうして、當分母親を扶けて仕事をしてゐるうちには、またどうにか事が極るかもわからない。

こんな事を考へてゐると、お幸が再び馬鈴薯を運んで來た。さうして、今度はしばらく物置に這入つてゐたが、間もなく出て來て、右の親指の先へ刺つた竹の刺を、爪がなくて取れぬから、お岸に取つてくれろといふ。お幸が側へ來て手眞似であれこれいふ素振が、いかにもお岸には何の隔てもないやうに見えた。早速抜いてやると、につこりと子供のやうに笑つて、指先を管めながら畠へ行つた。お岸はこの女が物も言はれず、人のいふ事も聞き取れぬ一生を、あゝして土だらけになつて、何一つ物事に逆ふことを知らない女のやうにこつ〳〵働く後影を見送つて、自分のことのやうな哀れさをそゝられた。

かれこれしてゐると、間もなく午時になつた。母やは作一のちやん〳〵と下駄とを片手に提げて、例の畚を擔いだお幸と二人で畠から歸つて來た。上の女の子は、村の酒屋へ子傳に行くので、夜でなくては家へ歸らないのであつた。その他の小さい二人の子は、着物の裾を口に銜へたりブリキのきれへ繩を附けて引つぱつたりしながら、母たちの跡に附いてぞろ〳〵歸つた。物置へ立ち寄つて直母やをいぢめて來た母親は、土間に立つて、父やの寝てるのをがみ〳〵言つて、子供等に盛振り起させた。父親は濟々床から出た。さうして、一同が上り口に圍まつて、皿や椀に拵つて午飯を食つた。母親とお幸とは、土間に立ちはだかつたまゝで食ふ。父やは、口の内でお岸のことをいつまでもぶつ〳〵

罵つた。

「もういゝぢやないか。お岸にやわしが十分言ふ事だけ言つちよるけ、お前さがくど〳〵言はつしやる用はないがい。」

母やはうるさがつて釘を刺すやうに言ひ放した。お幸はいつも餘つ程父やに苛く扱はれてぴり〳〵してゐると見えて、一刻々々に物でも投げ附けられるのを待ち怖れ　もするやうに、父やの方をじろり〳〵覗ひながら、惡い事でもしたあとのやうに、おづ〳〵と一口々々を食べる。母親はやがて、

「お前さ、もう箸を置いてもいゝがい。」と父親の食事を切り上げさせた。

「こうれこれ、そんなに茶ばかりがぶ〳〵と飲むと鮒に化ける。腹がぶく〳〵に膨れて鮒になるぞい。さあもう止めて外へ出い、外へ。」と、子供等を追ひ立てた。

「なう寢平さ。」と、鼻先で笑ひながら、

「午後はもう表にして、蒲團を上げて畠へ出て下さつせ。さうやつて毎日々々お前さ……」

「分つとらい。」と、父親は膨れながら外へ出た。

お幸も行つた。母親は二人になるのを待ち設けてゐたやうに、早速裏口へ出て、石臼の中へ匿して置いた蝋の鹽物を出して來て、三四本ばかり火にかけて、お岸に下をふい〳〵吹かせた。母親はそれをお岸と分けて食ひかけて、戸口の方を覗いて見た。

「もう父やは出かけたのかい？　かうしちよるところを見ると直ぐ這入つて來て引つたくるけのい。本當にお前子供よりか仕方のない父やぞの。これでももう早隱しちよくとこころがないのぞと思ひせい。探しては取つて食ふけ。自分はお前さ、外で氣儘に好きなものを食うちよるくせに。」と、小憎さうに言つたが、

「わしはお岸、いつからか章魚の蔕でたのが食ひたいがい。」と、取つて附けたやうな事を言ひながら、焦げた鹽物の頭をかじり〳〵噛んだ。そこへお幸が小さい子に乳を銜へさせながら出て來て、缺けた皿を母親に渡した。母親は鹽物を一切お幸にやつた。お幸がそれを食べるのを見ると、お岸も食ひかけたのを食べて了つた。母親は缺皿へ飯を一杓ひ落し入れて、その上へ漬物の殘りをこさげ落してお幸に返した。お幸は母親が裏へ鹽物の殘りを隱しに立つたあとで、竊と皿へもう一杓ひ入れ足して、お岸を見て微笑みながら物置へ歸つた。祖母やが食べるのだとお岸は知つた。

母親は直ぐに銀を撿いで出かけようとした。お岸は何か仕事をしたければ濟まないのだが、この容子では三四日は畠の仕事のやうな力業は出來さうにもない、追々に體を癒してから働くから、當分は少し許してくれ、その代り何かよその仕事でもいゝから、家でぢつとしてゐて出來る事を探して來てはくれまいかと母に訊いた。

「なにお前、そんねいに、二日や三日は休んでゐたちうてお前。まだ寢附いた跡ぢやけ、用心せいし。お前の日の色を見んか。病人のやうにどんよりしちよるに。まあ當分ぢつとして子供の見張りでもするい。」

母親は親切にかう言つて出て行つた。子供等は畠の小溝の日高を抄ふと言つて、お岸に人物を探してくれろとねだる。お岸は漬物が壺入つてゐた缺丼を、壞してはいけないよと念を押して貸してやつた。作一は兩方から何かいふ二人の仲間の言葉が分らないので、指を銜へながら勢まない容子をして附いて行く。

「作一や、母やはこゝから見てゐて上げるけの。」と、お岸は自分の子供の痩せた後影を見送つた。

祖母やはいつの間にか、壁の根の蔭の上に子供を這はせて、さつきの皿の餌を手探りに摑んで食べてゐた。その側には、骨の浮き出た、どす黒い小猫が居眠つてゐた。

四

お岸は、父親が使はれてゐる、片栗の製造場へ紙袋を張りに行くことになつたので、子供を置いて例早くから出かけた。五六人傭はれてゐる女仲間は、大抵お岸の知つてゐるものばかりであつた。それ等の女は、お岸が出奔してからの事をいろ〳〵突つついて訊かうとした。お岸は仲間が默つてせつせと仕事をする時も、無駄口を叩いたり小唄を歌ひ伴れたりしてゐる間も、始終自分ひとりが冷やかされたり、當て擦りを言はれたりしてゐるやうに心が鬱んだ。それに體も倦怠くて、一とき〳〵が長くてならなかつた。

夜暗くなつてから、一日の工賃を貰つて、腐れるやうな心持をして家へ歸ると、母やは土間に積んだ馬鈴薯の側に坐つて、傷の附いたのや、非常に小粒なのを探し分けてゐた。お岸は早く床に這入つて寢た。

お岸はかうして四日ばかり仕事に出るには出たけれど、どうも氣分が浮き〳〵しないで困つた。すると或朝、烈しく目暈がして、土間の降り口へばたりと倒れた。それからこつちは、丁度町で寢附いてゐたやうな容體で、五六日寢床に這入つてゐた。

表間誰れもゐない時分なぞには、お岸は一人蒲團の上に起き直つて、着捩れた着物の間に膝頭の覗き出たのも直さうともしずに、力なく首を傾げて、障子の外へとまつた蠅の影が、膨れて寫つてゐるのを見詰めたりして、毎日作一と二人で食ひ潰してばかりゐるのを心苦く考へた。作一はよく外で泣かされては歸つて來る。お岸はそれを叱つたり宥めたりしながら、自分も時々涙ぐんで、せめてこの子供でもゐなかつたなら、自分はこの儘死んで了つてもいゝし、達者になればなつて思ふ儘に働けもするのだがと考へた。お幸は馬鈴薯を撿いで影のやうに這入つて來ては、また影の如く出て行つた。

五六日目からお岸は毎日吐きたいやうな心持が續いた。横になつてゐるうちに、どうかすると むか〳〵と胸が惡くなつて裏へ出た。そして崖の下の棒杭に倚りかゝつて、嘔いて見ようとするけれど、その段には何にも出ては來ない。お岸はしまひにお幸に千金丹でも買つて來て貰ふ氣になつて、塵紙に包んだ僅かばかりの小錢を蒲團の下から出した。

かうした五六日の容子を見てゐたお幸は、その時土間に立つて、少らく首をかしげてゐたが、やがて側へ上つて來て、お岸に子供でも出來るのぢやないかと心配さうに訊くのであつた。お岸は何だか惡い事を探し當てられでもしたやうな心持がした。けれども顏を振つて、さういふ事はないと返事をした。

併し、さうは言つたものの――自分には度々かうした癖もあつたし、又頃つてゐた間のことでもあるから、勘定には入れずにゐたけれど――言はれて見れば自分でも疑へる事情がないでもない。お岸はさう思ふと氣になり出して、町で寢附いた當分に、中根がひよつくり會ひに來た、あの一番仕舞の日の前後から月を經つて見た。

かういふ方には疑を持つてゐなかつた母やもお幸が相談でもしたせゐか、その晩作一に燈の灰で馬鈴薯を燒いて食べさせてゐると、お幸が訊いたのと同じ事を問ひかけた。お岸はそんな心配はない、もう久しく、そんな事になる覺えはないのだからと、取り繕つて言ひ切つた。

さうして、かう體の惡いのは、やつぱり先頃の疝きだと言つて、町で煩つてゐた時の病狀を詳しく訴して聞かせた。本當のところ、お幸が

あんなことを言はない間は、自分でもさう思つてゐたのである。まだはつきり子供だと極つてゐるのでもない。だから十が十讒をついた譯でもなかつた。唯、またこの前のやうにひどくなつてくれなければいゝがと、お岸はそれを苦にしながら話を杜切つた。

「まあそんだらいゝがお前、この中へまたお前が子でも殖して見い、どうなるだものけい。ただ脚れ出しただけでもお前、荷厄介で力一ぱい仕事は出來やせんがい。それにお前、かう弱つてゐるちふと、どうしても二月は寢たりぐつたりせにや生れやせんけのい。そんなにしてお前、のら〳〵して見い、作一の口だつてお前、馬鹿にしたもんでないがい。」

かう言ひながら、母は時刻が惜しいと言つたやうに立ち上つて、土間の馬鈴薯のところへカンテラを持つて下りて行つた。お岸は腹のことが鎖りと氣になり出した。十の八九は大丈夫だと思ふけれど、しかしそれは自分が慾に任せて、都合のいゝやうにばかり考へるのかもわからない。事情が一つでもあるからにはどうも不安心でならぬ。お岸は厭な心に鎖され出した。

それ以來お岸には、暮る日になつても、お幸や母親の容子が、何だか知らぬ顔をして自分を探つてでもゐるやうに解んで見えた。けれども二人ともそれぎり何にも口へ出しては言はなかつた。

お岸は毎日横にばかりなつてゐるのが苦しくなつた。それで、晝間少し心持のいゝときには、起きて物置へ行つて、お幸が夜仕事に作つてる芋俵を、氣紛れにぽつり〳〵掛へてみたりした。そのうちに嘔きたいやうな氣持のするのが少しは止んだ。ときには面白く勞んで作つた。

或晩の事である。お岸は退屈まぎれに物置へ行つて、火穴へ火を掛へて、お幸と向ひ合せに坐つて、俵の手傳ひをしてゐると、誰だか、入口の戸を少し開けかけたものがある。そして、その盤小簞に立つて、中を覗き込んでゐるらしい容子であつた。お岸は謹だらうと思ひつゝ、目附でそれをお幸に話すと、暫く後を振り返つて考へてゐたお幸は、何だか氣を置くやうにお岸の顔を見た後、ふと立つて外へ出た。

お幸は間もなく歸つて來たが、どうしたのか怖ろしいものに會ひでもしたやうな目附をして、母親が來ても默つてゐてくれるといふ手眞をして出て行つた。お岸は、謹かお幸のとは違つた足音が下の方へ下りて行くのが、お幸の出た跡に聞き取れた。

お幸はやがて歸つて來た。そして氣になるやうな容子をして仕事に附いた。お岸は別に事の譯も訊かなかつた。

するとその直ぐ翌る晩である。お岸は寢入つてゐるところを揺すぶられて目を覺した。部屋中は眞つ暗であつた。併し、顔にかゝる女の臭ひで、お幸が側に來てゐるのだと氣が附いた。どうしたといふのか合點が行かないけれど、とにかく、お幸が突つ突くまゝに床を出た。開け放した戸口から、一幅の月影が薄白い布を張つたやうに土間に射し込んでゐる。立つて行くお幸の跡に附いて下へ下りかける時、ちらと月影に當つて戸口を出たお幸は、下の物一つで素つ裸でゐるのであつた。お岸は愕いて附いて出た。

外は冷たい水に濡つたやうな月夜である。お幸は暗い物置の中へ潜入つてしく〳〵泣くのであつた。寢床にしてゐる、積み擲げた藁の上に伏さりかゝつて泣いてゐる。暗がりでは手眞似で話は用來ない。

「お幸さ〳〵、どうしたのだい、お幸さ。こつちへ出て話してお聞かせい。どうしたといふの

い。」

お岸は、聞えるものに言ふやうに、手を引つ張つて、入口の月明りのところへ伴れ出した。見ると、髪を引つかき亂したお幸は、頭へ上る身振をして、寒いから着物を貸してくれろといふ。お岸も縞袢と下の物だけだからぞく〳〵寒い。家へ這入つて蒲團の据にかけた自分の着物や、母やの半纏や手探りに引つ抱へて來て、お幸に、自分の半纏と下の物を解いて貸してやり、自分も着物を着た。お幸は涙鼻汁を啜りながら、もういゝから歸つて寢てくれといふ手附をして、再び藁の上に伏しかゝつて泣くのであつた。お岸は母やの枕もとのカンテラの灯を點けて、夜の氣の冷たく搖れ入る戸口を閉めた。

「お幸さ〳〵、一體どうしたのい？」と揺すぶると、お幸はやつと顔を上げた。その頬口には、亂れ下つた髪の毛の下に、生血が一筋吹き出てゐる。お岸は青くなつて愕いた。お幸は、言はれてはじめて氣附いたやうに、手の平でそこを押へて見ると、指先に血がべつとりと喰つ附いた。

五

お幸の話すことは飲み込めないことが多い上に、話の續き工合もよく分らなかつたけれど、お岸は大體を了解して、お幸が意外なことをやつてゐるのに愕いた。

お幸はお岸の兄の出たあとで、密かに男を拵へたのであつた。どうして出來た仲なのか知れないけれども、ほじ〳〵つて訊くと、相手は二十一だといふ。お幸よりは年下の男である。どこの誰だといふことは、お幸は訊いても答へない。お幸も一時は相手を思ひ込んゐた。二人は大分久しく喰つ附いてゐたものらしい。お幸は兄から少しも好かれないで、何とかいへば撲つたり蹈んだりばかりされて來た。そしてしまひには言はじかうして置き去りにされたのである。お幸がそれでも矢つぱりこのまゝに、手ひどい父親と他人々々しい母親との間に挟まつて、いちんち小休みもなしに働いてゐたのは、たゞ夜になるとこの男に會はれるからであつた。男はよくさう言つた。いまに表向きに自分の家へ入れてやる。寅はどこへ行つて了つたのかてんで分らないのだから、子供も一緒に引き取るといへば親等も直ぐお前を渡すに極つてゐる、と、こんな事を言ひ〳〵してゐた。お幸はそればかりを待つてゐた。すると、そのうちに子供が止つた。お幸は或晩會つて、かう〳〵だと話した。相手はそれではと言つて早速にも親等へ掛合つてくれると思つたら、そんなどころか、男はそれは他のものの子だらうと言つて全く取合つてもくれなかつた。しまひには、ありもせぬことをこじつけてさかさにこつちを罵つた。お幸は恥しさに相手の肩に噛みついてわん〳〵泣いた。それからといふものは、男はふつつり寄りつかなくなつて了つた。畫間擦れ違つても見向きもしない。お幸がたづねて行けば、母親を出させたりして、何の用事で來たのかと突き當らせる。お幸は情なくなつて、夜になると一人ここで泣いてばかりゐた。それからいろんなごたごたがあつたりした末に、お幸は仕方なしに諦めて、腹の子供を產み落した。――お岸は生んだといふらしい手眞似を見てうなづいた。

ところがさうして元の體になると、男はまたひよつくりと物試へ這入つて來て、何とか然とかいやらしいことを言ひかけるのであつた。お幸はもうこの男を信じなかつた。これまでいい眞似をしてゐたのも考へて見れば怖ろしい。お幸は男が何と言つたつて振り返りもしなかつた。それはつい二三日前の事である。

續いて昨夜も來た。昨夜は丁度お岸がこゝにゐたので、氣づかれては極りが惡いから、お

岸には黙つて外へ出て、もう許してくれと男に頼つたのだけれど、また今晩寝てるところへ這入つて来ていろんなことを言ひかけた。お幸はしまひに外へ逃げて出た。すると男は附けて来て、月夜の中で捕らまへた。お幸がそれを振り放して逃げようとすると、男は怒つてお幸の頭をぐん〳〵撲りつけた上に、力づくめに着物を剝いで、それを引つかゝへて逃げて行つた。なんでも今夜は大分酒を被つてゐたやうであつた。——

お幸は涙ぐみながら、かうしたいきさつを話した。お岸は、こんな生な女を、しかも口で争ふことも出来ぬ女を弄つていゝ氣になつてる若者の、卑怯と粗暴とを憎んだ。いくら何たとて、裸にしといて逃げなくてもよさそうなものである。小面憎い奴もゐたものだ。まだこれから夜が明けるまでに、また調戯ひに来るかもわからない。わしも朝までこゝで寝て行くから、お前ももう寝んだがいゝ。泣いたつて返る事でもないから、と、お幸をいたはつて、土間の火穴へ火を拵へて、自分も藁を敷いて坐つた。何だか今の話で、お幸が子をはらむまで、弄られてゐるのだといふ事を知らずに、こちらから一心に思ひ込んでゐたといふのが、いかにも年の行かぬ女かなぞのやうにばか〳〵しい。お岸はかうして火を隔てて向き合つて、再び悪い若者の悪戯を怒つてゐたが、気附いたやうに、藁にすがつて目を閉つてゐるお幸の時を突いた。

「それではいつも祖母やに傳をきれてるのがその男の子供かい。」

お岸は手負ひでかう言つて訊いた。ところがこの問ひがいくど言つてもお幸に通じない。お幸は小首を捻つて子を生んだといふ手附ばかりを繰り返した。

「それは分つてるよ。だけどその子はどこにゐるい。」

「ゐない。ゐない。ゐないだよ。」とお幸は頭を振つて、何か庖丁で細つて土瓶へ入れて、それを火にかけて煎じてぐい〳〵飲んだといふ所作をして見せて、それで以て腹の中の子供を——お岸はまあと惜いた——子供を殺胎したといふのであつた。お岸は何だか自分がしたことかなぞのやうに怖ろしい心持がした。

お幸はさう言つて當り前のことのやうな顔をして再び目を閉りかける。

「そして何かい、そんな無茶な事をして、まあずゐぶん苦しかつたらうのい。」

「否い。」

「いつの事かい。」

「たつたこなひだ。」

二人は手負ひでこんなことを訊いたり答へたりした。

「もうよつぽどこゝは大きくなつてゐたのかい。」

「着物の上から見ても少し脹れてゐた。かうして上を手拭で包んで、それから前掛をこゝいらからから掛けて。」と、さうしてゐたからはたからは分りはしなかつたらうといふそぶりをする。

「その何とかをぐいと飲んだら直ぐ下りたのかい。」

「二度飲んだ。そしてその翌る日に下りた。」

「跡で寝附いたらうが。」

「いゝや。」

「母やは何と言つた。」

「知らん〳〵。母やは知つてゐやせんに。そこの祖母やが、」と、小娘のやうな笑を口もとに浮べて、

「祖母やが、夜その床の下に置いた土瓶を、猫を探すと言つて知らずに引つくりかへして、何だ何だと言つてまご〳〵した。母やは知りはせん。」

「その前つて煎じたものは誰から貰つて来たのい。」

「そこいらをはう〳〵探し廻つて掘つたのだよ。」

「掘つたのといつ？」

「こつり〳〵と掘つたのい。」

「何だらうそれぢや。」

何か草か木かの根で、すぐ煙られる、臭もないものらしいと言ふだけは分るけれど、それ以上は、口の利けないお幸には證き明しが出来ない。

「腹がきり〳〵痛みはしなかつたかい。おい、見いよ、こゝがきり〳〵と。」

「いゝやい。」

「子供は血になつて下りたのかい。それとも固まつたものが出たのかい。」

「それは、さあ……どうだつたらう。」と言ふやうに小首を捻る。お岸は一人惚きながら、藁に縋つて寝かけるお幸の横顔を見詰めてゐた。する〻自分の腹の事が再び氣になつて来た。何だか、體がだだ黒くなるほど不安である。

寝てる祖母やがかし〳〵言はせる。見ると、向うを向いて、手拭を被つた頭の先を用して、お幸の小さい子を抱いて寝てゐる祖母やが、囲炉の中で薪柱のあたりをかし〳〵搔いてゐる。寝入つてゐての仕業らしい。柱に括り附けた綱の先が囲炉の中に傳はつて這入つてゐるのは、例の痩せた猫が中に藁縋り込んでゐるのだと見えた。お岸は火穴に枯枝を加べ足した。猫に這入つてゐるやうに森閑とした夜の中に、たつた一匹死に後れてゐる、何とかいふ蟲が、壁の穀で朽ちた絲を引くやうに哀れに啼く。お岸は、もし本當に子が生れるのだつたらどうしたらいゝかと考へ惑はれた。

六

ろくに寝られなかつた物置の二人は、夜明け方、焚火を隔てて、灰暗い手負ひで話をした。そろ〳〵母の着物を返して貰かねば、何とか疑はれるに極つてゐる。併し母のを返したところで、着るものがなければ同じことである。お岸は一寸當惑して、最早大分明るくなつた入口のがた〳〵の戸をこじ開けた。外は雨もない雨が小糠のやうにしと〳〵と降んでゐる。ふと見ると、すぐそこの蔵の根に、お幸の着物が投げ捨てあつた。半分以上雨の中にさらされてびたびたに濡れてゐる。飛び出してそれを拾ひ上げたお岸は、思はぬ拾ひ物をしたやうに嬉しがつて濡れ滴る半襟や着物の裾を絞り上げた。さうして、火穴に火を十分に拵へて二人で乾かし始めた。火に炙るゝ湯気が立つて、井端からずんずん乾いて行くやうに見えたが、障つて見ると、まだじと〳〵してゐて容易には乾き切らない。お幸はいゝ加減でいゝといふやうに、そのまゝ帶はず着て了つた。

雨は終日降つたり霽つたりして、しめ〳〵しい日であつた。母親もお幸も蓑を着て、高へ馬鈴薯を掘りに出た。子供等は縁側に集つて、橋すの殻などを積んで、湯つぽさうに遊んだ。祖母やは薄ら寒いと言つて物置の戸を閉めて閉ぢ籠つてゐた。因習ゐる鶏も、軒下に黙んで動かなかつた。お岸は、お幸の小さい子を負つて、父親を手傳ひながら、馬鈴薯を俵に詰めた。昨夜藁の上に坐つたまゝ、被るものもなく居眠つたせゐか、惚にも氣分にも變に力がなくて濁つた幻の中にゐるやうな氣がした。

夕方近く、雨が小止みになつた時、お岸は表の石段の下にぼんやり立つて、子供等が、土の匂ひに濡つた麻を、油たといふことにして抄つて賣り買ひするのを見守つてゐると、お幸が母親の後に附いて歩つて来た。例の泣いた跡のやうな目をして側へ来て、

「何を考へ込んでゐるの。」と言ふやうに、立ち止つて、同じく子供等の賣り買ひを見守つた。お岸はさつきまで腹のこゝばかり考へ續けてゐたところであつた。お幸が昨夜話した腹の子の處置が、恰も自分のしたことのやうに浮んでゐた。

「お幸さ。」と、お岸は、母親が家へ這入るのを振り返つた後、お幸に、あの削つて飲んだあれは、いつでも取りに行けば直ぐ取つて來られるのかと、たいして深い考へがあるのでもなく訊いて見た。するとお幸は、お岸の顔を讀むやうに見入つて、

「それではやつぱりこゝがあれなのかい？……」と、腹の痛む手眞似をして心配さうな目附をした。そして、それならこれから行つて探して來よう、待つてゐろ、取つて來て見るからと、お岸がもうその氣でゐるやうに強りで合點して出かけて行つた。

お岸はそれを止めようともしなかつた。少なくとも、どんなものかを見たいやうな氣もした。お幸は、蓆の下に覗いた、泥の刺ね上つた足をびしより〳〵と小さく運んで、横手へ廻つて、家の裏の丘へ上る小路へ這入つて行つた。お岸は、何だか怖いやうな不安な心持を隠しながら、また雨になりさうな、灰色の低い雲の、足早い擦がりを見入つてゐた。そのどんよりした雲の下には、見る限り人一人ゐやしない。だだ黒く濕つた畠の中を、小川が黄色に淀んで、遥げ落ちるやうに流れてゐるばかりである。お岸には何だか自分一人が遠い海の向うの、知らぬ國の果へ漂泊うて來でもしたやうな夕方であつた。

お幸は、灯を點けねばならぬ頃になつても、ねつから歸つて來なかつた。お岸はみんなと一緒に、圍爐裏の側で小暗く飯を食ひながら、お幸がまた昨夜のやうな目に會つてゐるのではないだらうかと考へた。どうとかして當分お幸をこちらで寝せるやうにしなければ不安心だと思つた。

お岸は母に向いて、

「お前さ、お幸を夜あそこに置いては蠅が集るい。昨夜もお前さ。」と、誰だか、この邊の若い者がからかひに來て、戸をがた〳〵させたりするんだものと言ひかけると、母親は一口目に目色で遮つた。父親が箸を置いて片栗屋へ出かけると、母親ほ口を開いて、父やの前では、お幸の悪口を言つてゐるな、あんな狐根の耶げたやうな女を、苛い目に會せるのは不憫だからと、たしなめた。母親はお岸の心持を取り違へてゐるのであつた。

「お前、それくらゐのことはいゝがい。若いうちはちつとは内證でどうとかすらあに。あんねいに一心に仕事をするだもの。少しぐらゐのことは默つてゐてやらんちやあてがひがないもの。」

「それだらいゝがおつ母や、どこのものか知らんが、耶がつて小さくなつちよるものを捉まへて、呆れたことをするんだぞい。」

お岸は、お幸が節に血を出されたことから、着物を剝がされて雨の中へ投げとかれたことを話さなければならなくなつた。あの男とのこれまでのいきさつは隠して、唯相手がひょつくりやつて來て亂暴をしたのだといふ風に取り繕つて話した。

「はゝゝゝ。」と、母親は子供のたわいない惡戯を見るやうに笑つて、

「ぢや、そんだ傷かい、額のあれは。いちやつく間際に引つ掻かれたのだらい。若いうちはあんねえにして着物を脱がされたり、追ッかけられたりするのが面白いのよい。はゝゝ、つまらねい。あれやお前、お幸の方から好いちよる男、ぢやらうがに。」

「そんだらお幸やでも男を引つぱり込んだりするのかい。」と、お岸はわざとから言つて見た。

「それやお前、出かけても行かあに。」

「だれだのい、それぢや、その相手といふのは。」

「はゝゝ、そんねいにお前羨しけれや、お前も自分が力で拵へたらいゝがい。けど今度はもう騙け出さないことにしてくれいよ。本當に外聞が悪いけのい。」

「耶あなこと、まあこの母やは。……そんだが……」と、氣を替へて、

「お幸やは、そんなにして、しまひに子でも出來つれやどうするぢやらうぞのい。」と、知らぬ振りで訊いて見る。

「ふゝ。」

「でも困るぢやらうぞい。兄やでも訊いて見い。」

「どないにするちうてお前。」と、母やはそんなことはどうでもいゝといふやうに笑つて、口を歪めて、奥齒に挾がつたものを舌の先で掘り出さうとしてゐる。二人でこんなことを話しながら、カンテラへ灯を點けたりしてゐるところへ、お幸が泣いた目をして歸つて來て、柿えたやうに蓑を脱ぐ。お岸はやつぱりあの男にどうかされたのだらうと思つた。

「どうしたのい、お幸さ。」

「泣いちよるのかい？　これ〳〵――これに撲られたのかい、田がけに。」と母親は親指を見せた。お幸はうなづいた。

「どうしてそんなに父やはごき〳〵人を撲るのぢやらうかめ。不憫に。」と、お岸はそこいらを片づけながら言つた。

「今晩は餘りぐづ〳〵が長過ぎたからよ。ちよつと片附がめろくてゆつくりして來ると、ぼかんとやられるのぢやがい。何の罪もないものをあねいにするのが癖ぢやけのい。わしぢやつて お前、何年撲られて來たぢやらう。あの男ほお幸を見さいすれあ、お前、どうしてあゝだか、無上に細疵に障るのぢやがの――上れよ、お幸。早く足を洗つてのい。これだ〳〵。お前だけだざい、もう。憑も何も冷らあに。」と、母親は顔を蹙めて頭の吹き出ものをがし〳〵と掻いた。

お幸はやがて俯つ向いて飯を食つて、こそこそ物置へ這入つて了つた。

あとでお岸が行つて見ると、お幸は黄つ黑に油の浸みた、二つに折れた鬢櫛を、つぎ合はせたり離したりしながら、しよんぼりと火穴の側に坐つてゐた。火の上には缺けた皿を置にした、口の缺けた手の取れた古土瓶が傾いて乘つかつてゐる。お幸は、

「のい、これだぞい。」と言ふやうにそれを指した。お岸は棒の先でそれを摘み下して、カンテラの下で覗いて見た。中にはどす黑い汁が滯き立つてゐる。何を煎じたのであらう。搖ぶつて見ると、細かく刻んだ、木の根のやうなものがちら〳〵見える。

「もうこの儘飲みさいすればいゝのかい。」といへば、お幸はうなづいて、喰つ附け合はせて持つた掌を、遠くへ突き出して眺めてゐる。

お岸は試しに飲んで見ようかといふ氣になつた。飲んで何ともなかつたら體の加減でかうなつてゐるのであ。下りて了へば厄介が取れるから言ふ事はない。併し本當に子が出來てゐるのだつたら、ずゐぶん苦しい目を見るに違ひない。それにしても、一たいこれは何の根だらう。お幸に幾度訊いたつて、たゞ何か草の根で、土を掘つて取つたのだといふことだけしか分らない。お岸は黄つ嗜い中で物の見わけをしようとするやうな、じれつたい心持を見ながら、お幸を手傳つて芋俵を作つた。

お岸はやがて仕事を指くと、お幸の袖口を引

つ張つて、昨夜の男がまた出て來るかもしれないから、今晩は母屋へ行つて一緒に寢ようと勸めたけれど、お幸は手を振つて、

「いゝ〳〵。」と言ふ。內から桶を提つて汲くからいゝ。祖母やに抱かれてる子に夜中に乳を飲ませなければならないからと言つて來なかつた。

母屋へ歸つて見ると、もう寢てるだらうと思つた母親は、子供等が頭を並べて寢入つてゐる寢床のそばに坐つて、子守に出るお辰の蟲齒が痛むのを介抱してゐた。

「もう障らない。寢れば治るけのい。口を拭けい。さ。」と言ひながら、蒲團の裾を叩いてゐる。矢の妹と作一とは目を覺ましてもぢ〳〵してゐた。作一がぱく〳〵口を動かして、小さい聲で口の中で歌つてゐる唄は、お岸が子供の時に謠つたのを、町で教へてやつた、「雀や雀」といふ唄らしかつた。

母親はカンテラを吹き消して、お岸の側へ這入つた。しばらくしてお岸が寢入りかけると、母親が不意に、

「お幸かい？　お幸や。」と大きな聲を出すので目がさめた。暗がりへのそ〳〵這入つて來た足音に、何をかごとつと、お岸の枕元へ置いて、お岸の肩をちよいと突つ突いて下りて行つた。

「お幸ぢやらうがい？」と母親は言つた。

「お幸さだよ。」

「何しに來たらう。びつくりするぢに。」

「何、わしが枠でも返しに來たんぢやろ。父やに捉られて、柄が二つになつたんぢやがい。お幸の柄が。」

から言ひ紛らしながら、お岸は漸と、それと分つてゐる枕元のものに觸つて見た。さつき物置へ忘れて來た、例の土瓶である。

母親は再び寢入つた。

お岸はどうしようかと考へた。

七

お岸は言ふに言はれない、ただ黑い心持で目を開いた。みんなはまだ寢入つてゐた。戶の隙間が薄白く白みかけてゐる時刻であつた。お岸は昨夜たうとあれを飲んだのであつた。そして何だか自分が今にも黑い血でも吐き上げるのを待ち受けるやうな、[illegible]な心持をして眠りに這入つた。けれども體にはまだ何こそ異狀がない。もつとたつてからだらうか。あれだけではどうもならないのではあるまいか。土瓶にまだ半分ばかり殘つてゐる。ついでにすつかり飲んで了はなければ駄目なのかもわからない。

こんなことを呆んやり考へてゐたうちに、お岸は全で自分のすることに氣の附かないもののやうに、いつしかついと土瓶を取つて、口を吸うても出なくなるまで飲み乾した。あとがいつまでも苦い澁い。そして變に氣が惡くて非常に心持が惡い。こんなに澤山飲んでもいゝものだらうか。併しもうどうなつたつて飲んだものは仕方がない。なるやうになるのを待つより外はない。どうせどうにかなるだらう。

お岸は追ひ詰められたやうに蒲團を被つて、出來るだけの他の事を考へながら再び目を閉ぢた。一同が床を出る時分には、お岸は平生の朝のやうに、何事をも忘れて、生欠伸を噛みながら、今日は賣り渡して了ふといふ馬鈴薯の値段を、母親と勘定したりしながら寢床を出た。

「飲んだかい。」と、お幸は顏を合はすと直ぐ訊いた。お岸は、何だか氣味のわるい心持を、自分の胸に欺くやうに、眼もとで笑つて點頭いた。

朝飯が濟んでから一時間もすると、お幸がさつき起き拔けに呼びに行つた馬鈴薯の仲買人が二人と、その手下の男が三人とで、どや〳〵出かけて來た。父親も夜番から歸つて來て、今

た。小さい土間へこれだけが立ち詰めて、俵の口を開けて中を調べたり轉がしたりして、一俵づつ秤にかけて、附木へ目方を書き入れながら、がや〳〵と取り込んでゐる中に、母親とお幸とは、まだ詰め餘してゐるのをせつせと俵に入れた。

さつきから雨に變りかけてゐた空から、雨がぱら〳〵と降り出した。しばらくすると他の仲買仲間が二三人、ぼう〳〵言ひながら雨の中を驅け拔けて、雨宿りに走り込んで來た。それは矢張り組を組んで買ひに來た、他の村の仲買であつた。めい〳〵に草履や下駄を脫いで手に提げて、緣側へ上つて小止みになるのを待つた。母親は他の方がすむと、漬物を切つて、その雨宿りの客に茶を出したりしながら、せか〳〵と戶口を出たり入りした。そのうちに土間の中では下見の濟んだのへ値段を附け始めた。

「あい、やあ〳〵〳〵、こいつは、大分小さい奴ばかりが交つた分で、えゝと、こいつうは。」と、大きな聲に節を附けて煎り附けるやうに競り出した。

「それぢやあ酷いや。いけねいよ。もつと張つた。もう三錢張つた。」と、お岸の父親は汗を滴らして爭つた。母親も口を添へて覗んだり拗ねたりした。さうしてるところへ、さつきから疊の上で縺れ廻つて騷いでゐた子供の中で、作一が俄かにぎやん〳〵泣き出した。逆せ上るやうに聲を絞つて泣き立てる。母親は矢つぱり構はず飛び廻る他の二人を叱りつけながら、それどころではないのでいら〳〵して、甲高くお岸を呼び探した。つい今しがたまで母親を手傳つて、俵の口を締めてゐたお岸は、ちよいとどこかへ行つたと見えて姿が見えなかつた。

「八釜しいがい。お新やい。何で泣かすんぢやい。見てやれよ、千吉。——お岸は何をしてよるんぢややらい。こんな取込んでる最中にどこへ行つたらい。お岸〳〵。」と、油紙に火が附いたやうに怒鳴り散らしながら呼び探した。

「おゝい、八釜しい。お岸はどうでもいゝがい。——否い、それではいけねいよ久さん、それぢや前の輕い分と一錢二厘しきや違はない算用ぢやがい。——おいお簾、燐寸を貸せちうてるに。煙草の火を出さんかい、そこに休んでる衆等に。」と、父親はがみ〳〵言ひながら鉢卷を締め直した。と、裏口からお岸が蒼ざめた顏を顰めて、自分自身を失つた女のやうに、のそりのそりと草履を引き摺つて出て來た。お岸は母親が燐寸を取つてくれと言つてゐるのに耳も貸さずに、人々の間をゆら〳〵とくゞり拔けて、物置の中へ這入つて行つた。

そこには祖母やが、地ひたに立つた、小さい子供の腕をとらまへて、戶口の横にきよろついてゐた。お岸は小猫が小さくこゞまつてゐるのを押し除けて、どす暗い床の上へ俯つ向きに倒れかゝつた。あちらの方が混亂してゐる間に、お岸は二三度續いて裏口へ行つたのであつた。血が多量に下りた。何度も下りた。そのたびに石の裂け目かなんぞに引つかけられて、力任せに逆に扱き拔かれたかと思ふほど苦しかつた。お岸は床の上に倒れると同時に目先が見えなくなつて了つた。雨は砂利の層を落し附けるやうな勢でごう〳〵と小屋を叩きつぶしでもするやうに降り出した。お岸は頸の邊に縋り附く小猫を押し退けた。何だか頭がぐわん〳〵割れるやうで、耳が鳴り、目が痺れた。そして、ちきり〳〵と下腹が痛み出した。苦しい、苦しい。捩ぢ切られるやうに苦しい。猫がまた摺り附く。除ける。また來る。お岸はしまひにぐつと猫の頸つ玉を無我無中で引つ摑んだ。お幸には何事もなく下りたといふのに、どうしてわしだけがこんな苛い目を見るのだらう。このまゝ眞つ黑になつて息が止つて了ふのではあるまい

か。お幸はどうしてゐる。わしのこのざまに氣が附かなかつたらうか。息が苦しい。水が欲しい。水が飲みたい。——

かう思ひつゝ氣が遠くなつて行つたお岸は、ふと飛び出すやうな笑聲が、母屋の入り亂れた人々の間からどつと湧き上つたのに氣が附いて目を開けた。見ると自分は猫をぐんと摑んでゐる。

お岸は、「おや。」と怪いて、あわてて横へ投げつけた。やがて氣がつくと、猫は土間に倒れてゐた。針に倒れて、足をぴく〳〵と引き附けながら、蠕り動いてもがいてゐる。お岸は薄暗くなつて行く目にそれを見て、猫が自分を恨む恨みの精が、だだ黒い煙のやうに自分を取りまきでもしたやうな、氣味の惡い心持に押へられながら、茫として何ごとも分らずくなつて了つた。

母屋に集つた仲買等は、雨が小降りになるのを待つて、伴れ立つて歸つて行つた。土間には二十何依の俵が賣り渡し濟になつて、一々封の紙が結びつけられてゐた。お幸はこそり〳〵それを片隅に積み片づけた。母親は何事もほつといて、仲買から受取つた金を剛煙裏の側に并べて、札は札、銀貨は銀貨と別々に幾度も數へた上、一緒にしてまた數へ直した。父親はそれを横目で見ながら、吸ひ盡して煙も出ぬ煙管をいつまでも銜へて煙のはたの帶の上に寢轉がつてゐた。

子供等は疊の上に集つて、反古紙を切れ〳〵に切り崩んで遊んでゐた。と、お幸の男の子が外へ小便をしに戸口へ下りて、小雨の中へぱり〳〵り飛ばしながら、

「あゝ猫が死んでるい。猫が死んでるい。」といふ。他の子供も早速飛び出して、

「やあ死んだ〳〵。——祖母やの猫が死んだ。」と一緒になつてわい〳〵いふ。お岸の作一までが、よく廻らぬ舌をして、

「死んだい〳〵。」といふ。母親は疊を剝つて金を納めると、

「どこによう。祖母やはまたあの猫ら飼うちよつたのかい。どうしてまあ。あの猫も、よくのそのそ何度も歸つたものぢやらう。」と、呟きながら下りて行つた。祖母やの小汚い小猫が、兩足を揃へて、びしよ濡れになつて物置の外に横はつてゐるのであつた。雨の足の叩き飛ばす泥を被つて、白と黑との斑毛が濡れて片寄つた間から、肋骨の浮き上つたぼこ〳〵の腹を暴して棒がつてゐる。子供等は雨の中へ飛び出して

「死んだ〳〵。」

「あゝ猫が死んでるい。猫が死んでるい。」といふ。他の子供も早速飛び出して、

「やあ死んだ〳〵。——祖母やの猫が死んだ。」

と一緒になつてわい〳〵いふ。お岸の作一までが、よく廻らぬ舌をして、

「死んだい〳〵。」といふ。母親は疊を剝つて金を納めると、

「どこによう。祖母やはまたあの猫ら飼うちよつたのかい。どうしてまあ。あの猫も、よくのそのそ何度も歸つたものぢやらう。」と、呟きながら下りて行つた。祖母やの小汚い小猫が、兩足を揃へて、びしよ濡れになつて物置の外に横はつてゐるのであつた。雨の足の叩き飛ばす泥を被つて、白と黑との斑毛が濡れて片寄つた間から、肋骨の浮き上つたぼこ〳〵の腹を暴して棒がつてゐる。子供等は雨の中へ飛び出して

「おゝい何するぢやい。這入れよ馬鹿。ほつとけい。さうしとけい。障ると恨まれるぞい。お前が殺したのぢやと間違へてお前を恨むがい。」と、母親は眞面目になつて警告した。子供は薄氣味が惡くなつたやうな顏をして、

「濡ぢやらう？」と、頭の雨を拂ひながら母親の側へ集づた。

「何が濡ぞい。お前を恨むぞい、千吉。作一も今日のやうに泣くと猫が化けて出るぞい。」

かう言つて調弄ひながら立つてゐると、祖母やがぬつと物置の戸口から顏を出して、

「お兼や〳〵。」と呼び立てた。

「來て見いよ、お兼や。力造や。」と言ひながら、うみ〳〵してゐる。

この日は舊の十一月十七日であつた。お岸は土間に倒れて冷たくなつてゐた。

（明治四十三年一月）

烏

一

「ぢやあ已出るぜよ、おまきさ。——う？　何に、寢ちよれよい、ぢつと。もう一んは二日はぢつとしちよつて見い。と、六は力を附けるやうにかう言ひつゝ手拭を被つて、戸口に下げた席を出た。

どんよりと曇つた切れるやうに寒い朝である。

無果花の木の側へ來て、二本指でちゆん〳〵と水鼻汁をかみ飛ばして灰小屋の角へ出ると、裏の方にでも逃げ隱れてゐるのだらうと思つた烏のさくは、とんなところへ來て、追ひ出されでもしたやうに、泣き汚れた目をして、小屋の壁の、食み出した寸莎を爪で搔りながら、裸足の儘で、薄ら寒く拗ね廻つて立つてゐる。

「何をしちよれやい、さくい。はあ可えけ、歸れよい、彼方へ。諦ぢやけよ。」と六は歩き〳〵振り返つて、袖附の綻び目から垢まぶれの臂の覗いたのに目を附けながらかう言つて、竹藪の間の小路の、下駄の畝の跡などのぐざ〳〵捌れたなりに凍て附いた赤土を、浮足に踏んで土手へ出た。これまで鏈はれて行つた日傳とちがつて、出掃ふ時間をきち〳〵言はれるので氣が急く六は、ぼろ〳〵の半纏の下に括り下げた神當包みを上から押へて、だら〳〵下りの下りを桑畑の間へ下りかけると、

「父やあ〳〵。」と、十四になる白痴の由が、土手の上まで追つ駈けて來て、大水でも出て來たやうに呼びかける。

「何だやい。」と、またかいと思ひつゝ六は立ち止つた。

「何だい、由。姉やにして貰へよ。可え子ぢやけ。」

「うゝうん。」と、いつもの癖で、何でも父がゐれば父にさせなければ間かないのだか仕方がない。

「それぢやあ來いよ、こゝへ。何だい、毎日々々出がけにやあ何かさせるぞな。——お前、帶をどうしたい。落したんぢやないけい、途中へ。こうれ、そ、こゝを結ぶものわよ。」と、ドリて來た子の、胴も腹もばあ〳〵出して、甘えたやうに息を勢ませてゐる着物の前を掻き合せて、

「かうしちよれい、こゝを。押へちよれ。さ。何かい、その絲は。また鳥かい？　もうはあ、さう捕れやせんぞい。そんねいに何度も捕れるもんか。針はどうした。ふ、この野郎、落したのかい。絲ばかりぢや括られやせんがい。探して見い。まつとずん〳〵向うへ行つて見い。まつとまつと。」

うみ〳〵してる間を見て、六はいゝ加減に放つといてせつせと行つて了ふ。今度この地方へ、久しく噂の儘になつてゐた輕便鐵道がかゝる事になつて、一里半ばかり先の村を通る線路の工事へ、六たちは土を搗ぎに出て行くのである。

九月の水害ですつかり水に漬つて了つたこのあたりの村のものたちは、何にも收穫れなくなつた跡の生活を立てるために、出られるだけのものは大抵かういふ日傳とりに鏈はれて出るのであつた。

うろ〳〵と針を探しつゝ土手へ引き返して行く由は、さうしてゐる間に、もう父はずん〳〵縣道へ向けて遠ざかつて行くのにも心附かない

で、だ　りとした、脇から泥を流らしながら、帯がたらはどけで、土の上をぎろ〳〵見つゝ、際まで上がって来ると、

「かあ、かあ〻。」と、ほうれ、――自分の目に附け狙ふ烏が啼いた。山口は口をあんぐりと開けて、ぎろ〳〵と眼の上を見廻した。

「かあ。」と、度はかゝれたやうな異様なのの啼声が、上の方で聞こえた。山口はもうなぜか忘れてしまつて、上を見ると、一羽の烏が、何か盗つて、ずつと向こうの岸に飛び移り、草の見えぬ隠れして横ついて行く、嘴ら、なぶ筋の尾根の上を見探つたが、烏はそんなところからは啼くのではない。山口の欲しい〳〵その黒い烏は、波の間を、ぶんぶまゝ水に附いたやうな、飯くく押し下つた岩に突き嘴がつてゐる。竹竿の先に高く棲つてゐるのであつた。

上下になつて二羽棲つてゐる。上の一羽が何を食つて来た、嘴を、と〳〵り〳〵と、跳まくたは枝に絡つてゐる。一羽はもう飛び立たうと羽をくつてゐるやうに、尾をぴく〳〵させながら、見廻り、水面の跡をそのまゝに、ぎれて来る前つた下の、かち〳〵の水面を見廻し、してゐる。

山口はどこにゐる烏とも見分けがつかなくなりに、引き附つて来た竹竿を、長い手元で泉の下を、つかゝり〳〵、手繰られて寄る蛙には、ちらな水の水の粉が、喰つ附いて来る。烏はまたかあ〳〵と、遠い日の上からの前に、嘴を擦れた伸を回を探し、仔やうに、代り〳〵、鋭く、相れたやうな嘴を立てた。

二

「もう何も聞こえぬ、淡で、言ふ事を聞いて、早はう食べて了つておくれ。いつまでも片附かんけ。」

十日ばかり極に、四月になる六の子を抱し て、まだ幾のしやんとせぬ若ぎめたおまきは、戸口の敷居の外ぎにぐつり〳〵して立つてゐる。湖が、ひつゝ、絃に冷厳をついだ顔に、修子の内からから言ふ、嘴を探したやうにきゝくれた繋の毛を、うるそく、嘴を上げつゝ、ちやんと待つてゐるのだけれど、湖が出したら嘴で、言くば言ふだけひねくれるのだから切りがない。

「おさくさ。」

もうこの方お知らんぜ。己の方だけ食べて片附けら。いつまでもぐつり〳〵面倒臭い、本家に、と、おまきはもうくさ〳〵して、力の抜けたやうな

手に土瓶をはづして、湯をかけては、茶碗で、犬が食つたあとの丼の、茶の滴が、ぐく、流し注ぎて、曲に流みつく冷たい手桶の滴を、みながら、一人でさつさと先に食べ出した。

何だといふいけすかない、いれくれた回答なんだらう。何か言くば直ぐあゝして、知れた迷んで、わざと己を困らせるんだ。お前の心は分つとら。己のがからしで他の越から過へ入つて来てるものだと思つて、成の血にして、人が何でも喰くとれやう可き筆になつて附け上がるんだ。そんれいに、己だだつて何にもしずにたゝで食はせてもらつてるが、外のものでもないちやないけえ。ばか〳〵しい。己のが一寸した事を言やあちきに相ばつて、犬が鳴がるのを待つとつては、何だのかんだのと己の方が事をあり もせん文句を言けてつてこつて言ひ出すんだ。話にならない事にてそ〳〵泣いたりして、何にもかんぜのない小回廻のうちよのやうに、頭を絡つてゐるけれど、なにになれや投げ出して、男を喰くつて附きに出て行きやがるんだ。己あ知つちよるえ、ちやんと、何にも知らんかと思つてしらばつくれちよるから小癪つたらしい。己あもうもうお前をあしらふばかりにでもどれだけ血が減ると思やや。無駄目をくさ〳〵本家に。――

おまきはもかく〳〵した泣きつぶつ食つた

（74）

帯がたらはどけで、土の上をぎろ〳〵見つゝ、際まで上がって来ると、

「かあ、かあ〻。」と、ほうれ、――自分の目に附け狙ふ烏が啼いた。山口は口をあんぐりと開けて、ぎろ〳〵と眼の上を見廻した。

「かあ。」と、度はかゝれたやうな異様なのの啼声が、上の方で聞こえた。山口はもうなぜか忘れてしまつて、上を見ると、一羽の烏が、何か盗つて、ずつと向こうの岸に飛び移り、草の見えぬ隠れして横ついて行く、嘴ら、なぶ筋の尾根の上を見探つたが、烏はそんなところからは啼くのではない。山口の欲しい〳〵その黒い烏は、波の間を、ぶんぶまゝ水に附いたやうな、飯くく押し下つた岩に突き嘴がつてゐる。竹竿の先に高く棲つてゐるのであつた。

上下になつて二羽棲つてゐる。上の一羽が何を食つて来た、嘴を、と〳〵り〳〵と、跳まくたは枝に絡つてゐる。一羽はもう飛び立たうと羽をくつてゐるやうに、尾をぴく〳〵させながら、見廻り、水面の跡をそのまゝに、ぎれて来る前つた下の、かち〳〵の水面を見廻し、してゐる。

山口はどこにゐる烏とも見分けがつかなくなりに、引き附つて来た竹竿を、長い手元で泉の下を、つかゝり〳〵、手繰られて寄る蛙には、ちらな水の水の粉が、喰つ附いて来る。烏はまたかあ〳〵と、遠い日の上からの前に、嘴を擦れた伸を回を探し、仔やうに、代り〳〵、鋭く、相れたやうな嘴を立てた。

二

「もう何も聞こえぬ、淡で、言ふ事を聞いて、早はう食べて了つておくれ。いつまでも片附かんけ。」

十日ばかり極に、四月になる六の子を抱して、まだ幾のしやんとせぬ若ぎめたおまきは、戸口の敷居の外ぎにぐつり〳〵して立つてゐる。湖が、ひつゝ、絃に冷厳をついだ顔に、修子の内からから言ふ、嘴を探したやうにきゝくれた繋の毛を、うるそく、嘴を上げつゝ、ちやんと待つてゐるのだけれど、湖が出したら嘴で、言くば言ふだけひねくれるのだから切りがない。

「おさくさ。」

もうこの方お知らんぜ。己の方だけ食べて片附けら。いつまでもぐつり〳〵面倒臭い、本家に、と、おまきはもうくさ〳〵して、力の抜けたやうな

手に土瓶をはづして、湯をかけては、茶碗で、犬が食つたあとの丼の、茶の滴が、ぐく、流し注ぎて、曲に流みつく冷たい手桶の滴を、みながら、一人でさつさと先に食べ出した。

何だといふいけすかない、いれくれた回答なんだらう。何か言くば直ぐあゝして、知れた迷んで、わざと己を困らせるんだ。お前の心は分つとら。己のがからしで他の越から過へ入つて来てるものだと思つて、成の血にして、人が何でも喰くとれやう可き筆になつて附け上がるんだ。そんれいに、己だだつて何にもしずにたゝで食はせてもらつてるが、外のものでもないちやないけえ。ばか〳〵しい。己のが一寸した事を言やあちきに相ばつて、犬が鳴がるのを待つとつては、何だのかんだのと己の方が事をあり もせん文句を言けてつてこつて言ひ出すんだ。話にならない事にてそ〳〵泣いたりして、何にもかんぜのない小回廻のうちよのやうに、頭を絡つてゐるけれど、なにになれや投げ出して、男を喰くつて附きに出て行きやがるんだ。己あ知つちよるえ、ちやんと、何にも知らんかと思つてしらばつくれちよるから小癪つたらしい。己あもうもうお前をあしらふばかりにでもどれだけ血が減ると思やや。無駄目をくさ〳〵本家に。――

おまきはもかく〳〵した泣きつぶつ食つた

（75）

（　）

ぬ、お前の方の本家はうるさくなったら、何にも知らんかと思つて、成の血にして、人が何でも喰くとれやう可き筆になつて附け上がるんだ。そんれいに、己だだつて何にもしずにたゝで食はせてもらつてるが、外のものでもないちやないけえ。ばか〳〵しい。己のが一寸した事を言やあちきに相ばつて、犬が鳴がるのを待つとつては、何だのかんだのと己の方が事をあり もせん文句を言けてつてこつて言ひ出すんだ。話にならない事にてそ〳〵泣いたりして、何にもかんぜのない小回廻のうちよのやうに、頭を絡つてゐるけれど、なにになれや投げ出して、男を喰くつて附きに出て行きやがるんだ。己あ知つちよるえ、ちやんと、何にも知らんかと思つてしらばつくれちよるから小癪つたらしい。己あもうもうお前をあしらふばかりにでもどれだけ血が減ると思やや。無駄目をくさ〳〵本家に。――

おまきはもかく〳〵した泣きつぶつ食つた

（　）

（75）

いにたと黙ってつん〳〵してゐちや分らんぢやないか。」

「それあ、お前がありもせん事を拵へて、無闇な事を父やに告げ口をするけいよ。」と、おさくはばら〳〵落ちる涙を嚙んだ。

「う、うらがいつ爲造と喰つ附いたい。見たかい。いつ見たかい、己が喰つ附いちよるところをいつ見たい。」

「あれ、あねいな事を言ふぜよ。己がそねいな事を父やに言ひつけた言のかい、お前さ。何をいふだよ。」

「白を切れい。聞いちよるけ、己あ、ちやんと。今朝がた暗い時に、寐間の中で父やに執つこい程言うたぢやないかい。」

「それはよう……ほんぢやあ言ふけど、それ言ふのはお前が父やの留守には仕事もしずに、毎日ぶら〳〵怠惰けてばかりゐるけ、どうも惡い蟲がついて誘き出すんぢやあるまいか言て、この邊の若いものの癖の惡い事を話しちよつたのぜい。」と言ひかけるのを、おさくは押し除けて、

「讒ばつか言へい。いつ己が爲造と喰つ附いた證據を見たい。いつ見たい。」と向きになつて來る。

「ふん。そねいに言やあ言ふが、お前さ、そねいな大きな口が利けるものかよ。默つちよる方が得ぢやらぜい。」

「何がい。」と、おさくはづう〳〵しく白ばつくれる。

「己あ知つちよるぞい。言はうかそんぞやあ。昨夜お前さは己が知らぬかと思つて、こつそり灰小屋へはひり込んで何をしたい。――ほれ立つがい。聞けよ、おさくさ。己あ、そねいな事は何にも父やに言やあ〻ざつたぜ。お前が一人で餘計な氣を曲らして、つけ〳〵人に喰つてかかるだから可笑しいぢやないか。」

「知らんわい。」と、眞赤な顏になつたおさくは、どぎまぎして土間へ飛び下りるが早いか、びしんと、けたゝましく障子を撲ち閉めて、草履の上まで裸足で渡りつゝ、

「へん、お前だつてこなひだから何をすれあ。」と、わざと大きな聲でいふ。

「己だつて見ちよるぜ。晝の日中に男を引つ張り込んでべたつかあ。間男ぢやらうがい、お前のは。」

「こうれ、何を言ふだ。人聞きの惡い事をばあばあと。」

「ふん。言つたらどうしたい。」と、それなりふいと戸口を出る。

「おさくさ、何處へ行きあ、おさくさ。」と、何をし出すか薄氣味が惡くなつて、おまきはどきどきしながら、立つて緣側の障子を開けた。

「おさくさ、減多な事を人に言ひ布れでもすると聞かんぜ己あ。」と追つ被せるやうに言ひ押へて見たが、おさくは見向きもしないで、踵の赤切れから血が流れ出してゐるのも構はないで、つん〳〵して土手の方へ駈け出して行くのであつた。

と、すぐ二三間前の棕櫚の木を心にして積み上げた置藁の向う側に、荷馬の足音がして、だれかが通りかゝる。おまきはかうした、惡い事をあばきまくられて周章へた心持を、通る人に見咎められでもするやうに、急いで竊と障子を閉め切つた。

「おい〳〵おさくさ、おさくさよう。」と呼びかけながら、藁の下の矢平が、馬を引いて出て來た。

「おさくさ。――あゝれ、もう行つた。ほ、落しちよいて知らねいだ。」

おまきは障子の隙間から覗いて見ると、どてちをだらりと着て、齒の曲つた足駄をはいた矢平は、灰小屋の手前で、何か下に落ちてゐたものを拾ひ上げて、ことり〳〵上へ行く。櫛らしい。おさくの插してゐる半分に割れた櫛であらう。人のものを放つとけい。餘計なお世話だい、目下り爺。あんなに頭の天井のくるりと剝げた、いゝ加減によぼ〳〵の癖に人の女房をつらまへて口説いたり何かしやがる。づう〳〵しい。きやあつ言て、わざと大聲を張り立てて外へ逃げ出してやつた時の泡を食やあがつた事い。隨分いゝ氣味だつた、あのときは、と、いつかの事を考へ返しつゝ、おまきは帶の結んだのを締め直したが、

「俳しあゝした腹の惡い執念深い奴だから、うつかりしてゐると何といふ事で仇をし返されるかも分りはしない。」

かう思ふと、おまきは氣がついたやうに、おさくのあゝして駈け出した儘なのが餘計に心配になつた。矢平がそこらで呼び止めて、どうせあの櫛を渡すだらうけれど、あいつが女子だとさへ見ればいゝ加減な人よがらせばかり言つて乘せ上げる奴だから、おさく奴がいつ口を滑らして、腹立ちまぎれにさつきのやうな事を矢平に喋り明けてしまひはすまいかと氣にかゝる。

おまきはもぢ〳〵して、だだ黑く當惑しつゝ、何をするでもなくぽつんと障子の側へ坐つて考へた。

「おさくが言へば言ふで仕方がない、何の。さうなれあ、逃げて行かあ。六が聞いてつべこべ言ひ出すより先に、こつちは信吉の言ふやうにして伴つて遁げて出らあ。知れたつて何だらう。もと〳〵六と夫婦の約束をした譯でもないのだ。己がだれと喰つ附いて出て行かうと己の自由だもの。」

おまきはかう考へ返して、覆り寂へた心の中に、平生の自分にも似合はぬやけ度胸を据ゑた。

四

やがておまきはぼろけた着物の上に汚れた上つ被りを着て、細切を帶にして、いつもの仕事にかゝつた。

かうした百姓仕事のない時分には、六が外で稼ぐ留守に、おきくと二人で炭團を拵へる手間仕事をするのである。縣道ばたの孫右衛門のところから、目方の極つた新炭を、俵で借りて來て、夜なべに石臼で粉にして、拵へ溜めては持つて行くめである。

おまきは、土間を暗くした戸口の風除の蓆を半分捲き上げて、土間の眞ん中へ二つの桶を持ち出して、出來たのを干し並べる箱を積み重ねると、鍋に一杯煮てある布海苔を四桶にうつして、湯を注して加減をし、炭の桶から粉を掬ひ入れては撫して廻して揑ねた。

今日は手傳ふおさくが出て了つたのだから、支度が出來上るまでは一人であれこれ動いてゐて、物の考へ事も忘れてゐたけれど、かうして覆を束ね煎いた上に坐つて、ぢつとした仕事にかゝると、昨夜から逐つてゐる信への返事を考へなければならなかつた。信は今日もう一度來て、決着を聞くと言つた。昨日のやうに午時分にやつて來るとすればもうたんと間もない。どういふ事にしたものだらうかと思案の間に、おまきは手の平で炭を丸めては箱に並べて行つた。

何にせよ、かうして二度と會ひさへしたければ、もうこちらもあれぎり忘れて了つてゐたのだのに、それがひよつくり尋ぬ探して來たといふのも、やつぱり切つても切れぬ聖がりが、まだあれから續いて隱れてゐたといふものだらうかと思ひつゝ、おまきは二人が知り合つたはじめからを考へた。

信はおまきの先の男だつたのである。こゝから七八里ある村に生れて、早く雙親に死なれて了つたおまきは、小さい時から、同じ村の物持

の百姓の家に子守にして雇つてもらつて、二十六の年になるまで、長い間その家に使はれて、百姓仕事をしてゐたのだつたが、一寸した事から、間近い宿場から洋燈を恵いで廻つて來る、自分よりは五つも年下の信と出來合つて、前後の考へもなしに、たうとう使はれてゐる家から默つて逃げて出て、信のところにはひり込んだのであつた。さうして妻はその村の煉瓦を拾へるところへ貰取りに通うて、信と、信のおつ母と三人で世帶を持つてゐたのだけれど、そのおつ母といふのが性の惡いがり〳〵の女で、まだ色男も持つてゐるくらゐの年輩だつたが、それが少しばかり一緒にくらす内に、間もなくおまきを惡み出して、向ひして歩く先々で泊る信の歸らない夜などには、傍のやうにこじつて責め拔くのであつた。根は信と仲のいゝのが癪にさはるからもしかつた。

それは後から考へて見ると、よくまあ、あんなに非度い事ばかりされながら、ものの五月もあんなところに我慢してゐられた事だつたと、自分ながら怪かるくらゐであつた。返事の仕方がつん〳〵してゐるとか何とか言つて、頭から、夜の冷水を浴つかけられたなどは何でもない事である。あの蹴し男が來る夜は、家の雨かは降つてゐても外へ突き出されて、裏手の牛小屋で凍えながら立ち籠けの夜を明かした事もあつた。それを一々信に言ひでもすれば、後の仕返しが怖ろしいから、どんな日に會つても默つて我慢して、逃げて歸らうにも歸る處がないばつかりに、泣き〳〵苦しい毎日を見てゐたが、しまひに、或夜、庖丁を足へ投げつけられて倒れてゐるところへ、信がついと歸つて來たので、信とおつ母との大喧嘩になつて、おつ母が惡态のところへ癇ふと言つて跣足でかけ出して行つた後で、信はおまきをつれて、要るだけのものを引っ括つて家を出て、夜路を四里の土を歩いて死んだ父やの方の縁きの小さい農家へおまきを預つて貰つて、自分は商賣の合間々々に來て泊ることにしてゐた。

おまきはかうしてまた百姓に歸つて、一人前の食料だけはその家へ働きで償つてゐたが、その内にどうした事か、ふいと信が一寸もやつて來なくなつて、待つても〳〵一言のたよりさへもしない。そんなにして心配な三十日四十日といふものが經つた。それで、こつそり容子を探らつて貰ふと、信はその二月も三月も前から村へは一寸も歸つては來ないのださうで、何でもどこかの村に女がゐて、そこにずつと引つかゝつてゐるといふ事なので驚いた。段々聞いて見ると、それはもう信が以前から夫婦のやうにして圍囲してゐた女だといふ事であつた。けれどもおまきは全でそれを信ずる事が出來なかつた。

おまきの腹にはいつしか三月の子が止つてゐた。さうして徒に待ちに待つ日が集つて腹は五月にもなつた。おまきはたうと欺されたのだと知つて後悔したがもう仕方がない。人に行つて見てもらふと、信はこの時はもうどこかへ妻をかくしてしまつて、例の女のところにもゐなかつた。それで腹の片附は所帶になつてゐる家のかみさんの指圖で、八月になるのを待つて、新鍾で突いで、死んだ子を生み落した。

おまきはそれからかれこれ一年もその家でぐづぐづしてゐて、そこの家の世話で、このもう一つ手前の村の、或馬車引の嬶になつて、生れたところから段々と遠くへ移つて來たのであつた。

馬車引と夫婦になつたのが二十九の年である。さうして三年足もずの間何といふ事もなく來たのだつたが、その男がどうした邀に附かれたのか、ひよいと出先で物を盜んで、それなり懲役に投げ込まれて、一月とたゝぬ内に、平

の中でチブスにかゝつて死んで了つた。

六はこの馬車引の兄である。懲るところのなくなつたおまきは、どうにかこの先を極めるまで、當分といふので、六の家へ引き取つてもらつたのであつた。六は丁度一年ばかり前に嚊に亡くなられて、二人の子をつれて不自由な日を送つてゐたので、女の手がはひつた事は、六に取つては切つて嵌めたやうに仕合せであつた。その内にまだ三十二にしかならないおまきは、もう五十に近い六とずる〳〵べつたりに夫婦のやうになつてしまつて、こなひだの、九月の洪水にも潰つた。さうして十日ばかり前には子供を墮胎した。子なぜで膨れてゐては働けないからであつた。

おまきはこゝへ移つて來てからまだ七箇月ばかりにしかならない。六もおさくも、矢つぱり來た時の儘で、おまきさ〳〵と言つてくらしてゐるのである。たゞ由だけは母や〳〵と言つてゐる。由のいふ事はもとより言葉にもなつてゐないけれど、おまきには母や〳〵と言つてる積りらしく聞かれるのであつた。

五

かうしておまきは、もうこれなり行きがかりで、人のものになつて了つた積りで、その日〳〵を送つてゐたところへ、この五日ばかり前の夕方に、思ひがけない昔の信が、自分を尋ね當てて、ひよつくりと出て來たのだから驚いた。

信は自分があゝして放つといて了つてからの、その後のおまきの事は何もかもすつかり聞いて來たのであつた。お前の前へは死んでも出て來られる譯ぢやないけれど、何と言はれても構はないから、どうかして一日會つて見たい氣になつて、わざ〳〵探して來たのだと、信はもぢもぢして立つてゐた。そんなお前見たいな、人間でもない男に何も用事はない。もう何を言つたつて相手になるものかと、おまきは心を締めて、信のいふのでは、何も隱さず話すと、わしにはお前と出來る前に一人腹々に圍囲してゐた女があつて、しつつこく附け廻されるので困つてゐた。それはわしがつい欺されて引つかゝつた、村茶屋にゐたあばずれ女で、そいつがわしにお前といふものが出來たのを聞き知つて、わしの出先から出先へ血眼になつて附け廻つて來て、いろんな外聞の惡い事ばかりするのでわしも困つてしまひ、仕方なしに一月二月とお前の方へは苦しい不義理をしてゐた。その間僅けるだけのものは皆その女に搾られた。それといふのがこの女にはわしの内證事を探られてゐて、ぐづ〳〵言へば掘出しにして出すと威かされるのだからどうする事も出來なかつた。何に、今から言へば馬鹿々々しい話だけれど、その時分は、お前も知つてるやうに、わしも二十を一つ二つ出たばかりの生なわしで、その女と手を切るだけの腕がなかつた。さうしてる内に、わしは一寸した借金も背負ふやうになつて、すつかりやけになつて了ひ、たうとう二進も三進も行かなくなつてから、夜逃げをして町場へ出て、あれやこれやへ泰公して見たが、人に使はれて働き廻つてゐたのではねつから物にもならんので、辛抱してためた金が少し固まつたのを引出して、たつたこの一月前に、生れた村へ歸つて來た。おつ母はいゝ年をして男と逃げて了つて、どこへ行つたのか分らない。

それからわしはやつぱり元の商賣にかへつて、かうして歩いてゐる。實際のところあの時はくしや〳〵してやけになつて了つて、お前の事も、どうなるものかと無理にさういふ氣になつて逃げてつてしまつた。併し、さうして飛び出して了ふより外には手がなかつたので、それからはばつが惡いから、お前の方へ一本のばが

きさへも得う出さなかつたけれど、あれからずつとお前の事は忘れちやあゐない。それはもうお前からどんなに恨まれても言譯はない。何と言はれても仕方がない。——

かう信は話して、どうだい、まあ話だけれど、お前こゝを出る事が出來ればもう一度昔に歸つてわしに添ふ氣はないか。わしももう先のやうなぐうたらでもない。何が何でもお前を二度といゝ目にも會はすまいぢやないか、と、かういふのである。

「まあそれは話が別だ。已もはあこの年をして、さう〳〵人の口車にや乘りたくないから。」と、おまきはあの折の事を思ひ返して、

「お前も全體まあ考へて見いよ。」と、さんざ及ばぬ腹立ちも漏らして見た。

そこへおさくが外から歸つて來たので、話もそれぎりでその日は別れたが、二三日して信は昨日またやつて來て話し込んだ。

おまきはあゝして、この男については隨分馬鹿を見たのだけれど、こんなに再びまた目の當り行き會つて見ると、もと〳〵性質の惡い人間といふ譯でもない上に、自分が女になつてはじめて持つた男であつて見れば、まんざら惡い心持にもならない。自分がそれから持つた男といへば、あの馬車引や六のやうなものだけで、ねつから男といふ程のものにも出會はなかつた。おまきはやつぱり昔のこの男に繫がるのが自分の引いて生れた約束ではあるまいかと考へた。信は、手つ取り早く駄つて逃げ出せば、何のかのといふ面倒がなくていゝぢやないか、わしの心が分つとるなら、何のそれしきの事を怖れる事はないぢやないかといふのである。

それはもう、こんな處にゐて、あんなちぢむさい六や、小憎つたらしいおさくなぞと貧乏の中に潰つてゐるよりも、信に附いて二人でせつせと稼げばいくら氣が利いてゐるかも知れはしない。併し、こゝを逃げ出してから先がどうなるかといふ事は、かうして貧乏して苦しんでゐても、あゝやつて六から大事にされるやうに憐かではない。信の心の中ももつとよく探つての上でないと、損をしても抑らん事だ。とにかく、もし出るとすれば、これまでになつてゐて、六にかうだと話し出すのは言ひ辛いから、それには默つて逃げるのが可え。何も六の女房でもないに。——

おまきは炭團を丸めながらいろ〳〵に考へた。

六

やがておまきは、上になつてゐる二つの箱へ拵へ詰めたので、それを一つづつ地へて外へ出て、柿の木の下の蔭の上へ干し並べた。

昨日も今日も、どんよりと寒く曇つた厭な日和で、どこを探すべき日向もない。切入るやうに皮膚にあたる冷風ほ、かち〳〵に凍てた土の上に、どこからか飛んで來た泥けた鶏の拔け毛を、——それがぢつと考へ入つてはまた轉がるやうに——ふはり〳〵とほろゝ寒く走らせた。こゝはぐるりの三方を竹籔で裏かれてゐて、烈しい風は當らぬけれど、藪の外は物の吹き飛ぶやうな北風が出だしたやうで、ざわ〳〵と籔を搖つて海の響のやうに鳴り渡つてゐる。

おまきはついでに柿の木の股にかけてある山の帶を取り入れながら、由は俄も食はずに出て行つたまゝ、外で何をしてうろついてゐるのだらうと思ひつゝ、再び土間へ這入つて竈の上に坐つたが、一つ二つ拵へかけると、つと、ちきりちきり差し込みがして來た。

何だかこなひだからこつち、少し仕事に坐つてゐると、ちきにちき〳〵と痛んで來るのである。あんな、子を産拾したりなんか無理な事を

した後が、かうした寒氣に冷えるのだらうと思はれる。おまきはしばらくそのまゝ下腹に力を入れながら、顰を顰めて息を殺して怪へてゐた。

やがて、やう〳〵それが大分落ち附いて來かけると、そこへ村の使ひ走りをする寅がやつて來た。

「小母やあ、お前のとこは洋燈かいカンテラかい。」と出し拔けの事を言ひながら、いきなり竈の側へ行つて、大方灰になりかけた火をほじくつて、新聞紙でたゝんだ煙草入を出して、まだ十七八にしかならない青二歳の癖に、馴れない手附をして、曲りへこんだ鉛豆の煙管で煙草を喫み出すのであつた。

「カンテラよ。それが何だ。」

「何、そんぢやあ可えんだ。」

今度お上からの布告で、洋燈は一切、鐵葉か金かの油壺が附いてゐるのでなくてはいけないといふ定になつたので、この月の末までにすつかり買ひ換へないと、來年早々巡査が調べに來て、もしやつぱり改めてゐないとなれば、二十圓以下の罰金か食はす規則になつたから知らせて廻るのだといふ。

「さうかい。何でまた、そねいな八釜しい事をいふのぢやらう。」

「あたり前のぢや、火事が危いけいよ。」と寅はすば〳〵と忙がしく吸ひ續けて出て行きかける。

「あの、のい、寅さ。」

「あゝ？」

「お前來る時に已がとこの山を見かけやせざつたかい？」

「山け？——あれあ、今そこの藪の根へ上つちよつたぜい。」

「あれい、あのでつかい木の上へかい？」

「おゝ。ずつと先つ頭まで上つちよつたい。」

「ほうかい。まあ何ちふ事をするだらうか、あの野郎は。——落ちつれあどうするのぢやらう。危え、まあどこにやあ。」と、おまきは見に出た。

「あの子は人さへ見れあ、持つちよる物を何でもくれろい〳〵言てせがむ子ぜいなう？」と寅は先に立つて歩きながら言ふ。

「馬鹿ぢやけのい。」とおまきは仕方なくから言つた。馬鹿でも、由は、おさくとちがつて、おまきには何だかいぢらしい心持が引かれるのであつた。由はおまきのいふ事は何でもよく聞きわけた。

「こなひだはよ、あすこの土手のところを馬が下りて行くのを山やが飛び出して來て、動いて行く馬の腹の下をくるり〳〵くゞり拔けるのぞい。そしてお前、その馬の、下つちよる金玉を切つてくれろい言て、せがみ〳〵どこまでも附いて行くがい。」

「そねいな馬鹿な事を已に告げるお前の方がもつと馬鹿い。」と心に言ひつゝ、おまきはつんとして返事もしずに路まで出て、

「由やあ。」と言ひつゝ榎を見たが、高く突き出てゐる部分には由は見えなかつた。また側の鳥を引つかけようとしてゐるのだらう。高い梢の先から絲を下らせてゐる。

「寅さ、そこから覗いて見ておくれい、藪の中を。」

「うゝ。」と言ひつゝ、土手の方へ歸りかけた寅は中を見探つた。

「ゐねいかい。」

「ゐねいかい？」と見に行きかけると、また側のかちきり〳〵とさし込んで來た。

七

おまきは痛みが烈しいために、たらと上へ上

つて、廊圏に這入つて、俯つ伏した儘、午後になつても、それなり仕事につく事も出來ない。斜に古畳の上ににじり出て、枕を伏せたなりで、枕元の障子の雪間からすう〳〵寒い風が來ても、這ひ出てそれを閉めるだけの氣力もない。痛みだけはもうこれで落ちついたのかと思つてゐると、またぢきにぐすり〳〵さし込んで來るのであつた。

さうしてゐると、だれだか窮と這入つて來たらしく、上り口の障子をこそ〳〵開けるものがある。信ぢやないかと苦しい頭を上げて見ると、おさくがこつそりと上つて來るところであつた。何をそんなに内證のやうにして歸つて來るのだらう。

「おさくさ。」と髮嫁を返るやうに、氣分の悪い中からさういふと、おさくはもう見附けられたからどうでもいゝといふやうに、わざとがたびしと、おまきが足にしてゐる方の戸棚を開けて、元結と水油の壜を取り出して、がたりと閉めて下へ下りる。

「己あ一人でかうして困つちよるのぢやけ、もう出ずに家にゐてくれると可えに。」と言はうとする間もなく、おさくはそれなりまたふいと出てしまつた。何か藥でも買つて飲んだら、ちつとはよくなるにちがひなからうにと思へど、どうする事も出來ない。おまきは冷えつく手足をした儘で、ぢつとさうして寢そべつてゐた。

おまきはさうしたなりでつい知らず〳〵寢入つて了つたのであつた。ふと目を開いて見ると、障子の内はいつの間にか薄暗くなつてゐる。さうして、力の拔けたやうな體が急に頭つくやうにぞく〳〵寒くなつた。例の痛みはもうすつかりなくなつたけれど、何だか、かうしてたつた一人で、冷たい中に力なく薄暗く生きてゐてもするやうな、いつにない味氣ない心持が被さつた。

と、おまきは、炭團を外へその儘にしてゐたのに氣が附いて、蒲團を出て戸口の外の黑ずんだ夕方へ出た。

竹藪の向うには、書間よりもきつくなつた北風がごう〳〵と鳴つた。見ると路際の棕櫚の木の積藁の下に、由が土べたに咳く足を投げ出して坐つて、首をうな垂れ一鍬りに何かやつてゐる。

「ま、由や。そげんとこへ坐つてからよう。何をしちよるい。」と側へ行つて見ると、おや、またたうと鳥を捕つて、ぶすり〳〵と齒で引つぱつては毛を毟つてゐるのである。駄や、あたりの土の上に、黑い生毛がふは〳〵と散らかつてゐる。

「あれ、まだ生きちよるいなう。見せ。ほ、むくむく動かあ。」

まあ馬鹿の癖にどうしてあんな手に合はぬ鳥を引つかけるのぢやらう。

「針へ何か餌を附けちよくのかい、由」と言つたところで、由に分る譯もない。由はたゞ、「うゝう〳〵。」と言ひながら、半分毛を拂つた鳥を、兩方の翼を握つて突き出して見せる。

おまきは炭團の箱を一つづつ土間へ持ち入れた後、戸口でカンテラに油をついで灯を點して、飯を炊く支度に、家の後へ松葉の束を取りに行くと、途中でぶすりと草履の鼻緒が切れる。おまきはそこらで藁を探してそれをすげて、ついでに他の片方の切れさうなのをも直したりしつつ、稍手間を取つて、松葉を抱へて家へはひると、いつの間にかおさくが歸つてゐて、上り口に置いたカンテラを背にして坐つて、煙の火が消えてゐたのだから、冷たい水になつてゐる瓶の土瓶の湯をかけて、ざぶ〳〵茶漬を食つてゐる。

「おさくさ、お飯ならもう一寸待つたら可かつたに。今に暖いのを炊いたげるのに。お前さ、

たうとう麦も食べないでゐたのけいな。」と言つても、おさくは默つてゐる。さうしてがたりびしりと荒々しくお櫃なぞを片附けて、

「退いてくれ。」と下へ下りかける。

「お前さ、また出るのけい？　もうはあ可え加減にせいよ。もう追つつけ父やが歸るに。また叱られようぜ。己あ今日お前さがずつと家に居らなんだ事は父やにや隱しちよつてやるけ、もう出ずにゐなよ。なう。」

「へん、隱しちやいらんぞい。何にも隱したりしちやいらんぞい。」と、ぷり〳〵して土間へ下りる。

「あゝれ。朝つぱらからまだ騷れちよるのけい？　しつつこい子ぢやいなう。あきれたよ己あ。」

「己もあきれたあ。男を歸してもやつぱり寢ちよつて、人が見れあ腹が痛い風をしてごまかすけ、世話はないだい。」

「何を言やあお前。そんな出任せを。何だ言？」

「お前に訊いて見いよ。お前がよう知つちよら。己あ今日は父やの歸る途中に待つちよつて、みんな父やに言うたらい。お前も父やに己の事を言ふけ、己も言はあ。」と言ひ散らかして飛び出した。

「えゝい、何なりと言やあされ、畜生。本當にあゝいふ奴だ。だれが今日男と寢たら。己があゝして苦しんぢよつたのをつらまへて、膝手な文句を附けろい。あの阿魔。ちつとも悔れあしねいだ、己あ。」

八

それからふう〳〵と廊の下を吹いてゐると、「おい、おまきさ。」といひながら、ついと信が這入つて來た。

「何だ、お前さ。それに息を切らせて。」

「お前一人かい？」と信はいらく〳〵した目附をして、抱へて來た風呂敷包みを上り口に置いた。

「ようおまきさ。きつぱりと絲めてくれい。崖から下へ飛び落ちる氣になつて了へばそれきりの話だい。逃げてくれいよ、これから直ぐ。これを見い。お前の着る物もちやんとからして工面して來たい。襦袢と參入と帶と。――半襟だけや反を買うて今日仕立てた新らしいのだぞい。見いこれを解いて。」

「そしてお前、今こゝから伴れて走る氣かい。」

「それよ。そのつもりで己が荷もはあ向うの村まで擔ぎ出しちよいたんぢやけ。早うせいお前。よう。」

「まあ、そねいに言うたちて。」と、おまきはいつそさうして了ほうかといふ氣になつて、

「お前今そこらで、うちの由に、で無え、おさくに會ひはせざつたかのい？　つい、お前と入れちがひに。」

「いんにや。おさく言やこゝの阿魔つ子ぢやらうがい。」

「あいつがそこをうろ〳〵しちよつて見い。」と、おまきは、くしや〳〵になつた髮の亂れを掻き上げながら、どうしようかと考へて、

「あいつがもうはあ、己がお前と臭い事をちやんと見ちよつて、今夜六の歸るのをそこらで待つちよつて、何もかも六に喋ち聞ける言ふんぢやがい。」と、信の解いて見せる着物に目を附けながら、

「こゝからそれを己が着て出るのかい。」

「いゝやい。そんだぐづ〳〵しちよられやせんけ、どこかへ行き着いてから着換へる事い。」

「ぢやあ出い。逃げるけ。――その代り お前もう己に二度と非度い目は見せまいなう。一生添うてくれるかい、本當に？」

「何を言ふだい。――知れた事を。」と言ふところへ、

「うゝう〳〵。」と涎をたらしながら、由がいつかの缺けた皿を持つて、醤油をねだりに這入つて來た。

「何だい。もうあいつを燒いたのかい。待つちよれよ。――おさくの阿魔あ醤油の壜をどこへ置いつろ。」と、上へ上つて戸棚を探す。

「おい。いゝ加減にしちよけよ。あゝ、これぢやないかい。」と信は、戸口に置いてあつた石油の壜を取り上げる。

「否。こゝにあら。おい、持つて來い皿を。二滴ばかりあら。ほうれ。」と、おまきは下りて注いでやつた。

「さあ行け、由。」と、外へ出して、おまきたち二人は、それから直ぐに戸口を出た。

「信さ、お前先に行つて、そこらに誰かうろついちよれやせんか見ておくれい。」

「おゝ。」と信は立つた〳〵先へ行つた。

おまきは出かけた足で一寸灰小屋を覗いて見ると、由はもう中で足を投げ出してつくばつて、丸焼きにした鳥を握つて、ぐじり〳〵齧つてゐるのが、焚いた螢火の蔭にぼんやりと見える。

「お前は何にも知らねいで、由よ、己あこれぎりで明日からもう居れあせんのぢやざい。」と思ふと、何だかいぢらしい心も殘る。

「由や。お前その火を外へ持ち出すなつ。風が吹くけ。よう。可えかい。」

由はたゞ、

「うゝう〳〵。」と言つてゐる。

「おい〳〵。ぐづ〳〵するない。」と、信は小さく言ひつゝせか〳〵して立つてゐる。

「大丈夫かい。」と、おまきも小聲に言つて、前後になつて竹藪の間の寒い闇に這入つた。

「何をしちよるのかい、灰小屋で。」と訊きながら、信は先に立つてせつせと歩く。

「由かい？――鳥を食ふのい。」

「何をい？」

「鳥をよ。」

「鳥をい？」

「あゝ。」と、おまきは追ひ附いた。駭つてゐる體はもう息切れがするのであつた。

（明治四十四年二月）

月夜（五）

自分は變だと考へつゝその力へ引き返したけれど、いくら行つてもその形に追つ附かぬ。椋の木の、もと入つて來たはづれまで這して來たのに、女はゐない。形がない。それでも、歌はまだ聞える。しかもまた後の方に。――

見ると再び白いスカートがちらと見えてすぐ消えた。――

自分は頭の迷ひかと考へつゝ、先の二階の窓を見上げると、そこにはもう灯影が消えてゐた。茫として立つてゐると、だれだか、女の聲で、早くお母さまの方へお歸りよといふ。これこそは耳のせゐだと考へつゝ、それでも急に母が氣になつて來たので、西洋人の女の疑問もその儘にして、急にさつさと歸つた。

するとバルコニーの下の石段に伯母さんがしよんぼり立つてゐた。

「どこへ行つたの？」と小さく訊く。母には變りもないのだと分る。

「西洋人の女が一人で歩いてゐましたよ。」

「女の異人さん？――うそ。あそこには、女の人はゐやしません。メイリーさんといふ孃さんがゐたけれど、去年亡くなつて、もうゐやしない。あそこには教官をしてゐる年取つた方だけが一人でゐるんですよ。」といふ。

女

自分はやはりその時代でも、外部のすべての事物に何の交渉をも感じないで、たゞ自分と、自分の仕事とだけを一人薄暗く見入つてゐたのは變らなかつた。それが自分に取つては、黒い水にばかり生きてゐる生物が、わが水の黒いといふ比較を取つた事がないやうに、それで何の缺損をも意味しない、平靜な狀態なのである。さういふのが、與へられた自分の性分だから仕方がない。自分は今でも、夜になるとぼ〳〵變なところに寢に歸るけれど、その頃はまだ學生でゐた時代で、或つてから、――一匿の、あのざわざわしい――町といふやうな變つた場所に住んでゐた。

けれども、――町といへど、裏筋のやうに這入つて行く、壁の厚い三階にゐたのだから、忘れてゐればそんなにざわ〳〵しい町場の中のやうでもなかつた。そこの表通りを行くと、入口の石柱に半鳥半女の形を浮かせた、或機械や標本を賣る店のショーウインドーに、子供の外套位ある黒い大きな蝙蝠と、後の恰好の物足りない、足の長い駝鳥の出てゐるのが目に留る。そのショーウインドーに沿うて這入ると、高い煉瓦の壁に挾まれた、行き抜けの狹い露路の取つ附きに、自分の住居の入口がついてゐた。

夜は露路の中程にたゞ一つ瓦斯ランプが暗く點く外には灯影もない。建物は表の標本屋の所有である。丁度マッチの箱を突き立てたやうな、ぬつとしただけの摸つ切り棒の煉瓦造りで、外から見ると、がた〳〵に老いぼれた、うす汚い建物であつた。階下の土間は持主が居の倉庫に使ひ、二階が標本などを作る仕事場で、その上の大きな一室を、他のものが何かの事務室に借りて、下の入口に表札をかけてゐた。

自分は、階段口を隔てた、三階の表角の小さい一間と、それへドアーで續いてゐる後の一室と、さうした二つの間を借りて、物蔭に馴れた、滅入つた鳥かなぞのやうに、自分一人忘れられたやうになつて住んでゐた。同じ屋根の下に頭と足とになつてゐても、下の仕事場とはもとより何の交渉がある譯もない。

たまに家にばかりゐる日には、二階の水の出るところへ、水さし、汲みになど下りて行くと、ちよい〳〵、汚れたエイパーンをあてた仕事場の工女たちと擦れちがつたりするけれど、人を注意して見る自分でもないから、いく度か出會つたにしても、いつでも、はじめて見る相手のやうに、何の接觸をも見出さなかつた。三階の室とだつて、互にろくに顔も知らないなりに立て切つてゐて、外の町での別々の家同志のやうに暮してゐるまでの事である。さうした一室で何の事務をしてゐるのだつたか、いつも、閉鎖された、使はない室のやうにひつそりしてゐた。そこの廊下は晝でも夕方のやうにどんよりしてゐた。

自分は角の部屋の、表の建物の後壁に面した、厚い窓の下にテイブルを置き、それに黒のカシミヤの布をかけて、一脚の質素な椅子を配してゐた。さうして、入口のドアーのある壁の根に、かなり買つてゐた自分の書物や、死んだ兄の讀んだ多くの文學書を積んだ棚を並べ、下の往來に面したもう一つの窓のところに、肘突のある椅子を、何の續きもなくたつた一つ据ゑた外には、一方の隅に水さしやコーヒー茶碗などの五六の小物と、ニッケル色の石油こんろとを載

せた蹴卓を、取片附けたやうに置いてゐた。

自分は、夜は物古く暗くやうな蠟燭の灯の外には使はなかつた。何がなし蠟燭の火の影が好きであつた。いつも寝る時には、もう短くなつた何本目かの蠟燭を持つてドアーを開けて、次の、より小さい室に這入る。そこは疊敷になつてゐて、樫の木材の大きな寝床が、一ぱいになつて横はつてゐた。さうして、その頭の方の物を置く棚に、薔薇の蕾を浮きの中に押へた、三四尺の丈のバンドールの聖像と、その脚の下に花挿の壺を置つた。そこへ置いた蠟燭のまたゝきが、白く淀んだ壁にバンドールの影を大きく投じて點いてゐる間、自分は蹴に這入つた儘、夜はこの建物に唯一人ゐる自分をしんとした心持に見守りつゝ、やがて火がじゝゝと言つて盡きるのと共に確かに目を閉げば、夜の長さもなくすや〳〵と寝る。さうして、朝になると、蹴卓で麵麭を切つて食べて、さういふ一時からとぼ〳〵歩いて學校へ出た。

それからレクチュアが了ると、地下の穴倉に、日影を知らないもののやうに、たつた一人で仕事に續けるのであつた。夜もとつぷり深くなつたといふ事を、外に出てはじめて氣附きながら、包みをかゝへて、さきの三階へ寝にかへるやうなことも殆らしくなかつた。どこをどう通つたとも分らずに、いろんな取留もない考へに浸されつゝ、流入つたやうに、力なき足をのろく運んで、いつ歸つたともなく入口の戸を開けるのが續けであつた。

そのやうにして、いつも考へ入つてゐるものやうに生きてゐて、その實はこれといふ何にもを考へてゐるのではない。仕事に關した事の外には何にも考へることもない。入口の戸は夜中でも押せば開く。夜になれば、倉庫の中のやうにだれも人のゐぬ階段を、足探りに上つて、ポケットの鍵を出して室を開ける。

休みで籠つてゐる球外の日には、夕方の暗がりの中に、二階の工場にしまひまで一人ゐた、作業の主任の男が、パイプの火の赤く見えるのを口にして、靴を重たくこと〳〵階段を下りて來るのを見るきりで、この建物にゐる人々と顔を合はす事も稀であつた。

休みの日には寝たいだけ寝て、それから町に灯が點く頃になると、例の、どこをどう出て來たともなく、一一の、ペイヴメントの續いた町をぶら〳〵歩いて、古本をせゝくつたり、草花を買つて來たりして、肘突の椅子のある窓に置いたことも忘れるので、雨の日の、外へ出られぬ晩なぞに、蹴に、カーテンを開けて、向うの屋根の續きを見る時なぞに、そこに、いつしか花蘇も落ちた、黒い鉄なぞを見附して、最早幾日さうして置き忘れてゐたかを考へ分かない事すらあつた。自分が自分の學科に關した、最初のエッセイを書いたのはかういふ風の事であつた。

その時分には、學校では、穴倉で自分の工夫した或裝置を覗いて、そのエキスペリメントにばかり没頭してゐた。そんなにして、度々夜になつて穴倉を出る自分は、小使部屋の窓にしか灯影のない、暗い建物の石段を下りると、年古い大木の黒く夜を包んだ、人もない佛内の闇に唆はれつゝ、その内にいつの間にか、店の灯の續く町の中を、何にか因はれた人の如く、とぼりとぼり陽つて行くのに氣が附く。さうして、行きあたりばつたりのレストーランに這入つて、スープと麵麭と、二皿ばかりのものを食べて、例の三階の椅子段を探り〳〵上る自分を見出すのであつた。

さういふ調で自分は或小さい雨のしと〳〵した夜、自分のゐる町から聞もない、ペイヴメントの續きの盛町角の家に這入つて、樫材竹の床

の置かれた、小綺麗な階段を上つた。

そこには白いエイパーンをかけた一人の小女が、壁の奏見の前に立つて、客のない夜の、する事もない我が髪を撫でてゐた。それが、皿を通しに下へ下りて行くと、自分は一旦かけたテイブルを變へて、外のバルコニーに臨んだ、小さい一室に席を取つた。

その室は、かうした家によく見るやうな、小下りもしない裝飾なぞは何にもない、さつぱりした一室で、高度な瓦斯の灯影が、薄青い水の中のやうに漲つた中に、白い麻の布のかゝつたテイブルに、ペイズに插した赤い色の西洋花の束かばつと目に立つて見えた。

自分はそこに一脚ある椅子に坐つて、さうした花の色の何をか告げようとしてゐるやうなのを目の前にして、皿の來るのを待つた。外には下の夜のざわ〳〵しい中に、小さい雨がしと〳〵とバルコニーに落ちるのが聞き取れた。

その内に自分は、ペイズの中に、東から取れた花の一つが沈んで、容器の硝子を通して大きくなつて見えるのを、頭を傾げて透して見たりして、何のためにこゝへ來たといふ事を忘れたもの〳〵やうに、かうした斯の光りに澄み切つた一室に、小雨の夜の自分を紛してゐた。

さうしてゐると、さつきの女が皿を持つて上つて來て、あちらのテイブルにかけてゐると考へて設けたのが遅つたやうに、

「そちらへいらつしやいましたのですか。」と、一寸入口に立つたが、自分が例のやうに、何にも言はないで默つてゐるものだから、そのまゝ這入つて來て皿を置いて、氣のない容子にあちらからナイフなぞを運んで來た。

自分は何といふ調もなく、たゞ恬性のやうに、その製る目にも夜になつての歸りにこの家へ這入つた。丁度女中が一人もそこにゐなかつたから、柱のベルを鳴らして置いて、自分のために定められたところのやうに、一度這入つた昨夜の室のドアーを、何心なくつと開けると、一人の女がそこのテイブルにかゝつてゐたので、おや人がゐるのだつたと思ひつゝ急いで閉めた。

と、直ぐに内からノッブを廻して、その女がそは〳〵しく出て來た。

「あの、構ひませんからどうかこちらへお這入り下さいまし。」と、こゝの家のものらしくさう言つて、今までそこで讀みかけてゐたと見える、黒い表紙の洋書を、指を挾んで片方の手に持ちながら、徐かに向うの室へ行つた。自分はこのすらりとした女の、長い眼の下に深い色にしめつた目と、つや〳〵しく束ねた髪と、薄いとき色の中に石竹の花を出した帶とを目に入れて、そのまゝ這入つてテイブルにかけた。

すると、昨夜の小女でなく、ずつと年の入つたさびしい造りをした女中がやつて來た。

「はい。」と自分の命じた皿を受合ひながら、テイブルに置いてある紙切を取つて眞を返して見たが、

「ふゝゝ、横文字ですね。何といふ事が書いてあるのでせうね、これは。」と、物馴れた女のやうにさう言つて、自分の前に置いといてさつさと下へ下りて行く。

自分は仕事のない時に何でもない事をするやうに、その紙しを取つて見ると、鉛筆で急がしさうに書き付けた字で、

"Chi rende alla meschina
La sua felicità?"

と、小唄の一句が書いてある。それから下はフランス語で、引歌の一部分らしく、

いゝえ、そんなにいつもあの人の事ばかり言つてやしません。私だつてほかの話も出來ますわ。

と書き、

蜘蛛。
と書いて、
それから何といふの、お母さま、え？
と、がさ〳〵と書いてある。さつきの黒い本を持つてこゝになった女が書いたのだらうかと、自分はたゞそれだけの事を考へつゝ、ふと、ベイズに插された花が昨日のと異つてゐるのに氣が附いた。何といふのか、見馴れない、黒い草花である。黒い花もあるのかと見つめてゐると、その間に、女が皿を持つて出て來た。
「何と書いてありましたの、さつきのは？　あら、あの紙切をどこへおやりになつて？」
「あゝ、こゝに落ちてゐる。」と、自分は足の下を指しつゝナイフを取つた。
「これでも手紙か何かでせうか、あちらの言葉で。」
「……」
「女が男へ遣る手紙でせうか。何だか私たちが見ますと蟲が這つたやうですわね。」と、女中は口元に笑を見せながら、そんな事でも言つて、客のために相手にならなければならないかのやうに、それを拔げて見つゝ話を引く。
「手紙ではないよ。」と、自分は側の薄暗い調子で言つた。
「ぢゃ、何でございます？　言つて下すつたつてどうせ私たちには分らない事なんてせうけれど。」
「……」
こんな返事だから女は話を持つてくはずみもないやうに出て行つて、次の皿を持つて來た。
「だれが書いたのかい、これは。」と默つてゐる癖の自分も、つい挨拶にかう訊いて見る氣になつた。
「これですか？」と女は來て、
「さつきこゝに女の人がゐましたでせう？――あの方が書いたんです。私見ませんけど。」
「このうちの娘さんかい？」
「まゝ、まあ。」
「まあとは？」
「ほゝゝ。」
「……」
「こゝの家で預つてる人ですの。」
「こゝへ這入つて黒い本を讀んでゐたつけ。」
自分の話は喰つ附け方が下手である。
「えゝ、種々いろんな本を讀みますわ。横文字をすら〳〵讀むんですもの。隨分變つてる方なのよ。どうかすると十日でも二十日でも朝から晩までたゞの一言も口を利かないでゐられる人なんですからね。」と、終りは獨り言のやうに言ふのであつた。變つてゐたつてもいゝけれど、その言ひ方には、この女はこゝの家へ來てから來た日もないといふ事が受取れた。
それきりで女はついと下へ行つた。何だか面白くもないところに置ぼれて、自分で自分一人を見守つてゐるのを示すやうな容子であつた。
やがて自分はそのやうな事はみんな浮ぶまゝに忘れて、この一室を出る時、何の氣もなく口に出たさつきの一句を、
Chi rendu alla meschina
と、獨り言のやうに言ひつゝ戸口を出ると、そこにさつきの、この句を書いた女が、自分のさういふ獨り言を聞くとはなしに立ち聞きをしてでもゐたやうに、我を忘れたやうな目元をして、そこの室の瓦斯の灯をぢつと見入りつゝ立つてゐた。自分は、
「キ、レンダ、アラ、メスキナ。」
と、もう一度それを繰り返しかけて、この女のゐたのに心附いて後を默つて了つたが、それでも人の書いた物を盜み見たかのやうに、ぱつの惡い心持を見る側物にかゝはる自分でもない。

ので、たゞ、上つて來た時と同じに、何の心もなく、次の瞬間にはさういふ女のゐたといふ事すら忘れて、のそり〳〵梯子段を下りた。
それから四五日も經つて、もうどこかで夕飯を食べようかと思ひつゝ、例のどこをどう歩いて來たとも分らない、歸りの夜の町筋に、ふと、洋食とかいた石柱の札を見て這入ると、それはやつぱりこの間も來た、棕櫚竹のある家であるのに氣がついた。
「あすこへ這入れるかい？」と、この前の淋しい造りの女中に訊くと、
「すみませんけれど、唯今そこで例のが本を讀んでゐるのですから。」と言ふ。
やがて自分はナイフを動かした。
「あすこの室はあの女が使つてる室なのかい？」
「えゝ、ですからあすこに插してある花が毎日變るのですわ。」
「テイブルの上の？」
「えゝ。」
「……」
「今日は黒い花です。」
「だつてこの前も黒いのだつたぢやないか。」
「あら、さうでしたつけね。」と言ひつゝ女中は次の皿を取りに下りた。すると、いつの間にか今日も石竹の帶の女が室の戸を開けて覗いてゐて、
「こちらへいらつしやいませんか。――どうぞ。」と言つて中へ這入る。自分はそれに對してたゞ默つて點頭いただけで、その儘そこで食事を了へた。さういふのに從つて、わざ〳〵そちらへ動いてゆく程の必要は何もない。戸はそのまゝ自分が這入るのを受取るためのやうに開かれたまゝで殘いた。
それから自分はもう歸りかけて、梯子段の方へ行きかけると、
「あなた、失禮でございますけれど一寸。」女が急いでテイブルを離れて呼びかける。
「私ですか。」
「えゝ、すみませんけれど。」
「……」
「一寸この句を數へて下さいませんか。どなたかに數はらなければ分らないのですから。」
もうよく知り合つてゐる間でもあるやうに言ふのである。
「何ですか。私に分るやうな事ですか。」
自分も當り前のやうに戸口の方へ歩みを運んだ。
「出しぬけな女ですから變だとおぼしめすでせう？　あの、この本のね……」
「私には分らないでせう？」
「キ、レンダ、アラ、何とかいふ――待つて下さい。――えゝ、こゝに引いてあるのですよ、昨晩のは。これはイメリヤ語でせうね。」
「さうでせう。」
「では一寸。これをフランスに譯して下さいませんか。ほゝゝ、變な女だといふお目ね。」
「これへ書くんですか。」
「御面倒ですけれど。」
自分はかうしてたうと黒い花のテイブルの上で、例の黒い表紙の本の一頁の、フランスで書いてある中のキ、レンダを譯させられた。
「おや、さういふ事なんですか。――尖はれたる女にだれか與へ得る。その過ぎにし幸福の。」と、女は自分の綴る洋字を追うて讀みつゝ、
「幸福の――えゝ、その字だけは分つてゐました。――幻影ですね。――ありがたうございました。」
「どうせ直譯だから拙いです。何を書いた本ですか、これは。小説ですか？」と自分はそれで默つて立ち去るのも間が惡いから訊くと、今自分の書いた譯を取つてもう一度讀んでゐた女

は、目を伏せて微かに眉を顰めた。
「厭よ、あなた。そんなにわざと知らない振をなさらなくともよどざんすわ。」と言つたが、
「でもお嬢さまでございました。」と、直ぐ氣を換へて、
「一寸待つてゐて下さいましな。私お禮にあれをあげますから。本當に待つてて下さる？　錠をかけてちやんとしまつてあるんですから。」と言ひつゝ、次の室の戸を開けて這入る。自分は何だか朦手な目に會はされてゐるやうな氣がしたが、それでも、構はないでさつさと下へ行つて了ふ譯にも行かないので、仕方なく立つてゐると、
「ね、これよ。かうして見ると赤いでせう？」と、女は何だか洋酒の這入つた壜を持ち出して、火にすかして見せたが、
「でも、あなたはお酒を召し上つて？」と、女はこゝ時はじめてぢつとまともに、黒く深いうるほひの目を自分の顔に注ぎつゝ、
「上れシでせう？」といふ。自分は、さう言はれて、何だか物の怖れといふものを知らない、罪なき小鳥のそれのやうな、この女の目の色に逆ふ事は出來ないやうな心持を見た。
「どうだか。飲んだ事がないのだから。」と、自分の女人に言ふやうに、
「何といふ酒？」と訊く。
「ぢや、この椅子におかけなさい。めしあがつた事がないのなら、あがつて御覽になればいゝわ、あがれるかどうか。」
「私はその酒ばかりの話ぢやない。」
「えゝ、酒といふものをでせう？——御覽なさい。この小さいコップだつてレナが孔雀の女王になつた儘の着物を着て、毒を飲んで死ぬ時のコップでせう？　だからこの酒も私がエヂプトから取り寄せたんですわ。」と、自分には何の事か分らない事をいふ。
「そんなに注いでは駄目。一口だけ義理で飲んで行くんだから。」
「ね、飲れるでせう？　本當はこんなものたゞへ注ぐのではないのですけれど、レナが、こんな指を洗ふコップで飲むんですから仕方がありませんわ。」
「もう濃山。」
女は壜の口をして、ぢつとそれを押へた儘、何をか考へ入るやうな目元をして、黒い花を見てゐたが、と、思ひ出したやうに、
「ぢや、もう上げません。あなたは隨分嗜い方ね。薄嗜い心持の方。ほゝゝ、また變なんだとお考へなさるのね。さうでせう？　私はあなたになら何でも言ひます。憚いていらつしやる。」と、ぢつと灯影を見る。別に憚いてゐやしない。
「ぢや、それをもう少し下さい。」
「えゝ、まだあちらにもう一本ありますから。——レナが怖れ〳〵、鞄の中に隠したこの酒を飲むでせう？　だから私も厭になると飲むんですの。こつそりと。——でもレナのは毒が這入つてるからいゝけれど。」
「レナといふのは何です。」
「あら、あんな事をおつしやる。嘘でせう？」
「私が嘘を吐く必要は何にもない。」
「だつてキ、レンダをだつて知つてらつしやるぢやありませんか。違ひはないわ。私がちやんと考へてゐたのと違ひはないんですもの。」
「何が。」
「だつて昨日もその前も、この室へ入れて上げたでせう？」
「入れて上げた？——ぢや駄目なものは這入れない室ですか、こゝは。」
「えゝ、だれだつて厭。それはね、かういふ家ですから、お客さまが這入つて來れば仕方がありませんけど、さうしたら、こゝに飾してある

花をすつと抜いて、持つてつて了ひますわ。」
「それではどうして私が這入つても取つてかないの？」
「だつてあなたはキ、レンダをお厭ひなさるからぢやありませんか。本當にお疎さまでした。私はどこかへ訊きに行く積りでゐたんですよ。女囚の窓から聞えるのだから、意味が分らなくてはじれつたくつて。——氣ちがひでせうね、どうしても。」
「だれが。」
「これを歌ふ女囚。」と、女はさつきの本の開いたまゝの頁を指で押へる。
「そんな事は私には分らないが、あなたも隨分出鱈目を言ひますね。」
「あら、なぜ？」
「だつて私がキ、レンダを歌つたからだと言ふけれど、それでは、私がこの前はじめてこの家へ上つた時にはどうしてこゝへ入れたんです。憚かこゝに赤い花があつたと思ふけれど。」
自分はもう好い加減で切り上げて出て行く氣子を示しつゝ言つた。
「えゝ、一ばんはじめも私が這入つて下さいと言つたのでした。」
「それはキ、レンダの昨夜よりもずつと前ぢやないの？　だから誰だ。」
「だつてその前は三階の窓から下へ飛び落ちて死ぬ人に似てると思つたんですもの。」
「私が？」
「えゝ、いつもさう思つて見てゐました。」
「なぜです。」
「だつて、薄嗜い沈んだやうな方ですもの。」
「ふゝゝ、そんなものは三階から落ちるんですか。」
「さうね。——さうばかりでもなささうだけれど、丁度私が、そんな事を考へ出してゐた夕方に、二階だつていゝから、そこの窓から眼いて下を見てゐたら、その時に丁度あなたがお通りだつたかも、それでいつでもさう思ふのかも知れません。——さうして、えゝ、それよりもあなたが三階にいらつしやるから。」といふ。
自分は、この女が、どうして自分が三階にゐるといふ事を知つてゐるのだらうかと心に考へた。
「ほゝ、知つてますわ。」と、女は直ぐ自分の心を讀むのであつた。
「私がこゝのうちに來てから、あなたがこの下をお通りなさらない日が四月と、それから七日。四月は私が病院へ這入つてゐた間。——お通りになつても私が見なかつたのです。だからただ七日。」
「それでは無駄日私を見るのですか。」
「えゝ。もう一つついでにみんなお上りなさいな、これを。見てて御覽なさい、あとで驚くと酔ふから。奇體なお酒よ。」
「……」
「この椅子へおかけなさい。」
「それではどうして私がこゝを通る時刻が分るんです。ぢつと通るまで立つて何を見てるんです。」
「ね、サロメですか、あの句は。——憑の女の目に何ものか見えざる、といふのは。」
「どうだか。私たちがそんな事を知るものですか。」
「そんなに私を軽蔑なさらなくもいゝわ。あなただからそんな口を利くんぢやありませんか。私は人が嘘だと言つてるほど、いつもは默つてゐるんですのに。」と言つたが、
「私も三階から落ちたいと思ひますよ、時々。毒を飲むよりかもつといゝわ。」
「なぜ三階から落ちるんです。」
「たゞ落ちて見たいだけ。」
「だつて私に似てる男が落ちたと言つたでせ

こゝに赤いのがたつた一本あるでせう？　あれがアンジオラ。――昨日はまだ黒い花ばかりでしたけれど、今日のところで赤い小さい花が加はりました。キ、レンダの女は汚されたやうな白い花。――おや、どこへ行つたんでせう。――あら、下が腐つたから、水の底へかなんで流れて了ひました。ではどうしてもあの女を因は流れがひね。」

「何でですか。そんなに飛び〳〵に言つたんぢや一つも連絡がなくて解が分からない。」

「でではあなたは一つの話をはじめから終りまで順序を追つてお話なさるのですか。」

「あなたは？」

「あら、小説なぞはどこを開いても面白いものあります。女の子が城の上へ上つて、父さん、神さまにお願ひなさい、もしあなたがシルヒオ、ベリコさまなら、お母さまはあなたのお妻きになつた本を盗んでゐます、幾度の幾度も。それからね、えゝそれから何でといふの、お母さま。――死の海の岸からゼノアの海を見ゐると、子供がさう言つて泣くでせう。私はそれだけの！　頁を繰めば、もう長篇い小説を読んだやうに、その下に隠れて子供にそれを言はせてゐる女の、化れてから死ぬまでを、城に上つ

て、戦争のそらに母の面ふ事を思ひ出すこの子が、また母の年になるまでの長い月日の間の小説事も、すべてこれ一日に見えるんですもの。一つの小説を一枚〳〵読まなければ家の清まない人元間は尼谷です。学引の字を一つ見ても、それが一々小説になつてるんですもの。」

「何だか人つかしいな。――そのシルヒオ、ベリコといふのはどういふ人元間です。」

「ほゝゝ、全くで武蔵野のやうね。ベリコが何だらうとそれよりも蜘蛛がいゝわ、絲日を吹く渡き遊れてゐるので、淋しくて堪らないものだから、蜘蛛が通つて来たのを捉まえて、麺麭の切をやつと、そこへ蜘蛛の糸の端が出て来て、私の蜘蛛を取つたといふのね。それから女はいつも、泥棒のにコーヒーを渡りに来ては、男が俯つ伏して黙想してゐる後に立つて、その頭しばらくおつと見守つてゐるんでせう？　何をしてゐるのかと男がお呼びつて、驚くゝ、からしてあなたを見てゐて上げるのよと言つて腰を出すんですわね。――きうして上げれば、あなたが淋しくないだらうと思ひますから。――それから、もういゝから行けといふと、でもまだ腰が乾かない、父に見られるから、と言つたやうな句があります。しまひに、たらと女は自分に悪しい男があるを事と誤

（　女　）

ら？」

「あれは蜘蛛です。サヴォーの山にあるちやありません。モデルに雇はれた女がその蜘蛛から飛んで落ちて死ぬでせう。」

「小説の話でしですか、やつぱり。」

「たんと知らない蜘をなさるといゝわ。――それに何がいて蜘が解れて、その女と同じ窓から落ちて死ぬ蜘蛛だわ、あなたは。」

「何でもいゝ。」

「ほゝ、御愛敬なさい、解ひが来たでせう？」

「解つたのかしら。」

「まあ苦しさうな息をなさるわね。――そんなに苦しいんですか。」

「何だ、――ただ息が出るんです。」

「何だを考へていらつしやるの。」

「ふゝゝ、何だにも考へてゐやしません。――もう解る。」

「まだ。お空しくないのならお話をして聞かせて下さいよ。ね。この本のアンジオラは火の事で焼けて死ぬんぢやないんですか。」

「そんな事は私もし思いたつても駄目。それより かあなたから話して聞かして下さい。そのキ、レンダの女の話を。私は人とから聞くのならば

く。分る話なら。」

「ほゝゝ、分る話はならですつて。私たつて自分の読んだ話を人にさせて、忘れてるこうなのを考へ出すのは大好きよ。」と、女はちつと灯影を見守つてゐる。

「きうして灯を見ては考へるのですか。」

「だつて――何だといふ作でしたか、コーティエね、あれは、窓から出た女が、何だらにいつも黙く灯を見ては物を思ひ出すでせう？　その灯を見ないと自分が死ぬ頃にどういふ女だつたかといふ事が思ひ出せないのね。」

「だからあなたも灯を見るんですか。」

「私は灯を見たつて自分が何だか分らないからつまらないわ。――では私がしませうね、お話を。――私はこの本で蜘蛛が出て来るのが面白いと思ひましたわ。まだこれだけしか読まないのですけれど。」

「それは宇宙の事が書いてあるのですか。」

「だからこの花は黒いでせう。」

「黒いのをわざと植したんですか。」

「えゝ、かういふ宇宙の事なんかを読む時には黒いのを採して来るんです。」

「どこで？」

「ほゝゝ、花園へ行かなければありませんわ。」

「力が〳〵なのですから。――きうして アンジオラは、私が来なくなつたら、私の蜘蛛を見て、私を呼つて下さいと言ひかけて、父の獄舎に呼び立てられて出て行つたきり、それきり一寸も来なして、それから何だかいふとこのベリコのところへ来て泣くんでせう？　なぜ私はこんなにこゝへ来たがるのでせう。――それは私の前で涙に泣くのを評してゐるからさ。――いゝえ、そんなにいつもあの人の事はかり言つてやしません。私だつてほかの話も出来ますわ。――一人がこんな夕方の日、窓が一筋、解れた絲のやうに鎖の格子の隙間から板の間へ落ちますね。」

「あゝ、その女の言葉なのか、この間のは。」と自分は心に言つた。この女は自分があのいつかの紙屑を読んだのを知らないでゐるのではないだらうか。あれを見て以来にキ、レンダを自分が知つてゐる霧もない。

「きうして或る日女は、ふと袖の中の手紙をことつかつてベリコに渡すのですね。私はその手紙は、きつとあの悪の歌を歌ふ女王から来たのだと思ふのですが、どうでせう。」

「それでは？」

「過つたら駄目つて下さいな。私はさう考へる力がいゝのですから。――きうしてアンジオラは、私が来なくなつたら、私の蜘蛛を見て、私を呼つて下さいと言ひかけて、父の獄舎に呼び立てられて出て行つたきり、それきり一寸も来なくなるのですね――るのそれで――来ないから海水浴でいでせう。それはアンジオラ。」と、女はペイスの黒い花の中から、さつきの小さい一輪を抜いて見べるのであつた。

「おや、流石いゝ。ちきりした。何だら。」と私は流石しかめに。

「ポケットの中？　では引つ〳〵遊んで御愛敬なさいな、ただつて。」

「まさか。」

「ほゝゝ。よろ〳〵なさるわね。お部屋にはそんなに出てもゐないのに。」

「無だ〳〵。何だにもない。どうしたのだつたら。」

「何でもなかつたのでせう？」

「では、これで私は帰り〳〵よ。またこの次、いろんな話をしよ。」

「あなたこゝで。今度は私の知らない話をあなたから沢山聞かして頂きますからようございますか。」

「さやうなら。」

「あなた、三階からお飛びなさらない？　私がききに飛ぶから。」

「厭だ。そんな下らない事を。」

自分は梯子段を下りて外へ出た。

町娘は人の出さかりで、麻の服のペイヴメント

に並んだ夜店のカンテラの火が、向うの方は、夜ばかりの暗く繽く國に、物の微に現はれた、怪しい火光のにじんだのでもあるやうに、薄暗く垂れ下つた空を凶惡な靈味を帶びた色にほてらしてゐる。自分はざわ〳〵しい下駄の音の中を、一分間前まで何をしてゐたかといふ事も忘れて、蝙蝠の出たショー、ウインドーを求めつゝ、かういふのを醉つてゐるといふのかとばかりたゞ思ひながら、いつもの自分より變にぞディファイされた心持を見ながら、とこ〳〵と歩つた。さうして、側の暗い階段を上つて、戸を開けようとしてポケットを探した時に、おや鍵をどうしたらうと變に思つた。

ないの。どこへも落すわけもないのだが。——ではあすこだ。あすこでポケットを引つくり返した時にと考へ合せたので、またてく〳〵二町ばかり二度の足を踏んで、檜竹のある階段を上ると、小女がテイブルに俯つ伏して居眠りをしてゐる。奥の方の室からは、二三の客が來てゐるらしい話聲が漏れた。

自分はさつき女と話した室を開けて見た。と、女はあれなりずつとそこにゐたもののやうに、ぼんやりと瓦斯の火を見詰めたまゝ、自分が這入つても、遊つた形の如くにぢつとしてゐるのであつた。

「私はこゝへ鍵を落して行きはしませんでしたかね。」

「いゝえ、そんな物は落ちてゐやしませんでしたよ。見て御覧なさい、そこいらを。無いでせう。」と、もう口を利くにも倦きたやうに、そとの方を見るやうにしつゝ女は言ふ。

「困つたな。それではどこへ落したんだろ。家の戸口の鍵だがな。」

「ぢや中へ這入れないんですか。」

「なに、家主のところで合鍵を借りればいゝんだけれど。しかし困つたな。その内、こいらに落ちてでもゐたら取つといて下さいな。ね。」

「まあこの蟲。もう有張蟲が出るんでせうか。」と、女は他の事を言ひかける。

自分はぐづ〳〵しずに歩つて、標本屋へ這入つて鍵を借りた。さうして三階の室でマッチを擦つて蠟燭を附ける時分には、もうあたり前の自分になつてゐるのを見出した。一分間の後には、さつき何といふのか或酒を飲んだといふ事も忘れて、自分のエッセーに關する本を讀んだ。さうして一時を聞いて床に就く時に、パンドールの足下へ蠟燭を置いて、しばらく、まんじりと、壁に映るその塑像の女の、何とも分かぬ大きな影を見詰めて眠りを待つ事も、もとより毎日と變らなかつた。

かうして自分は常のやうに寢入つたのであつたが、夜中に、ふと、目の上に何だかもや〳〵と灯が射してゐるやうな感じを以つて目がさめて、寢てゐての譫覺なのかと茫とした目を開けると、どうしたのだらう、本當に灯がついて、ぼろ〳〵と物古く輝いてゐる。自分は驚にでもつまゝれたやうに目を見張つて、頭を上げて見ると、

「ほゝゝ、私よ。」といふ。自分は暗がりでふいと猫の目を見た時のやうにぎよつとした。黒い本の女が寒て、寢臺の見にしてゐる方の角に蠟燭を立てて、その下に蹲んで何をかしかけてゐるのであつた。

「愕いたでせう？　たうとう日附つた。大丈夫だと思つて蠟燭を點けたものだから。——まゝ、動いちやいけません。あら、駄目よ。落ちてしまふわ。御覧なさい。」といふ。自分の這入つてゐる蒲團の上がぎつしりと鮮赤な花を振り撒いて覆はれてゐるのであつた。

「ほゝゝ、また愕いていらつしやる。鑷子の花はお厭？」

女は平氣で微笑みながら、蒲團の裾の花の上に腰をかける。

自分は何にも言はないで息を吹いた。

「あなたはさつき月蝕があつたのを御存じないでせう？」

「一たいどうして、こゝへ這入つて來たんです。あすこは戸がかけてあつたのに。——あなたは私の鍵を持つてるな。」

「あんな厭な事をおつしやる。それならあの時にお返ししますわ。」

「でもあゝでも持つてゐなければ這入れないぢやないか。」

「そんなに平凡な事を言はれるのは厭。イッポリタは十階の屋根の尖塔に男の生首を隠しに上るぢやありませんか。繩もなしに、梯子もなしに。」

「さうしてこんな夜中にこの花を撒きに來たんですか？　夜中でせう？」と、一寸動くと花はぱた〳〵と肩から落ちる。

「でもあなたは嘘い人ね。月蝕の夜だとも知らないで眠つていらつしやつたあなたは日蝕のやうに嘘い人。」

「困つた女だね。」

「私がこんなに出し抜けに來たのがお氣に障つて？」

「さうぢやない、私は同情した意味で言ふんだ。しまひには自殺でもするよ、あなたは。」

「それは今夜でもしますわ。」

「……」

「目を閉つて何をお考へなさるの？」

自分は自殺といふ我が言葉が耳に這入つて、詛ひのやうに自らの心を黒く包むのを、悲しく見守らずにはゐられなかつた。もう永久に忘れるやうに自らに誓つて、さうして近頃漸く忘れ得てゐた兄の事を、圖らず考へ出したのである。今から思へば、今夜この女に、どれだけ自殺の話をされたか。何とかが毒を飲む。女が三階から飛ぶ。畫家が飛ぶ。さうして眞赤に碎けて死んだといふ。まだあつた。——そんな具體された事件をでも何でもない話のやうに唯聞いてゐたのに、今自分が言つた自殺といふ抽象の言葉によつてのみ、どうして自分は、自殺した兄の——もう忘れ遂してゐた兄の死を、詛ひのやうに考へ浮べたのであらう。

自分はかういふ事を自らに疑問しつゝ、因はれた如くに默してゐた。

「ぢや、私は歸りますわ。」と、女は間が惡くなつたやうに、急にしよんぼりして俯つ向きながら、子供が拗ねたやうに、指先で蒲團の上の花を突つ突いてゐる。

「もうお歸りなさい。」

「えゝ。」と、女は感ひにしめつた言葉になる。

「月蝕を見るために今夜起きてゐたの！」と、話の續きのない自分は、それがこの女に對して物りになりでもするやうにかう言つた。

「私ね、」と、女は大分俯つ伏したまゝ間を置いて。

「今夜はぢつと寢ないで物を考へてゐたんですの。さうして……あれですから……」と言ひかけたが、

「もう私何にも言ふのは厭。」と、投げるやうにかう言つて、側の灯影を見詰める時分のやうに、坐つた自分の肩を越えて立つ、パンドールの塑像を見守るのであつた。

「あの、女が押へてゐる壺の中には帝冠が這入つてゐるのでしたね？」

「どうですか。」

「また！」

「だつて知らないのが何と言へます。私はさういふ風な事は少しも知らんのだ。たゞパンドールといふ名を知つてるだけです。」

「もうそれでは私は歸ります。さやうなら。」

と、女はどうしたのか、間もなくつんとして、蠟燭を取ってずん〳〵出て行くのであつた。

「何です。どうしたといふんです。」

「知りません。」と、次の間へ出て行つて、こちらからは見えない、戸口の横の壁の根に、蠟燭を持つたまゝ佇みながら、

「どうしてそんなにまで自分の讀んでる事を隠し了す必要があるのでせう。私はもうあそこにどれだけいろんな本があるか、今夜ちやんと見ました。私がうちで話しただけの話なんか、みんなあすこにある癖に。」

「あゝさういふ事か。それで怒つたの？　けれどもあの本はね。

「もうようございます。見ない先から、こゝへ來る本屋の男にも聞きました。疾くに。」

「だつて、あれは死んだ兄の持つてゐたもので、自分が讀んだ本の中のアンダーラインを引いたところを、死後に人から見探られるのは厭だと、いつも冗談でもなく言つてゐたから、あゝして我が手に保存されてゐても讀みはしない。讀んだところで文學の本だから自分に分る譯もない。何で自分がそれ等の本の内容を知つてゐよう。」

かういふ譯を話さうとする間も與へずに、女は急に、

「ほゝゝ。」と考へ直したやうに笑つて、またこちらへ這入つて來る。

「あなたは、あのパンドールは最初の女だから置いていらつしやるのですか。それとも、すべての女を憎むためですか。」

「六つかしいね、あなたの言ふ事は。たゞ何がなし置いてるだけです。好きでもなく、憎いのでもなく。」

「冷たい方。あなたは冷たい方。暗い冷たい方。」と、手にした蠟燭の心のもや〳〵するのを見詰めたが、

「あなたはどんな女に戀をなさるのでせう。あなたが戀をなさる日には、このパンドールの像が動き出しますわ、きつと。」

「なぜ。」

「だつて私があの中へ私の心を入れて置くのだから。」と言ひつゝ、女はほろ〳〵涙を流すかと思ふと、つと板の間に蠟燭を投げ附けて、ずんずん外へ出て行つて了つた。

自分はまだあつけに取られて、そのまゝ暗い中にぢつとしてゐた。これが果して目さめた現實なのであらうか。暗がりにかうしてゐれば、何だか今のすべては、寢てゐた間に見た幻影のやうにも考へられる。

けれども事實である。すべてが事實である。自分は何だか自分で自分を知らないものやうに、蒲團の上を撫でて見た。花がある。散るために咲く花のやうに、ほろ〳〵しい繊芥子の花がふは〳〵とある。自分は、まだ女がそこらにゐるのではないかと思ひながら、はじぬて身を起して蒲團を出て、手探りに次の間へ行つて見た。

「ねえ。」と、から言つて見る以外には、名を知らない女なのだから呼びやうもない。

「ゐないのですか。」と言つたが返事をしない。

自分はテイブルの抽斗を探つて蠟燭とマヅチを出して灯を點けた。

女はゐない。何ものもゐない。もう歸つたのかしらと考へて、戸のところへ行つてハンドルを動かしたが、戸はきちんと鍵がかゝつてゐて開きはしない。自分は騙されでもしたやうに、そこに立つて暫く茫としてゐたが、と三階の窓からと言つた事がびしやりと冷水を浴びせられたやうに心を突いた。

自分は自分を忘れてつか〳〵と表に臨む窓のところに行つて、カーテンをめくつたが、何、まさかそんな事もと自分の愚きを消し静らしつ

つ、他の三つの窓をも見た。いづれも硝子がちやんと下りてゐる。併しどうして女は下りて行つたのだらう。同時にどうしてこの室に這入り得たのだらう。――自分は再びそれを考へずにはゐられなかつた。何だか女はまだこの建物の中にゐるのではあるまいかといふ氣がする。けれどもこゝにはどこと言つて隠れるところもない。

自分は鍵を出して入口の戸を開けて外へ出て見た。蠟燭を傾けた拍子に暗い足下にぼたりぼたりと蠟が落ちる。夜中の上り段は、深い洞穴の口のやうにひつそりと暗く淀んでゐる。女はこゝを上つて來て、下りれば下りたのだらうけれど。――併しもうどうでもいゝ。

自分は引き返して、それなり床に這入つて、困つた女がゐたものだと考へつゝ、パンドールの足下に灯を消した。

自分は翌る日目をさますと、何だかさうした夜中の事がみんな寢てゐるうちに見た、空しい影ではあるまいかと疑はれた。けれども、目を開いて坐つた朝の明るみにも、やつぱり赤い花は蒲團の上に散らばつてゐる。下にもばら〳〵散つて澤山落ちてゐる。室の片隅を見ると、かうした花を入れて來たらしい、蔓で編んだ大きな籠が、そのまゝに置かれてゐるのであつた。

自分はそれから麵麭を食べて、戸口の鍵をドして學校へ行つた。さうして、またいつものやうに何事も忘れてゞ方の穴倉を出たが、やがて、夕飯を食はうと心づくと、あゝした、鏡芥子の女の事を考へ出して、もう面倒臭いから、これからはあの家へ行くのはよす事にして、ほかで食事をした。

それから三階へ歸つて來ると、机の上に何か紙切がインキ壺で押へて置いてある。自分はこんな物をかうして置いて出やしない筈だつたがと考へつゝ、紙の裏を見ると、おや、また來のだ、またこゝを開けて這入つて來たものらしい、さうしてこゝにあるペンを取つて書いたのであらう。

「パンドールの像の動く日のために。」とフランス語で書いてある。パンドールの像が、自分の戀をする日には動くと女は言つた。どんな人を戀するあなただらうと言つた。その日のために。――何の事だか。その日のためにどうしたと言ふのだらう。

まあ何でもいゝけれど、また今夜も來るのかしら。五月蠅い女である。今夜は言ふ。もう決してあなたとおつきあひはしたくないと言つてやる。――そんな女と交際ふには第一に時間に餘裕がない。もとは自分があの女の酒を貰つて飲んだりしたのが惡かつたのだけれど、併しもう來させない。ろくに知り合ひでもないのに馴々しいと叱つて歸してやる。

かう考へつゝ、着物を着換へに次の寢室へ這入つて見ると、放つた儘にして出た蒲團がちやんと寢臺の上に疊まれて、昨夜の花なぞは、すつかり籠に拾ひ入れられて一隅に置かれ、疊に一つの散らばつた花瓣もなく綺麗に掃除がしてある。いろんな眞似をするものだ、自分は、弄ばれてゐる樣に不愉快な心持がした。

やがて自分は戸口をかけて、テイブルにかゝつて物を讀んでゐると、こつ〳〵と入口の戸を叩くものがある。そうら來たと思ひつゝ、しばらく相手にしないでゐて見ると、頻りにこつこつとやる。自分はむつとした心持を押へて戸を開けた。

「どうもすみません。」と小さい女が立つてゐる。

「だれだ。――お前か。」

例の女の家に使はれてゐる小女であつた。

「何の用事だ。」

「いゝえね、あの唯これをお渡しして歸ればい

いのでございます。」と、何にも書いてない、洋紙の封筒を出すのを受取つて、
「よろしい。歸つて行け。」と自分は言つた。中には自分の忘れた鍵が這入つてゐるのであつた。
「あゝ、それからね、これからは一切、もう二度といたづらをしに來てはいけないつて、さう言つてくれ。いゝか。」
「だれにでございます？」
「あの女にさ。」
「あら、何もいたづらをしたんぢやございませんわ。この鍵はあなたが落していらつしやつたのを、あの方が拾つて置いてくれたんですのに。」
「それはいゝんだけど、こゝへ出て來てはいけないとさう言つてくれ。」
「さうですか。でももう私方にはいらつしやいませんのですよ。今日出ていらつしたんでございます。あの方がこゝへおいでになつた事があるんですか。」
「何、別に來たといふ譯ではないけれどね。」
「でも少し變つていらつしやるのですからね。何だか氣ちがひ見たいな時がありますよ。夕方になると一時間でも二時間でも二階の外の出窓へ出て立つてゐたりする事がありました。」
「とにかく、出て行つたつて、また歸つて來たらよくさう言つてくれ。」
「でも、歸つていらつしやりやしません。遠いいところへ行つて了ふんだつて言つてましたもの。」
「どこへ。」
「白い鳥ばかりゐるところへ行くんだとか言つてましたわ。」
「ふゝん。」と、いつまでも厄介な女だと嘲るやうと言ふと、
「あら、本當ですわ。あの人はお金をいくらでも持つてゐるお孃さんですもの。どこへだつて行きますわ、あなた。でも白い鳥の澤山ゐるところがどこかにあるんでせうか。」
「どうだか。——もういゝからお歸り。」と自分はいゝ加減に追ひたてた。
「それではさやうなら。」と、何事も知らない小女は辭宜をして下りて行つた。
自分はそれで面倒を拂つたやうにすつとした。さうして、それきりで、もう煩る日からその女の事を消したやうに忘れてしまつた。それからは、誰にも來て邪魔をされる事もなく、前のやうに、一切人と口を利く世話もない自分に返る事が出來て、例の薄暗い心に朝出ては、夕方またのそ〳〵歸つて來て、パンドールの足下に灯を消しては寢るのであつた。
けれどもそれから幾月か經つてから、この建物の三階の間も、すつかり標本屋の仕事場に使はれる事になつて、となりの事務室と共に立ち退きをしなければならなくなつた。
それは二月二十いく日といふ日と、丁度雪解のした午後であつた。自分がそこから今ゐるところへ引つ越して出るために、下へ一臺の荷車が來て、荷造りをするものが二人で以て、すつかりの物を縛り上げた。自分も一緒に手助けをしたが、何より兄の形見に遺したパンドールの像の壞れるのを怖れたので、自分で標本屋から箱を貰つて來て、鉋屑を詰めて入れることにした。さうして、いざ收めようとして、像を抱へて一應臺の上に下しかけると、何かかさと下へ落ちたものがある。
併し別に何もそこにあつた譯でもないから、何の氣もなしに像を箱に入れて一息してゐると、寢臺の頭の臺の下に、金の、丸くなつたやうなものが落ちてゐる。拾つて見るとそれは指輪であつた。どうしてこんなものがと、いろ〳〵考へて見たけれど、どうしても像の足の下に隱

れてゐたのであるより外には、これが今日まで目に見えずにこゝらにあり得る譯がなかつた。併し、それにしても、これだけのものが下に挾まつて、像が安定な位置で臺の上に載つてゐる譯もない。自分は訝しみながら、鉋屑を掘つて像を取り出して、足の下に着いてゐる圓板の裏を見た。すると、そこに穴が開いてゐる。後からナイフでぐり〳〵掘り穿めた穴である。指輪を入れて見たら、丁度きつしり這入るだけ掘つたのだと思はれた。
二人の人足は、
「さあ濟んだ。第一この寢床から積まう。」と言ひつゝこちらへ這入つて來かけた。
自分は少らく人足等の這入るのを止めて、像をその儘にしたまゝ、ぢつとそこに突つ立つて考へてゐた。
「パンドールの像の動く日のために。」
話はこれだけの事である。
その指輪は今でも自分のそこらの箱の中に收めてある筈である。返さうにも返すべき相手に會ふ事が出來ないのだから仕方がない。白い鳥のゐる國へ行くと言つたとかいふあの女は、どこかで相變らず例の調子で、三階から飛べとかいふやうなことを言つて、自分のやうなものを脅かしてゐるのだらうけれど、もとよりどこにゐるといふ事も分らない。自分は矢つぱり例のやうに、穴倉に出入して仕事をしてゐる。平生そんな女の事なぞを考へ出したりする程閑もない。たゞパンドールだけはいつまでも好きである。
それは足の下から指輪が出たずつと後に、或日、兄の本の中に「メタモルフォーズ」といふ、フランス語で書いた本があつたのを、物のついでにちらと開けて見ると、それには何もアンダーラインが附けてないから讀んでもいゝと思つて、何の本か讀んで見たら、昔の神話の詩篇であつた。作者は紀元前四百年時代に黑海の海岸の蠻土に暗澹たる晩生を了へた羅馬の詩人だといふ事が、序文に書いてあつた。原文はラテンなのである。
それはどうでもいゝけれど、この本を少しばかり讀んでゐる内に、ふとパンドールといふ名が見えたので、おやと思つた。自分はそこを讀んで、はじめて毎日自分の寢床に附き添うてゐる女が、どうした女であるかを知つたのである。それは造化のはじめ、諸々の生物を造るために地に下された、ジャペの子エピメテが、最後に水と土とを用ゐて人を作つたが、それに生存の能力を授けるとて、兄のプロメテに謀つて、兄に、天の日の動く車の火を盜ませて持ち來らしめ、人間に火といふものを與へたので、その罪を罰するために、神の首長が、天上で一人の「女」といふものを造り、人間の最初の女としてエピメテに下し嫁せしめたのがパンドールである。パンドールは神の首長から封じた壺を授かつて下りて來た。
エピメテはいかなる事があらうともその蓋を開いてはいけないと固く禁じてゐたのだけれど、パンドールは、その中に何があるかを見たさに、遂に竊かにそれを開いて覗いた。女は愕いて、あわてて再び蓋を押へたが、それはもう遲かつた。女が壺を開くと共に、その中に封じられたる、人間の肉體を破壞するためのあらゆる害毒と、内なる心を腐蝕するすべての罪惡とが、一度に飛び出して人間の間に瀰漫して了つたのである。かくしてたゞ希望といふものが、パンドールが愕いて閉ぢた壺の底に、たつた一つ取り殘された。だから今に人間には、僅かに希望だけはいつでもあるのだといふのである。自分は、自分の寢床の上に立つ女の意味をはじめて解して面白かつた。
それからプロメテも、弟のために火を盜ん

だ罪で、永久にコーカサス山嶽の頂上に鎖で縛りつけられて、その肝臓を禿鷹といふ鳥が啄き出して食ふに任された。不幸にも彼の肝臓は食はれる後から直ぐまた出來る。禿鷹の子孫はプロメテの生命と共にいつまでも絶えない。だからプロメテは永久に縛せられて永久に肝臓を食はれるのだと書いてあつた。

自分は相變らずバンドールの足下に蠟燭を滑して寢床に這入る。さうして希望、希望、と、時々その押へた壺の中のものを考へつゝ寢る事がある。

「バンドールの像の動く目のために。」

また引つ越しでもすればこの像は動く。けれども引つ越しは面倒だから出來ればもういつまでもこゝに籠つてゐたいと思ふ。

自分はあの女が言つた、戀といふものにはまだ落ち得ない。從つて戀の印に使ひ得る例の指輪は、いつもどこかにそのまゝ納つてあるきりである。

（明治四十四年四月）

月夜（六）

「それでもゐましたと、しかしね。」と、さつき女が自分が行くにつれて、俄かに後になつて了つた事を話すと、伯母さんは笑つて、

「それは月の光りのせゐでせう。霧があるとそんなに見える事があるわ。いつだつたか、私も夜お二階から下を見ると、シートが一枚竿にかゝつてゐたから、下女に取入れて來いといふと、けふはシートの洗濯はしないといふのでせう。だつて出てるから入れといてくれとさう言うて、下へ來て見ると、月の工合だつたんで笑つた事があつてよ。」と言ひつゝ、伯母さんは毎夜の附添に寢足りないで、力なささうに疲れたからだを柱にもたせてゐんだ。

「お母さんは、まだ目をさましませんか？」

「よくお寢つていらつしやるわ。」

「では月のせゐでせうね。」と、自分は再び先の事を考へつゝ石段に立つた。

二人が何んにも知らずにたゞかうして休息してゐる間に——その間に、母はハンケチで以て自殺して、冷たくなつて寢てゐたのである。——

その時の事は言ひたくない。母は氣が狂つてゐたのである。よくさめ〳〵と泣くのもそのためであつた。

書置はたゞ二行、鉛筆で書いてあつた。それは——白い着物を着た西洋人の女がうるさく呼ぶから附いて行く。きつと私を厭なところへつれて行くのだ。三つちやんさやうなら。——と自分の名が書いてあつた。

その書置はいまでも自分の手に殘つてゐる。

（『赤蜻蛉』より）

午後（一）

私はどんよりした午後の町をぶらり〳〵歩いた。

黒ずんだムードに鎖されつゝ、書くべき筋を頻りに考へ續けてゐるのだけれど、氣が附いて見れば何を考へてゐたのか分らない。どこをどう來たともなしに、汚いがた〳〵の店ばかりの續く、剝げたやうな町筋に這入つてゐる。

こんなものを、どんな女が買つてどんな女がまた買ふのか、脂じみた、女の不斷着が一枚、古靴や古足袋の洗つたのを並べた店先に、小寒く下つてゐる。

金魚

町に金魚を賣る五月の、かうした青い長雨の頃になると、しみ〳〵おふさのことが思ひ出される。今日も外にはしと〳〵と蜘蛛の絲のやうな小雨が降る。金魚の色ばかりを思ひ浮べても物淋しい。おふさを思へばうら悲しい。

二人はあの青山の裏町の、下二間と二階一間とだけの小さい家に住んでゐた。

はじめて世に出す作にかゝつてゐた私は毎晩夜學へ講義に行く外は、妻はいちんち二階に籠つて一字々々に血も黑くなるやうな思ひをして、一つところを消したり直したりばかりして、狂人のやうになつて書いてゐた。おふさはその間下でたつた一人、しよんぼりと、下手な手習ひなぞをして坐つてゐた。今から思へばそれも半分は體の惡いせゐだつたのだらうけれど、おふさはその頃はしよつちうはき〳〵しない顏ばかりして、鬱ぎ込んでゐた。

私にはおふさのさういふ心持も分つてゐた。おふさが私のところへ來てゐることが母親の方へ知れてからは、絶えず手紙で以てしつつこく責められて、一ん日も延び〳〵した心持がしないらしいといふことは私も察してゐた。それでも私はあれの母親が何と言つて來ても、おふさには手紙を出させなかつた。しまひには母親は私へ當ててさま〳〵のことを言つて來る。そんなものはおふさには見せはしないけれど、母親からの手紙だと見れば、何が書いてあるかはおふさにも分る。そんな事で、私に對してもすまないすまないといふ念が、おふさの心を痛めて來るといふことも分つてゐた。けれども私は書かうとする事がうまく書けないと無暗にいらいらして、そんな事に思ひやりもなく、罪もないおふさに當り散らすことが度々であつた。くさくさして下へ下りて來てもおふさがたゞ自身のことばかりを考へ入つてゐるやうに、涙ぐんだ目もとを伏せて、火のない火鉢の傍に坐つてしよんぼりしてゐるのを見ると、私は、おふさが、私と私の事業とに何の同情も持たないで、自分勝手のことばかりにくよ〳〵してゐてもするやうに思はれて、一人土の中にでもゐるやうな、ゐたゝまれない寂しさにいら〳〵して、おふさの沈んだ顏是に愛の解れ下つてゐるのをかこつけに、もののたしなみのない、自暴落な女だと言つて八釜しく叱りつけたりした。私がかれこれ半歳も入院した後だつたので、行李の中の二人のものが一つもなくなつてゐるやうな貧しさも、私にひがみを起させた。或時はおふさの態度を曲解して、そんなに貧乏が辛いくらゐなら、こんなところにゐないで出て行つてしまへと言つて、夜遅くおふさを突き出さうとしたこともあつた。

その他に、いろんなことで隨分無理を言つてがみ〳〵叱りつけたのも、今から思へばみんな私が惡いのだけれど、その時には、一途におふさを惡んで當り散らした。それでもおふさはすべてが自身の罪のやうに、どんなことをされても言はれても、たゞ默つて怺へてゐた。時には私も、おふさをひどく叱りつけた直ぐあとで、自分が無理だつたことを悔いて、おふさが涙を隱しながら、かひ〳〵しく使ひなぞに出て行つたあとに、私は先刻まで彼女が仕かけてゐた乏しい解し物が束ねてあるのを淑しく見守りながら、自分のやうな男の妻になつた彼女の運命を、憫れと思ふ事も度々あつた。

けれどもその時分の私は、遂に自分自身よりより多く憫れなものを知らなかつた。私は先の女についておふさに打ち明ける事の出來ない或深い苦痛を抱いてゐた。而もそんな中で、一行一行に血を吸ひ取られるやうな思ひをして、苦しい作を續けなければならなかつた。私はおふさを叱りつけたりした後に、いきなりおふさの手を取つて、一人とめどなき涙に暮れることもあつた。私が泣けばおふさも譯を知らないなりに私のために涙ぐんだ。おふさは、自分より外にはだれ一人私がたよりにするものがないのを知つてゐた。私がどんな事をしても、どのやうな事を言つても、おふさはそれが當然のことのやうに默つて受け入れてゐた。

併し、私だつてたゞ苛々した心持ばかりで生きてゐた譯でもない。二人はやつぱり年若い夫と妻とであつた。おふさは今でも、私のために辛かつた事は忘れ盡して、たゞ、女として與へられたいろ〳〵の享樂をのみ考へて眠つてゐてくれるやうな氣がする。それだけ私は、彼女に對して一つも夫らしい仕向けをしてやらなかつたかのやうに、おふさに與へた苦勞ばかりを追憶して、いぢらしいあの女の不仕合せな命數を憫れに思ふ。何が彼女の得た享樂ぞ。物蔭に置かれた黒ずんだ鉢に、咲いて萎れた、質素な花のやうに寂しいあの女よ。

不仕合せなおふさは私の作がやう〳〵出來上らうとする時分になると、或日どこがどう惡いともなくふら〳〵と床についた。私が作に浚つてゐた長い間のいろんな氣苦勞に疲れたためだらうと私は憫れに思つて、何もくよ〳〵しないで當分ぢつと寢てゐて見るがいゝと言つて、やさしく介抱してやつた。おふさは牛乳は厭、何は脈だと言つて、何をも食べようとしない。何にも欲しくはありません、たゞかうしてぢつとしてゐさせて戴けばその内には直りませう、あなたは私のことなぞに心配をなさらないで、ついでに早く書き上げて下さいと言ひながら、無理に起き出て、私の食事の世話をしてくれたりする。或ときはもうすつかりよくなつたやうな氣がすると言つて、床を疊んでつれ〴〵の編物なぞをして坐つてゐた。

それは丁度かういふ青い小雨の續く或日であつた。私は朝から二階に閉ぢ籠つて書いてゐた。外を見ると、窓のぢき前の、黒ぼけた屋根に張つた蜘蛛の巣に、絶らに溜る程の小雨が、絶え間もなくじめ〳〵降り頻つた。

それが、午後になつて不圖氣がつくと、いつの間にか、空の眞つ青い雨上りとなつて、久しぶりで、黄色い生々した日影が、窓に迫つた屋根瓦の、黒い濕り氣の上に射してゐた。

見ると、そこには、下から覗いた桐の梢の、潤ひ重なつた青葉の蔭に、雀の子が一匹、珍らしく探し當てた日向を嬉しむやうに、枝から枝に飛び移つて餘念もなく戯れてゐる。

すると下からおふさが上つて來て、雨が晴れて氣分がからりとなつたから、そこらあたりまで出て、買物をして來たいといふ。私が、勞のいゝ返事をすると、おふさは子供のやうな笑顔をして下りて行つたが、それから大分經つても容易に門口の鈴の音がせぬ。もう出かけたのかしらと、息休めの旁下りて見ると、一つしかない不斷着の帶を、着換へたネルの着物の上に結んだおふさは、小晴い三疊の鏡臺の前に俯つ伏して泣いてゐる。どうしたのかと訊けば、おふさは涙に汚れた顔を上げて、髪が澤山抜けるから悲しいといふ。こんなに、いくらでも抜けるんですのと言ひながら、油染みた櫛に引つかかつた抜け毛を見せる。片方の手にも、抜けたのを溜めて持つてゐる。私は、そんな下らない事に泣く奴があるものかと、わざと作り笑ひをして言ひながら、行くなら早く行けよと勸まし

て出したけれど、さうして出て行く後ろ影を格子越しに見送つて、おふさが前と較べて、くつきりと力なげに痩せたのを見て、それがみんな自分のした事のやうに、濟まないやうな憫れな心持がした。いつもは見馴れて何とも思はないでゐたけれど、今氣がついて見ると、いかにも腕い妻になつてゐる。何を買ひに行くのだか私もそこらまで附いて行つてやらうかと思ふ。けれどもその内におふさは露路を出てしまつた。

私は再び二階へ上つたけれど、おふさが歸るまでは何だか落ちつかれなかつた。書きかけてもペンが動かないので、紙の上へ意味のない惡戯書きをしてゐる内に、いつしか、憫れなあの女の、私についての長い苦勞のあとが、考へるともなく考へ浮べられた。

どこまで行つたものか、いつまでもおふさは歸らない。もう屋根に當る日足も段々と夕方に近く蔭ばみになるのにまだ歸つて來ない。私は氣になるから表通りまで出て、傘屋の店先に立つて、通りの兩方を見廻した。

すると丁度向うからおふさがとぼ〳〵と歸つて來る。金魚を買つて來たらしい。硝子の入れものを絲で下げて、しよんぼりと歸つて來る。私は二人がより早く近づき得るために、こちらからも歩いて行つた。

どこまで行つたのかと訊くと、私どうしたんですか、歸る途中で急に息が苦しくなつて歩けなくなつたものですから、どうしたらいゝかと思つて、少らくあそこのところで休んでゐました、すみませんがこれを持つて下さいませんか、と、金魚の入れものを渡すのであつた。眞つ蒼い苦しさうな顔をしてゐる。何ならこの足で直ぐ醫者へ伴つて行つて、見て貰つて來ようぢやないかと、私は氣を引き立てるやうにさう言つたが、それよりも早く家へ歸つて横になりたい、醫者へ行かなければならないやうなら、明日にでも行けば濟む事だからと言つて、おふさはその儘一緒に家へ歸つた。

おい、大丈夫か、しつかりしろと、私は障子につかまつて上るおふさにさう言ひながら、押入から蒲團を出して敷いてやると、おふさは、おや、すみません、あなたにそんなことをして頂いてはと、そのまゝ崩れるやうに蒲團の上に伏せつたかと思ふと、不意にがぶりと敷蒲團の上に血を吐き出した。

その時の私の愕きを、私は今でもたつた昨夜の事のやうに目に浮べ得る。ぢつとしてゐよ、かまふものか蒲團ぐるみ、もう吐きたくはないか、いゝのか、と言つたきり、自分も涙ぐんで、おふさの俯つ伏した背中を抱くやうにしてゐた。おふさはおろ〳〵と泣いて、私はもうどうなつてもいゝけれど、私が寢つけばあなたのお仕事がと、儚かにさう言つて、絶え入るやうに泣き崩れた。

その夜、私はぢつとおふさの枕元に坐つたまゝ、おふさが力のない目を閉ぢて、やう〳〵と微かな寝息になつた蒼ざめた眠りを見護つた。私は夜中過ぎまでまんじりともせずに、夜が更けると、おふさはかうして何日かの後にたうと亡くなつてしまふのではあるまいかと考へた。枕もとには、夕方おふさが買つて來た金魚が、夜つぴて藥罐と共に並べて置いてあつた。

金魚の色はいつ思ひ出してもうら悲しい。おふさを思へばうら悲しい。

（明治四十四年六月）

瓦

一

私は老い剃げた一枚の瓦を持つてゐる。それは私が、自分の家の古い倉を忘れ得ない印に、いろ〳〵の自分のことの忘られなさに、わざわざ倉の屋根へ長い梯子をかけさせて、一枚剃ぎ取らせて持つて来た瓦である。

丁度秋も暮れて行く夕方であつた。その老いた屋根の上に生えた草の、から〳〵に耄けたのから、鳥の生毛のやうなものがふは〳〵と飛つのが、そのとき、梯子の下に淋しく孑んでゐた私の上を力なく落ちて、薄い黄昏の中に見えなくなつた。あの剃げ古けた倉は容易く忘れ盡されはしない。あの倉の事を考へれば、私の長い間のさま〳〵の事が、にじむが如くに思ひ返される。

私は母が亡くならずにゐた日の事は何一つ知つてゐる譯もない。私にどんな母がゐて、どんなに私を育てゐたかを記憶し得るには、餘りに早く母は亡くなつた。祖母は、私が長じてからでも、母の事に就いては、たうと何にも話してはくれなかつた。私が自分の幼い日を考へ出し得る限りでは、私は最早母といふものを奪はれてゐた子供であつた。それから間もなく父も亡くなつて了つた。私と小さいお文とは、昔から薄暗く古りて来たやうな、どんよりした、使はない室のいくつもある中の一つに、祖母と、それから、久しく使はれてゐる、髪の毛の少ない、何とか言つた女中と二人に傳られて、藤にばかりゐる小鳥のやうな目を見つゝ、夕方になるとすぐ寝間着を着せられて、早く寝かし〳〵させられた。

私は、表口の、桐の木が二本ある門の内側に、乏しい日向に薄べりを敷いて坐つて、狐の面なぞを被つたまゝ、お文を抱きかゝへた女中に、千代紙を切り抜いてもらつたりしたのを微かに記憶えてゐる。さうした、外の土の上ですら、何となく、いつも古い代のやうにどんよりした家であつた。十二月から二月へかけては、そこの桐の木の、小寒い實のがら〳〵に黒ずんだのへ、稀にも人通りのない裏町なれば、唯しと〳〵と、晝も小暗い雨がよくふり續いた。さういふ季節には、さらでもの一間々々は、餘計にどんよりと薄ら寒かつた。私はしば〳〵、ぢつと坐つたきりの祖母にあやされるのにも飽きると、中戸の格子のところへ出て、下駄の上に下りて、お文を負つて使に出て行つた女中の歸るのを待つとしもなく待ちながら、一人しよんぼりして、昨日も今日も降る雨を、ぢつと見て立つ事のあつたのを忘れない。外の門のくぐり戸には、鮑の貝殻が、長短の絲に釣して下げてあつて、人の出入りの開け閉てに、がら〳〵と鳴るやうにしてあつた。

私は、お文が生きてゐた頃の小さい自分に關しては、こればかりの事しか考へ出せない。お文といふ名は早く亡くなつて了ふ子の名であつたのか。このたつた一人の女の子は、まだろくに立ち歩きも出来ない内に、永久に、母のゐるところへさそはれて行つたのであつた。

私はその内に、學校へあがつて、罫紙の帖に、假名の文字を一つ二つ宛おぼえて来る程の年となつたけれど、祖母は私が他の子供の仲間に加はりに外に出て行く事を許さなかつたゆゑ、學校から歸れば、矢つ張り小さい時と同じに、家の

中で祖母や女中と薄暗い毎日にゐる外には、友だちといふものも持たなかつた。祖母は、私が一寸土の上に下りて、指先で土を弄つたりしても、汚いと言つて直ぐに叱るのであつた。かうして、性來あんまり口を利かない、默つた子供であつた私は、終日大方家にばかりゐて、しかも女の子かなぞのやうに、一間の中にのみこそこそしてゐるやうな子供であるより外はなかつた。私がだん〳〵と祖母たちの見る目から遠れて、裏の小暗い倉の中なぞに、しんめりと一人ゐる事を求めるやうになつたのも、そろ〳〵この時分から微してゐた。私はこのときには、ただ、祖母に見咎められないで、自分のしたい位の出來るために、よく、黒ずんだ廊下を傳つては裏へ行つて、こつそりと、倉の前の潦喰の上に下りた。

そこは祖母のゐる方から見ると、丁度、いつも雨戸の閉つたまゝの――私のまだ這入つて見た事のない――とある一間の藤になつてゐて、潦喰から倉の石段の上へかけて、書でも夕方のやうにどんよりしてゐた。こゝへ來れば、何をしても祖母には見えない。跣足で下りても見るものはない。下りて左へ這入ると、倉の側面と、二階建になつた隣りの裏座敷の壁との間に、一間位の幅の空いた地面が、向うの角まで深まつてゐる。その突き當りが、裏へ出るくぐり戸になつてゐたけれど、その戸は釘附けにされてゐて、朽ちかけたなりに開かなかつた。裏へは他の方から行くのであつた。裏には無花果の木なぞが澤山植つてゐるのだつたが、いつもは、あちらの通ひ口も閉ぢたきり、誰も一寸も行かなかつた。

私はかうした倉の脇の、どんよりした物藤にこゞんで、一人土なぞをいぢくつた。土を見ると、雲の固まつた塊が、二つの高い壁に狹く區切られて見える。足もとの土の中には、剃げた榮螺の喰ひ殻がごろ〳〵埋まつてゐた。私は小さい手に古釘なぞを持つて、その貝殻をいくつも掘り出して、水を入れて并べたり、古けた壁の裾の石の下に、蟻の穴の開いてゐるのを見出して、土を掘りかけて閉ぎ〳〵しても、直ぐに藻掻り出てちら〳〵走る蟻をなぶりなぞして、一人こゞんでゐるのが好きだつた。

すると、私がゐないものだから、女中がのこ探しに來る。廊下の端まで來て呼び探してゐるのを、ぢつと隠れて立つて、壁の上皮の剝げたところを爪でほじつて、赤土の粉をほろりほろり落しながら、わざと默つてゐると、女中はこゝにはゐないものと欺されて引き返して行く。私はさうして置きながら、もう、いつまでもかうやつてゐるのにも飽きると、誰も自分をこゝまで目つけに來てくれないのが、見捨てられでもしたやうにうら淋しくなつて、その内にほろ〳〵涙を出しながら祖母のゐる方へ歸つて行き、半は面當にしく〳〵泣いて見せる。それを祖母や女中が、どうかしたのかと氣遣つて、色々に問ひ尋ねる。私は默つて頭を振りながら、矢つぱり泣き拗ねてゐる内に、何かしら本當に物悲しくなつて來て、しまひにはひし〳〵泣き入るやうな事があつた。けれども私はどうしてそのやうに泣くのか、それは自分でも分らなかつた。

このやうにして私は、涙に汚れた顔をしたまゝ、泣き疲れると、知らず〳〵それなりそこへ寝入つて了ふのが癖だつた。やがて不圖目を開くと、もういつの間にかあたりはとつぷり暮れて了つてゐて、着せかけてある祖母の半纏の、襟元のほろゝ寒さに坐り直ると、祖母も同じく、薄暗がりにぢつと坐つたまゝでゐる事があつた。

「もう目がさめたかのい。」と、祖母は私の淋しい眠りを見守つてゐたやうにいふ。押入の内に

は、祖母が夕方々々に亡き母とお文とに供へる臀ひの線香が、ぽつちり、赤い點になつて點つてゐる。そこへ下女が何處かから歸つて來て、

「まあま、清みませんでござんした。」と急いであかりをつけて、夜食のものを運ぶまで、私は祖母をいつまでもその暗がりに坐らせて、膝頭を私に貸してぢつとしてゐさせた。私はさうして寢ころんで、障子の外の八手の木の上に、黑ずんだ倉の屋根より低く、早い夜の星が一つ、母のない私のやうに、ものさびしく消え〳〵に出てゐるのを、默つて見守つてゐたいのであつた。

「さ、頭を退けておくれ。もう火を點さうに。」と祖母が言へど、

「まだい〳〵。」と、私はいつまでも暗がりにさうしてゐさせた。

私はこの時分、夜寢る前に、好んで祖母にしてもらつた話を、今でもちやんと記憶してゐる。何かなし暗い淋しい話が好きであつた。祖母はそれとは知らないで、私を悦ばすために話すのだつたらうけれど、私はそれを聞いてうら悲しくなるために話して貰ふのであつた。さういふ話を聞いてゐると、ほろ〳〵と涙が出る。涙を見せれば祖母が知る故、私は隱して涙を拭き〳〵聞くのであつた。女中は次の間に坐つて解しものなぞをする。その手元へあかりを送るために、間の襖のところに置いて、こちらに遠い行燈は、燈心押へのお狐さんの影を大きくぼんやりひろげて映して、及ぶ灯は暗かつた。私は祖母がする話は一寸した何でもない事でも直ぐさびしかつた。

その頃女中がよく歌つてくれた歌の一くさりをも、私はまだ忘れないでゐる。

「お萬來い〳〵おいろをつれて、おいろ來たとて遣るもな無いが。」といふ歌を、その髪の毛の少ない女中は、私をつれて外の町筋を行くときなぞに、小さい聲で歌つて聞かせた。そんな歌だつて、祖母が、もう私が目を閉つたから寢たのだと思つて、あちらへ行つた後に、一人まんじりして考へれば、

「狀の上書讀んでくれ、おいろはゐないと書いてある。おいろは死んだと書いてある。」といふ文句なぞの、狀の上書といふのが何の事だかも分らないなりに考へれば何でも淋しかつた。

私は今でもさう言つたやうに、何でもない事が薄ら淋しく考へ入られるやうな、しんめりした自分を見る日が時々ある。さういふ日には、日に入るものが、何でも、私と同じ灰色の心持を抱いて、しつとりと私の考へる通りを考へてゐるやうに見えて、どのやうなものをでも、ぢつと見守つて行きないではゐられない。見るものが一つ〳〵何とはなしに淋しく戀しい。私がひとり出て行く夕方なぞに、やはりとぼ〳〵と私の前を行く人があれば、その人が違ふ方へ曲つて見えなくなると、何だか私が思ひ護つてゐてやらなければならぬ人のやうに、その人に就いて見たものを考へ入りつゝ行く事なぞがよくある。風いてゐた下駄、肩の形、提げてゐたものの色合なぞを考へて行く。その行く手に貸家の札があればそれがまた何とはなしに戀しい。その文字が下手な文字ならそれが戀しい。鳥籠に鳥がゐれば、ぢんで見る。貧しい魚屋の店先に、小魚が乏しく并んでゐても立ち止つて見る。

さうして何となく淋しく物戀しい。

私は時々のかういふ心持の直ぐ裏には、小さい時に、さきに言つたあの女中や祖母と、ひつそり暮してゐた日夜の自分が、直ぐに續いてゐるやうに思はれる。

二

けれども、最早それは何れも久しい昔の事と

なつた。何だか、さういふ頃の自分といふものは、それが長じてからした今の自分になつてゐるのだと言ふよりも、その頃の自分は何れの日までもその儘に――別に小さい自分といふものを――隔つた年代の向うに薄暗く納つて置いてゐるやうな氣がするのである。

私はそれから段々に十ばかりになつて三千代がたま〳〵家へ託されて來る迄ほど、このやうにしてどんよりした日にのみ生きてゐたやうな、弱々しい小さいものの如くに、たつた一人の祖母と、さつきの髪の少ない女中とに傳られて、灰色な靈と夜との下に生ひ立つて來た。

私は、三千代がどんなにして家へ伴れられて來たかを記憶してゐない。私の忘れる事の出來ない女となるべきものが、いつの何月から私と同じ祖母の膝下に置かれるやうになつたのだつたか、それもはつきり考へ出せない。私が三千代との間に就いて考へ浮べ得る最初の記憶は、たゞ彼女に對しての、小さい自分のムードだけである。二人は互に長じて後の、二人が落ち入るべき約束を考へ得る筈もなく、たとへば同じ一つの鳥籠に、灰暗い小さい鳥と、色のある異つた小鳥とが、何の疑きもなく入れられてゐでもしたやうに、祖母といふ一つの壺の水と餌を、別々の態度に食べてゐたやうな二人であつた。私は三千代を何となく好かなかつた。三千代は髪のふさ〳〵しい、しつとりした黑い目をした子の癖に、何うしてか、何をするのにも容易くは私の言ふ事に從はなかつた。

三千代は私よりも二つ年上の子であつた。私が、どういふ譯で伯母が三千代を私の祖母の手に託したのだつたかを知つたのは、ずつと後に、三千代が最早一人の女になつてからの事である。小さい間には、もとよりそんな事を詮索する譯もない。祖母はこの女の子を受取つて、何と言つて私に話したものだつたか、それは私の記憶にない。

私は三千代が未だ學校から歸らなかつたりして、一人で相手もなくゐる時には、何だか三千代のゐる事を求めて、三千代が好きになるのだつたけれど――子供ながらにも、三千代の睫毛の長い黑い目だつても何となく好きだつたけれど――二人でゐると、一寸した事にも氣に喰はない事が多かつた。

「かうするのだのに。」と私が言へど、三千代は聞かないで默つてゐる。私は直ぐに、物が自由にならないやうな、暗い心持になつて、背中を反けて、默つて一人で事をする。さうしていつまでも物を言はないでゐる内に、三千代はいつしかその長い睫毛に涙を潤ませて、一つところをぢつと見入つてゐる。赤い下駄の緒の跡の附いた足袋をして、斜に坐つて、ぢつと目を伏せて、一つところを見入つてゐる。さうして、いつまでも私のいふ通りをしようともしずに默つてゐる。

このやうにして私は、三千代が厭になると、かういふ女子が、自分の祖母によつて自分と同じに劬られてゐるといふ事に、何だか自分の分前が減ぜられて損をしてゐるやうな、忌々しい心持を見るのであつた。

私は、三千代が小惡さに、彼女のカナリヤを殺して了つた事があつた。三千代は同級の或女の子の家から貰つて來た一匹のカナリヤを――澤山に孵化つた子鳥の一匹を貰つて來て――籠に入れて飼つてゐた。

それを三千代は一人で大事にして、私が貸せと言つても貸さなかつた。柱にかけてあるのを下して見せろといふだけの事をでも、鳥が怖れるから厭だと言つて、聞かなかつた。祖母にねだつても、一つゐればいゝのだと言つて、私のにするのを買つてくれない。私は三千代の小鳥が惡かつた。

それはどういふ事からだつたか忘れたが、或日私は、何かの事で三千代と言ひ爭つて、さういふなら、お前さんは家の子ではないのだから、もう行つて了ふがいゝときげすんだ事があつた。三千代はつんとしてさつさと祖母のところへ行つて、わざとそこでしく〳〵泣いた。さうすれば祖母は、どうしたのか、どうして泣くのかと庇ひ訊く。三千代は默つて泣き〳〵して、それで私に當て附けをするのが癖であつた。

「いゝから、こつちへおいでよ。附いておいでよ。譯をいはずに泣いては分らんに。」と、祖母は三千代ばかりがいゝもののやうに宥めながら、何かの用事で倉の方へ出かけて行くのへ、三千代は泣き〳〵くつ附いて——三千代一人の所有する祖母のやうに、私の方を見向きもしずに喰つ附いて行くのである。私は一間にたゞ一人となつて、障子の紙に小指で穴を開けたりして、忌々しく淋しい目を見てゐるのに、祖母は三千代ばかりを庇つて、私の事は忘れてゐるもののやうに、いつまで待つても倉へ行つたのが歸つて來ない。私は癇癪りな餘りに、三千代のいつも貸してくれないカナリヤを、默つて取り下していぢつた。しまひには手を籠に入れて、ぱた〳〵と愕く鳥を柔かに摑んで出して、口を開けさせて覗いて見たりした。さうして、それを持つたまゝ、のそ〳〵倉の方へ行つた。どういふ積りだつたものか、今考へては分らないけれど。

行つて見ると、祖母たちは倉の二階に上つて何かしてゐるのであつた。階下は入口の戸だけが開けてあるのみだつたので、中は暗くなつてゐる。私はかうして、三千代の見ない間に、三千代の鳥をこんなに手の平に持つたりして、二人のいつまでも出て來ない戸口にうろついてゐるといふことが、三千代に對していゝ氣味なやうに思はれた。それだから、私はそれなり竊かに中へ這入つて孤かなぞが隠れてゐるやうに、階子段の下の暗いところに、祖母たちが下りて來るまで隠れてゐた。

けれども二人は容易に下りて來さうにもない。私一人を放つといて、上で何をしてゐるのか。私は、人がさせる事のやうに、だれかが出てもよいと言ひに來てくれる迄は出る事も出來ないものやうに、ぢつとその暗いところに埋もれて立ち盡してゐた。けれども誰がさう言つて來てくれよう。勝手な私はやがてそれが一人で物悲しくなつて來た。

と、小悪い三千代がとこ〳〵下りて來る。祖母も續いて下りて來る。さうしてどちらとも私のゐるのには氣附かないで、二人で話をしながら、戸を閉めて出て行つて了ふ。祖母は布切の這入つた大きな疊紙を抱へてゐる。

戸が閉ると共に、中には暗がりと私とだけが鎖される。封じられた暗さの中に、戸締栓を開ける鍵穴が、小さく四角に明るく見えてゐるだけである。それが遠くにあるもののやうに淋しく隔つて見えるのであつた。

出ようと思へば、内から栓を上げれば戸は開くのだけれど、かうした儘出ずにゐて、夜になつても出ずにゐて、祖母たちが何んなに私を探し廻るだらうかを試てみたい。さうして、私はいつまでも、こゝにゐるといふ事を見出されないとして、だから夜になつても出られずに、一人で封じ入れられてゐるのだといふ事にしたい。——私は自分でさういふ事に假定て、わざといろんな物悲しい事ばかりを考へた。わく〳〵と小さい動悸を打つ、柔かい小鳥は、やつぱりそのまゝ手の中に持つたなりにして。

鳥はさつきから、放して欲しい口を開けて、ちき〳〵と手を噛まうとする。少し指を緩めると、暗い中でも矢はり放れ出たいと見えてばさばさと身を羽搏く。——何故に祖母は探しに來

ない。もう考へるべき悲しい事も、いく度も同じ事を繰返して考へた。祖母たちは私がゐなくても、探さうともしないで忘れてゐるのではないかと思ふと抑らない。私はもう飽きたから、不平な心持に戸を開けて、竊と開けて外の石段に出た。

と、手に握つてゐる鳥を見ると、ぢつと目を閉つてゐる。口を突つついて見ても矢つぱり固く目を閉つてゐる。逃げないやうに兩手の中で握りを緩めて見ると、ぐつたりしてぢつとしてゐる。首をぐつたり俯だれて、冷たくなつて了つてゐる。私はやがて、それは鳥が死んでゐるのだと分ると、急に愕き悲うた。どうすればいゝかと困つたまぎれに、自分で自分のする事を知らないで、つとその儘それを暗い倉の中へ投げ込んで、後から黑く追はれるやうに、すた〳〵と居間の方へ駈けて歸つた。

私は人のものを悪い事をしたのだから、どうしようかと氣が咎めた。殺された鳥が恨んでゐると思へば薄氣味が悪い。こちらへ歸つて來ても、三千代や祖母のゐるところへは行けないから、竊と、いつも這入らない室を拔けて、女中のゐる方を求めて行つた。だれかのゐるところへ行つてゐなければ、悪い事をしたのがばつが悪い。

女中はそんな事は知らないで、板の間で襷を結うてゐる。米櫃の上へ、剝げた鏡を立てかけて、乏しい髮を束ねてゐる。

「何かお要りなすのですかのい。」と言ひ〳〵髮を束ねる。私は默つてその後の壁の根に坐つて——版行摺の壁層の貼つてある下に蹲まつて——薄暗く悄れてゐた。

それから何うしたか忘れたけれど、とにかく私はさういふ事をして置いて、心に咎められながらも默つて隠してゐたのであつた。三千代はその大事な鳥がゐなくなつた事には氣附かないで、祖母のところで何をかしてゐたものらしい。もうそろ〳〵夕方も迫る頃を、私は竊かな罪を包んだ、後ろ暗い心持を見つゝたゞ一人、人通りもない門口に出て悄れてゐると、そこへ三千代が出て來て、

「あの、のい。」と、私を探し求めてゐた容子で話しかける。カナリヤが何處へか逃げてつて了つたと告げるのであつた。さう言つて、三千代は泣きさうな目元になつた。私は何とも言ひ得ずに、雨落溝に雨曝れた小砂を弄りつゝ俯つ向いてゐた。あの鳥は私が何うもしたのではないい。持つてる内にひとりで死んで了つたのだからと言はうとしても、やつぱり自分が悪いのだから言はれない。そんなこととも知らぬ三千代は、暫く取りつく續きもないやうに立ち盡してゐた。その内に、

「十さんには、私のものは何れでも上げるけ、もう書間の伸を直して下さいえの。」といふ。

「何でも欲るものを上げるから。」とさういひつつ、隠し得ぬ涙を睫に見せてゐる。私も默つて涙ぐんだ。何と言へばいゝかに惑ひつゝ、知らず知らず涙ぐまずにはゐられなかつた。

それから夜寢るのにも、私は自分のルーム中が悔いられた。さうして、矢はりその事の忘られぬ悪る目となつた。

私は尚だれにも隠してゐた。祖母なぞを見ると、何だか、もうちやんとすつかりを知つてゐて、默つて私の自白するのを待つてゐるかのやうに心が咎めた。學校へ行けば、先生の目附が、私のした事を見抜いてゐるやうに受取れて後めたい。——私は子供であつても、悪い事をして隠してゐるといふ事が、いかに心持が悪いかが足りるだけ分つた。

學校から歸ると、竊と倉を開けて這入つて、昨日の亡骸を探して見たが、どうなつて了つたものか、そこらを見廻しても、私の投げ込んで

行つたのが無いのである。ごだ〳〵したものの間をまで探して見ても見附からない。――私はそれが又氣にかゝつた。

その後いく日か經つた。さうして、その内にいつしかその死骸の事も暫く忘れて了つてから、或日、町はづれへ竹を取りに行くために、祖母に隱れて、倉の棚にある道具箱から鋸を出しに倉へ這入つて行つた。棚の上を探るのには足元が暗いゆゑ、ぼろけた、がた〳〵の長持があるのへ上つて、横手の明り取りの窓を開けといて下へ下りると、その長持の側に、例のカナリヤの黄色い抜け毛が一本、ふはりと落ちてゐるのが目に附いた。

よく見ると、そこの提灯を入れた箱が置いてあるところには、ばら〳〵と澤山落ちてゐる。その箱と、手の取れかけた古桶との間にも、毛が固まつてばらけてゐる。――鼠がしたのだ。惡い鼠が食うたのだと氣附きつゝ、その固まつたのを掻き出して見ると、その中から、食ひ切られたやうにぽつくり取れた片足が出て來た。長い小さい爪の附いた指を閉ぢ合はせたまゝ、かち〳〵になつたのが出て來た。私は、こんなに片足ばかりにされて了つた鳥を哀れに思ひ入ると共に、鼠の仕業が憎くてならなかつた。それもつまり自分がした事だ、自分の罪だとさう思ふと、ひとり心持惡く自分に責められた。

私はその散らばつた鳥の毛をそれなりにして置くと、自分のした事が分つて了ふゆゑ、すつかり拾ひ集めて、人の目に見えぬところへ――氣味の惡い、ちぎれた足と共に、長持の向うに落しやつて了つた。さうして、もうそれで以て鳥の事も片足も忘れて了はうとしたけれど、やはり時々思ひ出すと、祖母の前に出ても氣が咎めた。

三

私はまた或日、無理な事を言つて、三千代を泣かせた事があつた。三千代は泣き〳〵立つて行つた。祖母はそれを知つて、私を坐らせて、よそから來てゐる子だから、泣かされては情なくなる、泣き〳〵裏へ行つたゆゑ、探して來て伸を直せといふ。私は自分が惡かつたのが分つてゐたから、服々ながら探しに行つた。

倉の方だらうと言はれて行つて見ると、戸が少し開いてゐる。私は、三千代が一人でこの中へ這入つて泣いてゐるのだらうと思つて呼んで見たが、返事をしない。這入つて探したけれどゐもしない。――と、薄暗く彳んでゐた私は不圖またいつかの鳥の足の事が思ひ出された。まだあれが長持の向うに落ちてゐるのかと思ふと氣にかゝる。

すると、外の、窓の下で、女中が三千さまは何とかだと言つてゐるのが聞える。三千代がそこにゐるのらしい。女中と二人で、そんな、いつもだれも行く事のない裏口へ行つて何をしてゐるのだらうと、長持の上へ上つて、窓を開けて覗いて見ると、自分の耳の迷ひだつたのか、裏にはだれもゐはしない。開けた窓の金網に、蜘蛛が子袋を喰つ附けてゐる。見下す下は、もとは祖母が慰みに、鶏豆やしんぎくなぞを作つてゐた、小さい、町中ながらの畠になつてゐたのだつたけれど、今ではその儘に放棄つてあるのだから、土も掘れ返つたなりにかち〳〵に固まつて、ぐちや〳〵に五月の草が生え延びてゐる。向うの塀際に并び植つた無花果の木や、窓に近い梨の木なぞは、さうした、廢れた裏に、話しかけてくれるものもないやうな容子をして、淋しげに青い着物を揺へてゐる。無花果の木の下にも、叢にも、單の、白い、まろ〳〵しい覆盆子の花がちらほら咲いてゐる。蓼のやうな穢の出る草も延びてゐる。

と、三千代がとぼ〳〵と、向うの無花果の

木のところに出て來た。もう鳥のゐない跡の空籠を提げて、一つ〳〵の覆盆子の花を摘み取つては、附いてゐる青い葉と共に籠の中に充たし充たししつゝ、一人でしよんぼりと遊んでゐる。一人だから、何一つ口を利くでもなく、私に泣かされた後の心持を淋しく包んだやうにして、一つ〳〵、ほろ〳〵しい花を摘んで行くのである。

私はぢつと窓に彳んで――長持の上に小暗く立つたまゝ――三千代が一人でとぼり〳〵してゐるのを見守つた。ぢつと立つて見てゐるのに、三千代はその黒いしんめりした目を上げて私の方を見ようともしない。私のゐるのにさへ氣が附かない。――私はそれが、三千代が私を相手にしてくれない印のやうに淋しくなつた。さうして矢つぱり三千代の籠に白い花の充たされるのを默つて見守つてゐた。

かういふ事を繼々に考へ出せば限りもない。二人はこんなにして、一人がゐなければ一人が探し求めして、互に無くては足りない二人だつたのだけれど、私は何だか、三千代が、何かに私のしようとする通りをしてくれない事のあるのが小惡らしかつた。祖母が三千代々々と言つて、針に絲を通させたり、祖母の要る物を取つて來させたりして、すべてに庇ひ守るやうにするのを見ると、自分の祖母が三千代によつて奪はれてゐるやうな氣がして、それを心附かないでゐるやうに見える祖母が恨めしい事さへあつた。

しかし爭ひは一ん日の内に幾度も直つて、また二人でこそ〳〵と、どんよりした部屋々々に移り歩いて、大抵毎日同じ仕方をして遊びつゝ夜になる。さうして二人とも祖母の寢るところで、小さい寢息を并べて寢る。私は三千代が、私より早く、長い睫を閉つて寢るのを目に見つつ、その日自分の惡かつた事を考へ返すと、もう一度目を開けさせて、何をか――私を惡んでゐるのにさへ言つて後に寢入つてゐるのだらうと思つて呼んでゐたが、返事をしない。這入つて探したけれどゐもしない。――と、薄暗く彳んでゐた私は取つて來させたりして、すべてに庇ひ守るやうにするのを見ると、自分の祖母が三千代によつて奪はれてゐるやうな氣がして、それを心附かないでゐるやうに見える祖母が恨めしい事さへあつた。

しかし爭ひは一ん日の内に幾度も直つて、また二人でこそ〳〵と、どんよりした部屋々々に移り歩いて、大抵毎日同じ仕方をして遊びつゝ夜になる。さうして二人とも祖母の寢るところで、小さい寢息を并べて寢る。私は三千代が、私より早く、長い睫を閉つて寢るのを目に見つつ、その日自分の惡かつた事を考へ返すと、もう一度目を開けさせて、何をか――私を惡んでゐるのにさへ言つて後に寢入つてゐるのだらうと思つて呼んでゐたが、返事をしない。這入つて探したけれどゐもしない。――と、薄暗く彳んでゐた私は

その内に、私たちの履く下駄も、吉いのの納つて置かれてゐるのと較べれば大きな下駄になり、前には、汚れるから〳〵と祖母に言はれて言はれしてゐた着物もいつしか洗ひ剌げて惡くなつて、寢間着に着せられたりなどしつゝ、二人は段々に祖母の手で大きくなつて行つた。女中が包みを提げて二人に附いて、町中のそれながら、白楊の木の蔭の多い學校への行き歸りをしてゐたのも、いつしか一人で銘々に出て行くやうになつた。三千代は私がまだ尋常科にゐる間に、女ばかりを集めた、上の學校へ移つた。

二人を守り立てた、例の髪の毛の少ない下女は、もうこの頃には家を下つてほかの何とか言つたのが來てゐた。先の女中はいつ辭たのだつたか記憶えてゐないけれど、それが家から下つた日は、まだ暑さの取れない、九月かなぞの或日の午後で、日影のかん〳〵と漲つてゐる中に、赤蜻蛉の群の、目高魚の亂れ走る水の中めやうに、ちら〳〵と、込み合つて飛びちがふ門口に、私と三千代と二人で出て、女中が行李と共に乘つて行くための車を得べく、通りかゝるのを見つて張つてゐてやつたのが目に殘つてゐる。その女中が家を下つて行くのだといふ事を、その前の

夜には、私と三千代とにはまだ言はずに隠して、常の夜のやうに、解しものの技練を盆に集めて、膝の上で一本々々繋ぎ〳〵してゐたのも目に附いてゐる。この女中は私たちをよくしてくれ、祖母にも大事にされてゐた。

「十さまは、もう幾日寝たら幾つ〳〵になりなすぞのい。まあ〳〵大きい十さまになりなしたこと い。」と、小さくから附いてゐた私の生長を待ち計るのが常であつた。

さう言はれてゐた私も、この女中の事をも大分昔の事として考へ返す程に長じた。さうして十四の四月から中學校に這入つた。二つちがひの三千代は、學校は高等科だけで下つて、それからはお針のみに通うてゐた、それは、祖母が女には學校はその位で十分で、大勢の女の集りの中へ久しく交つてゐる内には、女が女らしくなくなつて来るといふ考へだつたからである。祖母は、女といふものは、何んな事に出くはしても、たゞ素直に自分が悦べること、する事に控へ目といふこと、行儀たしなみといふ事が女の印だといふこと、小さい事にも倹約しい事、目下の者に情をかけて使ふこと、――かういふ總てのきつちりした女になる癖を附けるのと、お針の業を修めるのとが何よりも大切だの

に學校では、たゞ本を讀む事だけしか教へてはくれないのだからと、三千代によく言ひ聞かせて、それきり學校へはやらせなかつた。三千代の交際つてゐた或ものは、上の女學校へ這入つて、束髪に袴をつけて、靴をはいてゐるのを、私は學校の往き歸りによく見掛ける事があつたけれど、三千代は祖母のいふ通りになるべき約束に生れた女のやうに、素直な髪と、女らしい帶に、表附の下駄を履いて、下女に送られて、亡くなつた家の母の知合の、つましい几帳面な小母さんのところへお針だけを教はりに行き、午後歸つて来ると、學校なぞへは行つた事のないものと同じに、女中と二人で、食事の事や、女のすべきその日〳〵の用事をした。それから十八にもなると、もうそろ〳〵仕馴れて置かなければならないとて、祖母は「帳面を綴ぢさせて、日々の家計を任して書き附けさせた。夜になると、三千代はいつも、針箱の抽斗から赤い絲で綴ぢたその帳面を出して、あかりの下で、書間買つたものなぞを女中と相談して記し附けるのが毎日であつた。私は學課に飽きると、そんなところへぶら〳〵出かけて行つて覗いて見たりした。すると、

「まあ厭です、十さん。男はこんな女のする事を見るものぢやありませんに。あつちへ行つていらつしやいよのい。」と三千代は笑ひつゝ言ふのであつた。

「では見ないからいゝに。」と、そこへごろりと横に寝そべつた、私は三千代の物尺を取つて、針山の針の頭を叩いて順繰りに一つ〳〵引つ込ませたりしながら、もう、追つつけほろゝ寒くなるべき時候の夜を、外の床の下で、古絲を引くやうに、かすれ〳〵に鳴くこほろぎを、聞くともなく聞き入りつゝ、人のゐる一間の火影を慕ひて、容易に自分の室へ立つて行かうともしなかつた。私はさういふ心持を今でもよく記憶してゐる。私が、する事がつかへて長く起きてゐる晩には、いつも寝る時刻が來ると、

「十さん、まだお寝みなさらないの？」と、三千代は襖の外に來て物を言ひかけて妨げるのを怖れるやうにいふのであつた。三千代はいつでも私の床を取つといてくれて、女中も寝させて、それから私が寝るまでは、中の間にぽつつり一人坐つて、燈火を相手に針仕事をしてゐるのである。風邪を引いて鼻をつまらせたりしてゐても、さうしていつ迄でも待ち坐つて、私が床に這入つた後に、晝の着物をちやんと疊んでくれて、金網に這入つた手焙を持つてもう一度方々

の戸締りを見て廻つて、それからでなければ寝に就かない。女はそのやうにするものだと祖母に言はれてゐるのであつた。

三千代は次の間に祖母と並んで寝るのだつた。すべてを片附けた後に、やう〳〵人の終りに床に這入るべく、すると〳〵と帶を解く布擦を、私は床の中で横越しに聞きながら、三千代が祖母のいふまゝに、素直に、女のする事を何から何まで一々してゐるのが、元々この家で生れた女でないだけに、何だかいぢらしいやうな、彼女のために小淋しいやうな氣のする事が、冬の夜なぞによくあつた。

四

男の子が男になる前に、女は早く女になる。十六といへどまだ子供に過ぎなかつた私は、何かにつけて三千代にたよつてゐた。母に對して求むべき或物の、祖母からは得足りない部分を、暗に三千代によつて與へられてゐたのであつた。私は何事をも三千代に訴へ、誘りたい事のすべても彼女に向つて誘り、厭な辛い事も彼女の關つた事のやうに不平を云つて、祖母には缺けてゐる、彼女の理解の中に生きてゐた。

私は體が丈夫でないために、よく學校をも休んでぶら〳〵してゐる事があつた。さういふ日には、何とてする事もなく、どんよりした家の中にゐるのゆゑ、ひとりでに物暗い重たい心持になり易かつた。

と、

「十さん、來て御覽なさい。今時分に蟬がゐますぞい。あの石の下を御覽なさい。一匹ぢつと棲つてゐませうがの。」と、三千代は障子を開けて私を紛らせようとした。

「私は子供の時には あそこにかうなつてゐる石が、何かの形のやうに見えてゐましたのい。大きな平たい石ですぞのい。」と、このやうな事を語る三千代は、つゝましく前憂に拘を入れたりしながら、ぢつと一つところを見てゐるのが癖であつた。

すると、

「三千代々々。」と祖母が呼ぶ。お針へ出て行かなければならないのである。

私はけたるく下駄の上に下りて、一人で裏口の方をのそ〳〵した。薄ら寒く曇つてゐる日なぞに、板目のざら〳〵に古りた物置の戸の前に、灰汁桶が置いてあつて、消炭の切れの浮んでゐる水が、ちよび〳〵入物に受けられてゐるのを見て行んだり、木戸を開けてとぼ〳〵裏へ出て

試たりする心持は、三千代の留守に一人ゐる、もの足りない私には薄らさびしかつた。倉の後へ行つて見ると、いつか子供の時に、そこの日向に立つて、古けた壁に寫した、低い自分の影法師を、三千代に釘で描かせた跡が、まだありありと殘つてゐた。冬ざれのその裏の裸木には、よく名を知らぬ小鳥が來てゐる事があつた。

私は暗い一冬を柄み通して、長い間床に就いた。その間の事にはいろ〳〵忘られない事もある。今著しく回想に浮ぶのは、その時分に私が飼つてゐた犬である。

それは或日門口から迷ひ込んで來た、黒い子犬である。私は女中に言ひつけて、中庭の緣側の下へ空箱で寝どころを拵へさせて、紐でつないで置かせた。

小犬は下に這入つてゐても、私が障子を開けて呼びかけると、くん〳〵言ひながら石の上に出て來る。それからのそ〳〵下へ下りて、向うへ走り出る。紐の長さが許さないのを、もつと出よう〳〵と徒らに苛ちながら、力丹を變へては走り出て喰ひとめられる。私はそれを見て、重たい時間の單調を紛らせた。それがそこらに食物や藁をばら〳〵散らかすのを、女中は厭さ

うに一々掃除をした。まだ生れて間もない子犬だつたので、夜になると頻りにくん〳〵鳴き續ける。三千代は夜中に雨戸を開けてはすかしに出た。

祖母は眼だから通がして了へと言ふ。けれども晝間になつて、私を人見知りして、罪もなく寄りつく客子を見れば、さうした、行きどころもない小さいものを放し出すのも非度いから、矢つぱりその儘に庇つて置いた。すると夜はまたくん〳〵鳴いて眠りを妨げるので祖母から厭がられる。その内には馴れて鳴かなくなるからと言譯をしてゐる内に、或日小犬はどうしてか、小屋の口に括り附けられた紐ばかりを遺して、何處かへゐなくなつて了つた。

私は、それに氣附いた三千代が、衰へ眠つてゐる私を起して、自分がした罪のやうにおどおど私に告げたことや、もしか夜は歸つて寢てゐはしまいかと、手燭を附けて、寢がけにもう一度探してゐる氣色を聞きながら、うと〳〵してゐた夜半の自分を、今でも目に見るやうに考へ返し得る。夜毎に祖母に氣を置いて、私のために、鳴く犬を宥め〳〵した三千代の、寢間着の上にうすら寒く結んだ、小帶の色も目に浮んで來る。

このやうな病間の出來事なぞもあつて、私は暗い長い冬の明けるのを待つた。

冬が明けると私は十七になつた。その三月に這入つてから、やつと久しい床を出る事が出來た、私は全快後のリフレッシュされたすがすがしい目に、裏の花床にさいてゐる、大人しい、質素なふだん草の花を見ては、もく〳〵と彳む日向を嬉しんだ。例の無花果の木のある裏口を、三千代が冬の内に女中に手を入れさせて、もとの畠だつた一區切へ、花の種を蒔いたのであつた。ふだん草の外にどんな花がさくのか、西洋豆とかいふものと、赤い花のさく、鬱芥子とが、やがてその花になるべく生えてゐた。それを見入つてこゞんでゐると、何處でともなく、ちゝといふ小鳥が、黄色い柔かい日影の深みに、わが考への中でのやうに聞えた。

「いゝ天氣ですぞのい。」と、三千代はもうお針の方もさがつて、家にばかりゐるいつからかを、かうして時々裏口へ出て見たりする外には、祖母の仕附けてゐる女とて、どこへ出て行く事もないのであつた。

「まあ一心に見てゐなすこと。」と言ひながら、私のこゞんでゐる側へ來て、私の見入つてゐる花を見て彳む。色を誇らない、單朴なふだん草は、母の乳を吸ひつゝ眠る心持に、穏かな日影の中に吸ひ浸りつゝ咲いてゐる。土の上には二人の影が斜に寫つてゐる。

やがて私は、

「長い髪の毛が。」と、獨りごとのやうにさう言つて、花床の上から一筋の髪の毛を摘み上げる。

「こんなに長い髪。……あんたの髪だぞい。」

「ほんに。」と三千代は笑つて、鬢に手をあてて後れ毛を撫く。

「私は爪が延びたね――こんなだ。」

「まあ。後で切つて上げませう。」

「わたしは自分の爪が切れないのい。」

「こちらの方がでせう？」

「何だかこつちの手では鋏が使へないもの。あんたは自分で切れる？」

「えゝ。自分でしなけりやあなた。――おや、蜂がゐますぞい。」

「もう行つて了つた。そつちへ行つた。後。」

「あれ、もう屋根まで飛んで行きましたぞのい。あしこに集があるんでせうぞのい。」と、三千代は例の癖で、長い睫毛をして一つところをぢつと見詰める。二人は男と女とであれど、一つ家

に住めば、このやうなたわいもない事を話しながら、何の不平も來めもなく、たゞ、久しぶりに返つた、三月の日を嬉しむのであつた。

私はかうして體も元に復して、學校へも出られるやうになつたけれど、相變らず人と往來する事はしなかつた。私の學校の生徒は、何の必要があつてか、大抵が膝頭までしかない着物を着て、申し合はせたやうに、汚れた手拭を帶に釣し、塵埃だらけの足をして、わざと力んで肩を張つて、ぞろり〳〵伴れだつて歩く。そんな連中と交際つて、どさ〳〵家へ上り込まれたりしては厭である。彼等の多くは、寄ると障ると厭な話をする。教室へ這入れば洋刀で机へ字を彫つたり、堅パンを買つて來て授業中に食つたりして、ろくに講義を聞きもしないで騒きながら、何をでも解らない〳〵。」と教師が怨いかのやうにぶつ〳〵いふ。「一たい、けるとかけれとかいふやうな文法なんかを教はると何ういふ效能があるのですか。」「我々男子たるものがこんなぐづ〳〵した文章を讀む必要があるでせうか。」といふやうな質問を發して國語の教員をいぢめるものなぞがある。勢よくやるのは體操だけである。さうして置いて、一校の規律を附けるのだと言ふので以て、少しの事を目つけ出しては下級生を捉り附けるのであつた。生徒の大部分は土の中で生れたのが下宿して出て來てゐるのである。品位ある家の子弟でも、さうした大勢の力に侵つて、彼等に從つて動いてゐる。教員にもろくなのがゐない。校長は一室に引つ込んでばかりゐる。生徒等はこの人の目前だけでは小さくなつてゐるものだから、校長はそれに欺されて、自分の威信で何事もうまく行つてる積りでゐる。

私は學校へ行くとがた〳〵の机までが癪にさはつた。それだから自分の調べるだけのものは調べ、學校ではさつさと了解して、自分一人で物の目ざはりのない處にゐるために、急いで家へ歸つて來た。下種な人間たちが私を除け物にしてゐてくれるのが却つて幸であつた。彼等は私が本にばかり齧り附いてゐるから、それで痩せて沈んでゐるものやうに誤解して、藤の蔓がいろんな惡口を言つてゐる。何だつて彼はないい。私はいつも口を閉ぢて、默つて絶に交つてゐた。

私はまだこれから先何になればよいのか自分にも分つてゐなかつた。けれども、とにかく自分の性質に投合するやうな仲間を得ないために、いつも一人で家にばかりゐて、自分の好きなものをでも讀む外には仕方もない。私は分らないなりに、出來るだけ簡易な西洋の物語なぞを、辭書を引き〳〵讀んだ。飽きて來ると、裏口へ出れば、小さくとも、彳むに足りる木の蔭があつた。私は大工のところで板を切らせて來て、倉の後の桐の木の下に、簡單な、形ばかりのベンチを拵へて、そこで物を讀んだりした。

五

それから一月二月たつと、遂に鬱芥子も咲いたけれど、これは脆く落ちるために咲く花のやうに、慌しく散り過ぎた。さうして間もなくしめ〳〵しい雨續きとなつて、裏には何の色彩もなくなつた。その久しい雨が霽ると、いらいら暑い毎日となつて、再び冷たい冬が戀ひられる。

戀ひられた冬は、もうそれを求めぬ頃になつて、日々の暗い蔭を着て廻つて來た。

私はこの冬には、不圖して、小さい頃の日とに違つた、或暗いわが影を見る私になつた。どうした事からか分らないけれど、私は自分に物の考へが出來て來るにつれて、丁度午後の日が蔭つたやうな變化が來て、或物に不足な自己を見出すやうになつた。人間といふものは、自分

のすつかりの性質に――自己の性質の求める、一々言ひ表はす事の出来ない刻々の欲求を、足し充たしてくれるものを得る事は出来ないものかといふ事が、一人で考へられた。どうしてかといふ事は言へないけれど、自己といふものの形が出来かけて来た私は、淋しいとそんな事を考へるやうになつた。何か私は欲しいものがあつた。何だとも分らない物足りなさが感じられた。

私はどうした拍きからか、一人門口などに立つて、考へるともなく自分の沈んだ性質なぞを淋しく考へた。目に入るものは、悉くほろゝ寒く、灰色に冬ざれてゐる。私が、この陰鬱な空の下に淋しく立つて何を考へてゐるかを了解するものは、自分一人しかないと思ふと物足りない。祖母には、もう大きくなつた私を解すべき理解はない。祖母としては不足のない、しつとりとした祖母だけれど、かうした私の心持の前には、さういふ祖母としてだけでは物足りない。私はもつと何か、祖母に缺けてゐる或物を欲してゐる。かういふ時に母といふものが要るのではないかと思つて見ても、母のない私には何がなる。

と、思に驚き出た。門口の雨樋の痛れたのがかた〳〵と鳴ると思ふ間に土塵埃が向うから茫と吹いて来る。

私は急いで門を這入つて、のそ〳〵家へ上つた。三千代はそこらのものを片附けて、絲の解れ屑なぞを拾つて掃出してゐた。それから方々の雨戸を入れるために、どんよりした一間々々に這入つて行く。しつとりと立居する女ではあるけれど、默つて彼女を手傳つて、引窓の綱を手繰つたりする私とは、別々の事を考へてゐるやうに向うへ行く。少くとも、私の包んでゐる心持は分りはしない。淋しいといへば何となく淋しい女に生れてゐるのに、その淋しい女なる自身には氣附かぬもののやうに、日元にかゝる髮の毛を、女らしく掻上げつゝ、

「明日もまた暗い天氣でせうぞのい。」と、しまひにこちらの戸袋の雨戸を繰る。私は何をか言ひたいやうな心持になつた。何を言はうといふ事は分らないけれど、何か言ひたい。自分の何とはなく物足りぬ心持を充たすやうに、何を言はうかと了解させたいやうな氣持がするのであつた。

かうして私は一室の夜に一人籠る。早に寝て了つて、あちらには三千代と女中とだけが、こつそりと閉まつて、かしかむ手を火鉢にかざしつゝ、切れ〳〵の寒い話を小さく私語いてゐる。私は物を讀むにも倦きて、壁にこゞまり寫る自分の影を見守りながら、誰も私の物足りない心持を知つてくれないのが淋しくもどかしい。三千代が、何をか話して、つゝましく笑つてゐるのが聞える。それが譯もなく私を淋しがらせる。何だか私を同情もし了解もしてくれる事の出来ない――しようとしてもしてくれない印のやうに小淋しい。

やがて三千代は、

「もう炬燵を入れといても可うござんすかい。」と、例のやうに訊きに来る。寝る前に、這入る蒲團を敷めて置いてくれるのである。私の返事が純いゆゑ、

「まだ勉强をおしなすの？　まあ火が乏しうなつてゐますのに。」と、火鉢に炭をついでくれて、

「何だか、この部屋はすう〳〵するやうですぞのい。」と、私を見る目を伏せるやうにしてさう言つて、唐紙を閉めて出て行くのであつた。かういふ物淋しい夜には、もつと私のところにゐて、火鉢を圍んで話してゐてもいゝのに、三千代は女になつてからは、私とは違つた事を考へてゐるやうに、元ほどしつとりと私の側に

は居附いてゐない。

「もう寝るんだ。」とて、私は床に這入る。

「十さん、忘れなさらぬ内に、炬燵を出して寝なさらんと、夜中に火が消えると風邪を引きますけめい。」と言ひつゝ、三千代は蒲團の襟を叩きに来る。さうして唐紙の向うで、まだ女中を相手に何をか讀んで聞かせたりして起きてゐる。私にはそれが妬ましいやうな氣がした。分りもしない女中に物を讀んで聞かせて何が面白いだらう、女は馬鹿げたものだといふやうな氣がして默になる。

私は物足りなかつた。何が欲しいのだかは分らないけれど、恰も自分の周圍のものが何をも與へてくれないで浸してゐるやうに物足りない。私は仕方なしに、その日讀んだ物語の中に出て来る女のことなどを考へ返しつゝ、段々に眠りに入るやうに努めた。私はナツーといふ古い人の綴つた、神と、早い代の戀のさま〳〵の話を書いた本を得て、毎日字引を繰つてゐるのであつた。

かうして暗い冬は日毎に寒くなつて行つた。暗い私は、それからは、この本の話を自分の事のやうに考へ返すのが、たゞ一つの淋しい享樂であつた。小暗い、誰もゐぬところに一人籠て、その中の話を一人淋しく考へるのが好きになつた。私が何んなものを讀んで、何んな事を考へて居るかは、もとより私自身の外には知る者はない。誰にかその話をして聞かせて、二人でそれを樂しむ相手がゐればいゝのにと求めた私は、或一章を三千代に話したけれど、三千代にはその面白さが分らないらしかつた。面白いのは戀の話だから、女の前には氣が咎めて言はれない。私は一人で讀んで一人で考へるより外はなかつた。

冬も十二月から一月、二月と向ふにつれて、側の暗い雨がよく降り續けける。どこへも出る事のない門口の、襖子の小障子を覗いて眺めば、そこに二本ある桐の木の、がら〳〵に黑ずんだ實の淋しく落ち殘つたのが、寒く濕れこぼれて、しめ〳〵しい雨の足に搖れてゐる。こなひだから一度も開けた事もないやうに物古く閉つた門の戸の下には、刺げたの壁を傳はつて漏り浸みる雨水が寒さうに暗く溜つてゐる。同じ日々に伴つてゐれば、一間々々に別々の火を掩して小さくこゞんでゐる各々の間には、薄ら寒く用事を言ふ、短い對話の外には何こそ話す種もない。三千代はそれにも馴れて、不平もなさうに、祖母の炬燵の側に坐つて物を縫ふ。女中は寒い火に赤い冷たい指を炙つて、赤裂れに膏藥を附けながら、あちらの一間の暗さも厭はずにしよんぼりしてゐる。私ばかりは何故かひし〳〵と淋しかつた。

私はこの程から、どんよりと濁つた障子の色を見守りつゝ、自分の得べき女といふ事を、水に溶けて行く色を見入るやうに、ぼんやりと考へて居るやうになつた。何のためにそのやうな事を思ふのかは分らないけれど、一人淋しいゆゑ、いつしかそれを考へ入りつゝ、夜は、何事をか私語くやうに點る灯の下に小寒く坐つた。

私の讀むナツーの本の中に、男と女とを語る話がある。ジョブが人間と罪惡とを亡ぼし盡した大洪水の後に、たゞ二人生き殘されたるデューカリオンとピラとが、土と水とを以て人間を造り代へる。デューカリオンの造るものは男に、妻が作れるものは女になる。その二つには、やがて戀に繫がるべき約束を附けるために、二人が半分づつの息を吹き入れて置く。かくして造られた男と女とは、互にその片方の相手を求め探して、人の代に繁き戀をするといふのである。或ものは遂に人間の間に求め得ずして、所つて鳥となり、悲しき歌を以て啼きつゝ探す。二つ寃ひしと喰つ附いて漂ふ白い水鳥は、それ

を水の上に得たる戀である。戀を得ずして徘徊ふものを導くために、星の明りは黙じられるのだけれど、星は黙してゐるゆゑ、その目叩の言葉を人は讀み得ぬ。かくして悲しく探し迷ふのだと記してある。

淋しい私はこの話を考へ返す事から、いつしか竊かに自分の女といふ事を思ふ癖が附いた。そんな女を得るまでは、人はかうして淋しいのではないかと考へても見る。けれども自分の女といふものは、どこか自分の見得ぬところにゐなければならぬといふ氣がする。容易に得られる女は自分の求むべき女ではないといふ氣がする。

私はこのやうな事から、戀とは何んなものかといふ事が、ぼんやりと分つて來たやうな氣がするのであつた。さうして、自分もいつかは戀を得なければならないと考へた。自分の戀すべき女はナツーの話の中に出てゐるやうな、鳴の赤い、悲しい歌をうたふ、水鳥のやうな女でなければならない。自分と共にナツーの本を讀み得る女でなければならない。――さういふ女がどこにゐる？　私はさういふ價のある女を見た事がない。どんな女を見てもつまらない女ばかりである。――けれども何處にか一人、必ず一人は自分の戀すべきものが隠れてゐるものと考へたい。その女を見出す事が出來なければ、自分は一生女といふものは要らない。いつまでもたゞ一人ゐる。一人ゐてナツーを讀むのだ。元の本はラテンで書いてあるのだといふ。自分はどうしてもラテンの讀める人間にならなければつまらない。早く高等な學校へ這入つて、何でも讀めるやうになりたい。探したら、このやうないろんな古い代の話を書いた本が、まだいくらもあるに相違ない。

私はこんな事を考へながら、淋しい若の毎日を、暗く一間に籠つてゐた。今から考へ返すと、それこそ水に漂ふ鳥のやうな自分だつたと思ふ。それでもその時分には一心にさう考へてゐたのであつた。たゞ何うする事も出來なかつたのは、ひし〳〵と自分を浸す暗い淋しさであつた。私はよく、ぢつとしてゐるところもないやうに、用もない倉の中にのそ〳〵這入つて行つて、二階の窓から冬ざれの郊外を見つゝ、薄ら寒く彳んだりした。向うに裸になつてゐる楊の大木の間から、淵候所の古けた屋根の上に、風見の矢の列が、老い剌げたやうに凍えてゐるのが見える。雨の降らない日でも、どんよりした空はいつでも陰鬱に眠へ下つてゐる。私の日々の淋しい心持は、丁度その陰氣な空の色に似てゐた。

六

三千代が私の家から實家へ歸つて行つたのはこの冬の二月の末の事であつた。

或日、減多に家へは來た事のない伯母が、珍らしく出て來た。二十里ばかりある或町に嫁入つてゐるのでもあつたけれど、何だか、母子とは言へ、祖母のところにはしげ〳〵來惡かつたものらしい。その譯は、ずつと後になつて私は聞いたのである。併しさう聞いてから考へ返すと、さうして自身の生れた家へ來た伯母に對して、何も祖母が冷やかであつたとも思はれないのに、伯母が一人で氣が引けてゐたものらしく思はれる。

伯母は三千代を藤へ呼んで、他人の家で話をしてでもゐるやうに、久しぶりで會ふ二人が、冷たさうに對座してゐた。私はもとより一間に引つ込んでゐた。伯母は祖母に似た目元をした物の分つた人であつた。私は、この時には、まだ何事をも知らないなりに、何だか、私が同情して上げなければならないやうな氣のする、しをらしい伯母であつた。夜私のゐるところへ來て、

穂先のない筆はないかと訊いたのを今でも私は記憶してゐる。

「手紙を書くのですけれどのい。私は先の尖つたのでは字をよう書かないのだから。」と言ひつつ、心持顔を蹙めて、簪で髪の中を掻き〳〵待つてゐたのも目に浮ぶ。三千代の母のやうにもない位の年輩に見える伯母であつた。

「十さん、一寸で濟むのだから、ついでにこゝで書いてもいゝでせうのい？――ぢやあ一寸邪魔をしますよ。」と、伯母は机の向うへ寄つて、卷紙を片手で持つた儘さら〳〵と書いて封をした。

「課業が濟んだらあちらへ出ておいでよのい。」と、伯母は立つて行く。伯母の寢床は、いつもは使はない六疊の間に取つてあつた。そこの押入の唐紙に貼つた更紗は、昔祖父が紅毛人から買つたのだといはれてゐた。

伯母は着物を着換へて、私と共に置炬燵にあたりながら、私の問ふ儘に、祖父の代の事で、私のはじめて聞く事を何かと話してくれた。賀といふものゝまだ用ゐられてゐた時代に、祖父が、青く塗つた籠に西洋の赤い鳥を飼つてゐたといふ事や、まだその時代の人の見たことのない、置時計を持つてゐて時間を測るので、人から切支丹のものばかりを持つてゐると言つて氣味を惡がられたといふやうな、小さい頃の記憶を話した。續きから、伯母が學校といふものの出來た最初の生徒で、「羅馬洋字」「亞剌比亞洋字」と言つて算用數字を教へられたといふやうな話もして聞かせた。

三千代は次の間で伯母の着物を疊んだ後、そのまゝ火の氣もないところに坐つたなりで、一人何か考へ込んだやうな容子をしてしよんぼりしてゐた。

「三千代はそこで何をしてるのい？」と、話の間に伯母が輕くさう訊くと、

「別に何にもしてゐやしません。――何か御用でせうか。」と、浮かない顔をして這入つて來た。

「まあ、十さんは、さつきから蒲團無しであつてゐたんですか。あら。――三千代、座蒲團をつもとは違つて、私に對して出來るだけ馴々しい容子を見せまいと努めてゐるやうなところがあつた。

持つておいでよ。どういふ、氣の利かない女。」と言ひつゝ、伯母は徐と蒲團の手前を上げて炬燵の火を強いた。

三千代の容子には、母が來てゐるために、い

一でも、一寸お布きなさい、十さん。」と、座蒲團を持つて來て出すのにも、何だか他家から來てゐるもののやうに、改つたやうに言ふので、あつた。それが私には餘計に、いつも他の事ばかりを冷たく考へて、つゝましく生きてゐる、淋しい女のやうに見えた。さつきから何をか考へ込んでゐるやうな後姿をして向うへ行く。何か母から厭な事を言はれたのではないかと私は考へた。

私が寢間へ這入つて目を閉ぢかける時、三千代は例のやうに、脱いだものを片附けに來た。私は、三千代の母がゐるせゐか、何だか、いつものやうに三千代にかうして慣つて貰ふのが氣が引けるやうな氣がした。二人の間に何の關係もないのを、こんな事から何とか怪しみでもされはしまいかといふやうな、先き廻りな心配のやうな或物が、譯もなく心の底を這つて、三千代が向うへ行くまでは、落ち附かれないやうな氣がするのであつた。

もう行つたのだらうかと、目を開けて見ると、三千代は室の片隅に洋燈を置いた儘、そこに顔を伏せてこゞまつてゐる。

「何うしたんです、三千さん。」と變に思つた私は、人から自分たちを怪しまれでもするやうに、

不愉快さうに言ふと、三千代は一人考へ沈んだ容子をしてゐたが、やがて、默つてそれとなく涙を啜りつゝ、急に氣が附いたやうに、

「お休みなさい。」と、あかりを小さくして、徐かに唐紙を閉めて次の間へ下つた。何か情ない事でもあるのらしい。唐紙を隔ててのみながら、冷たく寢間着を着換へたりするのにも、やつぱり何をか情なく考へて、滅入つてゐるらしい。けれども、それにしても、これまでとはちがつて、同じ默つてゐるにしても、私には話す事でもないと言ふやうに、私の前には冷やかに自己を鎖してゐるやうに見えるのが氣に喰はない。私は何うしたのかとも訊かないで、それなり自分は自分で寢て了つた。

翌る朝、學校へ出かけようとして、靴を履いてゐると、三千代はいつもになく表口の間まで出て來て、「ぼんやりと立つてゐる。

「何か用事？」と、私は變に考へるでもなくさう訊くと、

「いゝえ。」と言ひつゝ、矢つぱり立ち盡してゐたが、

「十さん、その靴下でなしに、もう一つ、穴の開かない、別なのがあるでせうがのい？」といふ。

「だつて探しても無かつたもの。」

「私が見て置きます。——あの今日は何時に歸りなすの？」

「何故？」

「……何故といふ譯もないのですけれど。」と言ひつゝ、何を見る的もなく、しつとりした目をして、外の桐の木の方を見てゐる。何を考へてゐるでもないやうなその目元が、何となく頼りのない女のやうな容子に見える。私は昨夜の寢がけの時の心持とは違つて、何だか三千代に、昨夜は何うしてあんなに涙を隱してゐたのかといふ事を訊かないでゐては、人情がないやうな氣がしたけれど、それを言ひ出す續きもないので、そのまゝ出て行つた。

貝の殼のがら〳〵に下つた、表の門のくゞりを出しなに、格子口を見返ると、三千代は土間に下りて、帶の背中を斜めに見せてこゞまつて、何もする事もない淋しい時分の仕草のやうに、下駄箱の下駄を掘へ直してゐた。私は門を出るといつそこの儘引き返して、今日は家にゐたいやうな心持がしたけれど、それを怪へて學校へ向つた。どうしてさういふ心持がするのかは、自分自身にも分らなかつた。

私は途々何をか暗示されつゝあるやうな心持がした。學校へは、表通りの町へ出て、一筋に行けば近いのだけれど、どうしてか、今朝は出來得るだけ、かうした、人通りのない、淋ばしれた二月の杉垣の續く間を、一人物靜かに小寒く歩いて行きたいやうな氣がするのであつた。それゆゑ私は、門の表札の字の消えたやうな家ばかりの、冬ざれの立木の眺き續いた、しつとりしたその町筋に滑うてとこ〳〵行つた。

やがて私は、何か隔つてゐるものに取り縋るために行きつゝあるやうな、一種の物戀しい心持に包まれて歩いてゐる自分を見出した。さうして、その心持を見守りながら、もしや自分は戀をしてゐるのではあるまいかと不圖さう考へた。このやうなのが戀の心といふものではあるまいか。自分は三千代を戀してゐるのではあるまいかと考へた。

と、私は、自ら何を考へてゐるかに氣が附いて、何だか、かういふ心持を後で誰かが聞いてゐはしなかつたらうかと、振り返つて見たいやうに氣が咎めた。けれども、そんな事は論だ。それは流れ行く水を見守る一部分が、全體と區別されるべき限界もないのと等しき、續きもない妄想である。今自分のやうなものが戀をしたつて何がなる。三千代を戀ひて何がなる。——私は慌てて私の考へた痕跡を拭き消しながら、

そこの町角を曲つた。私の學校のものが三四人行く。少し行くと後からもやつて來る。何だか自分ばかりが、怠惰な、人の笑ふべき事を考へ描いて生きてゐでもするやうに氣が引ける。假りに三千代が私の一々の心持をすつかり了解する事が出來て、私が戀ひれば私をも戀ひる約束の女であるとしても、まだ私は、現實に女といふ事を考へるべき筈の私でもない。もし三千代を戀ひるとしたらどこを戀ひる。——冷やかに考へれば、私は三千代の價値を否定しずにはゐられなかつた。私の得べき女は、そんなに容易く目前にゐる筈のものではなかつた。

私はその日の學課を了へると、今朝來がけに何を考へたかは最早それなり忘れ盡して、たゞ平生のやうに家へ歸つて來た。

門口を這入ると、伯母が外出の着物を着て、丁度どこかへ一人で出かけようとして、戸口を出るところであつた。

「おや、お歸りなさい。私はのい、もつと遅留する積りだつたのでしたけれどのい。——あの——急にあれだものだから——急ぐ事が出來て、夕方の汽車で立たうと思ふのい。一寸そこまで行つて來て、あとでゆつくり御挨拶をしませうよのい。」といふ。私は、

「さうですか。そんなに急ぐと言つて、靴を取つて上へ上ると、女中が、

「御隱居さま、十さまがお歸りになつたやうですぞい。」と小さく言ふのが聞える。なぜ今日に限つてそんな事を言ふのかと思ふ。私は自分の一間へ這入つて、學校の服を脱がうと思つて三千代を呼んだが返事がない。着物がどこにあるのか、三千代が出してくれなければ分らなかつた。

「歸つたかい。」と祖母が來る。

「三千代は今食に這入つてゐるよ。まあお坐り。」と、何たかもぢ〳〵して、私に話す事があるやうに言ふのであつた。

「どうしたのです。」

「何のい、お前さんの知つた事ではないのだけれどのい。今日お前さんの留守に三千代はお母さんから大變に叱られたのぞ。お前さんにはまだ話さんでゐたが、あの子は今度實家の方で嫁にやる事になつたのでのい。それで一應まあちらへ伴れて歸る積りで實は今度母が來たのだつたのい。——それで何だか急に今夕立つ事にしたらしいのぞ。——十さんには父私が詳しい話をするけれどあの子については段々込み入つた何があつてのい、どうもいつまでも家のものにして置く譯にも行かんのだから。と、私へ言譯でもするやうに言ふのであつた。何の意味でそんな事を言ふのか私には分らなかつた。

何で私に到してそんな事を言ふのだらう。私は、それが何でも自分の利害に關係する事でもないのだと言はぬばかりに、わざと冷淡な返事をして、着換へる着物を探しに立つた。祖母はその跡に少らくぢつと坐つた儘、しよんぼりして一つ〳〵ところを見入つてゐたが、それからのそのそと復私のゐる方へ來て、

「着物を探すのかい？」といふ。

「そこには入れてないだらう。三千代が今來るけ、一寸待つてゐなさい。」と言ひつゝ、そこにゐる續きを作るためのやうに、屏風を包んだやうな容子をして、衣桁の下に落ちてゐるものなぞを取り片つける。

私の開けて見た押入には、夕方に立つといふ三千代のものが、まだ何うもしずにその儘にある。これからどうする積りなのか。さう急に立つ支度が出來る積りでゐるのかと思ふ。けれども、人のする事だから、私が心配したつて何にもならない。

私は着物を着て自分の一間に這入つたけれど、何だか物が手に附かないやうで落ち附かな

い。用もない抽斗を開けて掃除をしたりしながら、そは〳〵してゐると、抽斗の物の下から、いつか三千代が、私が長煙ひをする前に、ちよいちよい病院へ通つてゐる時分、控室で診察を待つてゐるところへ、女中に持つてよこさせた手紙が出て來た。私は、手でちぎつて開封した切口を、家へ歸つて丁寧に鋏で切つて取つて置いたものである。開けて見ると、半紙半枚へ走り書きに、

「十さん、きものが寒くはありませんか。氣にかゝりますから、これを持たせて上げます。おはおりの下へ召して下さい。いりませんなら、おたけに持たせてお返し下さい。みち代。」

と書いてある。私は、その後忘れてゐたこの手紙を讀み返しつゝ、その時の事を目に浮べてゐる内に、何だか、もう去つてから久しい三千代が——どこか遠いところへ行つて了つて、それぎりいつまでも會ふ日の來ない三千代が——今かうして、これだけばかりの短い便りを寄せて來たのをでも聞いたやうに、いろ〳〵背が考へ返されるやうな心持がするのであつた。

私はそれを狀袋に收めて手に持つたまゝ、この三千代が夕方にあちらへ向けて去つて了ふのかと思ふ。實家へ歸つてどんなところへ嫁られるのだらうか。私は、昨夜三千代のしく〳〵泣いてゐたもこの事に關してではないだらうかと思ひ合はせた。今朝表口へ出て來てぐづぐづしてゐた容子も、この家を去るのが厭だといふ心が暗に現はれたのではあるまいか。ことを出て行くのが厭だといふよりも、これから嫁入させられるところが不平なのではあるまいか。それならばなぜ厭だと言はないのだらう。考へて見ると、三千代は七八つの時からこゝへ託されて來て、それ以來たゞの一度も實家へ行つた事がない。私もそれを當り前のやうに考へて、この家で生れたものも同じやうな氣で一緒に育つて來たのだけれど、一體どうした譯のある子なのだらう？　私はこの時はまだ何も知らなかつたので、さつきの祖母の言つた事も思ひ浮べて、はじめて三千代の身の上を考へて見たのであつた。

けれども三千代そのものの心も解し難い。母が一緒に歸るといへば、それに從つて、かうして急にでも歸る氣である。それは仕方がないと言へばそれでも可いけれど、そんな著しい變動があるものを、どうして私には默つて隱してゐたのだらうと思へば、三千代も少しよそ〳〵しい。

三千代は倉へ這入つて、二階の箪笥のものを取り纏めてでもゐるのだらうか。私がかうして學校から歸つてゐるといふ事も考へようとはしずに、他の事にのみ薄ら冷たく考へ奪はれつゝ、暗い二階で、こそ〳〵物を出し揃へたりしてゐる容子を目に浮べると、私が何んな事を考へたからとて、三千代にはそれが徹しはしないやうな氣がしてじれつたい。私は三千代が行つて了つたつて何だらう。母に伴れられて歸つてどんなところに嫁られても——丁度、いかなる手からくれる餌にでも賜れて、誰にでも附いて行く羊のやうに、何の反抗もなく人のものになつて了ふのを、私が何といふ資格がある。私はこれからこの女のゐなかつた昔の、祖母と二人で物暗く暮した日に返ればいゝ。私とは交渉を絶してゐる女が——だれにでも盡すだけを、型のやうに私に賜へてゐただけの女が去つたとて何だらう。ゐてくれなくてもいゝ。女には何が分る。型に生れて、型に從つて人に行けば、それで約束は充たされるのだ。

私はこのやうな事を考へつゝ坐つてゐる内に、何の譯ともなく一人ほろ〳〵と涙が出た。どんよりした障子を見詰めてゐる冷たい頰を、

冷たい涙が傳はつて落ちる。自分ながら何のために泣く涙だらうか。

三千代はいつまでも出ては來なかつた。

七

私は一人ゐるのが淋しかつたので、やがて涙を拭いて祖母のところへ行つた。祖母は炬燵にあたつてゐた。私はそれへあたつて寢ころんで、何をか忘れようとするやうな心持を見つつ、蒲團の更紗の小さい模樣の輪郭を目で辿つた。祖母は私の何事をも解し盡してゐる人のやうに——私と同じ心持を見守るやうにたゞ默して、上目に一つところを見つめてゐる。

さうしてゐる内に、三千代が唐紙を開けて這入つて來た。

「お祖母さま、——あの青貝の厭つた箪笥の後側へ、鼠が穴を開けてゐますぞのい。」と、平生の目に言ふやうな事を言ふ。私は壁の方ばかりを見て默つてゐた。

「あれはもう疾うからの事ぞ。抽斗へは内から板を當てて置いたけど、あれをまた齧つてゐるのかい？　どういふ惡い鼠ぞのい。」と祖母は訊く。

「それはいゝが、もうちやんと着て行くものの支度は出來ましたかい。そんなにしないで、急いでせんと間に合はんぞい。」と注意する。

見ると、三千代は泣いた後のやうな眼を伏せて、疊に指を突いた儘、他の事を淋しく考へてゐるやうな容子をして默つてゐる。

「本當は、あんなに急な無理な事を言ふのは、お母さんが間違つてゐるけれどのい。あの子はかうと言つたら聞かない性質だから手の附けやうもないわの。それもお前さんが惡いからぞ。」と祖母は云ふ。三千代は俯つ向いて冷たく涙ぐんでゐる。出ると言つても髮もぐら〳〵になつてゐる儘である。私はやつぱり何にも言はないで默つてゐた。氣の知れない女に向つていふべき事もなかつた。

三千代はやがて寄り附くところもないやうに、しよんぼりと立つて行つた。どうしたのが「お前さんが惡いから」と祖母にはれるのか、私には分らない。まあ何だつていゝ、人の事だから、と思ひつゝ、私は自分一人を見守るためのやうに目を閉ぢた。

「十さん、さうした儘寢てはいけませんぞい。寒冒を引くけよのい。」と、やがて祖母がいふ。私はそれには返事をしずに、これから先で私の得べき女——いつかは得べき女といふものを、形もなく考へ拵へてゐた。

三千代は次の間でこそ〳〵させてゐたが、やがて薄ら冷たく髮を解くらしい容子であつた。私はそれなりそこに假寢をして了つた。

目がさめて見ると、小寒い日はとつぷり暮れて、自分一人が薄暗い中に見捨てられたやうに寢てゐるのであつた。三千代はもう立つて了つたのだらうか。

私はかう氣が附いて、何にも忘れて寢てゐたのに愕いた。向うの方の間もひつそりしてゐる。祖母はどこで何をしてゐるのだらう。家中にはだれもゐなくなつて、たゞ寒い夕方の暗さばかりが鎖されてゐるやうな氣がする。三千代はもう出て行つて了つたのだ。これぎり最早私たちのゐるところを永久に見捨てて去つたのだ。それにしても、私に一言ばかりの挨拶をしようともしずに出て行き得る、冷やかな女の心が分らない。伯母だつてよくその儘立つて行つたものだ。私は何だか取り返しの附かぬ淋寂にでも會つたやうに、ひし〳〵と物恨めしく淋しかつた。二人が出て行くのを私に知らしてくれようともしなかつたお祖母さんも恨めしい。

私は少らくさうして暗がりに潜つたまゝ、も

う私に何を話しかけてくれるものも、私が何の理解を求めるものも亡くなつた、この先の暗い淋しい日の續きを考へ浮べずにはゐられなかつた。

と、女中かしらそろりと唐紙を開けるものがある。

「十さん。」と、竊と見探るやうにいふ。三千代の聲である。私は自分の耳を疑つた。

「お起きなさいよ。もう火を點す時分ですのに。」と、淋しさうに、

「私が背中を抱へて上げますからお起きなさい。」と言ひつゝ側へ來て坐る。

「なぜ私をこんなにいつまでも放つといて寢させたの。」と、さつき厭に淋しかつた心持を告げようとするやうに、

「私はもう默つて歸つて行つて了つたのかと思つた。」と、それだけを言ひ得たけれど、何だか、もつと言ひたい事があつた。言ひたい事が充ちてゐた。

「先刻からいくら起しても、厭だ／＼と言つて起きなさらないのですもの。謝ぢやありません。お前さんなぞは見ても厭だつて非度くお言ひなしたもの。」

「そんな事があるものか。寢言に言つた事じやないの？」

「さうでせうかのい。」と言つたきり、默つて坐つてゐる。

「さうしていつ歸つて行く事になつたの？　お母さんは歸つて來たの？」と、私は心にもない事を口先ばかりでのやうに言つた。それではない。そんな事ではない。私はそれとは違つた何事をか言ひたくてじれつたかつた。

「三千さん。」と私は前後もなく三千代の膝に頭を靠せて、言ひ難い淋しい心持に涙ぐんだ。

「私はまだ歸りはしませんけど。」と、三千代はどうでもいゝ事を言つてゐる。そんな事ではない。歸るなら今だつて歸つて了つてもいゝけれど、お前さんには何うして私の心持が分らないのか。私のこの喰ひ入るやうな淋しい心持がどうして分らないのだらうか。——

三千代は生れてはじめて男に偖す膝を、强ちに拒まうともしずに、冷たく考へ入つたやうにしよんぼりしてゐる。ついでに何とか言つて欲しい。私のこの心持が分るといふ事を示すべき何事をか言つてはくれないのか。さうして今でも歸つて行くがいゝ。歸つてもいゝ。お前さんが私のかういふ心持だけは解してゐてくれたのだつたとさへ思ひ得れば、これきり行つて了つたとて、私は何にも恨みはしない。どのやうな淋しさの中に殘されても堪へてゐる。——分るのか。私がかうして泣いてゐるといふ事だけをでも見てゐるのか。

泣くまいと思へど止まらぬ涙が暗がりに浸み落ちる。お前さんの膝に、こんなに、冷たい涙が浸みつゝある。それでも何とか言つてはくれないのか。それだけでは、たゞ反抗をしないといふだけである。私が泣き止んで、お前さんの膝を離れるのを、反抗なしに待つてゐるといふだけなのか。

「十さん。——どうしてそんなにお泣きなす。」と三千代は訊く。もう泣いてゐやしない。もういゝからあつちへ行つて了つて欲しい。かうして暗がりに二人でゐる事を、お祖母さんたちが何とか思つては厭である。

「もういゝからおいでよ。」と、私は壘に偖つ伏した。抑らない。自分の事はお前さんには分りはしないのだ。分らうとしてもくれないのだ。

「何とか疑られては厭だから。」と私は拒けるやうに言つた。

「十さん、濟みませんけど、あなた先に出なして、あちへ行つて御飯をお上りなして下さいな。」と、三千代は聽毛に涙を浪へたやうにして、他の事を考へてゐるやうにいふのであつた。

私は徒らにこんなところに偖つ伏してゐるのに氣がつくと、物淋しく立ち上つて、他のものに見られたくない涙を拭きつゝ、少らく出て行く足を止めてゐた。三千代はさうして坐つた儘、直ぐには立たうともしない。何を考へて、さうして默つて涙ぐんでゐるのか。なぜ私のゐない跡に泣かうといふのか分らない。お前さんは私と同じ心持で泣くのではない。私とは違つた事を考へて泣いてゐるのだ。私には遂に何にも言はないで、これで去つて了ふのかい。さうして泣いてゐる譯をすら私には何にも明かさない儘にして。——お前さんは冷やかに自己を鎖した女だ。じれつたい女だ。

私は、この女に何でこんな執着を見るのかと考へれば、自らを罵り嘲りたくなつた。

あちらへ出て行くと、丁度祖母が洋燈をつけてのそ／＼持つて來かけるところであつた。私は何を探られるのを怖れるやうにどぎまぎした。伯母は女中を伴れて再びどこへか出たのだといふ。それでは立つのはいつにしたのだらう。

「三千代は何をしてるのかい？」と祖母は訊く。

「何をしてゐますか。」

私はかう言つたきり、暗い心持をして顏を洗ふ水のある方へ行つた。

八

このやうなのが別れの夜の自分と三千代とであつた。二人はそれで別れて了つたのである。翌る日自分が學校へ出た留守に、三千代は母に伴れられて立つて了つた。

學校から歸つて來ると、祖母は伯母たち二人の立つた事を話した。私は伯母から聞いて出たのだつたから愕きもしなかつた。何だか、いつそ物が片附いてすつとしたやうな心持にもなつた。祖母は、伯母が偖かだがこれで好きなものでも買つてくれと言つて託したとて、紙に拈つたれ錢をくれようとする。そんなものは貰ひたくもない。

「三千代るのい、何となく出て行きたくはない容子だつたけれどのい。どうも仕方がないものだけ。」と、祖母はまだ何をか言ひ甘さうとするやうに默つてゐたが、

「まあ三千代はいゝのい、十さん。お前さんには、これからは何でも買はれるやうにお小遣を上げるけのい。」と、三千代のゐなくなつたといふ事を、私が不平にでもしてゐるやうに、氣を取直させようとするやうな事をいふのである。

「そんなに何も買ひたくもないもの。」と、私は素つけなく言つて一間に這入つた。祖母がそんな口振をするのを聞くと、私は、昨夜でも、三千代に何をか求めるかのやうに、あゝして涙に縋つて泣いたりしたのが、何だか自分ながら嘲られないではゐられなかつた。何であんな事をしたものか。どうしてあんなにひし／＼と淋しい自分を見たのだらう。私は三千代を戀ひたのではあるまいか。あんなのが戀といふのではあるまいか。私は三千代を戀ひてゐるのではないだらうか。

私は火鉢の炭のいぶるのを除けようともしずに、顏を蹙めてそれを見守りながら、一人とんな事を考へた。

「それなら厭な事だ。三千代の方では私を戀ひてゐるといふ印も、容子にすら見せなかつたのに。」

だからそんな事は考へたくない。三千代にそんな風に取られたら厭だ。尚うは私に鉄着もなく出て行つて了つたのだから、私一人がいゝ面

の皮になる。私はたゞ泣いただけで別に何も言ひはしなかつた。三千代も何で泣くのか訊きもしなかつた。もしこれが私の戀であるなら、もうこれで忘れて了ひたい。私の戀を見捨てて行つたものを、まだ戀ひるのは男でもない。

私は二三日は、このやうな事ばかりを一人考へて綴けた。さうして或時は、三千代の冷やかだつたのが惡かつた。さうかと思ふと、七八つの小さい時から一つ祖母に育てられて、あゝして歸つて行くまでの久しい間の事をいろ〳〵考へ返せば、三千代は何だか、行つて了つただけ一層戀しくもあつた。私が煩つた間だつて、いつだつて私をよくしてくれた。私はたつたこの間まで、どんなに彼女を頼りにして暮してゐたかが、別れてから分つたやうに思はれて、惡く思ふのは間違つてゐるといふ氣にもなつた。

私はどんな心持に三千代の事を考へるにしても、別れてからのこの程は、暗い冬の、どんよりした家の中に、どこに行んでも坐つても、何も手に附かぬやうに物淋しくて、自分で自分の置場がなかつた。私は二人ゐた日のいろ〳〵の記憶を浮べ返しつゝ、何をか失つた人間のやうに、用事もない暗い倉の中なぞに這入つて、そこらの物の前に立ち盡したりしてゐる内に、頭りに何か考へてゐたやうで、氣が附いて見れど何こそ考へてゐたのでもないやうな、茫とした自分を見出す事も度々であつた。

三千代のものはまだいろんなものがそのまゝ置いてあつた。倉の二階には彼女の小さい時のものを納めた手文庫なぞもあつた。表の下り口の下駄箱を開けても、まだ履かれる下駄が忘れて置いてある。極毫に鼻緒のにく色な、さういふ下駄なぞが、今脱いだ許りのやうに入れてあるのを見れば、何だかこれ迄のやうに矢つぱり三千代がゐる日の續きのやうに思はれて、あの女の返らない影が戀ひられた。

私は何だか三千代に手紙を出して見たいやうな氣がして、その中に書く事を一人で考へ盡くす事もあつた。その内に祖母へあてて三千代からよこした。裏へ蒔く鑑芥子の種を取つといたのが、薬箱に入れてあるといふ事を、言つて置くのを忘れましたから、さう言つて下さいと書き足してあるのを祖母は讀んでくれた。私は三千代がたつたそればかりしか私には通信しないのが寂しかつた。三千代はこれからどういふところへ貰はれて行くのだか。行けばもうそれきり私とは何のつながりもなくなるのだと思へば、祖母に訊くのも忌はしい。祖母は、わざと三千代の事については多くを話さないでゐるらしかつた。

「お祖母さん、三千代の事情といふのはどういふ事ですの？　ずつと家へ預けられてゐたといふ譯を、いつか話すつてこの間お言ひなしたぢやないの？」と、或日ものの續きから訊いて見たけれど、

「それはのい、一寸一口には言へないけれどのい……」と言つたきり、祖母は默つてしまつた。後にそれを私に話して聞かせたのは、私の大伯母に當る人であつた。

私は話相手がないので險鬱になつた。三千代の事は、一日々々と隔るにつれて、一人徒らに考へ續ける事も減つて來たけれど、それだけ寂しい自分を見守つて、他の暗い事をのみ考へなければならなかつた。私はどんよりと暮れて行く夕方なぞは、一人で、ひし〳〵と淋しい障子の黒ずみを見て坐つて、譯もなくしめ〳〵と涙ぐむ事もあつた。

三千代は物足りない女である。逃げた鳥でもあるやうに、それきり私には何にも言つては來なかつた。夜分なぞ、女中が祖母のところに行つて、ひそ〳〵と三千代の事を話してゐるのを聞くと、私は何だか癇障りだつた。私に冷や

かであつた女を、行つて了へばそれで私の事なぞは考へてもくれないやうな女の事を、恰もそれが當り前でもあるやうに、あの女の事をねち〳〵話すのが妬ましかつた。

やがてやう〳〵冬が行つて、日影の色が濃くなつて來た三月に、三千代はどこかへ貰はれたといふ事を聞いた。どこへ貰はれたつて、もとより私にはどうでもない。たゞあのしつとりした黒い二つの目だけは、人のものにしたくはないけれど、それも三千代の持つてゐる目なのだから、私が何と言つても仕方がない。私はもう戀しがらない。戀しがつたところでそれぎりの話である。

でも手紙に言つて來た鑑芥子だけは、女中に言つて裏へ蒔かせた。五月になつて、或日、もう二三日すればそれが花が咲くと女中は言つた。それから、今日は咲き揃つたから出て見よと言つた。

私は何かの事に紛れて、その鑑芥子の事も忘れてゐた。それから小雨のしと〳〵とふり續く日となつて、一人物に飽きたつれ〴〵に、それがどうなつてゐるかを思ひ出したので、とぼ〳〵倉へ行つて、薄暗い窓から裏を覗いて見ると、わたしの見ない間に、最早大方はわびしく散り果てて、僅かに三つか二つ淋しく落ち殘れた花の色が、しと〳〵の雨の足に叩かれて、はら〳〵しい約束の短さを語つてゐる。誰もわざ〳〵來て構ふものもなかつたと見えて、花床と言へど名ばかりに、いろ〳〵の草が亂れて生えて、廢れた裏になつてゐる。下草の延びた無花果の木の、茂り傾いた枝に注ぐ、しめ〳〵しい青い雨さへ物淋しい。

私はしばらくそこにふる雨を見入りつゝ、何とはなく昔の日の事なぞを考へた。戀ひ返すといふのでもないけれど、はかなく褪せた乏しい芥子の花片には三千代が去つて幾日になるといふ事も、考へるともなく考へられた。もうそれらの日も、久しい昔の事の記憶のやうに薄れて浮ぶ。この夫の同じ五月には、私はどのやうな自分になつてゐるだらうかと思つて見る。

私は、その翌る年には中學を了へて、かうした青い雨を見る五月には、上の學校の入學試驗を受ける支度をしながら、馴れない下宿の一間に、隔つた祖母を案じてゐた。それから九月になつて入學して出てからは、その後何年も國許の五月に會つた事はそれきりない。

私が出たあとは、女中とたつた二人になつた祖母は、私とも相談した上、これまでのだだ廣い家を區切つて、後の方の三間だけに倉を添へて小さく住まふ事にして、表はすつかり、性質の分つてゐる、小綺麗に住まふ人に貸して了つた。私の家がさう言ふ容子になつてから、三千代は一度祖母に會ひに來たさうであつた。私は三千代とはあゝして別れたきり、凡そ二年ばかりの間はそれきり交通した事もなければ、もとより互に會ふ事もなかつた。私はたゞ昔の記憶としての外は、三千代の事は忘れて了つた。

二年ばかりたつてから、私は、祖母が急病だといふ不意の知らせに愕いて、行李も整へ敢へず歸つて來た事があつた。それは十月の末の或日であつた。

夜中に歸り着いて、小門の外に車が下りると、内から待ち設けてゐたやうな灯影が動いて、門の栓を開けに出たのは、それだと考へ圖らない三千代であつた。伯母も大伯母も來て、祖母の枕許に附き切つてゐた。もう一月も寢てゐるのだけれど、介抱に來た伯母に、私へはまさかの時までは知らせないでゐてくれといふものだから、默つて言ふ儘にしてゐたが、この二三日以來、急に容子が惡くなつたので、醫者の注意もあつたし、萬一の事のない前に、急に打電したのださうであつた。

祖母はげつそり衰へて、何を辨へる力もない容子に、僅かにすや〳〵と寝入つてゐた。私は自分の何事にも代へて守り救はうとするやうに、そのかすけき眠りを護りながら、何とはなしにほろ〳〵と涙ぐまずにはゐられなかつた。

一倜し、まあ安心ですのい。この調子で行けばどうにか取りとめも附くだらうけ。」と語つて伯母も涙ぐみながら見守つた。人々は嘯くやうに立ち居をした。

私は少らくして、次の間の火鉢の側に、三千代が大伯母と代つて坐り、祖母のための片栗かなぞを溶いてゐるのに氣が附いた。もととは少し痩せたやうな横顔になつた三千代は、私の氣のせゐるか、何だか、しめやかな淋しい姿をしてゐた。

長時間の汽車に疲れた私は、後を伯母たちに託して、次の間に蒲團を延べて貰つて寝た。

「十さん、それで寒くはありませんか。少し薄い蒲團ですけ。」と、三千代は寝床の足元に膝を突いて、倉から出して來てかけようかと尋ねる。

「そんなに寒くはない。」とそれに答へた私は、「久しぶりで、かういふ秋冬の夜の蒲團に寝るんだ。」と独り言のやうに言つた。

三千代は直ぐにあちらへは行かうともしずに、稍しばらくそこに膝を突いたまゝ坐つてゐた。私は唐紙の向うに伯母がゐなかつたら、何とか話を續けて、その後どのやうに暮してゐるか、彼女であるかを問ひ尋ねてやりたいやうな心持もした。

「ではお休みなさい。」と、三千代は唐紙を閉めて行く。

それから翌る朝は疲れのために遅くまで寝た。日が開くと、どこから來た子か、四つばかりになる男の子が、私の寝てゐる室へ來て、一人でこそ〳〵と私が置いといた時計を取り出して弄つてゐる。物のある商家の、腺弱い、血の色のない女が生んだやうな、頭ばかり大きい、痩せこけた子供であつた。

「おいでよ。こゝまでいらつしやい。」と、やがて蒲團に坐つて、シャツを着ながら相手になつても、陰氣なねち〳〵した日附をして、私へは見向きもしない。毛を拐つた鳥のやうな痩せ蒼ざめた好かない子である。

と、三千代が出て來た。

「ーーさん。そんな、叔父さんの大事なものを弄つてはいけません。こつちへいらつしやい。ーーちゃんのお馬が待つてゐますけのい。」と、大事な子のやうに機嫌を取る。子供は、

「いや。」と、憎たらしく言つたきり見向きもしない。餘程甘えさせた子と見える。三千代はそれ以上に何も得言はないやうな、權威のない顔をしてゐる。

「その子は三千代さんを母ちやんといふのかい？　どこの子？」と、自分は何も知らないものだから三千代に訊くと、

「ーーちやんはどこの子？　叔父さんが訊いてゐなすのに。默つてゐるの？——おゝうそうそ。母さんの子ですわのい。もういゝのよ。泣くものぢやありません。さ、いらつしやい。」と抱き上げて、

「泣くのぢやありません。母さんの子ですもの。母さんは大きなーーちやんの母さんになりました。」と、半は私への返事のやうにかう言ひながらあちらへ伴れて行く。それは三千代の夫の子なのださうであつた。豪所で、大伯母からたつたそれだけ聞いただけで、三千代がどんなところに緣附いてゐるのか、詳しい事は何も聞かなかつたけれど、大伯母の口振で察しると、三千代ははじめての結婚なのに、先妻の子のある家へ嫁つてゐるものらしかつた。

三千代は、以前と違つて間數がないものだから、祖母に八釜しくないやうに、その子を倉へ伴れて行つては遊ばせた。あんな、自身の生んだのでもない、ねち〳〵したやうな、聞き分けのない子を、よくあゝして飽かずに大事にするものだと思ふ。伯母もこの子を、目上のものの子のやうに、大事さうに機嫌を取る。何だか、下劣なものが、利慾上の關係から人に取り入つてゐるのを見るやうな不愉快な感じがする。三千代がこの子に對する態度には、それだけで以て、三千代が何事にも反抗をし得ないで、すべてをわが約束のやうに受け入れてゐる性質と、與へられた今の生涯とが目に見えるやうに思はれて、何だか私の事のやうにじれつたくもあつた。たゞ鬱の薄い女だとばかり思へば哀れでもある。その子は私を嫌つて、いつも私を見れば直ぐに顔を反けて、泣き出しさうにして母へ行く。

私はそれから七八日ばかり三千代と共にゐたけれど、彼女自身の事については何一つ聞かなかつた。話し合へば二人に共通の、小さい時からの昔もあれど——かけ代のない、たつた一人の祖母の重病を見守る自分の心にも、さういふ事が考へ返されもしたけれど、伯母がゐる手前もあつてか、三千代もさして心安だての話もせず、人のゐないところでも、そのしつとりとした目元で、まともに私を見る事もなかつた。私も取り出でて過ぎた物事を話しもしなかつた。

「十さん、もうお休みなして下さい。私たちはこの間から、もう夜いつまでも坐つてゐるのに馴れてゐますけ。」と、三千代は言ふ。伯母もどちらも睡眠不足に疲れてゐるらしかつた。

「それへ少し湯でも水でも注して來ておくれよ三千さん。」と私は言ふ。

「おや、痺れが切れましたの？　私が呪禁をして上げませうか。」

「どんな呪禁？」

私たち二人は、病人に附き添つてゐる夜を、かういふたゞの事なぞを低く語るに過ぎなかつた。

祖母は幸に經過がよくて、少しづつ元氣も附いたので、三千代は一先づ安心して歸つて行つた。私にはその靜々しい黒い目もとが物哀れに心に殘つた。もうこの次はいつ會ふ日が來る事か。あゝした女にこの先段々と女房として の氣苦勞の蔭が印されて行くのを見るのは物淋しい。私は、後になつては、もつと何とか話してやればよかつたやうな氣がした。

祖母はこのときはたうとう助かつた。一箇月ばかりの後には、私も立つて出て下宿生活に歸つた。それからは伯母が去り、最後に大伯母も歸つたといふ事は、もうすつかり回復した祖母が書いてよこした。

九

話はこれ位にして終りとしたい。もとより、その後にもさま〳〵の變動はあつた。あの時祖母を勵まして、

「まだそんな弱い事を言つて下すつてはいけません。これから十さんも學校がすんで、立派になりなすのを見なした上、十年程お隱居さんをしなさらなければや。」と、祖母を引き立ててゐた伯母が、一年とたゝない間に、急性の病氣で先に亡くなつて了つた。三千代はそれから間もなく出されたか出たかして、祖母のもとに逃げて來た。三千代は厭々に緣附いた上に、ひどく夫から虐待されてゐたものだといふ事を、私は後に大伯母から聞いた。三千代は夫に別れても歸つて行くところはないのであつた。それは、これまで少しも話を聞かないでゐた事だつたが、實は三千代は、伯母が緣附いた夫との間の子ではなかつた。三千代が久しく私の家に育てられて

来た譯も分つた。詳しい事實は亡き伯母のために話りたくない。私には物哀れな伯母の話が、三千代自身の經た事のやうに考へられて、それだけ三千代を哀れに思ひつた。

私は遂に三千代との戀に落ちた。三千代は早くから私に戀してゐたのだといふ事を泣き〳〵話した。そのやうな事はどうでもよい。眼がつてゐたのでも構ひはしない。祖母は、伯母については死ぬまで何事も語らない儘で、今はもうあの世の人となつた。私が家をすつかり賣り拂つて、三千代と二人でこちらへ出て來たのは、私がまだ學校にゐる内であつた。私はその時、いざ立つて出る段になると、久しい自分の家と別れるのが惜しかつた。もし小さいものだつたら、せめてあの古い倉だけでも記念に持つて行きたいと、三千代も言つた。私は遂に、今柳の上にあるあの瓦を、わざ〳〵剝がせて來たのである。

もうこれ以上には話したくない。今私のところにゐる女は三千代ではない。それからの詳しい事は話したくない。私は三千代を一旦捨てて、今ではまた戀ひ返して悔いてゐる。

（明治四十四年七―八月）

午後（二）

死んだ女の着てゐたものではないかといふ氣がして來ると、私は、それが自分がどうかしてやらなければならなかつた女ででもあるやうに厭な氣がして、さつさと通れるやうに歩く。あとを振り返ると、私に何か關り合ひでも出來はしまいかといふやうに、ぐん〳〵急いで歩く。さうではなくとも、わざとさう考へるやうにして急ぎたい。

と、私は何のためにかうして急いで歩くのか分らなくなつて足を徐める。私は二三人のとぼとぼ行く人を追ひ越した。向うから來る人とも擦れちがつた。しかしそれが男だつたか女だつたか分らなかつた。

一人私の前を行く男がゐる。泥の刎ね返つたなりに乾いた長靴をぼた〳〵言はせて急がしさうに行く。紺の筒袖の、剝げた半纏に股引を履いて、鳥打帽に、海老茶色の襟卷をしてゐる。後から見るだけだけれど、懷に何か容積ばつたものを入れて、帶から上を膨らましてゐるやうに思はれる。魚屋か、飲食屋かの亭主らしい。

魚屋だつたら、血色のいゝ、氣のさつぱりした男である。飲食屋の亭主なら、頬骨をむさくろしく延ばせて、根性の惡さうな目をぎよろ〳〵させて、人にろくに挨拶もしないで、垢の黑くたまつた爪をして蒟蒻を切つたりする。鼻は、ふけだらけのくしや〳〵の髪をして、鼻たれ子に乳をくれてゐる。だだ黑い二疊の疊は火で焦げて穴だらけである。曝の足の垢を見るがいゝ。汚い店だからだれも這入りはしない。小屋根の板が古くさつて、繩切れの朽ちたのが引つかゝつてゐる下に、のれんが汚れて下つてゐる。私はこんな家をどこかで見た事がある。

もうさつきの男はずん〳〵向うへ行つて形が見えなくなつた。

私はさういふ飲食屋の前まで行くために、さうして、今の男をさういふ家の店臺の、紙でひびいを貼つた硝子を通してちらと見て過ぎるために、かうして歩いてゐるやうな氣もして來る。何だか氣味が惡い。

共用栓の下で一人の若いかみさんが洗濯をしてゐる。男のものらしい縞の着物を丸洗ひにしてゐる。

民子

一

私は鳥に水を浴びさせて、籠を提げて上つた。祖母と小母とは、私の見る目から隱れて、藤ばんだ一間にぽつんと坐つて、私に言ひたい事が言へない不平を包んでゐるやうに、二人でひそひそ何か話してゐた。私が上つて來るのを見ると、二人は、互に何でもない別々の事を考へてゐたのだといふやうに、しばらくさりげなく默して、浮かぬ目附を異る方へ注いで、ぢつと一つところを見守つてゐるのであつた。

二人が何を言つてゐるのかは聞かないでもちやんと分つてゐる。最早どうにもならない段になつてぐづ〳〵言つても仕方がない。民子の來る事がそのやうに面白くない位なら、かうならない先に、きつぱりと反對すればいゝのに。――そのために二人に相談もしたのであつた。何でも私のする事には逆はないといふのかと思へば、愈〳〵來る段になつてから昨夜以來またあの調子だから困つて了ふ。いけないと言ふのなら、來ると直ぐにでも歸して了ふ。着いても行李を解かせないで、その儘直ぐに――さんのところへでも伴れてつて、女中にでも賣つて貰へばいゝ。小母たちは、女としていろ〳〵の點を考へてぐづ〳〵言ふのだらうけれど、私の口から一旦引受けると言つた以上は、もう何でもいいから、そんなに藤の方でぶつ〳〵言はないで、私の計ふ儘に默つてゐて欲しい。自分だつて引き取るだけの務めをしてもいゝからこそ受け合つたのである。女房にして永久に伴れ添ふといふのではあるまいし。――

私は、私の心持が二人に了解されないのがもどかしいけれど、それを口へ出していふのも面倒臭い。祖母は物の分らない人でもないのに、あゝして、女一人を引受けては厄介だからと、ねち〳〵した事をいふのは、つまり民子の母を好かないからなのだ。祖母は亡くなつた私の母をも偽り好かなかつたとさへ聞いてゐる。立派な伯母でもないけれど、母の事を考へれば、私にはあの伯母を忘れる事は出來ない。さういふ伯母が困窮してゐるのである。民子は小鳥のやうに素直に出來た女であつた。私の久しく戀してゐた――さうして、私を戀ひるがために、あんな不幸な目を見たものの妹である。私はその四月以來、暗い、いら〳〵した求めに生きてゐる自分自身を描きつゝある。その中にはこの女の姉の半生をも寫してゐる。日毎の紙上にそれを書くのに痛せてゐる。それだけでも、民子とも切るに切られない關係を引いてゐるやうな氣がするのである。それがする事もあらうに、厭な看護婦なぞにならうとしてゐる。私が、女のプロフェッションとして何よりも厭で、考へても齒の浮く、安つぽい女たちの群に這入りかけてゐる。これだけは、私の母の血統といふものために、小母にも祖母にも言ひたくない。

さうして民子と、民子の母とが、どんな事をでもする、させるから、どうか當分少しの間引受けてはくれまいかと、二人で縋んで來たのであつた。

それに私が、かうして、民子を引き取る事を快諾したといふのには、半分は私自身の求めも暗に加はつてゐる。祖母や小母たちには、誤解を受けずには話す事は出來ないけれども、それにはもとより何等の後暗い考へがあるわけ

もない。少くとも、私が長い苦しい仕事をしてゐる間だけでも、理解といふものの備はつた、或純淨な同情を周圍に領してゐたいといふ欲求が私を驅つたのであつた。併し、それだからと言つて、私の方から言ひ出して來させるやうにしたのでは決してない。まさか祖母たちがそんな事を疑つてゐもしまい。

私は柱の釘に鳥をかけて、そのまゝ緣側にぼんやりと立ち盡しながら、このやうな事を取りとめもなく考へ入つてゐた。

私は、久しく會はない民子が、何だか自分の戀してゐる女でもあるやうに、午後には一一の驛に着くあの女の、すべての容子が思ひ描かれた。

生垣の向うの柿の木に、油蟬がじん〳〵鳴き出した。間近いその一匹が耳を刺すと、裏の山や方々で鳴いてゐるのが一時に耳に附いて來る。仕事に夜ふかしをする私に取つては、まだ寢床を出たばかりの朝だけれど、日蔭は已に强度に丈けて、頭ががん〳〵するばかりに黃色く强つてゐる。小母が刈り取らうと言つても私が取らせないために、雜草の延びたいだけ延びた、ただ廣い垣根の內には、何とか葵といふのの眞赤な大きい花が一つ、强つた日蔭の中に

奮いたやうに、小搖ぎもなく咲いてゐる。石の間の、土の皮がざら〳〵に割れた龜裂の上に、昨日或子供が忘れて行つた、白絲で石ころに括りつけられた蜻蛉が、から〳〵に死んで裏返つてゐる。油蟬は、それ等の總てをじり〳〵と浸した日光の色を、より黃色く、より暑くする力のやうにじん〳〵と鳴くのである。倦怠く燒けつく一ん日の炎暑が、もう目に見るやうに眼はしく待ち設けられる。

やがて私は、今日送るべき一回を書くために、例の如く原稿紙に對したが、まだ書かない先から、已に飽き〳〵した續きのやうにぐつたりしてゐる。四月以來一ん日の休みもない、長い苦作に疲れてゐるのであつた。

すると、小母が絞り上げた洗濯物を提げて、そこらの日向を得るために、こそ〳〵と日の前を通つて行く。そんなにわざと猫が歩くやうにこそ〳〵通らないでもいゝから、さつさと行くがいゝ。餘計なところで氣を遣つたつて、いつも肝腎な事で自分をくさ〳〵させるのだから何の足しにもなりはしない。また通る。日陰りで堪らない。

「小母さん、そんなに一つ〳〵いく度も行つたり來たりする代りに、バケツか何か入れて一度に持つてけばいゝぢやないか。」と言つて見る。

「ふゝゝ、だつて今丁度あれだもんですけのい。もう直ぐ濟みますけ。」と急いで裏口へ歸つて、また一つ持つて來る。最後のは私の寢間着らしかつた。

「もうこれきりですけのい。」と、事多いさうに寢れた小母は、人の宅地をでも通り拔けるやうに、濟まなささうにして往來をする。そんなにしないで、當り前に行動する方が却つて目障りにならないのだのに。

私のまはりには綿ざはりな蠅が、もう小うるさく集つて來た。私はそれを一つづつ蠅叩きで取つて、しばらくの間の小康を作り〳〵しては書いて行く。

いつもの事ではあるけれど、今日は餘計に纏らない。同じ書き出しのところを何枚となく書き崩すばかりで、容易に形を爲さないのでくさくさして來る。こんなになると、いかに焦つても駄目である。今日は、郵便夫が來るまでに出來なくても、どうせ町まで民子を迎へに行つてやらなければならないのだから、それまでに書けばいゝのだけれど、それがまた間に合ふやうに出來るかどうか分らない。

私は、いら〳〵しつゝ、べり〳〵と書き帆しを裂いた。またいつの間にか蠅がうちや〳〵來て、頭へも手の先へも、掛つても直ぐまた飛んで來て目まぐろしい。

私はしまひには厭になつてしまつて、がじがじと、伸びた頭の髮を搔き〳〵次の間へ行つて、何にも說いてない、がらんとした疊の上に倒れるやうに寢ころんで、壓へられたやうな黑い息をしつゝ目を閉ぢてゐた。そこの、私の足の方になつてゐる壁の後が、祖母のゐる、小さい、薄暗い一間の、押入になつてゐる。その戶棚で鼠が惡戲でもしてゐるのか、時い板戶の中でことことと微かな音がする。私の過敏になつた神經はこの四五日以來取りわけて、こんなこそ〳〵した物音にもちき〳〵刺激されるのであつた。

私は足で疊を叩いてそれを追うたけれど、矢つぱりこと〳〵言はせる。煩い蠅はいつしかまたこゝへも集りに來た。私は遂に出かけて行つて、祖母のゐるところを覗いて見た。と、それは祖母が戶棚に頭を突つ込んで、何かこそ〳〵いぢくつてゐるのであつた。

「何をなさるの、お祖母さん。——お祖母さん。」

といふと、

「あゝれ、びつくりした。お前さんかい。ふゝふ、いゝ子だからあちらへ行つておくれよ。どだごだした物が突つ突き込んであるのを見ると癇癪が出るけ。今こゝを片附けてゐるのぢやけのい。」

「何でそんな下らないものを大事さうに取つとくんです。その錆び附いたブリキの罐なんか何にするんです。」と私は癇走つて言つた。

「いゝからあちらへ行つておくれ。汚いけ。」

「おや、戶棚の中に水かしら零れてゐるぢやありませんか。いゝえ、その方ぢやない。——何だ、行李の下へ流れ込んでびた〳〵だ。——また目をあれするんですか、あなた。いくら言つても聞きわけのない。……日の緣が爛れてじくじくになつてるぢやありませんか。」

いく度も言ふのに聞きはしない。目が見えるやうになるのだからと言つて、鹽水で洗ひ〳〵して擦るのである。そんな事をしたつて何の足しになるものか。

祖母は私の言ふ事をがみ〳〵突つつくやうに取つて、情なさうに目を閉ぢながら、

「私も、もう長くは生きんけ、少しはしたい通りをさせておくれよ。」と、やるせなげに言ふのである。

「だから、何でも人のいふ事は聞かずに、したい通りをなさるからいゝぢやありませんか。」

「あんな事をいふよ。いつ私がお前さんの言ふ事に逆つたらう。言つて見なさい。」

「目だつて御覽なさい、そんなに痛さうになつてるぢやないの？」

私はくさ〳〵して口ではいら〳〵しくかう言つたけれど、私の外に、下女も小母といふものもゐるのに、祖母が何一つ面倒を見ても貰へないやうに、小汚い中に一人でこそ〳〵してゐるのを見れば、何もかも私一人が惡いやうに自責されて、默つてうろ〳〵してゐる祖母が可哀想で堪らない。

私は臺所口を覗いて、けたゝましく下女を呼んだが、小母が何事かと出て來たので、戶棚にひつくり覆つた鹽水を拭くやうにがみ〳〵と言ひ附けた。

私はぢつとしてはゐられないやうにせか〳〵して、またもう一度原稿に取りかゝつた。

「まあ、なぜ直ぐ私を呼びなさらんかのい。退いて下さい。おや〳〵、あなたの蝙蝠傘が倒れとつたのへ鹽水がびつしよりかゝつとりますぞい。あれ、行李もでさ。——まあ、これはついとゝから拭いたのぢや駄目。本當に仕やうのないお祖母さんぞのい。」

小母が、ぶつ〳〵いふのが耳障りで堪らない。黙つて拭いとけばいゝ譯である。たゞたその位の事が何だ。――まだ言つてる。

「おい、やかましいから黙つてしなさい。」と私はまた立つて行つた。

「誰もお祖母さんを叱れつてお前を呼んだんぢやないよ。」

かう言はうとして、口まで出かけたけれど、また小母が脹れるから黙つてゐた。

「お祖母さん、こつちへおいでなさい。そこをちやんとして貰ふ間、こつちへ来てゐなさい。」と、祖母の方を窘めるやうにかう言つて、人のどつ〳〵言はないところへ伴れて行くためのやうに、自分の物を書く方へ導いて来た。

「こゝへ坐つてゐなさい。そつとして。」

「かうかい。」

「えゝ、どうなりと好きなやうにしてゐなさればいゝ。そこへ寢そべつてゐなしてもいゝんです。」

「この一間は午後は日が這入るやうぢやのい。まあ、こゝにも隨分蠅がゐるぞの。――私のゐるところにばかりかと思つたのに。――私が日が見えればこゝに附いてゐて、蠅ぐらゐ追うてやるのだけど。」と、つまらない事を二人で言つてゐる。

「お祖母さん、私は物を書いてゐるのですけ、黙つてゐて下さいな。」と、子供に言ふやうにたしなめつゝ、私は何とはなしに祖母のために出したのか、見えない目に涙を溜めて、しよんぼりと坐つてゐる。

かうして私はまた、書きかけたのを刷しては べり〳〵裂いた。

外に漲る日はじり〳〵と暑くなつて来る。うゝん〳〵と虹が来る。

二

私はやつと出来上つた一回分を提げて、じりじりしい日の色の熱し切つた門口に出ると、かうした晝寝時の炎天の下を、二十町も歩いて行かなければならない事かと考へて、うんざりして彳んだ。

往来の下の溝川はから〳〵に乾き上つて、川床の暑い砂の中に、ブリキの切がぎら〳〵と光つてゐる。土手にいきれてゐる草の中に、熱した砂土の上皮が、陽炎ふやうに、獨りでほろりほろりと下に落ちる。うまく馬車でもゐてくれなかつたら、明のスティションまで出る間に、往来には確かの日蔭もないのである。原稿だけならば、つい、あそこの先まで下女をやつて、使ひをする子供にでも託ければいゝのだけれど。

自分ほもう、いら〳〵暑い汗でじく〳〵になるのを目に見るやうな、厭な心持をして洋傘を開いた。

この包介だといふ氣持は、何だかこれから民子を引き取つてから、祖母や小母に對して、これまでと違つた、一つの氣扱ひが殖えて来るのをも、今から考へ浮べさせずには置かなかつた。

私は都合よく、村の氷を賣る店の門口に馬車が休んでゐるのを得て乗つて行つた。

郵便局の前で下りて原稿を出した後、或家で水を貰つて體の汗を拭いて、それからスティションへ行つて、民子の着く下り列車を待つた。

驛員が總てで二人しかゐない小さい驛である。柱にかゝつた、不似合に大きな時計は、止つてゐるでもするやうに、針が一寸も動かないやうに見えるけれど、それでも三分五分づつ移つて行きはするのであつた。ぢつと落ち附いて立つてゐると、あれでも少しはそよ〳〵と動く風が受けられないでもなかつた。人口のすぐ外の、ふは〳〵した砂を掘り窪めて、どこかの鶏が

二三匹、暑い日光の中に倦怠さうに蹲つてゐる。ベンチの上なぞに、觸れば指の跡が附くやうに、埃がざら〳〵に溜つてゐるだけを見ても、この寂れた灰色の町に、人の乗り降りの少ない事が考へられる。民子は三千萬の人口のあるところから、こゝをどのくらゐ寂しい町だと考へ設けて来るのだらう。

私は一人ベンチにかゝつて、民子のすべての容子なぞを想像して見た。三十いく時間もかゝる間を――二度の乗換への度にもまごついたであらう。――長い、馴れない汽車に乗つて、一人で来る途中の事を考へれば、まだこれから先にある事のやうに不安であつた。自分は民子を思ひ護つてやるやうな心持になつた。民子が人に見られるのも何となく氣後れのするやうな心持に、たつた一つの値段のかゝつてゐない帶や着物をつゝましく着て、物馴れない女のやうに、手荷物を片寄せて乗つてゐる樣が想ほれた。或點が、わが戀ひたあの女によく似て、しつとりした、女らしいところのあつた民子を、私は何年ぶりに見るのであらう。

私はそれに續いて、わが昔の三千子の事についても、いろ〳〵の回想を浮べないではゐられなかつた。

私は、かうして、民子のためにこゝに出て来てゐる自分が、何だか、私が日々書いてゐる作中での出来事のやうな氣がするのであつた。

その内に時間が来た。さうして、待ち設けた列車が着いた。私は、改札口を覗いて、それらしいものの下りるのを待ち受けたが、どうしたのか、二人の男の客が下りたきりで、民子の姿が見えない。下りたものの一人はもう改札口を出た。私は落ち附かないで、列車の中を覗いて歩かうとしかけた。貨物の下りるのがあつて列車はまだ止つてゐた。

すると、二等車の出口から、民子が荷物と洋傘とを抱へて下りた。二等で来たものだ。ボーイが手傳つて、二三の手荷物を下した。民子は、紫陽花を染め出した、クリーム色の帶をして、垢抜けたつくりをしてゐる。ニッケルの口金のついた、ハイカラな手提袋を開けて、ボーイに禮をくれてゐる。それが、何だか遣らなくもいい餘計な事をパニティでしてゐるやうにも見えた。すつかり變つてゐる。考へてゐたのとは全で違つてゐた。――民子が私の来てゐるのを見たといふ事は、さうしてゐる容子の或物で分つた。私はその方へ近づいた。民子は何と言つて挨拶をすればいゝかに惑ふやうに、頬を赤らめて、極り惡さうに頭を下げる。久しく見ない間に、すつかり一人前の女になつてゐるのに愕かれた。

「一人で心細かつたらう。この方をお前持つてくれ。何、どうせそこから馬車に乗るんだから。」と、私は荷物の袋の大きいのを抱へてプラットフォームを出た。

「他に荷物は？」

「行李が二つと鞄とだけですの。――あそこに下りてをりますい。」

「あの三つか。――お前ずゐぶんハイカラだね。あんな鞄を買つたのかい、今度。」

民子は極り惡さうに口を伏せて、ベンチの上に置いた、袋の口を結び直してゐる。その腕に僅かに覗いたレイスの袖口が、何といふ譯もなく、プロフェッショナルな女といふ事を考へさせた。私は少しぐら〳〵しかけてゐる束髪の前髪や、肉附いた肩のあたりをじろ〳〵見た。

プラットフォームに下された行李と鞄が持ち出された。ばかにけば〳〵しい不愉快な鞄である。民子はすつかり私の考へ設けた事を裏切つた。

民子はそんな事は知らないで、そは〳〵したやうに、紙入に納めた荷物の合札を探してゐる。

着物の下はじつとりと汗ばんでゐるやうである。目もとにも、いら〳〵と暑い疲れが見えてゐた。

「どうだ。そこの家へ行つて顔を洗はないか。」

と私は言つた。

「お兄さんがお洗ひなすなら私はこゝで待つてゐます。」

「私はどうでもいゝんだけども。――ぢや早く家へ行かう。俳し大變だよ。まだこれからしばらくがた〳〵の馬車へ乗るんだぜ。」

私は言譯のやうにかう言ひつゝ、出口に立つて、約束して置いたさつきの馬車がやつて來るのを待ち受けた。

三

「まあ、ほんとにいゝところですぞのい。」と、汗を落して、さつぱりしたやうに、浴衣の上に卷帶をしてこちらへ出て來た民子は、やう〳〵落ち附いたやうに、緣先へ腰掛んで、何とか葵の、もう午後はすつかり閑んで了つたのを見入つてゐる。私は二三間置いた柱のところで、寢椅子の上の本なぞを片づけた。

「隨分と廣いのですぞのい。いろんな花がありますこと。あれは何とかぎひましたぞのい。」

「どれ？　あれは躬干さ。私は下らない草でも何でも、延びるだけ延ばして置くんだ。そこの雨落のところの砥草の向うには桔梗の花があるよ。――そこの鳥はどうだ。そこの戸袋のところを御覽。」

「あら、まあ。眞つ白い鳥ですぞのい。何を食べてゐますのですぞ？」

民子は私のかけた長椅子の側へ來て、珍らしさうにその鳥を見る。

山の藤だから、もう日足は隱れて、垣の内はすつかり暗つたやうになつてゐる。下女が限なく水をまいて置いたのが、雨上りの後のやうに土に浸みて、ひんやりとした夕方を待つ色をしてゐる。外の木立の中では、その夕方の迫るのを招くやうに、きり〳〵〳〵と蜩が鳴く。

「何だか寺の方丈か何かにゐるやうだらう。こゝらのかういふ大きな柱へは鎭がぼんやり寫るよ。みんな黑光りになつてゐる。その唐紙でも御覽、鰐が一間あるぜ。――障子がすつかり嵌まつてる頃は、雨が降ると家中が眞つ暗になる。――こゝは十疊だ。それからそこが八疊二間だらう。それから次の間がまた八疊だ。」

「あちらが三間とお祖母さんのゐなすところと、またそこのところにも一間あるのですぞのい。」

「あそこは雨が漏つて疊が腐つてるから使へないんだ。こゝだつてじやあ〳〵漏るんだよ。」

「まあ。――それぢや雨の降る日にはどうなさるんですの？」

「さういふ時には、バケツや盥や、手當り次第のものを并べといて、あちらの方へ引き上げるんさ。面白いだらう。これでもやう〳〵の事で目つけたんだから不平は言へない。もと醫者の家だつたんだ。あゝいゝ物があるよ。一寸こちらへ來て御覽。」

自分ほ椅子を離れて、向うの、物入れにしてある一間の、ぼろ〳〵の障子を開けて見せた。

「ほんに。こゝが本當の玄關なのですぞのい。」

「その上を御覽。あんなものがある。」

そこには、雨ざらしになつたやうな、古い淀んだ昔の駕が、二つ釣し上げてあるのであつた。

「こゝの家の人が乘つて歩いたものだらうね。いつの昔だか。」

「へーえ。」と言つて、民子は珍らしさうに見上げてゐる。足下は二段の階段になつて、下に三枚敷ばかりの式臺の板の間が、灰色に光けてゐる。こゝからの上り下りを用すために立てかけた、竹の格子の仕切も、いつからの物とも分らないやうに朽ちかけてゐる。直く外には大きな蘇鐵が一株あつて、その横に赤錆びた潮り水を湛へた、人間の丈が浸るばかりな、用水の大釜がある。その中に湧いたらしい子孑が蚊になつて、うぢや〳〵と立ち縺れてゐる。

「この小さい方のは、芝居でおかるが賣られて出る時に、こんなのへ乘つて出ますぞのい。」と民子はまだ駕を見つめてゐる。

私は何だか、いろ〳〵言ひたい事があるやうで、而も何こそ纏つて言ふべき事を見出さない。自分がこんな寂れた村に、年取つた祖母と、これもいゝ加減の年の小母と、そんな面白くもない二人をつれて、何一つ理解といふものもない、灰色な空氣の中に、毎日創作に苦しんで、いかに苛々寂しいがじ〳〵する日をのみ一人見てゐたかを、この女にどう言つて了解させればいゝだらうといふやうな氣がする。その日々の自分の生活がしみ〴〵と察して欲しい。――かういふ心持が突つ突くやうに動くけれど、口にはその表現が見出されない。私はたゞ、何でも民子には珍らしく受取られでもするかのやうに、そちこちを見せて廻つた。

「民子さん、こゝへ來て御覽なさいな。」と、小母が裏から廻つて、緣側へ出て來て呼びかけた。

「まあ段々にぼつ〳〵見ればいゝ。小母さんもこつちへお上りよ。お祖母さんもこゝへ呼んでおいでな。」

「でも一寸來て御覽なさい。これ、こんな小さい胡瓜が實つてゐるのですけ。」と、小母は手で大きさをして見せて、自分の物を何でも見せたがる子供のやうにいふのである。

「さうですか。どこに？」と、民子は甘えたやうに、お勤めのやうにかう言つて、小母が緣側の下から出した庭下駄を突つかけて裏へ行く。小母が種子を蒔いて、魚の腸なぞを肥料に埋めたりして作つた五六本の胡瓜や、近所で貰つた茄子なぞの植つた、二坪ばかりの畠が、物置の側にあるのであつた。

私は一人になつて、何だか落ち附かないやうな心持がした。祖母はどうしてゐるかと行つて見ると、小さい一間の緣先に出て、伯母から來たらしい手紙の、祖母に見えるやうに、手習ひの字のやうに大きく書いたのを目に喰つ附けるばかりに披げて、目を皺めて讀んでゐる。そこには、民子が土產に持つて來たのだらう、二品三品の、煮浸んだやうな青や赤で摺つた紙袋に這入つたものが、伯母が忍しく求めた事を苦げるやうに置かれてゐた。私はそれを見て、何だか伯母が不憫なやうな氣持になつた。目のよく見えない祖母は、私が側へ來たとも知らないで、手紙を讀み續けてゐる。緣側の壁の根には、祖母が買はせた鼠取の金網の籠が、この間私が釣しておいたビスケットが、未だにそれなりに附いた儘、口を開けて置いてある。

と、下女が、

「お食卓は座敷へ出しますのですか。」と訊きに來た。

私と祖母とは、やがて先に食卓について、小母たち二人が裏から出て來るのを待つた。私は四五杯しか飲めない酒を、一人で注いで、ちびちび嘗めるやうに飲んだ。そのうちに二人も下から上つて來た。

「さあ民子さん、こゝへお坐りなさい。大變な御馳走が並ぶからびつくりしなすなよ。」と言ひつゝ、小母は有合せの物ばかりを小皿に分けた。

「今日はあんたが來たお祝ひだけれど、この春こゝへ引つ込んでから以來は、かうして、家のものたちが一つになつて食事をするなぞといふ事は滅多にないのぞ。この人はいつでも一人で、

おかずも冷たくなつた頃にしよんぼりと來て食べるのぢやぞのぞの。」と、祖母は、これまでの寂しかつた録日の話をし出すのであつた。

「そんな事はどうでもいゝから、一つお上りなさい。お祖母さん。」

私はそんな捌らない事を聞くまいとした。

「とにかくのい、民さん、かうして來たからには家の子と同じぢやけ、これ〳〵と思ふ事は互に隠さずに言ふやうにして、みんなで面白く暮しませうぞのい。」と、祖母は民子に盃をくれる。

「お前ものい。」と私に向いて、

「かうなるまでには、私もいろんな事を言ひもしたけど、もうかうなつて見れば、何の事はない、家で生れたものも同じ調ぢやけのい。……ただ、いろんな事を考へて見ると、後で互に後悔をするやうな事があつても何だと思つたものぢやけのい。」と、餘計な事を言ひ出した。民子の來た事に對して、もう何の反感も持つてゐないといふ心持を、私に告げようとするのである。それはくど〳〵言はなくても分つてゐる。

「さ、お箸をお附けなさい、民子さん。本當にこういらには、お魚と言つたらこんな鯖か鰯かしかないのですけのい。それは〳〵不自由な、仕方のないところですぞの。私はいつもあちらの事を考へますのい。お魚だつて何でもありますしのい。」と言ひつゝ、小母は祖母が膝に食べ落したものを手の平に拾つた。民子は貰つた盃の始末に困つたやうに、手に持つて、何をか他の事を考へ入るやうに俯つ伏してゐる。私はその長い睫毛をした、黒い、潤りつぽい目を、偷むやうにちら〳〵見た。

私が昔三千子を戀ひて、伯母の家へ行き〳〵してゐた時分には、この民子は八つか九つかの子供であつた。その頃はまだ伯母のところも立派にやつてゐたのだけれど、間もなくがらりと傾いて了つたために、民子は三千子とは異つて、すべてに乏しい、薄暗いやうな中にのみ育つて來たのである。私は今民子が、かうして小母たちにまでも氣を置くやうな容子をして坐つてゐるさまを見ると、あちらに末の男の子と二人で淋しくぼらしく暮してゐる、氣の毒な伯母の事も考へられた。

私はかういふやうなムードを以て女を見ると きには、いつでも、哀れに弱いものは、不自由な中にゐる、女らしい女の運命だと思ふ。何も知らずに、薄い日に生ひ立つて、それ〴〵に同じ乏しいものの運となる。——私には、俯つ向いてゐる民子の帶の間に、はら〳〵と散りやすい、繊芥子の色に似た帶揚の覗いてゐるのさへ何とはなく哀れに見えた。

「どうだ、民さん、こんなひどい田舎だとは思はなかつたらう？　かういふところなら來るんぢやなかつたのぢやないか。」と、私は口では賑やかにこのやうな事も言つた。

「いゝえ。そんな事は……」と、民子は眞面目に返事をして、顔を上げて、眉毛にかゝる髪の後れ毛を掻き上げる。何を考へたのか、長い睫毛に涙ぐんでゐる。

「その盞を已にお返しよ。今に已が舌が廻らなくなるから見てゐて御覽。ちび〳〵積古をするのだけれど、とても亡くなつたお祖父さんなぞのやうにはなれさうもない。」

「あんな事をお言ひなす。あなたのやうな脆弱い體で、お祖父さんのやうに召し上つて御覽なさい、それこそ命はないのですぞい。」と小母がいふ。

「さうだ、命といへば、私は三十三になつたら死ぬつて、占者に言はれた事があつた。——本當だよ。そら、あの二丁目の角に鳥屋があつて、そこを少し左へ行くと、何とか言つたしもた家の格子の下に、夜になると占ひ屋が店を出して

ゐたらう？——あいつが言つたんだ。さうだな、私が十五六の頃だつたらうか。久しぶりで思ひ出した。已は三十三で死ぬのかな。」

「まあ厭なこと。どうしてそんな事を言うたのぢやらうぞのい。」と祖母も笑つた。

このやうな事から、皆はそれからそれへとあちらの話をした。民子は小母たちがいろんなことを訊き尋ねるのに返事をした。こゝへ來る途中の見聞をも話した。

「まあ、民さんたちはゆつくりお上りよ。私はいつでも、灯が點らない内にちやんと寢支度をして、引つ込んで了ふのが嬉ぢやけのい。」と、祖母はのそ〳〵立つて行く。

「お祖母さん。お危うございますぞ。」と、民子が附いて行かうとする。

「いゝよ、民さん、いつでも一人でずん〳〵行くんだから。」と民子を止めた私は、少してか〳〵し出した頬を押へて、またもつと飲まうとした。

下女は小早に洋燈を點けた。

やがて段々と外も暗くなつて行くのに氣が附くと、悲しい雨のやうに蛾の鳴くのもいつしか止んで、垣根に螽蟲がかち〳〵と言ひ出してゐた。洋燈の灯には、火を取る蛾が目まぐろしく舞ひ〳〵した。

小母は民子の疲れを休ませるために、早くあちらに床を取つた。私も、いつものところに蚊帳を釣らせたが、まだ本當に寢ようとする意味でもないので、寢間着も着換へないで、その儘這入つてごろりとなつた。民子はあちらの方で手提袋を解いて、さしむき要る物を出したりしてゐた。

「はあれ、綺麗でございますこと。あなたがお拵へなすつたのですか。へーえ。」とこんな事を言ひながら、下女が側で何をか見てゐた。

「でも、これはまだ何でもないのよ。もつとどんなのでも出來るわ。」などと、民子は下女ともう心安さうに話してゐる。かうした屈託のない二人の女の私語は、私のまはりから長い冬があけて、急に麗かな三月の日影になつたやうに、暖やかに吸かい或るのが感ぜられた。私は蚊帳の中の燈に映る、蚊帳の目の影を見守りながら、民子のしつとりした黒い眼もとや髪の形を、何といふ調もなく考への中に畫いてゐた。

その内に、私はいつしか、三千子の、目影を失つたやうな、海暗い妻を目に浮べた。垣の向うでは夜仕事にこり〳〵と蟋を搗く。

と、俄かに曇り出したやうな心持になつた私は、それから自分の書いてゐる作の事に考へ移つた。疲れ果てて而も過敏になつてゐる神經は、よく發作的に私のムードを動搖させるのであつた。明日は八十二回が出る。さうして今日の續きの八十五回を書くのかと思ふ。まだ豫定の長さまでにはもう九十回も書かなければならない。かうした先を考へると、この調子でうまく體が續くかしらと、心許なくなつて來る。

民子たちは、あちらで何か言つてげら〳〵と笑ひ合つてゐる。何だかそれが、かうした私の心持を同情する事を解しない、淺薄な女たちといふ事を考へさせる。私は、

「民さん。」と苛々しく呼んだ。

「はい。」と言つて立つて來た民子は、

「お呼びなしたか。」と、まだあちらでの笑ひを頬に殘してゐる。

別に用事があるのでもない。私が不安な事を考へる間、私の後に來て私と同じ事を考へつつ、私を護つてゐて欲しいやうな氣がするのである。私は昔の自分を書いてゐる。悲慘なお前の姉の事をも書いてゐるのではないか。——けれども、私がこの作に苦しむ心持が、どうして民子に了解させ得られよう。人にどうしてそのやうな事が分らせられよう。

一何の用事でもない。草臥れてゐるだらうから

もう早く寝るがいゝ。」

私はぱつを造るためにかう云つた。

「はい。」と言つて民子は徐かに向うへ行く。

私はさう言つた後から、何だか物足りなくなつた。私は先刻は、民子がかうして遂々出て來たことに、何か意義があるやうに胸を躍かせたりしたけれど、考へて見ると、民子だつてただ紙の上の模樣のやうに生きてゐる女である。私の底の心の懊惱に到しては何の足しにもならないやうな氣がする。私はどうしても私一人である。どうせ一人の自分だと思へば、やつぱり薄ら寂しくなつて來る。

「仕方がない。ぐん〳〵書く。書くより外には何の意味もない。明日は愈、あの蒼ざめた三千子と會ふところにしようか。」

私は我ともなく坐り直つて、自分ながらくつきり痩せた腕首の兩方に、代る〴〵指を卷いて見た。

四

民子は先程、下女と伴つて、外の方を見に出たと小母がいふ。

「もうあなた八時ですぜい。」と言ひつゝ、小母は例數代りの牛乳を沸かして持つて來る。私は仕事に就く前に、後の山の上へ、運動にぶら〳〵上つて來ようかと考へた。

私は今日書くべきシーンを考へ浮べつゝ、裏の無花果の木の間を抜けて、物置の後から山へ上つた。もう蝉はじん〳〵と、今日も暑い午後を見せるべく、日影に蔭へ擦かるやうに鳴いてゐる。蘭の花は、そろ〳〵最に老い萎れて、黄色い小草の花が暑く咲き續いてゐる。下から屋根の高さくらゐまで上ると、そこに小さい芋畠がある。元はこゝに何か家に附いた建物でもあつたらしく、礎だつたらしい四角な石が、掘り出して梨の木の下に片寄せてある。家を預つてゐる人が、こゝを打ち返して芋を植ゑたものである。

そこから上は低い灌木や小松ばかりの草山で、女郎花がちら〳〵交つて咲いてゐる。山と言つても、このあたりのは、屋根より三四倍高いくらゐの小さい丘の列りである。私はいつも行つては彳む、山の背の女松の林の中を目指してぶらり〳〵上つた。

そこには私が丸太を打ち込んで作つたベンチがある。私はそれにかゝつて煙草に火を點けた。こゝはまだ日の出ぬ先からの藤になつてゐて、足下の草の葉には露がじと〳〵にかゝつてゐる。物暗い松の枝の間に張り渡した蜘蛛の巣には、大きな女郎蜘蛛が一匹、固く蹲まつて眠つてゐる。時々、蝉がきゝゝと鳴いて、木から木へ飛び移る。

前は稍廣く聯る稻田で、ぐるりを遠く松山が取り繞つてゐる。その中程を、家の稀な往來が淋しく横切つて、たつた二筋だけの針金を引いた電柱が續いてゐる。その道路が再び山に隱れる際に、小さい川が見えて、そこに固まつてゐる一部落の間に、一棟の白壁の倉が、くつきりと、玩具の家を置いたやうに見えてゐる。向うの山の木立の間から、――沼の一部分が、果もない水の續きのやうに仄かに見え擴がつてゐる。稻は大分穂も大きく延びて來たやうである。見渡す限りの田面の色は、青さの間に薄く黄ばんだ色が交つて來た。

朝日の影の漲つてゐた空は、いつしか段々と、磨硝子のやうな朝霧りに鎖されて來た。かうして、しばらく薄どんよりしたやうに見せるのだけれど、その藤りのすぐ後には、暑い光が壓搾されて隱れてゐる。低い雲がふは〳〵と向うの水の果の方から漲り動いて來る。これが段々に散つて了ふと、かつと暑い炎天になるのである。油蝉が、その暑さを疎き出す先觸れのやうに、

苛だたしく四方に溶け顫へて鳴き立てる。

私は恰も、三千子を戀ひた日にゐる自分のやうに、今日のシーンに取るべき彼女を考へ盡きつゝ、そこらの女松の林の間を彷徨つた。今日は、自分が戀ひ求める三千子に會ふところを寫すのである。

それは、或はろゝ寒く曇つた夕方の事だつたのだけれど、かうした夏の日の下に考へ浮べれば、他惡く疲れた戀のやうに、重たい女の宿命である。あれだけ私に戀ひられてゐるのを知つてゐて、さうして、私に反く辛さに悶えつゝも、何事も知つてゐる母が、嫁入せようといふのを、どうして鎖にでも縛られた如くに、それを得う振り切らないで、薄暗い約束に生れた女のやうに、黑い心をして人のところへ行つたのであらう。行つてそれきりで私を忘れて了ひ得る女だつたら、私も恨みと憤りとだけに呪ふに盡きて、あゝした不斷の痛苦の檻には閉されなかつたのである。嫁入した女は、私への忘られぬ戀を見附けられて毒を飲んだ。私に出さうとする手紙を見られたのである。さうしてしばしが程は息も絶えて、だく〳〵と吐いた黑い血の固まりの中に俯つ伏してゐたといふ。それをなまなか助けられて、より暗い女となるために生き返つた。それから實家へ引き取られて、よろ〳〵と病んでゐた。それを私は知らなかつた。別れてしまつたきり何事も私は知らなかつた。

その時、私は頭が惡いので休學して歸つて來て、二年會はぬ彼女を戀ひ求めつゝ、がじ〳〵と痛い頭を抱へて家に籠つてゐた。三千子が歸つて實家にゐるといふ事だけは一寸聞いてゐたけれど、裏切りをした女にその上何を求めよう。それに、祖母が前に手紙で以て、少し課があるから、或時期が來るまでは、歸つて來ても一切伯母のところへ行かないでくれといふ事を言つて來た。何で行くものぞ。戀しいに戀りはないけれど、それは私を欺かない前の彼女を戀ひるのである。

けれども同時に、あの女が私を欺く女だとはどうしても考へられない。私が彼女を戀ひる日にるとは考へられない。私も彼女もやつぱり私を戀ひては、別れてゐても、彼女もやつぱり私を戀ひてゐるやうな氣がしてならない。私はそれがもどかしい。それは自分の迷ひかとも考へぬではないけれど、ぢかに會つて訊くまでは落ちつかれない。私はどうかして會へれば會ひたい。けれど又一方では、あゝした彼女をいつまでも追ひ求めるのが忌々しくもある。――

このやうな事を考へ惑ひつゝ、倉の横の露路を一人往きつ返りつすれば、屋根裏の巣に鳩が啼いて日はほろゝ寒く黄昏れかける。壁の根の、葉の落ち盡した無花果の木の下に、昨日倉の中の、物の間から見出して、嚙み裂いて投げ附けた赤い縮緬のきれが、まだ同じところに落ちてゐる。――誰の持つてゐた切とも知らないけれど、その赤い、戀のやうに赤い色は、求めても會へない私の心を恨多くそゝり立てる。その、ぽつちりと土に落ちた、戀の色も黄昏れる。

すると、裏の入口の方からとぼ〳〵と、物の影のやうに這入つて來て、蹌けかゝるやうに近寄つてくる女は三千子であつた。三千子は私に向いて何と言ひ寄るべきかに腮へ遏まれたやうに立ち止つて、顔に袂を押し當てて倉の壁に倚りかゝつた。何といふ衰へ憔したその不意な姿であらう。私は自分の目の迷ひではないかとぎよつとして立ちどまつた。その姿は何だ。屢はばさ〳〵に解れて、鳥の死骸でも見るやうに痩せ落ちた肩のあたりに、悲しく亂れかゝつてゐる、どうしたのかと胸を轟かせて近づけば、女は壁に寄れておろ〳〵泣いてゐる。

「どうしたんだ。何を思つてこんなところから這入つて來たのだ。お前さんはもう二度と、私のゐる前へは來られない女ぢやないか。」

私は何を言つていゝのかを知らずに、惡々しさうにかう言つて、身を顫はせながら女の肩に手をかけた。倒してやらうか。押し倒して蹂いてあつちへ行つて了はうか。

「何をしに來たのだ。」

「知りません。自分でも何しに來たのか分りません。」

「お歸りよ。用事がないのならお歸りよ。誰かに見られゝば、また無い腹を探られるのだから。——二人の事はもう父までが知つてゐる。お前母さんもみんなも知つてゐる。」

「みんな私が惡いのです。」と言ひつゝ三千子は身も世もないやうに泣き顫へる。

「さうしてお前さんのその裝は。——全で捨てられて出たばかりのやうな、だらしない着物の着やうをして。」と、私もいつしか涙ぐんだ。

「病氣をしてゐるのか、三千さん。」

「もう歸ります。放して下さい。歸りますけ。」

「何か私に言ふ事があつて來たのかい。」

「許して下さい。見られてはまたあなたに御迷惑をかけますけ。」と、よろ〳〵と出て行かうとする。

「待てよ、三千さん。一寸待つて。言ふ事があるけ。」と呼びかけると、ふいと後に小母が來てゐて、

「どうしなしたのです、あなた。——今行きなしたのは三千さんでせうがの。」と言ふのである。

私は惡事を發かれたやうにどぎまぎした。

「何でお前は人の後へそつと來て覗いてゐたりするのだい。己は何にもお前たちに探られるやうな疚密は持つてはゐない。」と、私は、半ばこの場のばつを消すために、わざと怒つて突つかかつた。

「何も、そんな惡氣があつてこゝへ出て來たのではありませんけ、惡く取らないで置いてくださいよのい。さうぢやないのです。そこまで倉の戸締りを見に來ましたら、誰かしら、しく〳〵泣いてゐるやうな氣色がするものですけ、自分の氣のせゐかとも思ひながら、つい下りて見たのです。——だけど三千さんはどうしてこゝへ出て來なしたのでせうぞ。」

「己は知らないよ、ふいと這入つて來たんだもの。」

「まあ、どういふ三千さんでせう。何というて來なしたのですぞ。」

「何だか己にも分らない。」

「困りますのぜい。もうどんな事があつても、三千さんは家へは來てはいけないと言つて、お父さまがよく〳〵言ひ附けて置きなしたのに。あなたは何にもお知りでないけれど、實はのい、大變な事があつたのですぞ。言ひませう。こつちへいらつしやい。お倉の中ですつかり話しませう。あなたには隱して置くといふ相談だつたのですけれど。」

小母はかうして、三千子の自殺の事を話したのであつた。後で考へ合はせると、三千子は、あゝして實家に歸されて、煩ひ附いて寢てゐたのを、自分で自分のする事を知らないもののやうに、母の目から拔け出して、私の家までふらふらと出て來たものなのであつた。

今からいへばそれは最早十年近くにもなる昔の事だけれど、今でも考へ返せばすべての事があり〳〵と目に浮んで來る。壁に泣き縋つてゐた三千子の、亂れ束ねた髮の下に、蒼白く痩せた顏、足、二人の手を放して出て行くときの病み衰へた蒼い顏——考へて見てからか、そのしめじめしい目に湧つた涙の粒さへ目に浮ぶ。

かうしたところを今日のシインに取らうかと

思ひながら、私はそこらを行き歸りした。

けれどもどういふ風に書かう。條りに心ばかりが充ちて、うまく纏めて寫し出せさうにもない。またあの蠅の群に突つつかれながら、こつりこつり消しては書きして、容易に形をなさないのかと思へば、もう今から頭が痛くなるやうな氣がする。

厭だ。もう何にも書きたくない。何も書かないでこの山へぐつたり轉んで寢入つてゐたい。

私は、とある椎の木の下の、苔の上に腰を下して、浮き上つたその木の根に靠れて、疲れたやうに目を閉ぢた。さうして、じん〳〵と鳴く蟬の聲に頭を浸して茫としてゐると、先刻考へ浮べたシインの續きがまた頭に纏つて來る。

今から言へば、もうどだつていゝ事だけれど、私はどうして、あの時實家に歸つてゐた三千子を自分のものにしなかつたらう。私は三千子を戀ひつゝも遂に決斷を得しなかつた。その後三千子はまた二度目の嫁入をして、最早どうする譯にも行かなくなつた。且つ私の心は、その女を執念く戀ひる程いつまでも若くはなかつた。私はその後いろんな女に出くはしたけれど、どうしても、もう眞から女に戀ひる事は出來なかつた。そんな女がゐなかつたといふよりも、狂熱に盲ひて戀を追ふやうな早い日が盡きたのだ。これから女を得るとせば、それはだコンベンションである。けれども私はまだ、これきりでコンベンションに納め入れられるのは物足りない。その前にもう一度最後の戀をして見たい。しつとりと私を解する女を得て戀したい。

私は常に戀を求めてゐる。いづくにかたゞ一人、自分のために隱されてる女があるといふよめのやうに生きてゐる。私はそれを探し當てた女がゐる。ゐると考へずにはゐられない。けれどもいつそれが求められるのだか。かうして遂に自分の血は空しく老いるのかと思へば恨めしい。

私は今、自分の生れてからの、いろ〳〵の仇なる戀の後に、この憧憬に寄々して生きてゐる心持を書いてゐるのである。自分の「……」の一篇は、このいら〳〵しい寂しい求めに强烈な表現を與へようといふクリエイションである。作の主人公としての私は、その求めが得られないために、昔の三千子を求めるのである。私の作はクリエイションに違ひないけれど、自分が寫してゐる女の性格と、作中の自分が一人の隱れたるものを求めて生きる心持とは、正しく三千子の性格と、自分自身の或ものを求めて得られない空虛なる間えそのものである。私は時々自分のロマンティクな性癖を嘲つて、目覺めたる現實に自分を引き入れることもあるけれど、ロマンティシズムに生きてゐる私は、現實の空虛に這入れば、たゞ、黑い息ある死骸のやうに何の意味もない。少なくとも、自分の率ゐてゐる祖母や小母たちの前には現實の自分として立ち得る。立たざるを得ない煩勞を辛うじて堪へてゐる。けれども自分の內心に喰ひ入る寂寥をどうする事も出來ない。このさびしさは何でちらう。どうすればこのさびしみが亡びるであらう？　少なくとも忘れ得られるであらう？

自分は弱いのだとも思ふ。意志が弱いのだと思ふ。けれども、これは時に自分自身が嘲る外には、人の批判を加へられたくない。人の嘲るのは許したくない。私は戀より外に自分以外のオーソリティを見出さないのである。嘲るものには石の如き幸福の外に何の力があらう。だから私は、自分の如きものを嘲らうとするものの前には、表面のコンベンションに從順な事によつて自らを守護して來た。私は教師なぞに

なつて、表面は人として素直に務めてゐた。けれども、内心では一人寂しさに堪へられなかつた。それで仕方なしに物を書いた。さびしい鳥が啼くやうに物を書いて僅かに自ら紛れようとしたのである。今度も、やはり學校へ出ながら書いて行くつもりで引き受けたものの、やりかけて見ると、他の事に力を分けてゐたのではとても十分に作を完成する事が出來ないので、たうと學校も辭して、このやうなところに引つ込んだのだけれど、勞作をする事も遂にやつぱり寂しい。餘計に寂しい。私は、どうかして自分の或物を求める寂しさをば、その求める或物の前に訴へたいがために――いづくにか一人隱されたる或女に――自分が求めても得られない或女の前に――わがさびしい求めの苦痛を告げたいために、自分の力量を疑ひながらも今度の作を受合つたのである。もし中途にして力が盡きたら、行き詰つて書けなくなつたら――その時には自殺でもする。自殺してわが浸り倒れる血をもつて、書けない續きを塗り消して了ふ積りで書き出したのである。而も私は、これまでよりもなほたゝまれぬやうにひし〳〵と寂しくなつた。體も過勞のために疲れ果てた。書いてもつまらない。訴へたつてどこにか通じよう。もう苦しくなつて來た。それよりも、やはりコンベンションに從つて教師でもして小さいさびしさに生きた方がましである。私は書くのが厭になると、いつも平凡なライフを戀ひる。コンベンションに大人しくしてゐる事が、いかに厄介がないかを考へる。

私はもう飽きた。これで止められるなら止めてしまつて、一日でもいゝからぐう〳〵寢て見たい。何にもしないで朽ちたやうに寢て見たい。

私は朝からぐつたりとなつて、とゝに一人行き倒れでもしたやうに、椎の根に倚りかゝつたなりに目を閉ぢてゐた。

すると、向うの、山の續きの方に、民子の聲がするやうな氣がした。

「兄さん〳〵。」とあちらの方から呼んでゐるやうである。用事があるなら默つてこゝまで來てから言ふがいゝ。自分はいつも從弟妹たちから、兄さん〳〵と言はれるのだけれど、何だか、今の民子の言ひ方にはアフェクテイションがあつて厭な氣がする。

私は默つてゐた。

「ほゝゝ、隱れてらつしやるのよ。」と下女に言ひゝ二人で近づいて來る。

「これを御覽なさい。」と側へ來て、

「まあ、こんなのが一ぱい咲いてゐますのい。取りに行きませう、のい。ついそこまで行くとありますけ。」といふ。

「知つてるよ。」と私は倦怠さうに立ち上つた。民子は白い百合の花を、兩手で持ち切れない程束ねて提げてゐる。下の谷間へずん〳〵下りて行つたものらしい。小鼻に汗をかいてゐる。小さい下女は、鹽たれた着物の袖で額を拭きながら、向うに立つてゐる。

「まあね、ついそこのところを一寸下りると、崖のやうになつたところにまだ幾らでも重なり合つて咲いてゐるのですけど、そこへは怖くて下りられませんのい。」と、民子はいかにもかうした山が珍らしさうに、勢んだやうにさう言つたが、私が取り合はないものだから、間の惡いやうな顏をして、

「でも、見て詩趣な割に、あんまりいゝ匂ひはしないものですぞのい。」と、小さく言ひながら喚いてゐる。

「もう下りよう。それをお祖母さんのところへ插して上げるといゝ。」と、私は努めてから言つて秋の蟬草を探つた。

「お前、どちらから上つて來たの？」

「そこのところをおつねに伴れられて、こちらへかう上つてまゐりましたのい。」

「では今度はこつちから歸らうよ。」

「その方からでも路がありますの？」

「こつちから下りると家の門の前へ出る。黍の畠があるだらう？　家の外に。あの中へ下りるんだ。」

民子は默つて附いて歸る。下女が、片方の草履の、切れさうな鼻緒を直しながら、その後に附いて來る。民子も素足に草履を履いてゐる。

「この次にはいつか百合の根を掘りにまゐりませうか。鍬を持つて來てこつ〳〵掘ると、ぢき一升ぐらゐ取れますぞよ。煮て食べるとずゐぶん甘しうございます。」

下女は、下りながら小さく民子に話してゐる。民子は、

「あゝ、この百合の根なの？　よく青物屋に賣つてるのは。」と言つたが、

「まあ蜘蛛の巣が澤山あること。厭らしい大きな蜘蛛が。――そこにも、それ。」

「あれを取つて來て、竹の棒の上で、喧嘩をさせて見ませうか。――えゝえ、竹の兩方へとまらせて、しつ〳〵といふと寄つて行つて喰み合ひますわ。」と、下女はまだ十六ばかりの子供だから、こんなのんきな事をいふ。

「まあ。さう？」と、民子は黃面目で聞いてゐる。そのうちに私も、或木の枝に蟬の抜殼の喰つ附いてゐるのを呑延びをして取つて、手の平に乗せながら、とろ〳〵下りを下りて行く。

「民さん。」

「はいッ？」と、後れてゐた民子は足早に近づいた。

「お前さんもかうしてはるゝ〳〵來たけれど、何一つ物が仕込んで貰へるでもないから、考へると掘らないだらう？」と私は訊いた。どういふ心持からそんなことを訊くのかを告げない以上は、民子には突然な問ひであつた。民子は何と言へばいゝだらうといふやうな顏をしてゐる。私は何の續きからか、かうして自分の許に來た民子の身の行先といふ事を、考へるともなく考へてゐたのであつた。

「女には學問なんかは要りやしない。その代りには、縫物なぞがよく出來ると駄目なやうな氣がするが、そんなものでもないかね。お前の姉さんは何でも上手に縫ふだらう？」

「さうですのい。でも姉さんはそれを一式にやつたんですけのい。」と民子は、自分の思ふ儘に何事をもさせて貰へなかつたこれまでを、傍んで考へ浮べでもしたやうにいふ。私は、とにかくかうして何一つ身に附いたもののないこの女を、せめては心の持ち方だけでも女らしいものにして置いてやりたいやうな、しみ〳〵した氣持になつたのである。民子は考へ込んだやうにして默つて附いて來る。これがこの先、どのやうなものの妻になるだらうと思ふと、何だか女といふものの名前それ自身からが不憫なやうな心持がする。

私はそれから家へ上つて机に縋つた。外はそろ〳〵日がじり〳〵して來た。今日はどうしてもあそこを書かうと思ふ。

私は何事をも忘れて、暑い倦怠い力を、ペンの先に集め一書き出した。

五

私には苦作に暑い同じやうな日が、昨日と今日との區別もなく續いた。昨日一日分のがやつと出來上ると、もう動くのも厭なやうにごろりとなつて、早く作の了る日の事ばかりを心に描いた。

私のゐるところは、午後になると日のいきれが暑いので、例の、疊の廂つてゐる一間の、がたがたになつた籐側に寢椅子を持ち運んで、大き

な樅の木の蔭になつた、仄暗いところに寢ころんで、何を見るともない目を、ぐつたりと、萬雨の赤く實つてゐる草の上に落してゐた。

祖母はこゝには蚤がゐるだらうにと、私のために厭さうに言つたけれど、家のものたちから隔絶して、ぢつと一人ゐたい私には、この部屋がどこよりもひんやりとしてゐた。そこの樅の木の下には、壊れた茶碗だの、古い鐵詰の壺だの、いろんながらくたものが、雨の足に撞れた泥を被つたまゝ、汚らしく轉がつてゐた。私はこゝへ來て寢椅子の上に横はるのが、晝の間の何よりの安息であつた。民子は小母に言ひつけられて、蠶豆のむたのなぞを小皿に入れて、楊枝を添へて持つて來たりなぞした。小母たちは暑い午後には、そんなものを拵へて食べたりしながら、臺所の冷々しい板の間に集つた。私もこんな不自由な村にゐては、そのやうなものを貰つて食べるのにも慣れた。下女は時々朝の涼しい間に、籠を提げて町まで使ひに出された。

私は原稿が出來ると、よく自分で往來の郵便箱まで出しに行つた。切手を九錢貼つて置くと、午頃に一日一回の開函に町から來て取つて行く。さうして入れてさへ置けば、局ではそれを書留にしてくれるやうに話が附けてあつた。

小母たちはこれといふ用事もないものだから、下女と民子と三人で、袷や冬物の、家で洗濯のきく不斷着なぞを解いてゐた。小母がこちらへ出て來ると、その縫の解れ屑が着物に喰つ附いて來るのを、自分は一々氣にして拾つて捨てた。時には、一人で所在なくなると、皆のゐるところへ行つて、無言のまゝ、柱に凭れなどして、女たちの仕事の手先を見守る事もあつた。よく民子を呼んでは、そこらの散らばつた物を片づけさせたりした。

民子は、私のいふ事を何でもさつさとした。

「のい、あなた、これでいゝでせうかのい。」と、何をしてもさう言つて訊きく〳〵した。私には、かうして物の分る若い女が周圍の用を足してくれる事が、物珍らしいやうな、ドメスティクな、或物を感じさせた。

「民さん、來て見ろ。あんな大きな物を一匹で引いてくよ。ほら、ずん〳〵行く。」

私は庭の蟻を指したりして、たわいもない話をする事もあつた。民子は掃除をしかゝつてゐても、すぐに側へ來て踞んでそれを見た。

「あれ、もう一つ。——あゝして二匹で擦れちがふ時に頭を一寸突き合はせるのは、何か話でもするんでせうかのい。」と、民子は子供のやうな眼もとで見詰めてゐたりした。

又或時には、本棚から西洋の畫集などを拔いて見せてやる事もあつた。二人對坐して話を引いて行く事の下手な私は、民子が側に坐つて、頭をこゞめて、大切なものを弄るやうに、一枚一枚を開けて行くのを、ごろりと横になつた儘見つめてゐた。民子は手の綺麗な女であつた。その本の角を押へてゐる片手の、ほつそりした指をのみ見てゐると、各〴〵の指の爪の形や、第二の關節から附根までの長さが、それ〴〵の指で違ふ程合までが細かに目に這入る。民子はそのやうな事とも知らないで畫を見てゐる。私はよくこんな時に、自分が何か言ふべき事を得言はないでゐるやうな心持がして、譯もなくそはそはする事があつた。何を言はうといふ事は明白には分らないけれど、何だか言ひたい事があるやうな氣がした。

「まあ、いろんなのがありますぞのい。」と、民子は無心に見てゐる。

そのうちに私は、かうして二人でぢつと坐り合つてゐるといふ事が、小母たちに變に見えはしまいかといふやうな心持がして來る。別に變に思ふ譯もないけれど、もしか、私が問さへあれば、民子を側へ呼びたがるやうに見えても罪である。

「もう、その位にしてまたこの次に御覽よ。」とやがて私はいふ。

「どうも有難うございました。」と、民子はたしなめられでもしたやうに、それを元のところへ歸して立つて行く。そんな時に、そこらに、あちらへ下げるものでもあると、それを持つて行けば、民子自身に取つても小母のゐる方へ歸るのに都合がいゝやうに思はれた。私は、時々自分ながら、いつも女の前にインディフェレントになり得ない人間だといふ事を思つて、罪な自分を嘲ることもあつた。

民子が來てから、まだ四五日にしかならないのだけれど、一つところへ寄つてみんなで坐る時なぞには、もう何日も一緒に居馴れたやうな氣持がした。民子は小母を助けてせつせと働いた。

「中々よく氣が附きますぞい。あれで何にもいいけれど、たつた一つ、どうもちよい〳〵書生風な存在なところが出て、目に見えるところだけ小綺麗にして、自分のものの始末なぞをきつちりおしでないがありますぞの。」と、小母は民子を譽めた後でかう言つた。

「どういふところが？」

「いゝえね、私が別にあらを探してあなたにとやかく藤口を利く譯ではないのですけれどのい。——まあ、下らん事ですわい。」

「下らんたつて惡いところは言つて直してやらなければやいけないよ。」

「何、たゞ、あの人のものを入れるところが、一寸都合の可い場所がないものですけ、お祖母さんの押入の下を當分使つて貰つてゐるのですが、何だかいつも行李の上へ、ちよい〳〵既いだり着たりするものを突つ突き込んで、ぐぢやぐぢやにして置いてゐなすのですのい。お祖母さんがそれを嫁ひなしてのい。」

「そんならお祖母さんがぢかにさう言へばいゝぢやないか。入れるところが狹いから思ふやうに片づけられないのだらう？」

「さうでせうけれどのい。」

「下らん事ぢやないか。」

「ふゝゝゝ、だから下らない事ですけどもと言つたぢやありませんか。」と、小母は笑ひ事にして了つた。

後で私は、小母から聞いたとはなく、押入の中を少しどうかしないかと民子に言つた。そんな事でぐづ〳〵言はれるのは拙らない。民子は、

「はい。」と言つて立つて行つた。

併しこんな事はどうでもいゝけれど、私は時々民子に對して何を言ひたいのだらうかと、一人裏の方を歩き〳〵考へた。裏には解した着物を盥に浸して、灰汁桶から灰汁がたら〳〵落ちるやうにしてあつた。小母の大切な畠には、胡瓜の花が黄色く咲いて、小さい胡瓜が五つ六つ實つてゐる。茄子の木は、まだ小さいながらに葉に蟲が附いて赤ばんでゐる。その根もとには、小母が肥料代りに魚の洗ひ汁をかけたのが、水を欲しさうにかち〳〵に乾いた土の上に、鱗がきら〳〵光つてゐた。民子に何か言ひたいといふのは、三千子の事が訊きたいといふ事なのではあるまいかと、私はそんなことも考へた。

けれども三千子が今どんなになつてゐようとも、私がどうする譯にも行きはしない。私は無分別な三千子の悲劇のために、臨分久しい間、それが皆自分の負はなければならない責任のやうに苦悶して、剝げ腐れるやうな重たい年月を送つた後に、やつと今あの女を忘れ得てゐる

のである。昔二人が、若く懸ひ合つた日の記憶だけは、いつまでも、早い代の物語を讀むやうに懐かしいけれど、その後の彼女の現狀に附いて考へるのは不愉快である。私を慰ひて、あんなに死にかけまでしたとは言へど、また嫁入をすれば二人も子を生んで、今ではあれで片附いてゐる。それは自由を奪はれた、古い型に作られた女の哀れさだと言へば哀れでもあるけれど、もうあれ以來四五年になつて、どうにか落ちついてゐるものを、私がいかに心配したつて駄目な話である。當人も、もや疾くに、返らない恨は忘れ盡して、現狀に滿足してゐるのかも知れはしない。それを私が一人餘計な心配をするといへば、私だけが損らない損をする事になるのかも知れない。もし假りに、女が私に救はれたいと思つてゐるとしても、私がどうする事も出來ないのだとすれば、私は、女ももう疾くに癒みを忘れて、その日〳〵に不平なく生きてゐるといふ、幸福な狀態を想像した方が氣苦勞がない。何で今の三千子の事を詮議する要があらう。訊きたければ何だつて民子に訊き得る譯である。訊いたつて一寸も可笑しい事はない。それとは違ふ。三千子の事に關してではない。

それならば何を民子に求めようといふのであらう。不愉快である。あんな女に懸し得る自分だとは考へたくない。やつぱり自分は隱されたる一人を追うてゐるのである。民子に對して時々見る、さつきのやうな心持は、隱れたる一人を探して與へられない、寂しい心の影の投射である。そんな一人がどうして得られよう。ただ空想である。愚かな自分の空想である。

私はこのやうな事を考へながら、家の周圍の藪を傳はつてぶら〳〵歩いた。

やがて、上へ上つて、祖母はどうしてゐるかと覗いて見る。今朝から一寸も口を利いて上げる樓がなかつた。あの一間に一人でしよんぼりしてゐるのではないかと覗いて見る。

祖母はそこに寢ころんで口の内で何か獨り言を言つてゐる。これは祖母の心持の平和な事を示してゐるのだけれど、私にはいかにも、先のない老人の晴い生を語るもののやうに不愉快に感じられた。

と、こちらの、入口に近い隅の窮屈なところに、民子が蹲まつて手紙を書いてゐた。私が這入るのを見ると、書きかけたのを手の平で押へて、

「祖母です、兄さん、見なしては。友だちへ出すのですけ。」と、わざとらしく仰山に言ふ。誰が人の書く手紙なぞを覗くものか。民子は、行李の蓋の上に、どこかから引つ張り出して來たやうな板切を載せて書いてゐるのであつた。ほてつた汗ばんだ額をしてゐる。側を見ると一二行書いては裂つた書き損しが、幾つも束ねてあつた。足を崩してゐたゐずまひを、居直つて直した膝の上には、隱さうとしても、女子用文と言つたやうな、薄汚い、表紙も取れた本が載つてゐるのが見えた。私がそれがいかにも看護婦にでもなりかけた女の、無學なところを見せられたやうに厭であつた。けれどもそんな殘酷な感想は、この女が私と同じ血を引いてゐる事のために――この女の不幸な過去のために、努めて掻き消した。

「訊くまでもないがお母さんへは、着くと直ぐ詳しい手紙を出したらうね。」と、私は言つた。民子は、

「えゝ。」と言つて、また今書きかけてゐるのをも裂つて手の平に丸めた。

私は祖母の側へ行つて、

「お祖母さん。」と言つて對手になる。

「お前かい。書けましたかい。」と祖母は、却つて私を慰め顔にいふのであつた。

「書きましたよ。今日はよく書けました。――暑くはありませんか。」と私は祖母の肩を押へた。私にはかういふ時には、祖母の外には、私の或分身はないやうに、いつまでもいたはり護りたいやうな氣がするのである。

「兄さん、私昨日のところを今日讀まして貰ひましたが、よく出來てゐますぞのい。」と、民子が口を出した。

「あのお倉ですか、あれは。よし子といふのは何だか家のお姉さんを見るやうですぞのい。」と、底に何をか含めたやうな物の言ひ方をする。私は不愉快であつた。民子の言葉は、あゝした哀れな私の女が、その肉親の妹によつて嘲笑されでもするやうに私には響いた。讀んで欲しくない。私の書く事が何を言ひ現はさうとしてゐるかが分らないやうなお前たちには讀んで貰ひたくない。――けれども私は、

「どこが姉さんに似てる？」と、口ではわざとさりげなく訊いた。

「だつて、さうぢやないかしらと思ひましたのい。」と言ふ。

「そんな馬鹿な事があるものか。女なんかはあんな小説なぞを讀むものぢやない。」と、私はそこを出てこつちへ來た。

もう何とか葵の花もそろ〳〵閉じ時刻になつた。土の上の日向には屋根の影りが出來て來た。私は何一つ自分の寂しい心を託するものがないやうにいら〳〵した。

先刻の、民子が自分の小説を讀むといふ事が何だか氣にかゝる。あんなのが三千子だとはもシテュエイションにも、いろんな修飾が附いてゐる。私は民子があれを讀む事を禁じようかとも思つて見た。

同時に、もし三千子があれを讀んで、彼女自身のいろんな事が寫してあるのを見たらどんな氣がするだらうと、私は今はじめてそんな事を考へた。三千子には、あれを讀んで一人竊かに泣いて欲しい。私と別れて出る時の、あの夕方のやうに泣いて欲しい。あの女は決斷といふもののない、自分で自分の自由といふものを作り得ない女だけに、何だか、しつとりした女らしい女であつた、自分自身の影に似た悲しい性を、しみ〳〵と讀んで泣くべき女である。

かう思ふと、私は何だか矢つぱり一度會つて見たくもある。私はもう何にも書きたくない。自分の求めの寂しさを書いて、なほより寂しい自分を見るよりも、あの女のところにでも懸ひて行つて、自分の側へ寄れば何が悲しいともなくさめ〳〵と泣くあの女の、亂れてかゝる髪の鬱ぎを見守つてゐたい。涙の雫を見入つてゐたい。――

かうした心持は――私のかういふ心持は、私が遂に彼女を得なかつた事を悔いる心が暗に動くのではあるまいか。私は何だか、私の懸を失つたあの頃に繰く日に、寂しく生きてゐでもするやうな氣がして來た。

私はいつしか柱に倚りかゝつて、戸袋の角にかけた籠の鳥を見入るともなく見入つてゐた。

やがて私は籠の下へ行つた。そこには誰が取つて來て插したのか、南天の木の下の手洗ひに、山の横突から來る水の潤れ〳〵なのへ、壺瓶の花の二つ咲いた莖が、長く引き拔いて來て插してあつた。私は鳥の壺の粟の殼を吹いてやり、水入の水をも取り代へてやつた。籠の戸口を半分開けて、手の平を見せると、鳥は水を飲むのをやめて、つい上籠を出て私の手の平に棲る。棲つて、ぢつと私の顔を見つめてゐる。歌ふ事の出來ぬ白い鳥ゆゑに、人の寂しい心も解し得るといふ事を告げるかのやうに、寂しさうに、ぢつと私を見入つてゐる。よく馴れてゐる飼鳥

なので、自分が顔を近く寄せても怯かない。その、硝子を嵌めたやうな黒い小さい目に私の顔が寫る。寂しい私の顔が喰つて寫る。ちい／＼とよく啼くべき鳥なのだけれど、私が學校時代に買つて、飼ひ出してから二年になるのに、一度も啼いた事がない。家のものは鳥屋に欺されたのだと實際的な事を言ふけれど、私は私のところへ來てから、急に歌といふものを謳はなくなつたのだと、子供の考へるやうな事を考へたい。この小鳥がこのやうにして私を見守るのは、私の二つの時に亡くなつて、顔も知らぬ母の靈かなぞが、鳥になつて見守るのだといふ事を、自分は十七八の時に、やはりかういふ白い鳥を飼つて考へた事があつた。その時には三千子と二人で戀に這入つてゐた。この鳥もいつしかかうして私を見守るやうになつた。さうして私は過ぎた昔の戀を書いてゐる。

今日はまたこれから夜へかけてもう一回書かう。書くより外に寂しさを紛らす方法はない。書くより外に自分の生きる意味はないやうに寂しい。

私は手の平の鳥を捉まへて籠に入れた。

下女が跳足になつて、庭へ水を打ちに來た。私は黙く眺へられて濡つたやうな息を吹きながら、再び机に倚つた。

六

大雨か執拗く降り續ける。今日もびしや／＼と滅撲りに吹きつけるので、どこも開けて置く事が出來ない。家中が厭にじめ／＼してだだ暗い。例の畳の朽ちてゐる一間なぞは、じやあじやあと音がして雨が漏る。座敷の八畳もびだびだ濡るので、私はすつかりのものを、鴨の下つてゐるところの縦四畳に移して、そこで作をするのであつた。

座敷の縁側の並びは、雨戸を閉め切つて了ふより外はないので、元の玄關になつてゐる方の戸を開けなければ明りが取れない。そこには障子が一枚もないので、座敷へ候まるのを持つて來たが、うまく合はないから、眞ん中を開けて、兩方へ一枚づつ抓へ打ちつけて倒れないやうにした。その代り動かされもどうも出來ないので、私はすつかりのものを、鴨の下に冷たい厭な風が來ても閉める譯にも行かない。前の硝子の下の窪みには、外の壁を傳はつて落ちる漏水が、赤土色に濁つて擴がつてゐる。方々の掛戸なぞががたびし言つて綱障りで堪らない。

祖母のゐるところもきつしり板戸が閉めてある。僅かに明り取りに開けてある部分は、障子がびしよ／＼に濕れてゐる。祖母は心持惡く寒いと言つて、毛布を被つて、温氣を減ずるためか、火鉢に火を入れて室の眞ん中に置いて、片隅にどんよりと小さくなつてゐる。表の出口の土間から外を見ると、大きな雨の足が横しぶきに吹きまくられてゐる。向うの竹藪が、大浪の狂ふやうに風に搖られて鳴り立つてゐる。數の手前に續く田の稻は、へと／＼に倒れ重なつざわ／＼と吹き亂れる。小母は暗い板の間で、夕方の菜の何をかこつ／＼切つてゐる。下女が手拭を被つて、背中に蓆を着て、びしよ濡れになつてそこらを往來する。何といふ厭な日が續くのであらう。

民子はどこに躍まつて何をしてゐるのかと思つて、

「民さん。」と呼んで見たが返事がない。小母はそれが聞えても聞えない風をしてゐるやうに、あちらを向いた儘こつ／＼と庖丁を使つてゐる。

所在の盡きた私は、また四畳へうろ／＼と歸つて、一人寂しく寝轉んだ。家のまはりの立木の搖れるのが、私が唯一人でかういふ中に閉はれてゐるやうに、ひし／＼と寂しく耳を

襲ふ。私は、疲れた頭に取りとめない事を考へては消し忘れして横はつてゐた。障子の桟の、上の方を見ると、蠅が二三匹、死んだやうにぢつと濕つぽく凝つて動かない。私は疊の解れを捲つて見たりして、ぼんやりと考へ込んでゐた。

やがてそこへ、不圖小母がやつて來た。鼻の先へ眼鏡をかけて、手紙の中身を持つて來た。

「あの、あなた、御邪魔でせうけどのい、これを一寸讀んで御覽なさい、お民さんのお母さんが、かういふ事を言つてよこしなしたのですぞ。私はあなたには見せないで置かうかと思つたのですけど、それでも一應は見せて置きませんではのい。」といふ。何を言つて來たのかと、面倒臭くそれを受取つて、寝ころんだ儘で披いて見る。

「何だ。こんなに濡れてるぢやないか。」

「えゝ。郵便屋が肱袋を濡らして持つて來たのが下まで浸みたのですのい。」

「どうも假名ばかりで書いてあるんだから、いらいらするばかりで已には讀めない。つまり一口に言ふとどういふ事が書いてあるのかね。」と言ひつゝ、下らないところは飛ばして讀む。

小母は屈託さうな、浮かない顔をして、ぢつと一つところを見詰めてゐる。

「民はぶじにおたくにつきそろや。出たきりでなんのたよりもござなくそろゆゑ、ひとりしんぱいいたし……。何だ、民子は家へ手紙を出したと言つてゐたが、まだ着かないのかな。」と私は言つた。

面倒くさいのを我慢して讀んで見ると、意外にも、民子は伯母を欺して飛び出して來たのであつた。民子はこの二月ばかり前から、――の方へ行つてゐたのが、不意に行李を拵つて歸つて來て、兄さんが見てやるから來いと言ふ手紙を下さつたから、行つてもいゝか、突然なことを言ひ出すので、伯母は愕いて、どういふいきさつから兄さんがさう言つてくれたものか、いつも私には細々と手紙をくれるのに、今度の事に限つて私には何にも言はないで、民にばかりさう言つて來たといふのも變である、すつかりの事情をよく訊してお聞かせよと言ふと、たどそれ以上に何もない、私もあんな醫者のところなぞは厭だから、兄さんの側へ行けばどんなに仕合せかも知れないといふ。それでは、一應、どういふ積りで言つてくれたのか訊いた上で、事によればお世話を願へればこちらも仕合せである、手紙を出して見るから返事が來るまで待てといふと、それでは兄さんの感情を害するからいけないと言つてぐす／＼泣いたりして見せる。とにかく、それでは私も相談をして來るところもあるからといへど、それは厭だ、餘計な人に知られてはいけないと無理なことをいふ。嘘やみくもに行きたい／＼と頑張るだけで譯が分らない。それから中一日置いて、では、兄さんからあなたによく話して貰ふから、この事は誰にも言はずに待つてゐて下さいと素直にいふゆゑ、勿論それが當り前ぢやないかと伯母は言つた。民子は、だからともかく返事が來るまで――さんの方へ歸つてゐると言つて、午時分に荷物を持つて出て行つた。すると、その夕方に葉書が來た。今汽車で兄さんの方へ向けて立つ、旅費として三千子に口實を設けて二十圓借りた、これから、私が先で立派なものになるまであなたには何も迷惑はかけないから、その代りにこの金だけはどうかして三千子に拂つてくれ、かう書いてある。伯母は餘りの仕打に愕いて、物も言へなかつた。全で下等社會のあばすれものがするやうな荒り口である。自分の子ながら全く呆れ果ててしまつた。――

こんな事が書いてある。私も聊か愕いた。まさかそんな女でもあるまいに、何か伯母が、爲

にしようとする考へで、いゝ加減なことを作つたのではないかと、瞬間にはさうも思つた程疑信じかねた。

伯母は、私がどういふ積りであの子を呼んだのか、詳しい譯を聞かしてくれといふのである。民子が私を欺して出たのは許し難いけれど、お祖母さんもあなたもゐるところへ、わしの子にも等しいあれが呼んだ事だから、行つてからの事は氣遣ひはしないが、それとも、あゝいふ太い奴だから、あなたの方へ行くのだと偽つて、他へでも行つたのではないかと思ふと、夜もおちおち寢られない。だれに相談も出來ないし、たゞ一人で案じ通してゐる。どうか容子を知らして下さい。もしあなたのところへ無事に着いてゐたら、何分あゝいふものだから御尤介だらうけれど、よく〳〵叱つて下さつて、あの堂摂れた根性を直してやつて下さい。父萬に一つもさういふ事はあるまいが、あれでも三千子の事もあり、若いもの同志の間にはどんな間違ひが起らないとも限らぬから、民子があゝいふ呆れた奴であるだけに、いろんな事が案じられる。そこもよく氣を附けて下さい。あの子はとてもあなたのところなぞに厭つて貰へる女ではないのだから、なま中の事があると、どちらも後悔しなければならない事になる。雙方のいろ〳〵のためを思ひ、あなたの返事が來るまで、私はどこへも話さずに待つてゐる。人前へは、民子は、心安い友達のところへ逗留に行つたことにしてゐます。もし民子が勝手に押しかけたのでしたら、直ぐにこちらから人を伴れに上せます。私の心配を察して下さい。——

小母へ宛てた、かういふ意味の長い手紙であつた。

「困つたなあ。」と言つたきり、私はしばらく默つてゐた。

「これが本當だとしたら民子はずゐぶん喰はせものぢやないか。あんな女がかういふ亂暴な事が出來るものだらうか。本當だらうか。」

「まさか伯母さんがそんな事を讒言におつしやりもしまい。——私はあの人が來ると直ぐから、はてなと思つた事がありますのぞ。殿方には何にもお分りになりませんけれどのい。あゝして、あなたの前へ出るとすつかり容子が變つて、大人しさうに澄ましてゐますけど、妙なところがちら〳〵見えますのぞ。一體この手紙に——さん〳〵と書いてあつて、あんなお醫者さんのところにゐたつて何とかだとあるのを見ると、——さんといふのがそのお醫者さんらしくも思はれますが、お民さんはあの……」

「一寸默つてゐな。」と私は小母の追求を誤魔化した。私もいつかの民子の手紙ではじめて知つたのだけれど、あれがあゝいふものになりかけたりしたといふ事は、伯母のためにもこの小母に知らせたくない。——といふのは、民子の家と知り合ひの醫者である。

「民子は今どこにゐる。」

「さつきから物置へ水が流れ込むものですけ、つねを手傳つて、赤土を捏ねて、下の敷石の隙間を閉して貰つてゐるところです。」

「一寸呼んで御覽。」

「まあ、そんなにお急きなさらんでも、伯母さんの方へだけ詳しい手紙を出して、一應安心させて上げなした上で、ゆつくり訊き糺して見なした方がいゝでせうぞい。あなたは何でも氣がお早いけのい。またこんな事がお祖母さんに知れでもしますと面倒ですから、お訊きなすなら竊とお訊きなさんと。——一體あなたが安請合をなさるから惡いのですぞい。よく物事を訊き糺した上でお引受けなさらないから、伯母さんの方ではあなたが誘き出しなしたやうに取つてゐなすかも分らんぢやありませんか。私は伯母さんからの紙みだつてあなたがさう仰しやつた

のを本當にしてゐましたのぞい。」

「下らない事を言ふな。」と私は鋭く言つた。小母は私と民子との間に何か言ひ合せてゐるやうな事をいふのである。馬鹿な事だ。

「とにかく、電報を打つから、つねをやつて、この間の男を呼んで來て下さい。」

「何と言つてお打ちなすめ？」

「無事に着いた。民子の事は安心するがいゝ。すべての處置は私がうまく附けるから待つてゐろといふ意味でいゝだらう？」

「さうですのい。まあ、さう言つて置きなした上で、篤と考へなせばのい。——併し、何にしても、もうかちなつた段に、お民さんを傷り非度い事を言つて責めなしてはいけませんぞい。さうすると私が伯母さんの手紙をあなたに見せたのが惡い事になりますけのい。」と愚かな事を言ふ。私は默つて澁い顏をして、もう一度手紙の節々を讀み返した。

「おや、こゝも雨が漏り出しましたぞい、御覽なさい。それ、そこんとこが。」

「併し愕いた女だね。」

私は何だかうまく喰はされたやうな、不愉快な心持を見守つた。

「小母さん。そこの新聞が積んであるのを少しこちらへ寄せておくれよ。そこもほと〳〵漏るぢやないか。」

七

私は電報を出しに行くものが來ると、ついでにそれを待たせて、小母に出す手紙をも書いた。それには、要するに私も全く民子から欺されてゐたので、小母への手紙を見て愕いたやうな譯だといふ事を認めて、民子がこの度の交渉のために寄越した二三通の手紙を封入した。

「これでも分る通り、あなたからの御依頼のやうに認めてあるので、さうすればあなたの足しになるといふ事なら、及ばずながら引き取つて上げようといふ氣になつたのでした。それに元々私は、何かにつけて民子に同情してゐたのですから、私がどうにか面倒を見てやる事が出來れば、私も自分の心配を一つ除く譯だし、それで快く引受けたのです。民子の仕打については、私が創くまで詰責するから許して下さい。併し、それはもう後の祭で仕方がないが、たゞ私のところへ受取つた以上は、もうこの上不都合な事は斷じてさせないから、私に任して置いて下さい。前以て言つて置きますが、私は民子を私のものとして永久に引受ける事は出來ません。たゞ當分預かるまでですから、そこのところは飽くまで御承知を願ひます。出來る事ならば、民子が何か一つ、女として必要な事が手に附いて、よしんば嫁入をしてから夫を亡くしても、かつ〳〵獨立して行けるだけの女になるまで世話をした上、再びあなたのところへ歸したい。それについては、私が學費だけを送る事にして、東京の知人に託するかも分りません。或は、民子の出方一つで、この際直ぐに人をつけてあなたの方へ送り歸すかも知れません。いづれにしても、あなたのところを出てゐる間は、私が安全にお預かりしますから安心して居て下さい。」

かういふ意味を、伯母に分るやうに書いて、局へ出させた。民子は何にも知らないで、洋燈の掃除をしたのを持つて來て置いたりして行つた。

私は民子が、よくあんな事が出來たものだといふ事には少々愕きもし、小母の前には、容易ならぬ事件だといふやうな顏をもして見せたけれ

ど、俄し考へて見ると、私は民子の仕打を、伯母や家の小母が不都合がる程悪いとは思はなかつた。それはなぜだか自分にも分らない。それよりも、私がこの女をこの先どうすればいゝかといふ問題が、今はじめて思ひ詰つたやうに考へ直された。どうするかといふ風もすつかり極めないで、たゞ引受けてやればいゝやうに安受合をしたといふ點では、自分も今度の民子の失態に關して責任を分たねばならないやうな氣がする。私は何かなし、自分のまはりが賑やかになるのを喜んで、それを幸に受合つたやうな氣がして、そんなものの考へのないといふ事が、民子に對しても伯母に對しても、いかにも無責任なやうに不愉快に反省された。俄し引き取つてから面倒を見てやるといふ同情と決心とを持つて話をした事だけは事實であつた。少なくともあんな變なところにゐるよりも、自分の家族の一人として自分のところに置いてやる方がいゝと考へて、民子自身のために受合つたのは事實である。たゞ引き取つた上でどうするかといふ、具體的な成算を立ててゐなかつたといふまでである。だから、これから篤と考へようけれど、民子のためにいろんな點を思ふと、直ぐに向うへ歸されもしない。第一、どうにかしてといいといてやれば伯母も助かるわけである。本人も、歸ればまた碌な目を見はしまい。

同時に私は抑らない厄介な事を引受けたものだといふ氣がはじめて浮んで來た。實は今度民子を見て、この女に被せてゐたイリュージョンが、少々取れたやうな氣がするところへ、あゝした下等な道り口なぞの化の皮が剝げて見ると、何だか私こそいゝ面の皮のやうで、あの女のしやあ〳〵してゐるのが小面憎くなつた。

面倒な手紙を書いて疲れた私は、またぐつたり寝ころんだ。知らない間に足を蚊に食はれた。烈しい雨の日もいつの間にか段々に暮れかけて來た。私はもう何を考へるにも餘りに疲れてゐた。

夜になつても、まだ雨は烈しく降り續いた。

「それで、この先をどうなさるつもりですのい。」と、小母は心配さうに訊いた。

「どうすると言つて、家で養つてやればいゝぢやないか。」

「だつても、あなた、あんな事をして親を欺して出て來たものを、伯母さんに對してもいゝ顏をしてぐづ〳〵に置いとく譯にも行くまいぢやありませんか。」

「だから民子の道り口には私も愛想がつきたといふ手紙を出して、民子からはじめ言つて來た手紙もすつかり入れてやり、私から酷しく叱ると言つて置いたんだ。私だつて、民子をこのまゝ默つて置きはしない。」

「私はこれを幸に、向うでもさうお言ひなさるのですけ、人を連れに寄越して貰つて、あちらへ歸したらどうかと思ひますのぞい。置くと言つたつて、もういゝ加減な女一人ですけのい。」

「女一人だからどうだつて言ふんだい？」

「ですから、そのまあ言つて見れば――」

「私と出來合ひでもしようかといふのかい。」と、私は皮肉な顏をして調弄つた。

小母は眞面目に、

「そんな事を決して私が思ひはしませんけれど、實はのい、私はふと、伯母さんの手紙を見て、何となく氣になり出したんですのい。」と誰か聞いてゐるものでもゐるやうに、聲を潛めて、

「私のい……その……民さんはあなたの奥さんにでもなりたい積りで、逃げ出して來たのではないかと思ひますのい。民さんの方でいつからかあなたを思つてゐるのぢやありますまいか。」

「そんな馬鹿な事があるものか。」

自分は心から苦々しくかう言つた。そんな事

は考へもしたくない。

「いくら思つたつて、あんなものが私の妻に出來ますか？」

「さあ、それですよ。それを思ふと、尙更今の内に何とかなさらないではのい。民さんも不憫ですけれど……」

「そんな馬鹿なことはないよ。歸してない。私は民子に思つて貰ふ譯がないのだから、そんな氣で來たのなら私はそれこそ今直ぐにでも突き返すよ。馬鹿にしてら。」と私は煙管の詰つたのを力を入れて吹き〳〵した。そんな事は冗談にも考へたくない。

「それにあの人は變物だつて、口でいふ程出來はしないのですぞ。口ではいろんなことをお言ひなすけど。」と、小母は何を考へた樣さからか、こんな事を言ふのであつた。

「まあ、それでいゝから、あちらへ行つて下さい。そして一寸民子に來いと言つてくれませんか。」

「さうですね、もうお湯から上りなしたかしら。」

小母と入り代りに民子が這入つて來た。湯から上つて、化粧をして、赤黄色いナスタシャムの造花の花簪を一輪、櫛の目の甚々した髪に挿してゐる。

「何か、御用でございますか。」と、這入つたばかりのところに手を突く。何喰はぬ顏をして、白粉なぞをつけて、いゝ氣な女心だといふ氣もする。

「もつとお這入りよ。話がある。」

「あれ、一寸兄さん。太鼓が鳴りますぞのい。――水でも出にんぢやありますまいか。」と、民子はちつと耳を傾けた後、徐かに立つて來て、自分の背後に何が起つてゐるかも知らないものの樣に、たゞ常の如く、そこらに散らばつた原稿の崩しを取り片附けて、洋燈の側へ來て坐つた。

「ね、遠くの方でどん〳〵鳴つてるでせう――この近くに大きな川があるのですか。」

「まあそんな事はどうでもいゝ。それよりかお前さんはね。」と、私は手紙の一件を言ひ出さうとしかけたが、それともも少し待つて、或る止むを得ない時期が來るまでは、しばらく不問に附して置いてやらうかしらとも思つて見る。私はこの女が私から詰問されて、ぐつと行き詰る心持が、自分の受ける責苦のやうに心に迫つて來て、耶を悔いてゐるものを追求しでもするやうな、殘酷な或物が感じられた。民子は、私の容子を見て、思ひ當る事があるのか、いつしか默つて頸を項垂れて了つた。

「何の事か分つたかい。」と言ふと、民子は躊躇するやうな目を、偷むが如くにちらと私に送つてまた俯つ向いた。

「さつきお母さんから手紙が來たよ。」

かういひ出すと、私も流石に、この女のづうづうしい、女らしくない仕方が忌々しく考へられた。何であんな亂暴な事をして出て來たものだらうかと、この女の品性のために情ないやうな氣持が强まつて來た。

「お前は隨分呆れた女だね。私はこの四年ばかりは、お前の平生のことを詳しく知らなかつたけれど、まさか、かういふ女だとは思はなかつた。お前さんは私を欺したね。」

民子はほろ〳〵涙を出して、

「どうしてですのい？」と顏を上げて怖れ〳〵私を見た。

「どうしてつて、お前はお母さんからの頼みだといふやうな事を言つて、私に承諾させといて、お母さんのところは勝手に逃げ出して來たやうに書いてあるが、謊かい。お母さんの言ふのが謊だらうか。」

民子は、それきり默つてしまつた。

「どうだ。默つてゐちゃ分らない。」
民子は急に、押へつけられるやうに泣き出した。
「泣かんでもいゝぢやないか。どつちか言つてくれよ。さうぢやないのか。お前は、一昨日だつたか、その前だつたか、もうお母さんへ手紙を出したかと訊いたら、出したと言つて謊をついたらう？」
「いゝえ、出しました。……あの朝出したんです。」と、涙をぱら〳〵落して啜り泣きに泣くのである。
「駄目だよ。何であんな淫賣婦か何かが逃げ出すやうな事をして出て來たんだい。」
かう言つたが、私は人を責める事が下手なので一寸後が出ない。
「お前の證り方は、全きり、淫賣婦だね。」と、同じやうな事を言つて、しばらく、民子の俯つ向いた額口を見守つてゐた。
と、小母がついと出て來て、
「のい、あなた、水が出てどこかが切れたらしいのですぞ。さつきから、向うの方の村で太鼓が鳴つてるから變だと思つてゐましたら、そこの往來の方でも何だかわい〳〵騒いでゐるやうですけ、つねを門口まで見に出しましたら、大勢が松火を點してどん〳〵走つて行くと言ひますがのい。」と、追々にはこの邊まで流りでもするやうにいふのである。
「大丈夫だよ。この近所には切れるやうな大きな川はないもの。沼の水でも溢れゝばだが、少々溢れたつて知れたものだ。この村までは二里もあるんだもの。」
「さうでせうかのい。まあ、水は怖ろしいですけのい。ずん〳〵來たらどうしませうぞ。」
小母は子供のやうな事を言ひながら仰もぢもぢしてゐたが、民子と私との對話を妨げないためのやうに、それなり再び向うへ行つて了ふ。
さう言へば何だか坦隔りの百姓家でもわいわい言つてゐるやうな氣色がする。民子は袂を目に當てて偷つぶしてゐる。雨はじやり〳〵と私戸を撲り附ける。
「民さん、私は、お前さんがそんな事をするやうな女としてこゝにゐるのならお世話はしないよ。ね、おい。一體どういふ了見で飛び出して來たの？」
民子はしばらく默つて涙を拭き〳〵してゐたが、
「兄さん、何もかも私が惡うございましたけ、どうぞ堪忍して下さいませ。」
かう言つて、また顫へて泣き出した。
「私は東京に一人たよる友達が來てるのがありますけ、どうせ長くお兄さんの御厄惑はかけない積りで來たのでございます。」とこんな事を言ふのである。
「馬鹿。」と、私はむつとして喝鳴り附けた。
「何をいふのだ。今になつて私に厄介になるならないの話ぢやないぢやないか。引き取ると言つて出て來させた以上は、何を今更也介の厄介でないのもありやしない。お前はそんなしやあしやあした事を言つて、お母さんに對して惡い事をした事を悔いようとはしないのか。私を欺したり、私の方から來い〳〵と言つたなんて騙るやうなことをしたのをどうするのか。馬鹿」
お前は下等な女だ。そんな永く迷惑をかけない積りだなんていふ下種ぱつた挨拶があるか。向うへ行け。——行け。罪だ、そんな女と口を利くのは。」
私はついと襖際に除つてつけ〳〵かう言つた。皮を剝つて見ればかういふ下卑た事をいふ女なのでは情ない。
「もういゝからあつちへ行け。行けと言つたら行けよ。」と、私は稍言葉を和げて言つた。
民子はし〳〵泣きながら、仕方なしに立つ

て行つた。
何だか、叱り方が足りないやうな氣がする。もう少し徹底するやうに言ふべきであつた。私の妻云々といふ事も、それとなく、ぎつしり止めを刺して置かなければいけなかつた。併し、そんな心配だけはなさうに思はれる。それは小母の罪推である。民子がそんな事を思ふ謂がない。民子は三千子と私との事を知つてゐる。そんな馬鹿な事はない。
私は一人、やゝ小降りになつた雨の音の中に坐つて、このやうな事を思ふ傍にも、民子があのやうな下等な、ひねくれた女となつて了つたのが不憫にも思はれた。私は氣の毒な伯母の事も考へると、何だか民子にもつとよく言ひ聞かして、ちやんとした女にしたいやうな氣がした。民子は何と思つて暮してゐるのだら。
と、俄かに三四町先の火の見のあれだらう、半鐘がじやん〳〵と、雨の中に鳴り出した。火事かしらと思つて立ちかけると、同時に、表の門をどん〳〵と破れるやうに叩き立てるものがある。
「はい〳〵。今開けます。只今。」と、つねが黄色い聲をして叫んでゐる。
「もし〳〵もし〳〵。」と、どん〳〵叩く。
「何ですか。」と叫びながら、自分も出て土間に下りた。
見ると、松火を持つて門を這入つて來た蓑笠の一人は、私がよく局まで使ひに出す子供の父親であつた。
「利根が今夜にも切れさうだと言ひますので、萬一の用意に、濡れてはならんものを片附けて、荷物を纏つときなさらんぢや、いざといふ時に困りますでがすよ。こゝはまあ少しは高みになつとりますもんだで、水が來ても大丈夫でがせうが、あれでもこの三十年前には床の上まで來ましたでがすから。」
かう言つて、注意してどや〳〵と引き返した。
「何ですか、利根の水がこゝまで來るでせうか。」と、私は追ひかけるやうにして訊いた。
「來ますのなんのて。利根が切れると沼へ來るんでがすから。」と、一人が振り返つて言つた。
一同は松火を先に立てて山の手の部落へ廻つて行く。
「おい、水が來るといふぞ。燈を上げろと言つて來たんだ。」
「それ御覽なさいのい。まあ、どうしませうぞ。」と、小母はわく〳〵して、
「お祖母さん〳〵。お起きなさい。お祖母さん。」と騒ぎ立てる。
「まあ、そんなに騒ぐことはないよ。まだ果して來るか來ないか分らないんだもの。——つね、お前御苦勞だが急いで蠟燭を十本ばかり買つて來い。ぢきあすこの小店にあるだらう？」
「蠟燭を何になさるのです。」と小母が訊く。
「だつて用意だもの。——それはいゝが片附けるといへば大變ぢやないか。」と、私はもう取りかゝらない先からうんざりした。
「民子。——民子はどこにゐるのかい。」
「お民さん、そんなところに這入つて泣いてなすどころぢやありませんよ。家が流るかも知れませんぜ、あなた。」と、小母は、押入を開けて、重たい行李を取り下さうとするのである。
「そんなところまで水が來るものか。落ち附けよ、小母さん。」と言ひつゝ、片附けるとすれば何より第一に私の四疊からかゝらなければならないと考へる。民子はまだ祖母のゐる暗いところに這入つて泣いてゐるのであつた。
私は一々の物を片附けたりする事の面倒なのにくさ〳〵して、民子がさうして棠摺れたやうにしてゐるのが補障りであつた。中の間の洋燈の下を見ると、民子は柄の惡い女禪縮緬の切を

綴り合はせて、肘突を縫ひかけて置いてある。自分にくれるためであらう。そんな肘突は厭だ。

それよりも本當に水が來るだらうか。

「どうする、小母さん。厄介だね。片附けると言つたところでどうすればいゝかなあ。もし疊へ水が上りでもしたら、どこへ行つて原稿を書かうね。」と、ぐづ〳〵して立ちながら、小母に相談をする。

「つね、何をしてるのかい、お前は。そんなにけろんとしてゐないで、こゝへ來て何か手傳つておくれよ。——蠅瓶なんか要らないでせう？あなた。」と、小母もどうしていゝか迷ふやうな顏をして、私にいふ。

民子は一間の暗がりの中で、泣き淵んだやうな小聲をして、何にも知らないで寢てゐる祖母を呼び起してゐる。

「とにかくお前たちはお祖母さんの行李なんかをよく縛つて上げてくれよ。」と言ひながら、私は四疊へ這入つて行つた。

半鐘はどこか他の部落でもじゃん〳〵と鳴り出した。

（明治四十四年八月）

午後（三）

頽けた襖には黑い汁が出てゐる。どんな類をした女が分らないけれど、拙い着物なりにもきちんと約ましい風をしてゐる。結うて間もない髮にほこりを溜らせてゐる。私はその袖振に覗いた、色の褪めたメレンスの襦袢の袖を見つゝ過きた。

何だか、こちらを向かせて見れば私のどこかで見た事のある、そして私の好きさうな女だらうといふ氣がする。

と、そこに古けた格子戸の嵌つた家があつて、その戸口の横に汚い床屋の店先から取りはづして來たやうな、古くさつた硝子戸が二枚、襖はづして紮げて立てかけてある。すぴた筆で、紙井に賣物と書いて貼つてある。格子戸の內の、日影の當つた事もないやうな黑ずんだ土間に、床の下から拾ひ出したやうな古下駄が一足脫いである。この戸をいくらで賣るのだらう。これを私が買へば、さしむき何にする事が出來よう。これを買つて大八車に積ませて、とこ〳〵引いて行かせて見てもいゝ。何處といふあてもなく、このやうなだだ黑い町筋を、ずん〳〵引つぱり歩かせて、飽きたらその男にくれてやつてもいゝ。

何を私は考へるのだらう。町筋は行きつまつて、ぼろ〳〵の寺の塀のところへ私は來た。右か、左かどちらかへ曲らなければならない。私は自足袋に泥が一點氣ね上つてゐるのを氣にして紙を出して拭いた。こんなところへ來るのにこのやうな坂つときの衰附を履いて來たのが餘計である。私は何のためにかうしてぶら〳〵あてもなく歩くのだらう。私のムードは黑く淀しく沈んでゐる。何をか探し求めようとして得られないやうに底知しい。

私は炭の缺けらで惡戯書をした塀を見廻して立つたまゝ、これからどちらへ行かうかと考へた。

と、一人の小汚い三つばかりの女の子が、ちびた大人の女下駄を履いて、小さいくゝり枕をちやん〳〵の背中に括りつけたのが、水鼻汁と一緒に肉桂を噛みながら向うから來る。じく〳〵になつた、車の幌の附いた上を、危さうに拾ひ歩きをしてやつて來る。

羊

一

久さんの手紙に返事を出し後れた私は、午後に休みが出來た或日、いつそこちらから出かけて見ようといふ氣になつた。

丁度、牧場の赤い荷馬車が驛へバタを積んで行つたと聞いたので、それが歸つて來るのを待ち受けて、乘せて貰つた。

膝の上までもあるごは〳〵の長靴を履いた馬車使は、荷物の上にかけるヂックの旅ひを取り出して、積荷箱の、後の方へ敷いてくれる。がらんとした車の上には、赤い鼻緒の附いた、小さい女の子の下駄や、紙袋に入れた干鰯魚が圓で紮げたバケツに這入つてゐるのや、正札の附いた柄杓などの、小貧しい買物が、片隅に忍しく荷積まれてゐた。馬車が止まると共に、物見高い、小汚い子供等がぞろ〳〵集つて來て、耳の長い馬の手綱に觸れたり、黑い帽子を着て、外套のボタンをかけながら彳んでゐる私を珍らしさうに見守つたりした。

馬車は私を乘せると、再び馬の頸のベルを鳴らして、黑ずんだ一筋町をがた〳〵と走せて出た。十一月の日影のどんよりした、陰氣らしい日であつた。それでも何日何の興味もなく一人滅入つてばかりゐた私には、かうした荷馬車に乘つたりして、單調なところから出て行くといふだけでも、一つの物さびしい變化であつた。

私は、言はゞ自分で好んで、わざ〳〵かういふところに日を得ためだけれど、來て見れば何だか人がさせた事のやうに忌々しくなつた。ただ私は、どこへ行つて何をしても、自分自身がこれではやはり同じだといふ事が分つてゐるので、努めて我慢してゐるだけであつた。自分の性格に反對した、厭な仕事をしてゐるのが祖はしいばかりではない、さういふ外面からの反射よりも、寧ろ私自身の變調に煩はされてゐるのであつた。

私は久しくからのさびしい自分を亡ぼさうとする事に因はれてゐた。どうしてから録日、謬もなく、ひし〳〵と食ひ入るやうな寂寥に襲はれるのか自分にも分らない。人と上つ皮の口を利くのが、何よりも面倒くさくて堪らないので、出來るだけ交際といふ事をしないやうにして、一人で引つ込んでばかりゐた。さうして取りとめも附かない事ばかり考へた。

何だか欲しくてならないものがあつて、それが得られないからかうしてさびしいのだとも思はれる。それでもその欲しいものが何であるかが分らない。女でもない。女はたゞ薄つぺらな裝飾品であるより外には何等の價もない。そんなものではなく、何だか已に消えて得られない或物を求めていら〳〵してゐるのだとも考へられた。私は夜一人のこ〳〵外へ出て、何をか探し求めて行くやうに、小早くから戸を閉めた、灯影の一つもない町筋をとぼ〳〵歩いてゐる自分に氣が附いて、暗がりの中にぼんやり佇んだまゝ、考へて見ても、變な自分の解し得られないやうな事もあつた。

それでも寂しいだけは事實であつた。こんな時に、これが開けた町であつて、色彩のあるシヨー、ウインドーかなぞの前を覗き〳〵行つて、一寸したレストーランにでも這入つて、ガスの灯影を青く受けたテイブル、クロースに肘をか

けながら、一皿の何かに、ウヰスキーでも取る事が出來たら、それだけで、どんなにかかういふ剝げさゝくれたやうな夜の内容を得るだらうにと、そんな出來もしない事を考へたりした。さういふ心持の下には、ずつと以前に、たゞ或物を買つたと言ふだけの、一種の下等な女でも、何だか自分の得られない戀人のやうに懇しく考へ返される事もあつた。私は町へ來て以來、かうした、譯も分らない寂しい心持を餘計に腐らすためのやうに、厭な毎日を自分で拵へては見てゐたのであつた。用事がなければ外へ出て歩くのも厭であつた。出たつて行くところもなく見るものもなかつた。

私はかうして馬車に搖られて行くのにも、寂しい私の事を全く忘れ得る事は出來なかつた。たつた一本しかない電線の低く引かれた村筋を、私は、定めもなく漂泊して行く人のやうに辿ばれた。

兩側には殆ど桑ばかり培られてゐる。何一つ見る價もない平凡な村だけれど、私がどういふサーラウンディングスを持つた町に來てゐるかを解するためには何でも意味があるやうな氣もした。

その内に馬車は村筋を離れて、小さい赤ぼしれた木ばかりがぱら〳〵に生えた、毛を拵り取つたやうな山に這入つた。

物の二十分間も、こと〳〵と迂廻して上つて行くと、下の村とは一段高まつた平地に出た。氣附いて見ると、だだ黑い土質から赤がかつた土に變つて來たやうに思はれる。道の左右は、低い木立がところ〴〵に固まつた、淺木と石ころとの交つた一面の草原が、淋しい狐色に末枯れてゐる。その中を、どこから出て來るのか分らない水が、うね〳〵とやみを走つてゐる。何といふ花か、薄紫の小さい花が夥しく咲いてゐる。隔つた深い森の續きが、かうした廣い方のバック、グラウンドになつて、仄黑い色に淀んでゐる。

やがて馬車は前を區劃つた森の中に這入つた。少しの間、日影の通らない、どんよりした陰になる。いつからの雨が乾かないのか、じくじくに水の溜つたところがあつた。木立の少しく杜切れたところへ來ると、先刻のやうな淺木の原が、弱い日影を受けて、一きは明るく擴がつて見えた。

すると、さういふところにたつた一つ、假小屋のやうな下手な高葺の小家が建つてゐるのがあつた。草原を切り開いた赤土色の小さい一郭に、がさ〳〵と掘り建てた「見すぼらしい低い家」で、外の壁も、塗りくさしたまゝで未だじめ〳〵してゐる。それへ、穴だらけの煤けた古障子が、繩で拵り附けて嵌めてある。家の前には型ばかりの小さい畠が作られて、土の固まりのごろ〳〵したのも柵はないやうに、忍しい葱がかち〳〵になつて被ぶられてゐた。住んでゐる人はどこかへ出かけて留守らしく、空家のやうに戸が閉つてゐる。

「變なところに家があるね。」と馬車使に言ふと、何か用事かと聞きちがへて馬車を止めかけた彼は、その儘速度を緩めて話相手になつた。この邊一帶には村も何もないのださうで、たゞこの原を開墾しになぐれ漂うて來たものが、ぽつり〳〵あゝいふ出來合の家を建てて、少しづつ草地を拓いては、僅かに芋などを作つて生きてゐると言ふのである。私はさつきの住居の印象を目に保ちながら、かうして一生を終る貧しい農夫の、野鼠のやうな不自由な生活を考へつゝ行つた。

何だか寂しいところに來てゐる自分だといふ念が俄かに增して來た。考へて見ると、私が學校を出て、かういふ土地に就任して來たのが、どういふ約束だつたのだらうと思ふ。さらして思

ひも設けない久さんにこんなにして會ひに行くのである。人間といふものは、いつもは互にすつかり忘れてゐても、もと一たび接觸すると其に、目に見えない無形の絲が結びつけられて、永久に暗默のつながりが引かれてゐるやうに思はれる。私は久さんを何年ぶりで考へ出し得たのだらう。久さんは私と小學校で同級にゐた、貧しい家の子らしい、默り込んだ色の青い子供であつた。私はたゞ學校で同じ机に並んでゐたといふ以外には、久さんがどういふ家の子だつたのか、私が三年生で中學校へ這入つた後に久さんはどうしてゐたか、さういふ事も一向に知らないまゝで、それきりこの年まで一度も考へ出した事もなかつた。だからこの間私の勸め先へ向けて出し拔けにはがきをくれても容易にだれ〳〵といふ事が分らなかつた。

「私はあなたが町に來られたといふ事を聞いて驚きました。お久しうございます。私は表記の牧場で牧夫をしてをります。いつかお伺ひしてもいゝですか。私のやうなものが尋ねてまゐつても御迷惑ではありませんか。」

かう書いたはがきが來たのである。私はこちらへ來てから間もないので、そこに牧場がある事も知らなかつた。私はこのはがきを見て、思ひがけない事もあるものだと驚きながら、いろいろ久さんの記憶を回想した。それから牧夫とはどういふ階級の職業であるかといふ事も人から聞いて分つた。私は、何だか、久さんがさういふ人夫同樣のものになつてゐるだけそれだけ、この遲り近ひが私の感情を動かす事が深いやうに思はれた。二人の生れたところは、こゝからはそれこそ隨分かけはなれてゐる。久さんはどこからどうしてかういふところへ來たものであらう。――私は人の一生の約束といふやうな事を考へ續けずにはゐられなかつた。

私は馬車使が再び默して急ぐ背中を見ながら、いろいろ久さんの記憶を回想した。それから牧夫とはどういふ階級の職業であるかといふ事も人から聞いて分つた。私は、何だか、久さんがさういふ人夫同樣のものになつてゐるだけそれだけ、この遲り近ひが私の感情を動かす事が深いやうに思はれた。二人の生れたところは、こゝからはそれこそ隨分かけはなれてゐる。久さんはどこからどうしてかういふところへ來たものであらう。――私は人の一生の約束といふやうな事を考へ續けずにはゐられなかつた。

私は馬車使が再び默して急ぐ背中を見ながら、やがて森を出て、片側に黍の畠が一面に續いてゐるところへ來た。他の一方には、道路と堺に高い土手が長く限られてゐる。馬車の上に立ち上つて見ると、中はさつきいくつも見たやうな狐色の草原で、土手に近い小さい水たまりに、一匹の、手綱も何もない黑い裸馬が水を飲んでゐる。痩と前足とに綺麗な白い斑毛のあるいゝ馬である。放牧してあるのだと察しられた。

私は已に牧場の一部分へ來たのだと思ふと、急に久さんに對する感情がそはつついて來たやうな氣がした。第一に、私の心に上つて來る事は、汚い腰引でも履いて、貧しい人夫の群にゐる久さんを見る私が、昔の同窓を氣の毒に思ふアリゼンティメントであつた。何だか自分が、かういふ、出來て來たばかりのぱ〳〵しい外套や、キヅドの靴などを着けてゐるのも、自分で咎められるやうで不愉快であつた。私が自分としては少し贅澤すぎる繻を附けてゐるのも嘲られた。

私はこんな氣分を見ながら、長い土手に沿うて運ばれて行つた。

二

私は牧場の事務所の門の前に下された。やはり土手を柵の代りに繞らした、灰色に古ぼけた低い平家造りで、入口の硝子戸の毀れたのへ紙が貼つたりしてある。黑ずんだ、朽ちかけたやうな標札を讀んで、私は初めてこの牧場が合資組織の一つの會社の經營である事を知つた。

門の内にはいろんな毀れた農具のやうなものや、腐つたやうな綱の切や、荷造りのあとの蓆の切端などが取り散らかつてゐる上を、十四ばかりの鶏がうろついてゐた。剝げた黑の小倉の服を着た、小使らしい若い男が出て來て、上り

口の土間の壁に木札が懸つてゐるのを見てくれた。久さんは綿羊牧場の第三號羊舎といふのに廻されてゐるのださうであつた。

私は教へられたやうにそれを探して行くために、古い小家ばかり並んだ村の通りを北へ行つた。一町足らずの間、小汚い駄菓子屋や、木賃宿や、黒くなつた燒豆腐の煮しめに切りさしの鹽鮭なぞを乏しく釣した居酒屋や、がた〳〵の床屋などが、何にもしてゐない家々の間にばらばらとあるだけで、再び兩側とも土手續きになつてゐる。その間に青いペンキで塗つた小さい郵便局と、門口に硝子戸を嵌めた二階造りの小綺麗な宿屋とが目に立つた。往來は雨の日の車の跡が、いく筋も深く掘れ返つたなりに固まつてゐて歩き惡い。商賣をしない家々には、大抵が、潜口に、木目のざら〳〵に出た、剝げた下し戸を下だけ下して、それへ塵じみた子供の着物などが引つかけたりしてあつた。

私は土手に沿うて二町ばかり行つて、左手に久さんのゐる羊舎の入口を見出した。中は側の草地で、正面に大きな榧の木の群がつた林が一固まりをなしてゐた。這入つたばかりの横手に、いつか外國の雜誌で見た事のある、器械仕かけの耕作用の馬車が一臺、泥にまぶれたまゝで置いてあつた。私は、その車の傍を通つて、私は榧の林の中で二つに別れてゐる路を右に取つた。さうして五六間も行きかけると、向うから、粗末な着物を着た二十前後の女が、さゝくれた髪に汚れた手拭を被つて手籠を抱へて出て來るのに會つた。私がすれちがつて行くのを振り返つて見てゐるやうであつたが、私がそこの曲り角を折れようとすると、後から呼びかけた。

何をいふのかよく分らない。解せない顏をして立つてゐると、女はこちらへ引き返して來て、

「あなたは三號羊舎へお行きなさるんでございますか。」と物馴れない女のやうに訊くのであつた。血色のない顏をした、目のしめ〳〵した淋しい女である。羊舎へは、この林を抜けてからでも四町ばかり行かなければならないのに、行つても今誰もゐない。羊を伴れてみんな出てゐるのだと注意してくれる。その、羊をつれて行つてゐるところはどこか、私が一人で探して行つては分らないのだらうかと訊くと、みんなそれ〴〵異つたところへ行くので、どこにゐるか分らないといふ。

「あちらの牛の方を先に見て來なせ。その内には羊も追附こゝの羊舎へ歸つて來ませうけ。」と、私をたゞ牧場の見物に來たものと思つてゐるらしかつた。

「それは困つたな。實は羊舎にゐる人に會ひたいのだが。」

「何といふ人でせう。」

「山下久二といふ、牧夫をしてる人に。」

「さうでございますか。それならこちらにゐます。私がそこまで附いて行つて上げませう。」と、どうしてか久さんのゐるところを知つてゐた女は、かう言つて先に立つた。私は女に附いて今這入つた入口を出て、さつきの郵便局のある方へ引き返して、或家の横手の小さい露路に這入つた。そこには牧場の役員の住宅らしい家が、杉垣に包まれて五六軒並んでゐた。女はそのはづれに私を待たせて置いて、芋畠の間を小走りに走せて、向ひの松並木の間へ這入つて行つた。

私は時計を出して見た。町を出てから二時間かゝつてゐる。牧場に觀めば馬車を仕立ててくれるといふ事を聞いて來たから、歸りの事はどうにかなるだらうと考へた。

空には鈍い色の雲がちぎれ〳〵して、弱い日影が射したり曇つたりした。見ると、私の佇んだ杉垣の角に、コスモスの花が、もう咲きじま

ひらしく覗いてゐた。私は、そのほろ〳〵した淋しい花の下に立つて待ち飽んでゐると、さつきの女は、ちがつた右手の森の中から出て來て私を招いた。側へ行くと、

「この小さい路についておはりなせば、どこまでも一筋でございますけ。さうすると廣い原へ出ます。そこへ出て見なすと羊がゐるのが見えます。それを伴れてゐるのが多分あの人にちがひありません。」

かう言つたやうに教へてくれて、女は蜘蛛の巣が顏にかゝつたらしいのを拂ひ〳〵しつゝ引き返して行つた。私は用事のありさうな女に迷惑をかけたのを氣の毒に思ひながら、林の中に這入つた。何といふ鳥か形は見えないが、きゝきゝと、小ささうな鳥が私の通る直ぐ側で鳴いてゐる。私はその小暗い林の間を抜けて數はつた原へ出た。

けれども何も羊らしいものを見出す事が出來ないのできよと〳〵見廻してゐると、何町先だか、ずつと向うの方に小黑いものが群がつてゐるのが見えた。ずつとこちらの片方の林の側に、一寸した裸の木が立つてゐるのへ、黑い半纏のやうなものが引つかけてあるのも微かに認められた。正面の薄れた森までは十五六町もあるかと思はれる。ミルク色の雲の固まりが、ふは〳〵とその森の上に大きく擴がつて、半面に弱い日を浴びてゐる。左右の幅は五六町ばかりと見える草原である。ぐるりを松林が取りまいてゐる。林は遠くの方になると、厚さもない薄黑い影のやうに見えてゐる。それがふうはりと、煙かなぞのやうに搖き消す事が出來さうで、それを拭へばまた同じやうな草原が果もなく見え續きさうな氣がする。原の中程あたりへ弱い日影が黃色に落ちてゐる。その明るみを後にして、小黑いものの群がのそ〳〵と影のやうに動いてゐるのであつた。

私はそれを目指して路もないところをとぼとぼ歩いて行つた。黃ばんだ芝草に交つて茨の果がところ〴〵に赤く固まつてゐる。紫色をした龍膽の赤紫の花もちらほら咲いてゐる。行く中に、ちぎれ〳〵に漂ふ雲の影が、足もとを蔭らせたり、再び明るくしたりした。

やがてふと前方を見ると、向うを限つてゐた森も、羊だと思つた影も、半纏をかけた裸の木もすつかり亡くなつて、私はたゞ草ばかりの果しもなく續く茫漠たる原の中に一人空しく彷徨うてゐるやうに見えた。私は一寸惘いて立ち止つた。氣がついて見ると霧んだ低いところへやつて來たのだと分つた。森の上に固まつてゐた雲はそのまゝに見えてゐる。構はないでずんずん行くと、しばらくして、白けた薄の枯穗の列なつた上から、隱れてゐた森が段々に現はれて來た。黑く群がつた獸の影も浮んで來た。何にもない草原で、あたりに比較を感じさせるものがないためらしく、私が遠々に近づいて行く羊の形體は、圖抜けて大きなもののやうに見える。或は羊でなくて、牛ではないだらうかとも考へた。それでも牛にしては形が低くて太り過ぎてゐる。

と、その側の森の中から、洋服を着た一人の男が出て來て、羊の方へのそ〳〵と歩いて行きかけたが、ふと足を止めて、羊の方を見てぢつと立つてゐる。それがやはり、並はづれの巨大な男のやうに見えるのであつた。久さんだらうか。二人はどう言つて挨拶をするだらう。久さんでなかつたらどうしよう。——私はこんな事を考へながら近づいて行つた。

何一町ばかりも行くと、その立つてゐる人は、さつきからぢつとこちらの方を見てゐるのだといふ事が分つた。その時にはその人の形も普通の人間の大きさに復して見えた。そのうちに向うからも近づいて來た。

「鳥井さんですか。」と沈んだ聲をかけた。私はさう言はれなかつたら、それが久さんであるとは受取り得なかつたであらう。膝の裂けた、ぼろ〳〵の詰襟の洋服に、古ぼけた茶色の鳥打帽を被つて何か這入つただぶ〳〵した袋と、紐で釣した角笛を肩に下げてゐる。寧ろ脊丈の低い、汚い羊飼であつた。私を乘せて來てくれた馬車使のやうなどは〳〵した長靴を履いてゐる。

「きつとあなたに違ひないと思つて見てゐたんでしたけど……でもわざ〳〵來て藏かうとは思ひませんでしたい。」と、久さんは昔の儘のアクセントで、口重にかう言ひながら、淋しい笑を漏らした。黒く日に燒けたその顏色には、私が子供の時の久さんに見た事のない、嬉しさうな感情が動いてゐた。

「あんたはどうして私が町へ來てるのが分つたの？」

私は子供の日の二人のやうにかう言つて、私から先に草の上に足を投げ出して坐つた。

久さんは町の學校へ通ふこの牧場の獄醫の子から聞いたのださうであつた。

「通ふといへばこの村からはる〳〵出かけるのかな。」

「でも馬車ですけ、あんた。」

「往き返りとも？」

「馬車はいく藁もるんですよ。」

二人はこのやうな事から話しはじめた。私は、それから何を言ひ出せばいゝかと惑はれた。

「あんたは一寸も變つてゐないなあ。隨分久しぶりだけど、よく見ると同じあんただ。」

「さうでせうかの。」

「實際こんな思ひがけないところで二人が落ち合ふといふのは全く意外だつたなあ。」

私は久さんが改まつた言葉を使ふのを止させようとするやうに、わざと存在な口を利いた。

「あなたは變つてゐなさらんが、私の方はきつと見違へなさるに違ひないと思つてましたけど。」と久さんは後戻りをした返事をする。

「私は三年ばかり前に長い間ひどい病氣をして、もちつとで死にかけたんですがの。」

「こゝへ？」

「こゝへ來る前にです。」

「でも體は昔よか餘つ程丈夫になつてゐるやうだよ。」

「こゝへ來てからよくなつたんです。仕事と言つても、たゞかうして終日のんきな事をしてるんですからのい。もう、說いてくれる限りはこを動くまいと思つてるんですい。」と、言ひながらポケットから安い兩切の卷煙草を出して口に銜へる。私は何と挨拶していゝか分らなかつた。さういふ言葉の裏には、これまでいろいろな事をして、隨分辛い目に出會つたのだといふ事が考へられた。

と、久さんはそれだけで自分の事はすつかり言ひ盡しでもしたやうに、それなり話を換へて昔の小學校の先生の事などを訊き出した。久さんには、そんな、私がこの永年の間一つも考へた事もないやうな回想がいつも繰り返されてゐるのらしい。私はそんな話よりも、あちらに群がつてゐる羊の方に目が注がれた。私は羊といふものを今はじめて見るのであつた。私がそれまで羊だと思つてゐたのは乳を取るために飼ふ山羊で、これが本當の羊なのであつた。私は話が杜切れると立ち上つて、半ば町ばかり向うにのそり〳〵動き廻つてゐる素直らしい灰色の眼の一群を見守つた。

「久さん、私一人で羊の側へ行つて見てもいいかい。」と言へば、

「そんなに珍らしいですか。」と久さんも氣を換へたやうに、

「それぢやこちらへ呼びますから、そこにゐなさい。」

かう言つて、肩から釣してゐる、豆腐屋の持つてゐるやうな角笛をぶう〳〵吹くと、向うに固まつてゐた羊は――恰もさうして命令を待つてゐでもしたやうに、こちらを向いて佇んでゐた二三匹が、こと〳〵と歩き出して來るのに續いて――長い列になつてぞろ〳〵とみんなやつて來る。この時まで私には氣が附かなかつたが、その羊の群には小さい薑色の犬が一匹附き添うてゐて、動いて來る彼等を檢閲するやうに、少し離れた草の中に小さく立つて見張りをしてゐるのであつた。そのうちにみんなの列に後れた五六匹の羊が、十間ばかり置いて、後からのそり〳〵來るのを見ると、犬は急いでその方へ駈け出して行つた。すると、後れた羊は小言を食つたやうに足早に走せて、みんなの列の後に附いた。犬はそれを見るとまた走つて引き返して、先頭の羊の前を横切つて向うの側面へ廻つて、再び後まで行くと、それで安心したやうに、あとから草の上を嗅ぎ〳〵徐かに附いて來る。

「あの犬があゝして羊の番をするのかい、久さん。」

「あいつがわしたちの手足のやうなものですのい。思ふ通りに犬がちやんと動かすんです。一匹でも迷うてうろ〳〵してる奴があると、ぢき嗅ぎ出して引つ張つて來ます。羊舎から出ると牧夫はたゞ懷手をして見てればいゝのですのい。」

久さんはかう言つて番犬を手もとへ呼んだ。外へ出てからは羊のことは何でも一々この犬が獨りで始末をするのださうである。

「だから牧夫は女房よりも番犬を大事にしますい。牧夫なんぞの女房なら、叩き出してもまたどこにか轉がつてるけど、かういふ犬はこの牧場に五匹しかゐないのですけの。」と、久さんは重たい口で冗談を言ひながら、犬の頭を撫でてゐる。

「あれでどのくらゐゐるの？　數は。」

「あれだけが二百五十七匹です。牧場全體では二千ばかりもゐませうよ。」

「三雙舎といふのにはどの位ゐるの？」

「さうですのい。私の羊舎だけだと七百五十ばかりです。それが年中三組になつて放牧に出るんです。」

かういふ話をしてゐるうちに、羊の先頭は久さんの足もとまで近づいて來て、命令を待つやうに立ちどまつてゐたが、間もなく先頭の二三匹が許されたやうに草を食ひ出すと、みんなも用事がすんだやうに、長く伸びてゐた列を解いて段々に密集して、思ひ〳〵の方向に向き換はつてくつろいで休息する。或るものは地面へ鼻先をつけて、芝草に交つた、何とかいふ草に似た黄ばんだ牧草を選つて食ふ。中にはいつまでもぼんやり考へ込んだやうに立つてゐるのもある。のそり〳〵大勢の間へ割り込んで歩くのもある。見てゐるうちに互に少しづつ勝手な方へ動いて行つて、段々と間が疎らになつた。

かうして目の前に寄せて見ると、丁度、古ぼけた灰色の羅紗を解して拵へた生物のやうである。體の色をちつと見てゐると、何となく舊約全書に喬かれた、遠い代の事蹟が聯想される。全で綿のやうに溫順しい老い耄けたやうな固まりである。非常に素直な動物で、互の間に爭ひといふ事が一寸もないと久さんが言ふ。どんな事があつても、たゞ一匹でゐる事の出來ない卿で、いつも必ず幾匹づつか集まつてゐる。獨り置くと非常に淋しがつて、悲しい聲を立てて鳴くのださうである。

「これほど人間を戀しがる動物はありませんよ。そこへ行つて歩き出して御覽なさい。あなたの足もとまで近づいて來て、命令を待つや

たの行く方へ附いて行くから。」

かういふのに從つて、私は或一角にゐる五六匹を誘うて向うへ行つた。すると外の仲間が段々に見附けて、さつきのやうな縱列になつて附いて來る。私は小學校の一年生の男女を扱ふ女教師のやうに、あとすざりをしながら導いて行つて、しまひには全での群を率ゐて一町ばかりの長さの半圓を描いて廻つて見た。羊は一匹一匹、ちやんと私を了解してゐてくれるやうな心持がする。私は何だか嬉もなく、ゆつたりした温かい氣分に包まれて來た。いつもひし〳〵と食ひ入るやうな寂寥に浸されて、いら〳〵しく生きてゐる私は、しばらく久さんと代つて、かういふ灰色の獸を牧してたゞ一人でこの野原の中でくらしたいやうな氣持がする。さうした方が却つてさびしさが忘られはしないだらうか。——私はこんな事を眞面目に考へながら、再び久さんのゐる方へ歸つて來た。久さんは何にも知らないで微笑してゐる。私は密かに久さんの境遇が羨しくなつて來た。

二人はそれからまたしばらく草の上に横はつてゐた。

「もうそろ〳〵羊舍へ歸りませう。汚いところですけど、私たちの小屋へ行つてお茶でも飲んでくれませんか。」

「さうだね。羊の寢るところを見せて貰はうかな。」

「別に見るがものもないですけど、わざ〳〵來て下さつたのに何の景もありませんから。」

「私ははじめて、こんなのんびりした氣持になつたよ。何にも忘れてあんたと二人で羊を引つぱり廻した事は、これからいつまで經つても忘れられまいよ。」

私はかう言つて、最早間もなく入日となるべき日影が、向うの森の上の雲を照してゐるあたりを見やつた。私がさう言つた心持は久さんには微しさうにもなかつた。

「ぢや私は外套を取つて來ますから。」と久さんは、それが引つかけてある木の方へのこ〳〵行つた。

やがて私は久さんと並んで羊の群を導いて、さつき來た方へ引き返して行つた。いろ〳〵話して見たい事があるやうで、同時にこれと言つて言ひ出す事もない。私が話したいのは、考へて見ると、町で一人寂しい私の心持や、私のしてゐる仕事についての不平である。けれども、さういふ事を久さんに話したつて分る譯もない。それよりも、久さんが今日までどこでどうしてゐたのかを久さんのために訊いてやりたい氣がするけれど、何だか、人に考へ出したくない記憶をほじくらせるやうな心持がして、深入つて訊く譯にも行かない。私はたゞ默つて歩いた。

「今日私がこゝにゐるのを誰が教へてくれましたろ。一應私の羊舍へ尋ねておいでたんでしたかい。」と久さんが思ひ出したやうに訊く。私はさつき女に出會つて、いろ〳〵面倒を見て貰つた事を話した。

「それではこゝのところに一寸した悲のある、色目の餘りよくない女でしたらうか。」と久さんは右の耳の後へ指をあてて訊いた。

「そんな事は分らなかつたけど、人のよさうな、二十ぐらゐの女だつたよ。」

私はこんな事でも言つて久さんとの話を作るやうにした。

「羊をつれて出る人たちは、毎日どこといふ極りもなく、方々へ行くやうな事を言つてゐたがさうかな。」

「えゝ極つてゐませんね。日が出ると出かけて、どこでも氣の向いた方へ行つて終日して來ればいゝのですのい。日が暮りかけると羊の奴は獨りでずん〳〵羊舍へ向けて勝手に歸つて行

きますよ。」

「ちやんと時刻が分るのだらうかな。」

「それは天氣なぞを見る事は早いですぜい。朝櫂を出す時に少し出遲るやうな事があるとその日はきつと雨ですけの。」

久さんはかういふ事をぽつ〳〵話した。夏なぞは、うつかり木蔭に寢こんだりしてゐる間に、羊が急にのそ〳〵歸りかけるので、犬が愕いて吠えかける。それで目をさますと、遠方の森の上に雨雲が擴がりかゝつてゐるので、早速羊の後に附いて引き返す事なぞが度々あるといふ。牧場の廣さは二里に一里の面積を掩うてゐるのださうで、その一部分には馬や牛や羊の食料を耕作する大きな畠もあつて、それへ種を蒔いたり刈入れをしたりするのをすつかり器械仕かけでやるのださうである。

私は猟羊についていろ〳〵の話を聞きながら、さつき出て來た林のところまで歸つて來て、久さんが外套をかけてゐた立木を、遙か後に見返つた時、さきほどの女が、こんなところから、四五町も隔つた向うにゐるものを、どうして久さんだといふ見分けがつくのだらうかと考へた。久さんにさう言ふと、

「それは馴れてるものが見ると、一寸した恰好のちがひでそれくらゐ分りますい。」と言ふ。二人が已に日の蔭ばんだ原を振り返つて、このやうな事を言つてゐる間に、羊はずん〳〵せぎせぎになつて林の中の小路へ這入る。後に固まつて待つてゐる羊がばらけないやうに、側の犬がぐる〳〵と周圍を廻つてゐる。

「あなた野葡萄を食べますか。」と久さんが不意な事を訊く。

「こゝらに澤山あるんですよ。」と言ひながら久さんは子供のやうに、深い灌木の間をばさ〳〵と分けて、林の中へ斜に這入つて行つた。

三

私は久さんと野葡萄を食べながら、小店のある往來へ出た。もう馬車を雇むならまないと、馬車が町へ着いて引き返して來るのが夜遲くなるがといふと、久さんは、別に何の面白い事もないけれど、用事さへなければ今、私のところへ泊つて行かないかといふ。明日早く、獣醫の子を學校へ運んで行く馬車で歸れば、勤務の方には差支へはしないだらうと言つてくれる。私も何だか林の中の小屋に寢て行くといふ、珍らしい變化を見たくもあつた。

「少々遲くなつても、馬車の方は構はないですから、一應羊舍へ行つて私たちの寢る小屋を見て下さい。あんなところでも構ひませんでしたら、蒲團だけは綺麗なのを借りて來ますけ。——それと食べるものが何にもありませんけ、氣の毒ですけど。」

こんな話をしながら、久さんは私を伴れて、さつき女に出會つた、門内の林の小路へ這入つた。私は久さんの迷惑にさへならなければ、さういふ事にしようかとも考へながら附いて行つた。

林の中を拔けて、三四町ばかりの草原を横切ると、木立の詰つた、少し高みになつたところへ來た。そこが羊舍のあるところであつた。

そこへ行つて見ると、林を開いた一區劃が、北と西とを高い木に塞がれて、海黒い土の色を見せてゐた。

正面に、二十間ばかりの低い茅葺の小屋が横に延びてゐるのが羊の檻であつた。その小屋の右角に、小さい二階のやうなものの附いてゐる、同じやうな茅屋根の小さい建物がある。右手に開かれた地面は七百ばかりの羊が群がり得るくらゐの廣さに見えた。羊小屋の前には、羊に水を飲ませる仕かけがしてある。丁度水車へ導かれた、板の筧のやうなのが二列に引かれてゐる。

「羊はどうしたらう。」と訊くと、
「もう獨りで小屋へ這入つてしまつたんです。入口の開き戸を犬と羊がこと〳〵開けるんですから。」と久さんは言ふ。右手の小家には貼りたての白い障子が嵌つてゐる。久さんは私を導いて羊舍の眞ん中の入口から這入つた。十間ばかり置いて、同じやうな小屋が後にもう一棟建つてゐる。中には檻が兩側に向き合つて並んでゐる。久さんの受持の羊は、右手の方の兩側に、一區劃に二三十匹づつ這入つて小暗く固まり合つてゐた。左手の方の半分は、まだ羊が歸らないでがらんとしてゐる。通り路の天井に硝子張りの明り取りが設けられてゐるけれど、兩側の窓が比較的高いのでそこいらがどんよりしてゐる。中央に側の鳶色の犬が監督者のやうに前足を揃へて控へてゐる。こちらから見てゐると、犬は檻の前を嗅ぐやうにして、二三間歩いては、またもとのところへ歸つて蹲つてゐる。

かうして絶えず自分の見張るべき羊に注意してゐるのださうであつた。

「羊小屋といへばこんなもんです。見るがものもありません。」と、久さんは捌らなささうにかう言ひながら、時々立ち止つて、何をか調べるやうに、羊を覗き〳〵して歩いた。さうして右手の端まで行つてそこの最終の區分に三四十ゐる角のある大きな羊を見せた。

「これはまた種類が違ふの？」

「どうしてです？」

「だつて角が生えてるぢやないの？」

「これは牡羊ですから。」

「ぢや、あちらのはみんな牝かい？　私はあの中に牡と牝とがゐるのかと思つてゐた。」

「さうぢやありません。一寸とこの角を握つて御覽なさい。こんなにぐる〳〵巻き附いたやうな恰好ですから、少しも敵を引き受ける武器にはならないのです。先端だつてこんな方へ向いてるでせう。」

久さんは小暗く蹲つてる羊の一匹を引き寄せて、私に角を弄つて見させた。

二人は横の出口から外へ出た。

「汚いところですけど、上つて休んで下さい。」と、久さんは先に立つて、小屋の方へ行つた。

「これからまだ片附ける用事もあるんでせう？何だか邪魔をするやうな氣がするな。もう歸らうよ。これからまた度々出かけて來るから。」

かう言つて私はもぢ〳〵した。これでもう馬車を傾んで乘つて歸つた方が、世話がなくていいやうに思はれた。

「さうですかい？」と、久さんはたつてとも言ひ得ないで、躊躇した顏附をしたが、とにかく一寸腰をかけるやうに、そこの小屋の、右角の一室の障子を開けた。そこは粗末な疊を敷いたみすぼらしい六疊の一間であつた。新聞を貼つた片方の壁に、ごは〳〵した木綿の古い布子が一枚かゝつてゐる。その外には石油の箱のやうなものを反古紙で張つたのが、ランプ臺の代りに使はれてゐるらしく、ホヤだけ一つ載せて、正面の押込の前に置いてあるだけで、がらんとしたほど取片づけてあつた。

「どうぞ一寸上つて下さい。こゝは私が一人で貰つてゐる部屋ですけ、だれにも遠慮は入りませんけ。」と久さんは、ぼた〳〵した長い靴を脱いで先に上つて、押入から、穴だらけの、古けた赤毛布を出して、四つに疊んで上り口へ敷いてくれる。同じやうな部屋がもう二つと、後に臺所がついてゐるだけの小さい一棟である。

「あなたは煙草を召し上らんからいゝですのい。」と言ひながら、久さんは次の間の汚れた襖を開けて、自身のための煙草盆を持ち出して來て、毛布の傍へ膝を揃へて坐つた。

「どうしようかな。馬車なら一時間半ばかりで

着くんだから、今から歸つたつて五時半には歸れる譯だが。」と私はまだ極めかねてから言つた。こゝへ一晩でも泊つて行くといふ事も久さんに對して一つの同情になるやうな心持もした。

「この三號舍といふのが三つの羊舍のうちで一等のんきなんですから助かります。私の他には二人の牧夫がゐるだけですけ。」

「その人たちはまだ歸らないの？」

「まだそこらに出てゐるんです。この近くで放牧してる時には大抵は日が這入つてから引き上げて來るのですから、こゝへ歸つて來て水を飲ましたりしてゐると暗くなつてしまひますよ。それから灯を點して食物をくれてやるんです。」

「それぢや今日あんたは私のために早く引き上げて來たんぢやないの？」

「いゝえ、さういふ譯でもありません。折々かういふ事もありますのい。」と久さんは頬をすぼめて、煙の來にくい巻煙草を吸うた。

「羊に水をくれてやるんぢやないの？」

「何、時間が來ると羊が獨りで水槽のところへ出かけて行くんですから。」

「水はどこから來るんだろ。」

「あすこのとこへ竹の筧が來てるでせう？　あれであの後の林の中から引くんです。」

「あの中に水の湧くところがあるの？」

「えゝ、土地が大分高まつてゐますけ、そこへ横穴を突いて水を出すんです。こゝの臺所にも、この後の林から引いたのがちよび〳〵來ますのい。つまりかういふ、水の出るところを擇んで、そつちこつちへ羊舍を立てたんですよ。」

「井戸は掘れないのかね。」

「井戸を掘ればずつと深く掘らなければやなりませんから大變です。」

久さんは煙草を喫みながらかういふ話の相手をする。こゝにゐる他の二人はどちらもまだ二十にならない若ものださうで、よその羊舍にゐると博奕を見習つたり、いろんな悪い癖を眞似るので、年の行かないものはこゝへ固めて入れてあるのださうである。

「女を取つたとか、取られたとか、貸した金を返したの返さないのと、そんな事ばかり言つてるのですけ、一眼のやうにのんきに日を送つてるのですけ、一日でも牧夫をすると止められないつて言ひますよ。一寸も體を使はないのですけのい。」と、もう殆ど吸口まで火が來てゐるのを、根元まで吸つて灰に插した。

「私のやうなものは、さういふ人たちに交れませんけ、一寸も輻が利きません。博奕も厭ひだし、酒も好かんし。」

かう言つて寂しく笑つたが、やがて思ひ出したやうに、

「まあ一つ火を指へて茶でも沸しませうい。直きですから。」と次の部屋へ立つて行きかける。

「久さん、私にならもういゝよ。どうでも歸る事にしよう。あしたの朝早く立つたりするのも厄介だから、いつそこれで馬車を傾んで歸らうよ。」

「さうですか。どうもこんなところですから無理にお引き止めしても何だし。」

「さういふ譯ぢやないけど。またこの次に來たときにゆつくり泊つて行くから。――どうしても休みの前の日か何かでないとね。」

「ぢや少らく待つてて下さい。馬車を仕立てて來ますから。」

「すまないがさうして貰はうか。ともかく二人で馬車のあるところまで一緒に行かう。」

「さうですね。」

私は久さんの後についてく〳〵と羊舍を出た。

「久さん、あの小屋の角の二階のやうなものは、あれや何だ？」

私は後を振り返りながら訊いた。

「あれですか。あれは物置でさ。」

右手の林の方を見ると、灰色がかつた鈍い空の下の方に、紙を通す弱い灯影のやうに淡黄色い太陽が、裸になつた大きな椋の木の間にどんよりと濁つてゐる。頭の疲れ易い私は、朝から終日仕事でもしてゐたやうに、そろ〳〵日が痺くなつた。私はもう何にも口を利かないで、馬車の上でぢつと目を閉つて見たいやうな氣がして來た。

「全く何だ風情もありませんでしたぞのい。わざわざたづねて來て下さつたのですのに。」と久さんは、門を出て事務所の方へ行く途すがら、濟まなささうにかう言つた。

「そんな事はない。いろ〳〵珍らしいものを見せてもらつて愉快だつた。今日程長く人と話した事は、こちらへ來てからはじめてだよ。」

「私も何だか言ふに言はれず愉快でした。私は羊をつれて出て草原へ一人ころんでは、よくいろんな昔の事を考へるんですよ。あなたが町へ來てゐなすと聞いた時には愕きましたぞい。」

「これからは私の方へも、出て來られたらちよいちよい來なさいな。私はどういふんだか、毎日一人で寂しくつて堪らないよ。」

「まだ田舎に馴れないからでせう。」

「いゝや、さういふ寂しさぢやないんだ。」

かう私は言つたけれど、それだけでは了解され得る譯もない。

私は、さつきからこの銅げこくれた小家の續きを三四度も通るので、村人はきよろ〳〵と私を見る。私はまたかうして町のさびしい夜の中へ一人とぼ〳〵歸る事を考へながら、久さんと並んで歩いた。

久さんは私を待たせて置いて事務所へ這入つて、何かそこで話を附けるらしかつた。しばらくそのまゝ出て來ないと思つたら、やがてあちらの出口から、ちやんと一頭立の輓馬車を仕立てて、馬の口を取つて出て來た。

「それでは、今日來た途中に山をぐる〳〵上るところがあつたでせう？　あすこの下り口まで送つて行きませう。」

「あんたが？」

私は考へちがへてゐた。

「それでは私はいつそ泊つて明日の馬車で立つんだつたのに。私はさうだとは知らないもんだから。困つたな、それは。」

「なぜです。」と久さんは馬の下へ頭を入れて腹帶を直す。

「だつて久さんに馬車を驅らせては氣の毒だ。」

「あんな事を。私はこゝへ來るまでには長く馬車使をしてゐたんですから。こゝでも一年以上あれでしたもの。平氣ですよ。」

「だつてあんたに私を引かすのは濟まんぢやないの。」

「でも學校時代では二人が代り〴〵馬になりつこもしたぢやありませんか。」と久さんは、例のさびしい笑を見せて、手綱を握い繰つて御者臺へ上つた。

「さ。」

「では乘らうか。」

「よがんすか。——急いで上げますけのい。もつと眞ん中へ乘つて下さい。へ、出しますよ。」

と久さんは手綱をしやくつた。私は何だか二人の境遇の相異を考へて、久さんを同情しずにはゐられないやうな氣がした。

かうして私は町へ引き返した。それから再び久さんに會ふまでには、私にはまた毎日寂しい日が續いた。

（明治四十四年十二月）

櫛

一

やつと一通り下だけ取片附けたおとわは、憂だけそこ〳〵に撫でつけて、通りの渦へ出て行つた。

禮吉は、二階の小さい四疊の、間もなく黄昏れになる襖子の障子に、そちこち穴が開いてゐるのを繕つてゐた。そこには、自分が始末をしなければならないものが、まだそれなりになつてゐた。手紙の束やノートなぞをごた〳〵に押し込んだ行李の底から、やつと手鋏をさがし出して、寸法を見測つて半紙を切つてゐると、すぐ前の門口の往來で、おとわがこゝの家の主婦さんと何をかこそ〳〵話し込んでゐるのが聞える。全で知らない人の家を間借りして、たつたさつき越して來たばかりだのに、もうあんなに親々しく立話なぞをするのである。

禮吉は、そんな事から自分の女の素性が少しづつ暴かれて行くやうな氣がして不愉快である。主婦さんのところから貰はせて來た飯粒も、たつたこればかりではすつかりの穴を張るのに足りさうもない。それでもおとわは平氣で出て行つてしまつた。こんなつまらない事までがじれつたくて堪らない。

この女と一緒になつてから、最早かれこれ半年ばかりになる。その間いつも同じことを叱つたり諭したりして、いろんなところを直さうと努めて來たのだけれど、まだ容易に自分の欲するやうな女になつてくれない。所つ中下らない事が癇に障つてくさ〳〵する。考へて見ると、自分が慰にすべてを忘れ盡して、甘い日向に浸つたやうな夜夜を、たゞうつとりと暮したのもほんの僅かの間であつた。向うでも、こんな私だとは思はなかつたやうな點も色々あるだらうけれども、こちらはそれ以上に、餘計な下らないものを摑んで來たやうな氣がしていま〳〵しい。今で思ふと、後ではこのやうな心持を見ることが、前から暗示されてゐた。自分が、自分の求め得る正當な女を捨てて、こんな變なものを引き入れたのが悔いられる。

この近頃は、おとわのする事が一寸した事まで、一々目ざはりで堪らない。この間まで二十日ばかりも入院してゐた禮吉は、病後の衰へた體のまゝでいろんな事に頭を使つたため、五六日前からとき〳〵不眠症に襲はれてゐる。右の耳は今で聾したやうに寒かつてゐる。今日も體に少し熱があるやうで、何をするのも不愉快である。平生怠惰けてばかりゐたところへ、卒業試驗が目の前に押し迫つて來たので氣が氣でない。おとわは、私はどうしてもあなたの氣に入るやうな女にはなれさうにもない、私がもとの私になつて、口にも出さずに一人隱して戀ひ入つてゐる方が、あなたに取つてもどんなに仕合せだか分らない、もう、これだけ伴れてゐて貰へば十分だから、どうか歸してくれと愚癡をいふ。自分に對してすまないと思ふ心持は分つてゐるけれど、そんなことを言ひ出すだけ、自分に對する執着が少ないのが飽き足りない。

さうかと思ふと、こちらが課業に追はれて一間に籠つてゐると、おとわは、自身のした事が氣に入らないために相手にされないかのやうに、目に涙を溜めて一人しよんぼりと坐つて考へ込んでゐる。女といふものはどうしてこんなに面倒なものだらう。おとわに物を分らせるために

は、どれだけ手數がかゝるか分らない。しまひには小五月蠅くなつてしまふ。自分はたうと、自分の求めるやうな女を得ないで、一生このやうに、砂塵の中を通るやうながじ〳〵した氣分ばかりを見て死ぬのだらうか。何にも言はないでも、一々こちらの心持を了解して、重ねて切つた二つの形のやうに、きちんと自分に嵌つてくれる女は得られないのであらうか。

どた〳〵した片附けに疲れた禮吉は、半分まで彈るともう厭になつて、それなりそこへごろりと寢そべつたまゝ、いら〳〵した暗黑な心持の中に、いろんな取りとめもない事を考へた。

板闇ひの直き外の往來を荷車がごと〳〵通る。禮吉はさつきからいつまでもぼんやりと天井を見て寢ころんでゐる自分に氣が附いた。頭りに何をか考へ入つてゐたやうだけれど、氣が附いて見れば何を考へてゐたのか自分にも分らない。たゞ不安な暗い心持が、冬の夕方の藏ばみのやうに自分を包んでゐる。何か、無くてはならない物を求めて得られないやうな、何事かの悔い入られるやうな氣分が、譯もなくだだ黑く湧き上つて來る。何だか病かに罪惡を犯してゐるやうな氣持もする。利己的な、殘酷な事をした後のやうな心咎めが感ぜられる。どうしてであらう。どうした譯で、こんなに自分で自分の罪を數へ立てるやうな氣分を見るのであらう。

それはともかく繼母からあれなり返事が來ないのがじれつたくて堪らない。たつたこなひだあれだけ取つたばかりだけれど、いろんな事で使つてしまつて、おとわの手にはもう一圓もあるかないかである。明日は例の奴がまた催促に來るに極つてゐる。人の足元を見通して、僅かばかりの借りをせか〳〵言つて來る。あいつが來るとおとわはおど〳〵して私の顏ばかり見てゐる。やつて來た相手に對してよりも、もぢもぢしてゐるおとわに突つ突かれるやうな氣がして忌々しい。繼母がよく金が要ると言つてくよくよしてゐる顏も目に浮ぶ。早く學校を出てしまひたい。さうして、どうにかうにか、自分で二人の生計を立てて行く事が出來るやうになつたら、繼母に對してどんなにかさつぱりするだらう。それには何が何でも試驗をうまく切り拔けなければならない。早く耳を直してすつとした氣分になつて調べに取りかゝりたい。

禮吉は寢ころんだ日に、行李に押し込んであるノートを見つめて、うんざりした心持になつてゐた。

と、その行李の下に散らかつてゐる手紙の中に、おとわの手紙が一本目に附いたので引き出して見る。日附さへ見れば、これ〳〵の時の手紙だといふ事は禮吉にはちやんと分るのであつた。この手紙は、もし今宵も出掛つたらどうしませう、私はもう立つてもゐられませんと言つて來たあの手紙である。おとわが自分に對して不安を感じ出して、自分と外で會ふのを避けようとするのだと疑つた禮吉は、約束したなりおとわのところへは行かないで、近くの寄席へ長唄を聞きに出て行つた。おとわと會つたところで何になる。體に觸れる戀はしないといふ事はこちらもはじめから極めてゐる。自分の求める戀に通俗な價を付けられるのが厭さに、そんなそぶりは論にも見せたことはない。會つてもどうするのでもないのに、何のために會ふのかといふことがおとわにはよく分るまい。それが分るまでは會はないことに極めよう。——から思ひながらも何だか物足りない心持を見ながら、寄席からとぼ〳〵歸つて來ると、禮吉は自分を待ち焦れて出て來たおとわと、ふいと家の前の暗い夜の中で出會つた。おとわは家へはもとより得う這入らないで、寒い夜の往來を、一人もぢ〳〵してうろついてゐたのであつた。

その夜二人は、たうとかうなるべき二人になつてしまつた。おとわは羽織をぬいで坐つたきり、ぢつと顏を伏せてゐて、いつまでも帶を解かうとはしなかつた。さうして、そのうちに一人さめ〳〵と泣き出した。はじめて女となる夜の恥らひに、何となくためらひ泣かれるおとわが頬には鬢の後れ毛が一筋哀れにかゝつてゐた。痩せぎすな體にしんみりと似合つた、何とかいふ縞縮の着物の胸に、黑繻子の片帶から、赤い縮緬の帶揚が小唄の一くさりのやうに覗いてゐた。

おとわはやがて息もたえ〳〵に、亂れた髮を被つて目を閉ぢてゐた。禮吉は、おとわが何にも言はずに泣いた後に、わがなすまゝに女となつて寢入つた睫の哀れさに、もうさき〳〵どんな事があつても一生捨てはしないと心に誓つた。禮吉は平生おとわに對して口やかましくつけつけ言つてばかりゐるけれど、かうして二人が一つになるまでの事をあれこれと考へればおとわも哀れにいぢらしい。

あたりは見る〳〵暗くなつて來た。

自分は一人で、どのくらゐの間こゝにかうしてゐたのだつたらう。何だかおとわの歸りの遲いのが氣にかゝる。薄暗がりに一人かうしてゐる自分の事には氣も置かないで、ゆつくり歩いて歸るところを目に畫けば小さびしい。

何だかまた熱が出たやうで氣分が惡くなつた。

六疊へ下りてランプを探したけれど、そこらには見當らない。ランプはまだ掃除がしてないなりで、ほやも黑くすぶつたまゝ押し込んである。油壺にも石油の滴にも油がない。

禮吉はそれなり緣側に立つて、しばらくぼんやりと、暮れて行く土の上を見てゐた。そこには一本の桐の木と、南天が一株植つてゐる外には何にもない。いかにもみすぼらしい裏町のやうな、どす黑い土の上に、引つ越しで散らかつた反古紙なぞがわびしく轉がつてゐる。緣側の片隅には、おとわが、こゝの家で借りたらしい薄べりを、二つに疊んで敷いて、その上に炊事用の石油こんろやバケツや、小さい笊や、俎などを並べてゐる。そこいらに釘がないので雨傘や洋傘が戸袋の側に立てかけてある。禮吉はその下に置いてある新聞紙にくるんだ自分の靴をそのまゝ開き戸の中へ片づけた。

こんな事をしてゐるところへ、おとわが裏口からこそ〳〵歸つて來た。

「どうも濟みませんでした。歸りにいろんな買物をしたものですから。——これをそこへ上げといて下さいまし。私下駄の緒を切つたんですの。足を洗つて來ますから。」

かう言つてあちらへ行く。風呂敷包みの中には何かごた〳〵這入つてゐる。

おとわはやがて界の襖を開けて、向うから上つて來た。中學へ行く男の子とたつた二人で暮してゐる主婦さんは、もう小早に食事も濟ましたらしく、食卓の上に洋燈をつけて、一人で讀讀本を讀んでゐた。

おとわは急いでランプを整へて灯を點けた。

「お前、何をごた〳〵買つて來たの？　家から例のが來るまでは、なるべく儉約してゐてくれないと困るがなあ。」

禮吉はおとわが風呂敷を解く手元を見ながらかう言つた。金があると、何の後先もなく下らない物を買つて、こちらの要る時に少しくれといふと、もうこれだけしかないんですのにと、困つたやうな顏をするのが癖である。禮吉は電車にも乘れないで、學校までてく〳〵歩いて行くやうなことが殘念もあつた。

「何だ。コーヒー茶碗かい？　そんなものを三つも四つも買つて何にするんだ。」

「でも安かつたんですわ。お客さまがいらつした時に、あんなもので紅茶なんか出すのが變ですから。」と、しまひにはおど〳〵と口の内でかう言つて、偷むやうに人の顔を見る。憂を解いて櫛卷にして町家の女房のやうな恰好をしてゐる。禮吉は眼な顔をして、おとわが火鉢に炭を繼ぎ足す手先を見つめてゐた。おとわは、浮かない顔をして、そこへ小鍋をかけて湯を注した。何かさいに煮るものを買つて來てゐるらしかつた。

「これから飯を焚くのか。」

「いゝえ。もうお主婦さんが焚いといてくれたんです。」と陰氣な返事をする。

「何をそんなにつん〳〵してるんだい。」

「直きにあんな事を仰しやるわ。どうすればいいんでせう。いつも何かといふとぢきつん〳〵してるつて仰しやるけど、私はかうした陰氣な性分なんですから。」と涙ぐんだやうに下目になつて、指先で襟元を弄つてゐる。

風呂敷にはまだ新聞に包んだものがかさ張つてゐる。何かと訊いてもおとわは默つて、一つところを見てゐる。出して見ると、二人の不斷ばきの下駄を買つて來たのである。

「とわ、また持つてつたね。――もうぢき來るといふのに、それだけの間がどうして待てないのだらう。だからお前は下種な女だといふんだ。女だてらで、あんなところへ出這入りするのを何とも思つてゐやしない。おれはそんな眞似をしてまで下駄を履くよりか跣足で歩くよ。お前は何でも見つともないといふけれど、假りに見つともなくたつて何だ。私はまだつまらない書生ぢやないか。どんな下駄を履いて歩いたつて何でもないぢやないか。」

禮吉は先のやうに、下女を置いて一軒借りてゐたときとはちがつて、模一重でこゝの家のものがゐるのに氣を置いて、囁くやうに小聲でかう言つた。

「下駄が見つともないよりも、眞つ書間あんなところへ平氣で出かけるやうな女を伴れてる方がいくら恥かしいか知れやしない。お前見たいに一寸した不自由が怖へ切れないやうな性分では、これから先々私が一人で困るのが目に見えてゐる。お前たちはもとはろくでもない家へ生れた癖に、金なんていふものは人がくれるものだと思つてゐたんだから堪らない。たつた一日も一文なしで暮す事が出來ないやうな女と伴つてゐたんでは、生涯私の仕事は出來やしない。私のやつてる學科では、世間へ出ても殆ど金にはならないんだ。それに今から一人前の暮しを標準にしてあれこれ言ふやうなお前では先々が不安でたまらないよ。」

禮吉はまたいつもの同じ事を言ひ出さずにはゐられなかつた。

「おい、下駄一足ばかりの事でそんなにつけつけ言はんでもいゝといふ顔だね、それは。」

「まあ。」

「私のいふ事が分らなければもう言はないさ。何でも自分のしたい通りをするがいゝ。」

「でも耳のあれへもお通ひなさらなけやならないぢやありませんか。」

「おれはお前の着てるものを剝がしてまで醫者へ行かなくもいゝんだ。それよりも、金がないから淋しくつてつい行つたんだと正直にさう言つたらいゝぢやないか。」

禮吉はかう言つてぷいと立つて梯子段の唐紙を開けた。

「おい、ランプを持つて來てくれ。――それぢやない。それを取つたら後が眞暗ぢやないか。點せよ、もう一つのを。」

禮吉は面白くない心持をして二階へ上つた。少しの事でも細に障ると、つい心にもないひどい事を言ひ出すのが癖だから、いつもこんな時

にはこちらからいゝ加減に立つて行くやうにしてゐるのであつた。

禮吉は二階の床の間にランプを置いたまゝ、不愉快な氣持でぼんやりそこに坐つてゐた。

自分の言ひ方は少し大袈裟だつたけれど、どうにかして、金がなくてはぢつとしてゐられないやうなあの女の性分を直したい。それでないと自分は所つ中一人でいら〳〵しなければならない。あの女から言はせれば、いつも出來得る限り不自由を堪へてゐるのではあるけれど、根本に今のやうな癖が取れないでは困る。自分が病院に這入つたりしたために、おとわは大分持つてゐた着物を、すつかりあれしてしまつたやうである。おとわはそれでも平氣でゐるやうだけれど、こちらは男として氣が咎める。今日は何を持つて行つたのだらう。いくら取つて來たのか知らないけれど、もうそれこそ着物が何にも無くなつたのではないかと思ふと哀れである。自分は、一つはそのために、あんなにつけつけいふのだけれど、向うでは、それほどまでの心づくしが察しても貰へないやうに思つてゐる。そんな事をするので以て、女のつとめの全部を盡してゐるやうな氣でゐるのだから可笑しくなる。

おとわが上つて來た。階子段のところへ顔を出して、

「出來ましたから召し上つて下さいまし。」といふ。

禮吉は默つて他の事を考へ込んでゐた。

二

禮吉は電車を降りて、おとわから報まれた胡椒を買つた。圖書室で手間取つたので、十二時も疾くに過ぎたけれど、ついでに家までてくてく歩く事にした。家へ歸つてもおとわはお針へ行つて留守だけれど、夕方まで一人二階に籠つて、おとわの歸つて來るのを暗に待つやうな心持で、徐かにノートを讀むのが樂しみのやうに思はれた。

五月と言へど、何となく日向さへ薄冷たい午後である。おとわはどんな容子をしてお針の先生の前に坐つてゐるだらう。當りまへの女たちの中に交つては、何となく氣後れがするだらうと思はれる日々を、小さい油紙の袋に、小さい握飯を二つ入れて、雜物を抱へて通ふのも、もう四月以上になる。何をいはれても默つて微笑んでゐるだけだから、口を利かない人だと言つてからかはれるさうである。自分はわざ〳〵あの家の前を通つて歸つて來る事もたび〳〵あつた。いつも竹の格子に障子が閉つてゐて、家の中は見えないけれど、上り口の土間におとわの下駄が脱いであるのを見て通つた事もある。口には出しては言はぬゆゑ、おとわはそのやうな事は一寸も知るまい。自分の氣に入る完全な女にしたいばつかりに、眼の前では小さな事をやき〳〵言つて叱るけれど、少しの間でも眼に見ずにゐれば氣にかゝる。

禮吉は外から歸るときにはいつもおとわの事を考へながら、冬の落ばみに日向を慕ひ求めるやうな心持をして歩いて來るのであつた。

植木屋の多い横町をぐる〳〵通つて家の傍へ來ると、古けた板圍ひの隙間から、おとわの着物の赤い裏が、洗つて物干竿に干してあるのがちら〳〵見える。

開き悪いがた〳〵の門の口をこじ開けて這入ると、上り口の横手の小さい空地に、家の主婦さんが黒つぽい土をほじくつて鶏豆を少しばかり蒔いたのが、二列になつて日向に吸ひ浸つてゐる。柔かい若葉を撫へた、低い無花果の木の上には、蜂が一匹まひ〳〵してゐる。その小さい影の影が、土の上や、無花果の葉の上にまひ〳〵と寫る。

禮吉は久しぶりに、おとわと二人がはじめて家を持つた頃の、濃やかな戀の心持に返つたやうな氣がして、そは〳〵と上へ上つた。

主婦さんはどこかへ出たものと見えて、家の中はがらんとして誰もゐない。

襖を開けて六疊へ這入ると、長火鉢に鐵瓶の湯がしゅん〳〵沸つてゐる。ちやぶ臺の上には例のやうにパンと紅茶とを用意して白い布が被せてある。

禮吉は押入から着物を出して、洋服と着換へて火鉢の側に坐つた。

庭を見ると、桐の木の下に、ナスタシャムが一株、もく〳〵した日向の中に五六輪の朱黄色の花を傾げてゐるのが目を引いた。おとわが買つて植ゑたものらしい。ほじくつた土の餘りが日影に乾いて、土の中から剝り出された貝殼が一つ、泥に塗れて覗いてゐる。

禮吉はちやぶ臺の神ひを取つて、紅茶を入れてパンを食べる。壁の根に据ゑた小さい手單簡の上には、翡翠色の硝子に嵌つた置時計が、十時過ぎを示したまゝで止つてゐる。その側に手紙が一通來てゐる。禮吉は母から書留が來たのではないかと思つて、立つて行つて見ると、それはおとわへ來た手紙の狀袋であつた。子供が書いたやうな下手な女文字で、「とわどの行」と書いて、切手が六錢貼つてある。先の住所へ向けて來たので、附箋が二枚も附いてゐる。裏を返して見ると、おとわの叔母から來た手紙であつた。

小さい時分に雙親に亡くなられたおとわは、たつた一人のこの叔母のところで十六の年まで養はれてゐたといふ事を、禮吉は前々おとわから聞いてゐた。これだけがこの女の生ひ立ちについて禮吉の知つてゐる總てであつた。それがどんな叔母だか、何をしてゐたものの子に生れたおとわなのか、禮吉はそんなことも全で知らない。おとわに向つてそんな事をほじつて訊くのも罪なやうな氣がして、さういふ事には一寸も觸れないで暮してゐるのだけれど、考へて見ると、あゝした素性も分らぬ女と戀に落ちて、かうして二人で住まつてゐるといふ事が、自分ながら自分でしてゐる事でもないやうに唐突な氣持がする。殊に自分はまだ學校の濟まない書生である。繼母なぞは自分がこんな暮しをしてゐるとは夢にも考へないであらう。自分はかうして、たらと一生おとわと伴れ添ふのであらうか。今更切れてしまはうとも思はないからには、このまゝで一年二年と經つて、遂には切るにも切られない腐れ緣に縛られるのかと思ふと、何だか、考へるなら今のうちだといふやうな氣もして來る。

平生は、たゞ自分が好んで得た女として、何の危惧をも抱かないでゐるけれど、おとわが叔母にたよりを出したとか、叔母から手紙が來たとかいふのを聞いてこの女のデリニエイションといふ事に考へ到ると、何だか、一種の不愉快な不安が呼び起される。下種張つたオリジンから出て來た女といふ事を見せつけられでもするやうに忌はしい心持がするときが度々あつた。

おとわは、さうした叔母たちと、どんな手紙を遣り取りしてゐるのであらう。叔母からたまに來る手紙は、自分には隱すやうにしてゐる。時々さういふ手紙のちぎれが、油に汚れて、鏡臺の抽斗なぞに見出される事もあるけれど、書いてある字はわざと見ないやうにしてゐてやるのである。

禮吉はこんな事を考へると、おとわが或黑い藤を引いて自分に投じてゐでもするやうで、何となく不安な氣持がする。

禮吉は食事をすまして二階へ上ると、留守だと思つたおとわがちやんとそこにゐた。机に寄

つて、小さい算盤と算紙の帳面とを出して、小遣の計算をしてゐる。

「まあ、びつくりしましたわ。いつお歸りになつたんです？」

寢亂れたやうなぐら〳〵した髪に、倦怠さうな目もとをして、急いで机の上を片附ける。少し鹽たれかけた着物に、紺青ととき色との縞になつた、メリンスの晝夜帶をだらしなく結んでゐる。

「お前、變な風をしてゐるね。」と、禮吉はいきなりかう言つた。

「留守の間に髮ぐらゐ梳いて、きちんとしておいでよ。長屋のかみさん見たいぢやないか。」

「何ですか、今朝から變に氣分が惡くて、何をするのも億劫だつたものですから。」と言ひながら、力なささうに鬢の解れを掻き上げる。

「女の癖に自分の身だしなみをするのを億劫がるのは、根性が自墮落なからだよ。お前は何だつて私のいふ事を畏まつて聞いた例がないね。いつも何とかかとか言譯ばかりするぢやないか。」

禮吉は、別に深く咎めるのでもなく、たゞ自分で自分の心持を紛らすために、外見は小言をいふやうにかう言つた。だらしない容子をしてゐると言つて叱るのも、一面には、自分のためにこんなみすぼらしい妻になつてしまつたのが、哀れに氣が咎めるからであつた。

「今に髮結さんが來てくれる筈ですから、ちやんとします。來當に何といふ風でせう。頭にこんなにふけが溜つてゐますわ。」と厭さうに傾を しかめて、禮吉に言はれない先にとゝあるやうにいふ。禮吉が今どんな心持を見てゐるかといふことは分らないのであつた。

「ナスタシャムを買つたんだね。」と禮吉は、叱られたやうに取つてゐるおとわの心持を忘れさせようとするやうに、かう言つて、話を換へた。

「あゝいふ花を少し買つて來て庭先へ植ゑようぢやないか。今晩二人で學校の前の夜店へ買ひに行かないか。」

禮吉は子供のやうに、おとわの膝の前へ頭をつけてごろりと寢轉びながらかう言つた。こんな時の心持は、自分で自分の責められるやうな氣分を忘れて、一人の、弱い單純な男としておとわから劬つて貰はうとする一種の哀訴の心持であつた。

「ね、久しく出かけないから、今夜あそこいらまで出て見ようぢやないか。」

おとわにいろんな苦しみばかりを見せてゐるのを償はうとするやうに、機嫌を取つてかう言つたが、いつもこんな時には直ぐに膝を貸して、こちらの心の底に何かの苦痛があるのを慰めようとするやうに、たわいなく微笑みながら、輕い取かしさうなキッスをして、その眦の長い、潤ひの深い黑い目で、まんじりとこちらの顏を見つめてゐてくれるおとわは、今日に限つて返事もしないで、默つて他の方を見入つて沈んでゐる。

「どうかしたんかい、お前。」と、禮吉は間を置いて頭を上げておとわを見た。

「何を涙ぐんでゐるの？ ——おい、おとわ。」

「何でもないんです。」

「何でもないのに泣くのかい。」

「……」

そんなじめ〳〵した面倒臭い女はもうつくづく厭だ。

「外へ出るにも着物がないから情なくなつたのかい？」

かういふとおとわは急に啜り上げて泣き出した。

「さうなんだらう？」

「つまらない事を仰しやるのね。外へ出る着物

ぐらゐちやんと持つてゐますわ。」と指先で涙を拭いて、

「あなたはこの頃他人がましい事ばかり仰しやるから厭。着物なんか一枚も亡くなつたつて何でせう。男がそんな事に氣を遣ふもんぢやありません。あなたは何か言へば私の着物々々つて氣にしてばつかりいらつしやるから水臭いわ。」

「そんなに泣かないでもいゝぢやないか。他人がましいと言はれりやそれきりだけれど、何だか自分だつてすまないからさ。すまないといふのが厭ならね、――それではかうだ。私は私自身のためにも、お前の着物を一枚でも減らしたくないやうな氣がするんだよ。私は自分の女がいろんな着物を持つてゐてくれゝば、丁度花の色が生々して濃いやうに氣持がいゝんだから。その反對にさ。」

「私はあんな着物はすつかり亡くして了ひたいくらゐに思つてゐるんですからようどざんす。」

「そんな亂暴な事を言ふものぢやないよ。」

「でも、これまであゝした私だつたときの着物なんですもの。」

「どういふ意味だい、それは。」と禮吉は、おとわの心持は分つてゐても、わざとかう言つて氣を變へさせようとした。おとわはこれまであんなところにゐたといふことで以て、いつも私に對して氣ぶ引けるらしいのである。そんな事は人の境遇だから仕方がない。それを知らないで貰つたといふのではないし、そんな事にくよくよして貰ふ必要があるくらゐなら、はじめからお前を引き取りはしないのだ。

「拙らない事をいふもんぢやないよ。全で子供見たいぢやないか。」

禮吉はかう言つて、おとわのそんな考へを挫はうとする心持の裏には、さつき、下で叔母から來た手紙の狀袋を見て、この女の素性に對して輕蔑と不愉快とを催したことが考へ浮べられた。おとわがかうして泣いてゐる心持を考へれば、自分がそんな事を竊かに心に抱いたりするのが殘酷のやうな氣がする。こちらの氣のせゐか、おとわは何だか今日は少し目のふちや頬のあたりが痩せ落ちてゐる。禮吉は、自分がいら〳〵口小言をいふために、おとわがこんなに衰へでもしたやうに、すまないやうな哀れな心持がするのであつた。

「私はどうしてこの近頃、こんなに一寸した事が譯もなく悲しくなるんでせうね。」と、おとわは氣を換へようとするやうに、袖口で涙を拭きながら下目になる。

「何もそんなに物を悲觀するわけはないぢやないか。」

少し神經衰弱にでもかゝつてゐるのではないかと思ふと、それが半分は自分がさせた事のやうに氣が咎める。

「お前、どこか體の工合でも惡いのぢやないだらうか。何だか目の色に變に力がないやうだね。」

「私はあなたから叱られるたんびに、自分といふものが情なくなつてしまひますわ。」

「それはお前が誤解してるんだ。自分にいろんな缺點がまだいくつも取れないでゐるから叱られるんぢやないか。お前は私から何か言はれるがそんなに厭かい？」

「さうぢやないんですわ。」

「私が言つて聞かせる事がお前を惡んで言ふやうに聞えるのかな。お前は私から嫌はれかけてゐるといふやうな氣がする時があるのかい？――そんなに言はれゝば私も泣いて見せたいやうな氣がするよ。」

こんな事を一々辯解しなければならないのだからじれつたい。

「ぢや、これからは何にも言ふまい。――ね、そ

れでいゝのだらう？」と、禮吉はもう面倒臭いので、わざと撫つ附けるやうにかう言つて見る。

「さういふあれぢやないんです。何かにつけてあなたに濟まないと思つて自分が厭になるんですわ。どうかしてあなたのお氣に入るやうな女になりたいと思つて、一生懸命になつてゐるんですけれど、どうしてかう情ない女なんでせうね。もう半年以上にもなるのに、おかずの一つだつて、いつも辯辛かつたり、水つぽかつたりして、まづいものばかりしかさし上げないし、……」

「つまらない事を言つてら。私はお前がどんなものをどんなにして食べさせたつて、たゞの一度も不平な顏をした事はない積りだがな。」

「ですから尚更私が……」

「止せよ。食物なんかどうでもいゝよ。それよりかまだ重大な問題がいくらもあらうぢやないか。」

「そんなにして何でも我慢してゐて下さるから、あなたがおいたはしくてならないんです。あたし勿體ないやうな氣がして……」と、またおろ〳〵と泣き出すのである。

「それに今日は叔母から手紙が來ましてね……その中に變な事が書いてあつたものですから。」

と、おとわは泣き〳〵かう言つて前垂で涙を拭く。

禮吉は訝しいて見ると、叔母はおとわがこゝへ來たといふことが、どうも不安でならない、だれが考へても係りに釣り合はない緣だから、その中にはいつか飽きて捨てられさうな氣がして心配である、出來るなら今のうちに早くちやんと籍を入れて貰ふがいゝ、もしとやかくと言つて、長引かされるやうだつたら、面倒のない間に、いつそ思ひ切つて、別れた方がいゝ、と、こんな事を書いて來たのだといふ。

禮吉はおとわが厭だといふのを聞かないで、命令的にその手紙を帶の間から出させた。

「この中で、どうしても私に見せたくないところだけは裂つてお取りよ。今の話のところだけ見ればいゝんだから。」と禮吉は、おとわのために下らない苦痛だけは省いてやらうとした。構はないといふからそのまゝ見る。必要のないところはずん〳〵飛ばして披いて行くと、しまひの方に今の事が書いてあつた。假名ばかりで讀み惡いけれど、その次にまだかういふ意味の事が書いてある。

「男といふものはよくさういふ段になるとそれほどたつて歸りたいといふならどうなりと勝手にするがいゝ、その代り、お前の荷物は渡さないからその積りで出るなら出ろ、こんな事を言つて、こちらを括りつけようとかゝるものである。萬一そんな行きがかりにでもなつたら、荷物なぞはいくらあらうとも目もくれずに出ておしまひよ。女の目先の慾から、そんな事に引かされて取り返しのつかないはめになつてしまつてはばか〳〵しい。荷物ぐらゐはまた働けばいくらでも出來るのだから。」

かう言つたやうな事が細々と書いてある。

「お前はいゝ叔母さんを持つてるね。全で相手を女たらしと見積つた方策だね。お前は一體、平生この叔母さんといふ人に、私の事を手紙でどんな風に言つてやつてるの？」

「後生ですからどうかお氣を惡くなさらないで下さいまし。あなたには何にもお話してゐませんけれど、今では多少落ぶれた暮しはしてゐても一寸も下種な人ぢやないんです。たゞ私の事を氣づかふあまりに、あれこれ考へるだけの事なんですから。」

「もういゝ。そんなに大きな聲をして泣くと下で變に思ふよ。――おい、もう泣かないでくれ。

私は別に何とも思やしない。荷物の議論なぞは中々非凡な見識と思つて感服したよ。たゞ滑稽なのは籍の事だ。いくら籍を入れたからつて厭になつて出さうと思へばそれまでぢやないか。そんな籍なんていふものに愛情を支配する力がどれだけあると思つてるんだらう。併しそれはとにかく、叔母さんにこんな事を言はれて悲しくなるといふのは、つまりお前が私を疑つてゐるといふ事を自白するやうなものだ。お前は何かいふと、私のやうなものでなくても、どんな立派な方だつて貰へるあなただのにとか、私のやうなものがいつまでも喰つ附いてゐては、あなたが先々まで肩身が狭いだらうとかいふやうな事を言ふだらう？　今更そんな氣がねをするくらゐならいつそ初めから私のところへ来なければいゝぢやないか。私にしたところが、氣まぐれに盲目半分に一緒になつたんぢやないんだ。私が世間ていに對して、いろ〳〵考へて躊躇したのもよく知つてるだらう？　おとわ。聞いてゐるのかい、私が今言つてる事を。」

「ちやんと聞いてゐますわ。」と、おとわは涙を啜る。禮吉は何だかおとわに言つて聞かせてゐるのではなくて、自分で自分に向つて諭してゐるやうな氣がする。この女をこのまゝ一生づれ添うてやるかどうかといふ段になると、まだそれとなく遅疑するやうな心持が閃くのを、自分で打ち消すために、こんなことを言つておとわに警ひをしてゐるやうな心持がする。

「私はお前がそんな事をいふのを聞く度に、それはお前が私をすつかり信じないせゐだとしか思はれない。お前が根性惡く、いつまでもお前を捨てはしないといふことを私に言言させようとするやうに聞えるよ。お前は私がそれを口に出して誓はなければ不安心なのかい？」

「そんなに、私のやうなもののいふ事を、皮肉にお取りなさるのはあんまりですわ。私はいつもあなたにすまない〳〵と思つて暮してゐるんですから、ついいろんな愚癡つぽい事を考へるんですすもの。」

おとわはかう言はうと思つても、それがてはき言へないといふやうに、默つて頭を下げてゐる。

「もうそんな下らない話をするのは止さうよ。」

そんな事を言ひ出せば、私がどういふわけであんなにお前を得たいと思つて執念く悶えたかといふ事や、お前のどういふところが私に氣に入つてゐるとか、私がどんなにお前を戀してゐるかといふ事などを、一々話さなければならなくなる。そんな事が口に出して言はれるわけのものではない。

「こちらへお寄りよ、おとわ。もうほかの話をしよう。ね。禮吉をお上げよ。」

かうなれば女に眞實を語るには抱擁より外にはすべもないやうな氣がする。自分は飼くまでこの女を戀ひてゐるのである。哀れなこの女をどうして裏切ることが出來よう。眞實はこの女のためにこの女を引き取つてやつたのではない。自分がこの女に求めてゐるのである。女は自分にすべてを棄してゐる。自分の言ふ事を一々羊のやうに從順に聞いてくれてゐる。どうかして自分の欲する通りの女にならうとして一心に努力してゐる。さういふ意味に於いて女は自分の求めを充たしてゐる。少なくとも自分の求めを充たし得る女である。

「おとわ、なぜ？……よ。」

「あら、一寸放して下さいまし。はい、――今下りますから。」と、おとわは涙つぽい唇を引き放して梯子段の方へ向いて返事をする。

「髪結さんが來たんですわ。私泣いたやうな顔に見えるでせうか。何だか今日は髪を結ふのも厭ですけれど。」と、顔に下る髪の解れを掻き上げて、涙を拭いて下りて行く。

禮吉は、おとわのためにもつと何かしみじみとやさしい言葉を附け足してやりたいやうな心持がする。おとわのすべての疑ひと懼れとを拂つて、二人がはじめて家を持つたころのやうな、醇淨な享樂を與へ得るやうな何事かを言ひ注ぎたい。我儘な自分が不斷言つたりしたりしたすべてを撤回してしまひたいやうな氣がしてもぢ〳〵する。何もかも自分が惡い。少なくとも、疑惑に陷り易い、理解の乏しい「女」なるものに對する、自分のインターブリテイションが惡かつたのである。自分がこの女に對して抱いてゐる心持を、インターブリートする仕方が下手であつた。自分は一から十までこの女に戀してゐる。自分がこの女に缺けてゐる點を悔い、この女を得てゐる事に對して狐疑を抱いたやうに見える點があつたなら、それは自分がこの女を完全な女として見ようとする愛情の迸りだつたのである。自分があらゆる我儘を言ひ得る女に對する、同情ある專制的欲求だつたと考へたい。それは餘りに身勝手な解釋であらうか。

禮吉は、腹這ひになつて、疊の目を爪でほじりながらこのやうな事を考へてゐた。すると、おとわが間もなく再び上つて來て、二疊へ膝をついて、

「私うつかりしてゐました。あなたはもう下でお午を召し上つたんですね。すみませんでした。昨夜の肉の餘つたのを叩いて、つまらないものを一皿拵へて置いたのでしたのに。――いつお歸りになつたのか一寸も知らなかつたものですから。」

「ぢや夕方に貰ふからいゝよ。髪結かい？」

「えゝ。」と、おとわはこそ〳〵と下りて行く。泣きほくろとて、睫毛の長い、黒の目の下瞼のところに、ぽつちりと小さいほくろのあるこの女の顔は、このやうな日には、自分が見る目まで淋しくなるほど哀れつぽい。

見ると、さつきこの女が泣き伏したあとに黑い斑點の交つた、厚ぼつたい籠甲の櫛が落ちてゐる。禮吉は手を延ばしてそれを取り上げた。

考へて見れば、何もかも自分一人が惡いやうな心持がする。

禮吉は櫛の齒を指先で割つたりしながら、それからそれへと考へ移つた末に、やがていつしか、二人がまだ戀を語るまでにならなかつた日のいろんな事を、一つ〳〵詳しく考へ返した。おとわがまだ水々しい十九の女の誇りに蠅いて、甲斐絹の青前垂をした高髷に、宗十郎の紋の、平打の銀の簪を挿した、だれに見せるともない、きちんとした早い面影が、最早壞れて取り返すことの出來ないはかないものの記憶のやうに、哀れに懷かしく目に浮んで來た。

三

禮吉はさつき歸りに買つて來たペン先を取りにとこ〳〵下へ下りて行つた。

外の土の上には黄色い日影がもく〳〵と漲つてゐる。おとわは縁側に間近く鏡臺を据ゑて、髪を結つて貰つてゐる。髪結は四十恰好の、色の淺黑い、眉毛を落した淋しさうな女である。毛筋櫛を頭に突き出して、元結の井端を口に咬へて、おとわの髪の根を括つてゐる。おとわはまだ結ひ馴れない髪結の手加減を氣にするやうに、上目使ひに鏡の中を覗いてゐる。禮吉が押入を開けると、おとわは顔をこちらへ捩う向けない儘で、

「何かお要りですか。」と訊く。

「洋服のポケットにペン先が這入つてるんだ。」

「では、こちらの方を開けて御覽なさいまし。すみません。」といふ。

禮吉は押入の中がすつかり髪結に見えるの

が、氣はづかしいやうな心持がした。上の段には蒲團が入れてあつて、下にはおとわのからつぽの行李が二つ並べてある上へ、二人の乏しい着物が載せてある。それこそ何一つの物のない二人の世帶の内裏がすつかり見透かされるやうで恥かしい。

おとわは平氣でゐた。

「そのお蒲團の上に載せてあるでせう？——まだその中ほろくに片附けてないのですから、ごたごたしてゐますわ。」

おとわは、禮吉からそれを叱られるのを氣遣ふやうにかう言つて、こちらへ立つて來かける。

「いゝよ。もう分つたよ。」

禮吉は押入を閉めて、上へ上つて行かうとした。

「あなた、一寸御覽なさいまし。これ、こんな蠅がもうゐますわ。」と、鬢を分けた髪を被つたおとわは、女らしい口を利きながら、右手の甲に棲つてゐる蠅をそつと見せる。

「もう蠅が出るのかねえ。」と言つたきり、禮吉は、人前で二人が口を利くのがこそばゆいやうな氣がして、さつさと上へ上つた。何だか學生でゐて、女を引き入れて暮してゐるといふことが、髮結にだつてじろ〳〵蠅を見られるやうで氣が引ける。跡におとわはすまして髪結と話をしてゐる。

「ほんとにいろんな厭なものがゐるのね。蠅だの蚊だのつて五月蠅いものがずゐぶんゐるわ。私は蚤や蚊に食はれると、ひどく腫れるんですよ。負ける性分なのね。」と下らない事を言つてゐる。

禮吉は一人でこつ〳〵と調べものをした。試驗までに、ノートを片附ける外に、一寸したエッセーを書いたり、二三の基礎學科の口答試問の準備もして置かなければならない。それがうまく間に合ふかどうかと思ふと氣がいら〳〵する。今日も醫者へ行かないで淫つて來たけれど、何だか耳が少し痛くなつて來たやうである。頭も芯として變に重たい。

二三時間も經つてから、禮吉は頭が疲れてがりがり痛くなつて來たので、ペンを置いて後にそつくり返つて目を閉つた。

何だか物が氣になつて落ちつかないやうな心持がする。考へると、繼母からまだ手紙が來ない事もその一つである。二人になつてからは、日に見えない下らない費用がかゝる、よく、あれだけの金でおとわがどうかかうかやつて行つてくれる事だと思ふ。いろんな事を考へると繼母といふ關係それ自身からが忌々しい。先の母がゐてくれたら、何でも打ち明けてしまへるのだけれど。——いつもは日の前の事だけ考へて一日々々とずる〳〵に暮してゐるけれど、どうせしまひには、こちらに妻のやうなものがあるといふ事を、繼母に自白しなければならないだらうと思ふと、今から不安である。こんないろんな心配の中で、厄介な試驗を受けなければならない。

耳がひどく痛み出して來た。

禮吉は薄ら寂しい心持に脅へられながら、おとわを求めて階子段を下りて行つた。下はしんとしてゐる。おとわはどこかへ行つたかして、そこらにゐない。自分が二階に籠つてゐる間は、おとわは下で一人考へ沈んでゐるのだらうと思ふと落ち附かないやうな氣がする。

「おとわ。」と呼んで見たが返事がない。鏡臺の抽斗から、元結の先が喰み出してゐるのが氣になる。ふしだらな女だと思ひながら入れ直す。それから何をするためともなく、押入を開けて見た。さつきごた〳〵してゐたこちら側を、おとわはちやんと片附け直してゐた。自分やおとわの寫眞の這入つてゐる板函が、物の一番下に入れ込んである。おとわはこれまでの自

身の姿を見られるのを一番厭がつてゐるやうである。

「この寫眞は幾枚撮つたの？」と、いつかも、つい話がないのでこんな事を何氣なく訊くと、

「なぜです？　三枚ですわ。」と、自分がそんな事を訊く心持を覗ふやうに顔を偷み見た。

「一枚は叔母のところへ送つて、あとの一枚はどうしたでせう。——さう〳〵、變な人に上げたわ私。あの家へよく來るおときさんね、あの人に取られたんですよ。」

こんな事を言譯がましく言ふ。下らない事にまで先廻りをして氣にするのであつた。

禮吉はこんな事を考へ返しながら縁側に立つてゐた。庭の日向はもういつしか薩ぱんでしまつた。垣の向うの家の屋根に、やがてどんよりと暮れて行く名殘りの日影が稍赤ぱんで射してゐる。桐の木の下のナスタシャムの花蔭に山蟻が一匹這つてゐるのが見える。

禮吉は下駄の上に下りて庭へ出て見た。物置の側に、何かの草花の苗らしいものが三四本植ゑられて、印の竹が立ててある。と、その物置の向うにおとわの聲がする。

「それから？　それからその姉さんがどうしたの？」と、どこかの子供の相手になつてゐるやうである。

ぶら〳〵行つて見ると、一人の小汚い女の子が、裏木戸のうちの、無花果の木が低く若葉を揃へてゐる垣根に蓆をしいて、赤い緒の下駄を脱いで坐つてゐる。おとわが、一人で寂しさにこんな子供の相手になつてゐるやうに、そこへつて、とき色の手柄をかけてゐる。髪をきちんと丸髷に結ひ、禮吉のシャツが二枚洗つて干してある。

おとわは禮吉が來たのを見ると立ち上つた。

「どこの子だい。青鼻汁を滴らしてゐるぢやないか。」と禮吉は小さい聲で言つた。

「私がこゝで干物をしてゐると、少しづつ這入つて來て、をばさん、こゝで遊んでもいゝんですかつて、一人ぼつちのやうに言ひますから、私はお這入りなさいと言つたんですの。さうしたら家へ歸つてあの蓆なんか持つて來て、一人でブリキの鍵を弄つて遊んでゐるのですよ。」と、おとわは子供に代つて言ふやうに微笑みながら話した。子供は大前でわざとするやうに、小首をかしげて、雜誌の口繪を裂つた幾枚かの寫眞畫を膝の上で揃へてゐる。ちよい〳〵禮吉の顔を偷み見る。いやにひねくれた陰氣な顔をした子である。

「私があの繪をくれてやつたんですよ。それから今活動寫眞を見て來たお話を私にして聞かせてゐたところです。よく覺えてゐるんですよ。」と、おとわは禮吉の疲れた頭を慰めようとするやうに、つとめて話をするのであつたが、その沈んだやうな目の色には、何か心の中で心細い事を考へてゐたあとのやうな容子が見える。

「紅茶でも入れてくれないか。」といふと、おとわは、

「ではまたいらつしやいなね。をばさんはこれから用事があるから。」と、女の子にかう言つて向うへ行く。禮吉はおとわが、こんな、どこの子とも知れぬ小汚い子の相手をしてゐるのが、いかにもおとわの子供の頃のシチュエイションを語るやうな、下卑た感じがする。同時に、いかにも同情といふものを味ふ事の出來ぬ寂しいものがする事のやうに哀れでもあつた。おとわはあんなに自分に戀されてゐても、自分の前には一々語られないやうな、或いろんな心細い思ひを包んでゐるやうである。女といふものには、どうしてこんなにかう理解といふものがないのだらう。どう言つてやれば自分に對して安心させる事が出來るのだらう。——禮吉はかう思ふ

と、女よりも自分自身の方が寂しくなつて來た。
「とわ。」
「はい？」
「もうその着物を着るのはお止しよ。物はいゝのだらうが、塵たれてるからみすぼらしいよ。」
かう言ひながら上へ上つた。
「これはもう解いてしまふんですけれど、今ここを掃除したりしてゐたものですから。」
「そんな汚い着物を着て、頭ばかり光らせてると、砲兵工廠の職工か何かの主婦さん見たいぢやないか。」
禮吉は冗談に響くやうにかう言つて、長火鉢の前に坐つた。
おとわは、紅茶の罐を開けて、茶出しへ入れて湯をさしてゐる。
女は丸髷に結つたのが一番戀をそゝる。これで一寸したなりをさせたら、人の目を引くいぢらしい小女房になるのである。おとわは茶出しを火の上にかざしてしばらく下目になつてゐる。こちらが頭ばかりじろ〳〵見てゐるのが極りが惡いので、顔を伏せてゐるのかと思つてゐたら、何だか目に涙をためてゐるやうである。そんなじめ〳〵した性分にはもう飽き〳〵してゐる禮吉は、厭な氣持になつて默つてゐたが、それでも何で涙ぐむのか氣になつて堪らない。
「とわ。」と禮吉は少し強しく呼びかけた。
訊いてもおとわは譯を話さない。
「だつて何でもないんですもの。私はどうしてこの頃いつもかうなんでせうね。何だか自分でも譯が分らないんですわ。」
こんな事を言つてごまかしながら、紅茶をさして、窩と袖口で涙を拭く。禮吉はそれなり默つて、角の砂糖の溶けるのを待つてゐた。

四

夜になれば、さうした二人の心持もいつしか變つてゐた。禮吉は晝に言つたやうに、二人で草花を買ひに、學校の前の通りまで行かうと言ひ出した。
「でも御勉强なさらなけやならないでせう？」と、おとわは氣になるやうにかう言つたけれど、
「では行きますわ。」と微笑みながら、そは〳〵と支度をした。
禮吉は、家にゐてもどうせ何も出來さうもないので、いつそさつぱりと外へ出て、明日から本氣でやり出せばいゝといふ氣になつてゐた。何だか二人で夜店の灯の搖ぐ中をあてどもなくぶら〳〵歩いて見たい。
禮吉は二階の雨戸などを閉めに上つた。
それとも、どこか寄席へでも行つて見ようかと思つて、「國民」の寄席案内を見たりしながら、おとわの支度が出來るのを待つてゐた。
やがておとわに呼ばれて下へ下りる。おとわは小綺麗に化粧をして、鏡臺の上を片附けてゐる。
「こんな風でいゝでせう？　夜ですから。」と、立つて、帶の背中を鏡に寫して恰好を直した。
「まだこれを着るのは早いでせうか。」と、いつもになく、麗らかな、すが〳〵したお目もとをしてゐる。薄赤い縞の大目に這入つた本フランの合羽に、水淺黄へ白でつぶ〳〵に麻の葉を抜いた絽縮緬の帶をしめてゐる。
「あなたはそのまゝでいゝんですか。」といふ。
やがて主婦さんに挨拶して、ランプを持つて上り口へ下りた。おとわは、昨日買つて來て叱られた二人の下駄を出して揃へて、クリーム色の帶の片裏に、赤い帶揚を結び直しながら立つてゐる。
「二人で出るのは、隨分久しぶりだね。」
「さうでもありませんわ、でも丁度一月ぶりですわね。」

二人はこのやうな事を話しながら、椽垣の多い、暗い横町を出て行つた。何だか久しく夜出た事がなかつたせゐか、暗い町の、寂れた水菓子屋の灯さへ珍らしく物懷かしい心持がする。二人は寄席へ行く事にして電車に乘つた。
かうした氣分の下には、見るものが一つ〳〵親しく見える。二人が並んで腰かけた前に、三十前後の、世帶のつましさうな、感じのいゝ女房さんが、不斷着に、油氣の抜けた髮をして、帶の間から白銅を一枚出して片道の切符を買つてゐる。その女房さんは下りるまで、おとわの容子を懷かしむやうにちら〳〵見てゐた。
「何だか見た事のあるやうな人ですわ。」と電車を下りるとおとわが言つた。その女房さんも同じところで下りて、日和下駄の音を刻んで二人の前を歩いて行つた。そんな見知らない女房さんさへ親しい人のやうに思はれる夜であつた。
二人は若竹へ這入る。禮吉の好きな東猿がかかつてゐるから來たのだけれど、少し遲かつたので、東猿は中入前二枚目を語つてもう濟んだ後であつた。名を聞いた事もない變な女が、きいきいといふ聲を立てて野崎を語つてゐる。
二人は二階の正面に坐つたが、禮吉は女の語るのは聞かないで、下に來てゐる客を見下してゐた。すぐ下のところに、待合の主婦さんかなぞのやうな、小意氣な中年增の女が、小さい銀の煙管で煙草を喫んでゐるのをぢつと見てゐると、
「ね、そんなにらまくもないやうですね。」とおとわが小さい聲でいふ。それでもおとわは目を輝かせて久しぶりのやうに聞いてゐる。禮吉は三味線の手を目で追ひながら、調子に合はせて、いつか明治座で見た延若のお染の身振を心に畫いてゐた。
かうした三味線の音を背景にして、いろ〳〵の戀にはかない事をとりとめもなく考へ續けるのは、二人がかうして一緒に出て來た夜の心持に似合はしい。禮吉はいつしか、おとわとはじめて會つた日の事なぞをそれからそれへと考へ追うてゐた。
二人がかういふ二人になつたのも、容易なわけではなかつたやうに思はれると同時に、すべてがたゞ自分のムードから造り出された、突飛な冒險のやうにも思はれる。もしもこの女が私といふものに出くはす事がなかつたら、どんな人と戀をして、今頃どんなに暮してゐる事だらう。假りに私に投じたやうに人に投じてその男に欺かれて悲しい目を見てゐるものとして見る。それよりも私がこれを捨てると假定して見る。何だか脆いものは女のやうな心持がする。もし捨てたとしたら、自分はやつぱり後ではこの女と伴らつてゐた日を戀ひるに相違ない。自分に向つて何一つ逆ふといふことを知らないもののやうに、いくら無理を言はれても、みんな自身が足りないからだといふやうに、わく〳〵してかしづいてゐる。自分はどうしたつてこの女を捨てることは出來ない。もしも自分のところから出て、どこにどうしてゐるか分らなくなつたとしたら、自分は目の前に泣き伏して恨まれるよりも、もつと心に責められるに違ひない。自分が今戀ひてゐるよりも、もつとやるせなく戀しくなつて、この女の行方を探して廻るかも知れない。さうして探しても、最早再び見出す事が出來なかつたら、自分は何を求めて生きるだらう。――禮吉にはその時の自分のすべての心持が、もうあつた事の回想のやうに目に見える。
禮吉はその中に、この冬頃おとわに本を教へてゐた時のことを考へ返した。さきで困る事が出來るに違ひないと思つて、小學校の讀本を買つて來て、少しづつ讀ませてゐた。おとわも進んで習ふ氣になつてゐた。禮吉が學校から歸つ

て見ると、おとわはよく一間の隅にちんまりと坐つて、膝の上に拡げたノートへ、本の中の讀めない字を書き取つたりして、子供のやうにおさらへをしてゐた。けれども、一旦習つた字を忘れると、それを訊くのが極りが悪いと見えて、先へ進んで行くばかりで、たまに後へ返つて讀ませて見ると、忘れたのをそれなりにして放つてゐる。そんな事などでよくおとわを叱り飛ばした禮吉は、しまひにもうこんな事はよさうと言ひ出した。お前たちにかういふ事をさせるのが間ちがつてゐる、いろはだけ讀めて、きつときつと返事を下さい、私は毎日あなたの事ばかり考へて居りますなんて、いゝ加減な人よがらせが書けるのだから澤山だ、と、寧ろ慰めるつもりで冗談半分にかう言ふと、おとわはしくしく泣き出して、

「これから忘れたところはきつと訊いて、しつかり覚えますからどうか教へて下さいまし。」と手を突いて詫びた。禮吉は、自分の全ての無意味で且つ殘酷であつたことを悔いて、穏やかに諭して止させた。つまりはおとわが小學校の生徒の學力さへないといふ悲しさを教へただけの結果になつた。

その時の、涙に沈んだおとわの顔が目に浮んで來る。うつかり罪な事をした自分だつたと思ふ。

高座の女は久作が炙を据られてあつゝ〳〵といふところをやつてゐる。義太夫もかういふグロテスクなくすぐりがあるので興がさめる。それを喜んで笑つてゐる馬鹿げた聽衆よりも、そんな下らない事を眞面目に書き下した、愚昧な時代の作者の頭の幼稚さと、それを守つて得意に演じてゐる無智な女のノンセンスとが、哀れなやうな、ひや〳〵するやうな氣がする。禮吉は女が生々しい聲で老人の聲色をつかつて、一生懸命に顔を蹙めたり、口を開けたりするのだけを見てゐた。義太夫なぞはかうして顔面筋肉の運動だけを見てゐると滑稽と醜惡とを極めたものである。學校の講義でもつまらない先生が下らない事を喋るのが馬鹿々々しくなつて、その頭の禿げ工合と顔面の運動だけを見てゐると、相手は人間でも何だか獣のやうに見えて悲慘である。みんながそれを懸命に筆記して、一字一句をも逃すまいとするペンの音が、閨室の蠶が桑の葉を喰ふやうに鳴るのも滑稽である。

禮吉はこんな事を思つてゐたが、それから試驗の事などに考へ移ると、何だか急に物悲しいやうな不安な心持になつて來た。心の底には自分がおとわを伴れて暮してゐる事それ自身さへ不安なやうな、黒い心持が湧いて來た。

「おい、もう歸らないか。こんな義太夫を聞くよりかそこらをぶら〳〵歩いて見ようぢやないか。」と、遂におとわにかう言ふと、おとわは、

「私はどうでも。」と言ふけれど、何だかまだ聞いてゐたいのぢやないかと思ふ。

「折角だからもつと聞くの？」

「いゝえ、私はさつきから他の事ばかり考へてゐるんですわ。」といふ。

二人はそこを出て、學校の前の夜店の方へ向けてぶら〳〵歩いた。

何を考へ出したのか、おとわは無上に滅入つたやうな顔をしてゐる。何か自分自身の事を考へてゐるらしい。禮吉が側にゐて二人で歩いてゐるのだといふ事は忘れて、禮吉には關係のない、他の事を考へてゐるやうな氣もする。禮吉は自分の女が、自分の知らない過去を持つてゐて、恋にそれを一人回想する自由を持つてゐるのをどうする事も出來ないのが不愉快であつた。

「おい、蕎麥でも食べないか。」と禮吉は、努めて自分のさういふ感情の頭を押へながら、女

の心持を自分自身に集めようとするやうにかう言ふと、おとわは、

「あなた、召し上りたいのですか？」と訊く。

「私になら澤山です。さつき御飯を戴いたばかりですから何にも食べたかありませんわ。」

「私だつて別に食ひたくもない。たゞ何だかかうして歩くばかりでも物足りないからさ。」

「ではもうさつさと帰りませう。早く歸る方がようございますわ。」

「なぜ。」

「なぜつて事はないんですけれど。」

から言つて物足りなさうに歩いて行く。すれちがふ人間がみんなじろ〳〵二人を見て行くやうな氣がする。制帽を被つた學生たちが景氣よく笑ひ興じながら通つて行く。學校の樹の下には植木屋がいろんな草花をづらりと列ねてゐる。

二人はこちら側のペイヴメントの夜店の前を、人込みに躊躇ひながら歩いて行つた。

「ね、あなた、金魚を買つてはいけませんか。」と、おとわが囁くやうにいふ。

「もうずつと通り過ぎたんですけれど。」

おとわは先に立つて引き返して行つた。禮吉が立ち止つてゐる目の前には古い石版繪などを拡げた主婦さんが、だれも買つてくれ手もない品物の上に、しよんぼりと視線を落してゐる。目の縁に黒い影を持つた、寂しさうな顔をした女である。一つしか點してゐない置ランプの薄ぼんやりした灯に、靈の手本の切のやうな、紅葉葵の花の赤いのが、哀れつぽく目立つてゐる。禮吉にはその哀れを帶びて見える色合が、何だか自分とおとわとの戀の色のやうに小寂しく見えた。

おとわは向うの方の金魚屋の店先に立つてゐる。そちらへ行つて見る。おとわは小さな硝子の入物に、小さな金魚を二匹入れさせたのを足下に置いて、帶の間から財布を出した。

「もつと大きな入物を買へばいゝのに。それでは金魚が死にさうだね。」

「でも大きな金魚は高いんですわ。」と、おとわは小さな聲でいふ。

「入物だけ大きなのにすればいゝぢやないか。」

「さうしませうか。」

「もうそれでいゝよ。面倒だから。」

禮吉は、興のない顔をして、桶の金魚の群が水の下にきく寫つて動くのを見て立つてゐた。呼吸をする口元のところに、丸い固まりのやうな影が、出たり引つ込んだりして寫つた。

二人は家へ向けて歸つて行く。歩けば隨分あるのだけれど、何だか電車には乗らないで、暗い横町ばかりをとぼ〳〵歩いて歸るのが、自分のかうした心持に似合つてゐるやうな氣がする。

二人とも默つてて〳〵歩いた。

「おい、何を考へてゐるの？」

或硝子燈の灯の下へ來てから訊くと、おとわは、

「私ね……」と、何か言はうとしたのを急に默つて、泣き出しさうな顔をしてゐる。

「何だい。」

「人がゐるから、もう少し向うまで行つたら話しますわ。」

「何を？」と禮吉は、たいした事でもないやうに平氣でかう言つて、暗い横町に折れた。

「何だい、話すといふのは。」

「私まだよく分らないから今まで默つてゐたんですけれどね、……」と、おとわは沈んだ聲で言ひ悲さうに、

「私は子供が出來たんぢやないでせうか。」と、ふいとこんな事を言ひ出すのであつた。

「さうかい？」と禮吉は、努めて平氣らしくかう言つたけれど、何だか考へたくもない厭な事を

不意に問かされでもしたやうに、不愉快な心持に鎖された。

「いつからかい、それは。」

「私はこれまでだつてよくさういふ癖があつたんですけれど、今度は何だか宮子が違ふやうですから、こなひだから一人で心配してるんですの。」と、困つたやうに言ふ。

「もういつからかあれなの？」

「えゝ。――――私考へると一人で泣きたくなりますわ。」

「なぜ。」

かう言つたきり禮吉は、その後を何と言つていゝか分らない。もしさうだとしたらもとより仕方もない事だけれど、それにしても何だか自分たちばかりが意地悪く苛められてゐるやうな忌々しい心持がする。今から子供が出來るのも五月蠅いし、それまでに女がやつれ悄んで厭な妻になるのを見る間でも不愉快である。女に對しては、それが自分のさせた罪のやうに哀れである。もしそれだとしたら、自分は世の中に出るはじめから、最早一人の父になつて出立するのかと思ふと、厄介な荷物を負はされるやうな厭な思ひがする。女がもうこれきりで、若々しさの滅び行く、母といふ身になるのも痛はしい。

禮吉はこのやうな心持が黙く寂しく自分に被さつて行くのを見入りながら、しばらく無言で歩いてゐた。

「だつてまだはつきり分らないのだらう？――お前が一人でさう思つて心配するのぢやないのかい。」

「でももう三月からになるんですもの。……それに今日魚屋が來ましてね、海老のいゝのを持つてたんですのよ。あんまり高いから私買はないでしまつたんですけれど、後になつて何にもないから困つて、あの海老でも買つといたらよかつたのにつて家のお主婦さんに話したら、お主人のが召し上るのならよごさんすけれど、あなたはもうそんなものは召し上られませんよつて言ふんでせう。私は何の事だか分らないものですから、けろんとしてゐると、それから椎茸と芹とそんなものがいけないんだと言ふんですの。さう言つてるところへ郵便が來たりしたものですから、私はそれなりこちらへ來てしまつたんですけれどね、後で考へると、身持の時の事らしいんでせう。それぢや人の目にももうさう見えるのかと思つて、私急にわく〳〵し出したんですわ。」

「その金魚をよこせ。代つてやらう。」

「ようございます。私が持つて歸ります。」

「仕方がないや。出來たものはどうする事も出來やしない。」

「私何だか情ないわ。」

「だつて女の役だから仕方がないさ。」と、禮吉は、何か言はなければならないやうに心にもなくこんなことを言つた。

「私のやうなものは、子供を拵へてもそれをちやんと得う育てないだらうと思ふと悲しくなりますわ。」と、おとわはまた涙ぐんでゐる。

「なぜ得う育てないんだ。」

「だつて何にも知らない女ですもの。私はあなたに濟まないやうな氣がして一人で泣けて來るんです。」

「何が。」

「私のやうなものが一生あなたに喰つついて廻つてゐては、あなたの肩身が狹いでせうと思つて……」

「またそんな事をいふ。ぢや、どうすればいゝのかい。」

禮吉は、いつもの、面倒臭い、焦れつたいやうな心持の中にも、自分が苛めてこんな事を言はせでもするやうな物哀れな氣持もする。

「よさうよ、もうそんな話は。もつとさつさとお歩きよ。――おや。」と、禮吉は自分の袂におとわの櫛が這入つてゐるのに氣が附いた。出がけに、二階から持つて下りようとして、雨戸を繰るのについ袂に入れたのを、それなり忘れてゐたのであつた。

「お前の櫛が袂に這入つてゐるよ。」

「あら、さうですか？」と、おとわは氣のない返事をする。

「私どこかへ亡くしたのかと思つて、方々を探したんですの。」と言つたきり、どうして禮吉がそれをこゝに持つてゐるかといふ事は氣にも留めないらしく、たゞ受取つて帶の間へ入れる。

二人はそれきり默つて西片町の椎の木のところまで來た。禮吉はさつきから、心の底には、おとわの姙娠といふ事をのみ考へ續けてゐる。何だかおとわの情げたやうに考へ込んで歩いてゐる妻が、暗い夜の中に物哀れに見える。禮吉は、もし本當に子供が出たのだとしたら、おとわが產に苦しんで死ぬやうな事がありはしまいかといふ氣がする。或は產後の肥立ちが惡くて、生れたばかりの赤ん坊を男の私の手一つに殘して、死にでもしたらどうであらう。――そのために自分が一人で困るといふ事よりも、さうなつた日には自分がおとわに氣苦勞ばかりさせて死なせたのを悔い慨れむ辛さが今から目に見えてゐる。

「何を自分は考へるのだらう。」

禮吉は、そんなつまらない妄想を消し忘れようと努めながら、

「おい、今の櫛を一寸貸して御覽。」といふ。

「どうなさるの？」とおとわは立ち止つて帶の間に手を入れる。どうしようといふのでもないが、たゞ何だかそれを自分が持つて歩きたいやうな氣になつたからである。

「もう何時位でせうね。」と、おとわは溜息を洩し紛らすやうにかう言ひながら櫛を禮吉の手に渡した。

「冗談は退けて、本當におとわは姙娠なのだらうか。もしさうだとしたら差し向どうすればいいのだらう。」

禮吉は默つてこのやうな事を考へながら、暗い夜の中をまだもつと暗い或物の中へ這入つて行きでもするやうに、とぼ〳〵と長い坂を下りて行く。向うの高臺の家々に見える灯影が、知らない海邊の港へでも漂泊して來たやうに、寂しく見える夜である。

（前治四十五年六月）

午後（四）

私はこんな女の子を私の女に伴れてゐさせようかと思ふ。――私の女といふのはこれから書かうとする女である。どんな女だかまだ極つてはゐない。たゞ一人の貧しい女が墮胎をし損じて死んで了ふところを書かうと思つてゐるだけである。

私はこの子の出て來た方へ向けて行かうとした。

「おい、ころぶよ。こつちへ出ろ〳〵。」

私は小さい泥水のたまりを渡らうとする子に指圖をしながらとこ〳〵歩いて行つた。

もつとぐる〳〵かういふ町ばかりを歩きたい。なぜでもないけれど歩きたい。さうして第一に私の女に名前を附けて、それから、どんな女にするかを考へ纏めなければならない。

私はどんよりした午後の中に、マントも着ず帽子も被らない儘で、わが書く女の住んでゐるやうな氣のするだだ黑い貧しい町を、ぶらりぶらり歩くのであつた。（『赤蜻蛉』より）

穴

一

私は、眠で堪らない一日の仕事からやつと放されて、一册のノートと午に食べさした麵麭の這入つた包みを抱へた手に、昨日置き忘れた、不恰好な大きな洋傘を持つて、底さびしい、黒ずみ剝げた心持に滅入りつゝ、たゞ一人、裏手の小門へ向けて、がた〳〵の暗い建物の階段を下りた。

何だか、たゞでさへ氣分が惡くなるやうな、上部だけ薄冷たくて變に蒸し附けるやうな、どんよりした天氣が續くところへ持つて來て、情ない忌はしい病氣の後を引いて、困憊してゐた私は、その藥のせゐか、この間中から、平生から弱い胃をひどく壞してゐるので、こんな日には、生きてゐるのも小五月蠅いやうにがじ〳〵と不愉快でたまらない。

いつからともなく烈しい神經衰弱にも罹つてゐる。昨夜もまんじりと寢入られなかつた頭は、中が毛蟲で一杯に詰つてでもゐるやうに、いら〳〵とさゝくれるやうに痛い。目を開けてゐると、瞼の內側がちき〳〵痒くて氣がいらいらする。その上に、隔日にやる、驅黴の注射の跡が、根性の惡いやうな、だだ暗い痛みを滑めてゐて、立つたり坐つたりするのにも、不愉快にうづ〳〵頭を刺戟するのである。

私はからしたくさ〳〵する氣分に包まれながら、光線の這入らない、陰鬱な小汚い一室で、がた〳〵のテイブルにかゝつて、下らないものがすべき仕事を面倒くさくこつ〳〵片附けて行かなければならなかつた。私の後の窓が下りなくて、一尺ばかり開いてゐる下から、眼な、ほろゝ冷たい風が、外の土埃を飛ばして、灰色になつて這入つて來る。目の前には、人格の下劣な、犬のやうなきざな或書記や、上のものへべこ〳〵して奴隸のやうに使はれてゐる老ぼれたさもしい上役のものや、ねち〳〵しい皮肉な目附をした、根性の惡い會計の男や、それらの低級な人間へまでも蝟び入るやうに作られてゐる二三のものが、がや〳〵と詰らない事を言つて面白さうに笑つたりしてゐる。裁判所の書記上りの、しみつたれた大風な幹事は、自分がみんなのものを儲けてでもゐるやうに威張つてゐる。人々は陰ではこの男の事を乞食か犬かなぞのやうに罵倒するけれど、この男に惡まれて口を失つては困るので、目の前では何にも得言はないで默つてゐる。いづれも哀れなほどひどい月給でこき使はれてゐるのである。中には眼でたまらなくても、ほかに行くところがないのでどうする事も出來ない人もあるけれど、大部分は、かうしてこゝに全人格的に縛りつけてゐるより外には何の働きもない人たちで、それが下のものに對して階級的に威ばつてゐるのが、私には餘計に哀れである。

私はいゝ口がないので仕方なくこんなところに出てゐる。人のやうに、幹事たちに拘泥してぶつ〳〵言つたりする餘裕がないから、そんな事には不愉快ながらに目を閉つて、一人かけ放れてゐるけれど、たゞ月給の事を考へるとばかばかしくて堪らない。體のいゝ時には、それでも半ば運動にもなるので、不平も忘れて出かけて來るけれど、今日のやうな、かういふ氣分の日には、何かの忌はしい刑罰のために、苛酷な勞役にでも繫がれてゐるやうに苦しくて、つゞく情なくなる。下らない人間と交つて、つまらない事ばかり聞くのが、腐れるやうに物寂しい。眠だといふよりも、何だかだだ暗く腐れるやうに汚く物寂しい。

私は、どんなにいら〳〵思つてもどうする事もならない自分を、何物かからつれなく嘲られでもするやうな、忌々しい心持をして、一人とぼ〳〵と裏門を出た。

さつきあの室から出がけに、剝げ壞れた薄暗い火鉢で火をつけて吸ひかけた卷煙草に、女の髮の毛のやうなものが交つてゐたのをじり〳〵と吸ひ込んだ、死人臭い、胸の惡い心持の續きが、變調な胃が與へる不愉快な氣分の中にまだ纏はつて殘つてゐる。

私はかうして門を出るには出ても、どこへも歸るべきところもないやうな、或は、自分の家へ向けて眞つ直にかへつて行くのも厭で、どこか行くところを考へ探るやうな心持になつて、我ともなく、少らく往來に立ちどまつて、がたがたの、埃に古けたやうな狹い通りの左右を見入つてゐたが、考へて、赤坂見附を廻る電車の方へ向けて歩いて行つた。いつもの方へ向いて歸れば、あそこの通りの醫者で注射を受けなければならない。氣分のくさ〳〵する私は、何だかそれが面倒臭いので、かた〳〵こつちの方へ足が向いた。こちらへ廻つたところで、どこへと行くべきところもないのだけれど。

こゝの通りは、がた〳〵の小汚い家ばかりがごた〳〵並んだ、だだ黑い町である。しほたれた、みすぼらしい着物を着た、色白の惡いやつれた女などが剝げたやうな店先に、子供を負つて倦怠さうに彳んでゐたりする。土埃の積つた低い屋根の上を、ぐちや〳〵した電燈の線が、老い疲れたやうに、重たさうにたるんで下つてゐる。そのすぐ上から惡病にでも祖はれたやうな、變に物晴い陰氣な午後の空の色が、家の中に暗く倦み疲れた人間や、仕方なくがじ〳〵した埃を嚙みつゝ不愉快に外を行く人間や、すべての汚らしい地上のものを腐らせようとする氣性の惡さうな、疲弊さうな人間がのそ〳〵通る。

げこくれたやうな小汚い人間がせちがらい中をくゞつて詐欺でもしさうな目附をして擦れちがふ。髮をほこりだらけにした、虱の惡さうな、疲れ果てた女がしを〳〵と歩いて行く。鞍ずれに赤身を出した、疲せこけた馬が、荷を下して來た後のがた馬車を引いて、やがてはどこか、途中で倒れでもしさうによぼ〳〵と通つて行く。大きな、泥だらけのその馬車の幌が、人の瘤をもうつと土ぼこりに包んで、狹いところをがた〳〵と蹣いて行く。

さういふ中へ、どこか町の裏手の方の仕事場で、がん〳〵と鐵板のやうなものを叩いたりする——煤だらけな場所と黑くなつてゐる人間を驚想させるやうな——物音が、いら〳〵しい頭を不愉快に刺戟するのである。濁つたおどんだ陰暗な天氣の中に、目に入るすべてのものが、たゞ憊れて剝げて、がじ〳〵とどす黑く見える。

私は、このやうな陰鬱な日には、多くの氣違ひの發作が起つたり、いろ〳〵の殘忍な凶行が行はれたりするのだといふ事が考へられた。自分だつてこの儘いつまでもかうしてて〳〵歩き續けなければならないものとしたら、その內には氣が狂ふか、又はいきなり卒倒でもして、土の上にだく〳〵と黑い血でも吐き出して冷たくなつてしまひさうな氣がする。かういふ氣分の惡い自分と氣ちがひや卒倒者との間には、最早何程の間隔も餘されてはゐないやうな氣がする。自分が氣が狂つて、うす氣味惡く青ざめ痩せて、暗いところにじめ〳〵して閉ぢ籠められてゐる心持や、それが人中へまぎれ出て、巡